時報

特別号

1949～1962

大阪大学山岳会

時報 特別号 (一九四九～一九六二) 大阪大学山岳会

はじめに

—戦后十年の歩み—

—後立山連峰から黒部へ—

篠田会長

はじめに

篠田軍治

大阪大学山岳会は昭和３４年に満１０周年を迎えたので、そのときから１０周年記念刊行が計画されて来たが、今回やつと合宿の記録だけがまとまつたわけである。

１０年間の歩みがどうであつたか、これはこの時報特別号を見る人によつて印象はそれぞれ違うであろうから、今こゝで会の歩みはこんなふうであつたと自画自讃する気はない。しかし１０年というと年のいつた者にはあまり違いはなくても２０代の者ならば１０代のときであるから大いに違う。そこで、会の発足当時およびそれ以前の山行の状態を少し振り返つてみるのも、この号を正しく理解する上に何らかの参考になるものと思われる。

戦後、山岳部を復活させようと思つてＯＢに相談すると今頃、山へ行く奴は闇屋のせがればかりだと言つて相手にされないことがあつた。事実、その時代は家庭をもつたまじめな人ならば今で言うレジユアーなどは考えも及ばなかつたわけである。一方で売り食いしているかと思うと、他方では闇でどんどん金を儲けていた時代であつた。こんな時代に闇屋とはおよそ縁の遠いものの中に山へ若い情熱を燃やしていたグループがあつて、これが結集されて山岳会の発足となつた。しかし、この時代に山へ行くことは容易なものではなかつた。装備は戦前の、空襲生き残りとも言うべき疲れたものばかり。食糧もろくなものはない。しかし、よくしたもので２２年頃から現地の食糧事情はよくなり、家庭でも食べ盛りのせがれが山へ行つている間だけは配給米を消費しない上に、帰りには食糧がふえているので大歓迎という面もあつた。交通事情も今と比較にならないくらい悪かつた。こうした事情で、今ならば簡単に行けるような町にも大いに苦心し、また慎重な行動をしなければならなかつたのである。

戦後１０年の歩み

後立山連峰から黒部へ

大阪大学山岳部の成立に就いて語るとき、私達は直接その伝統を土台とし継承した浪高山岳部及び間接に成立の契機ともなつた関西学生山岳連盟の戦後経過より筆を進める必要がある。浪高山岳部を再建すべき会合は、昭和２１年１０月、出身戦没者慰霊祭を兼ね遠見尾根東麓に於て行われた。私達は戦争に依つて多くのものを失つた。それ等の中には山や、それを以て連る友情を含んでいた。戦没した人々は遠い外地にあつて嘗ての日、魂を奪われたこの北安曇の地に骨を埋める事を書に遺して斃れた。われわれの仕事はその霊を慰める事より出発しなければならない。その日、東西より集つた人々は朱実の色付いた懐しい遠見尾根への石ころ道を登つた。荒廃した小舎の上に秋の空は恐ろしい青さを堪えていた。戦後その時迄、私達はこういう状態で空の色を眺めたことは無かつた。再び山の始めようとしたとき、秋の山は一入鮮かに映じた。その夜、再建に就ての具体的な討議が行われた。幸にも部は戦時・戦後を通じて組織と装備を辛うじて保存することが出来た。これはこれからの出発に当つて貴重な足がかりであつた。しかし、これを以て仕事を始めようとするには尚沢山の問題に逢着した。戦争に依つて農村の様相は一変した。種々の不用な摩擦を避け、尚且食糧の現地調達の途を調べ、不時の事故にも利用出来るための根拠地は自ら制限があつた。このことは「後立山連峰及びその東面」の開拓という主題に私達を導いた。後立山東麓の各部落には過去２０数年の経緯があつたし、こゝならば自分の庭の如く動ける自信があつた。一変したのは独り農村のみではなかつた。戦後の都会には登山を万能とする様な基盤は全く無かつた。人的制約と装備の購入難、そして輸送難……など、これを避けて通る訳には行かない。ラッシュ・アタックという方式はかかる致命的な種々の制約下の適応として採用された。

会合の翌朝、新しい希望に燃えて私達は平川沢を遡行した（註１）　それ迄にも冬季二、三の山行はあつたがここに進路と舵を得て部が動き始めたのである。しかし、再建後１年間は捨石的な状態が続いた。その年の冬、白馬東面を目指して二股に入つた私達は、嘗ての小舎の跡もなくなつた荒天下の猿倉台地を連夜苦闘しながら、与えられた唯１回の機会を逸し登攀の中ばで力尽きるという惨憺たる結果に終り、これに依りラツシユ方式の厳格さを改めて認識し直さねばならなかつた。

（註１）　平川沢二本松尾根。昭和２１年１０月。メンバー、佐谷、徳永、家田、加藤。

遠見の会合があつてから二度目の正月を同じ遠見小舎で迎えた私達は鹿島槍北壁を前に漸くあせり始めていた。合じ冬、早稲田はペテガリへ、明治は畳岩へ、そして同じこの尾根には関学その他がテントを進めていた。学生山岳界は全面的に極地法を採り始めようとしていた。こういう情勢の下下で鹿島槍北壁の登攀に成功したことは私達の前途を明るくした。（註２）　元来ポーラーシステム、と云い、ラツシユ・システムといい理論的にはその二つが対立的に語られる理由はないと私達は考える。目的も違うし才一夫々の下部構造が異質的であるこの二つのものが実際には並んでこの日本の山で実施せられるために色々と問題にせねばならなかつた。何れにしろ北壁の完登という事よりも遠見小舎より北壁、荒沢を経て鹿島部落へ一気にスライドを延すことに依つて此処にラツシユ方式の特徴が始めて十二分に生かされた。この冬の余勢を駆つた私達は昭和２３年春の合宿に於て白馬三合尾根に成功した。（註３）　しかし、後立山及び東面という浪高山岳部の再建当初の目標はこの白馬三合尾根の登攀を以て終りを告げ、新たに出来た大阪大学山岳部に依つて引き継がれる事に成つた。学制改革に依つて高校の廃止が決定したからである。

（註２）　鹿島槍北壁。昭和２３年１月。メンバー、佐谷、徳永。

（註３）　白馬三合尾根。昭和２３年３月。メンバー、佐谷、徳永、中西

（積雪期初登）

阪大山岳部が再建されたのは昭和２４年６月であつた。戦後の阪大には登山はあつたが部はなかつた。戦前に於ては校舎が分散している為に各運動部が各学部別に組織せられていた。全学的な組織の形成される基盤がなかつたのである。だから阪大全体の山岳部の再建は再建というより寧ろ全く白紙よりの発足に近かつた。それまで、部の形成に当るべき人々は出身高校を核として動くかたわら関西学生山岳連盟の仕事をしていた。当時の関西学連は漸く活潑に動き始めたものの尚著明な各校間の起伏を如何に克服して行くかという点につき一つの岐路に直面していた。各校別という枠をこの際外し大巾な指導権を与えられた学連を中心に向上しようとする復興策は、先輩の指導性から戦後切り放された一部の学校の要求なり、人的物的欠如に伴う各校間の相互依存性なりに裏づけされ、種々の曲折を経て学連中心主義が抬頭した。昭和２３年には学連総会の席上で白馬より槍への継続縦走が討議せられ、同年１１月富士合同登山が実施せられたりした。こうした傾向や指導性が正しかつたかどうかに就いての結論は避けるとして、実際には富士合同合宿は一応各校別の枠を取り、学連を中心に６０数人を動員出来たにも拘らずそれ以後再び単なる連絡と親睦の機関に還つた。学連に集まつたリーダー達は先ず真剣に自分達の足許を開拓し直す事より再出発する必要があつた。かゝる学連を中心とする諸情勢は阪大全体を一体とした私達の山岳部を発足せしめる一つの奨機となつた。

発足に当り部は旧浪高を始め工、医、理学部、大高の経験と装備及びスタッフを最大限に利用し、後立山に関する仕事を継続し正しく発展させて行く事を決定した。愈々部の発足の見通しがついた昭和２４年春、関西学院は後立山の稜線に長大な極地法を展開した。周到な準備と戦前から築き上げた組織を挙げて雄大な計画の実現を目指す東西各大学を横目で見ながら私達は胸中深く将来の発展を期しケルンの底石を並べる様な気持で雨飾

岳南稜に向つた。（註１）

（註１）　昭和２４年４月。メンバー徳永、大島。

（積雪季初登と思われる）

新学期に依る新入部員を９月に迎えて秋山より正式な活動が始まつた。冬に白馬東面合宿を決定していた私達は１１月北岳バットレス東北稜・木曾駒御岳・八ケ岳の四方面に向い冬に近い積雪に恵まれて之に備える事が出来た。冬の白馬主稜に対して既に２回に亘る浪高の失敗があり、春には幾多の足跡を有する此の唯一見長いだけの尾根が何故冬に登られ無かつたかに就て私達は頭を悩ました。何れにしても出来上つたばかりで吹けば飛ぶ様な寄せ集めの部であつてみればこゝらで何か一つ登つておく事がその運営上強く要望された。従来の経験に依れば、此の方面に於ける冬の登攀の機会は１週か１０日に１度と予想された。此の為猿倉台地末端の根拠地に入つた日から夜と昼を逆にした厳格な生活が始まつた。サポート隊は殆ど連夜徹宵して天候を観察し、風雪で無い限り夜半ラッセルに先行した。登攀隊は之に従つて夜明け迄登行し悪天候を見定めて帰投した。全てを極端に登攀へと傾倒して８日目の１月２日、好天を確実に掌中にして私達は主稜を完登した。（註２）

（註２）　昭和２４年１２月２２日－１月５日。メンバー。リーダー徳永。大島、家田以上（アタツク）加藤、松久、久保、細見、小沢、由比浜、田島、四宮、篠田部長。１月２日午前２時北股根拠地を出発。主稜末端より取り附き。サポートと別れ猿倉よりの中京山岳会の熊沢、鈴木両氏と共に３名のアタツク隊は午後８時頂上着。小屋で夜を明し大雪渓を下つた。

（厳冬期初登）

厳冬期の白馬主稜はかくして我々の手に陥ち一つの懸案は解決した。後立山東面に於いて厳冬期にバリエーションルートが登られる事は戦前でも稀であつた。これは天候と積雪状態に基くものであるが前述の鹿島槍北壁と今回の白馬主稜の成功はかかる条件に於いてラッシュアタツクの優れている事を

立証した。ともあれ、此の冬の計画が建設途上にあつた部の組織を固める点に於いていかに意義深かつたかは想像以上であつた。集合も盛んになつたし討議も活発になつた。之を期として戦前の先輩との連絡も追々つき始めた。然しやがて私達は此の冬の結果を広い面で分析して行く過程に於いて、これが成功と考える要素に案外乏しいという事に気付いた。部の運営面から云えば登山隊以外は1名もアイゼンを着用する機会を持たずに合宿が終るという縮少再生産的な不手際があつた。ラッシュ方式は戦後の色々な制約の下において尚且つ戦前に果し得なかつた課題の解決を可能にした。之に依り私達は鹿島槍北壁、白馬主稜、三合尾根及び雨飾南稜等を登つたし、之からも後立山東面の尾根と谷を刻明に開拓して行こうと考えていた。然し之のみを続ける事は部を広い分野に大きく発展させて行く途ではない。ラッシュアタックに依り私達は鹿島槍北壁に20時間、白馬三合に18時間、雨飾南稜に15時間、そして白馬主稜に18時間という連続行動を要した。実際にやつてみて始めてその限度を認識すべき時機に到達したのである。

毎年々々入れ替る部員に之を推し進める事は在学年数の上から無理があつたし、才一ラッシュアタックを採用しなければならなかつた当時の諸条件が今や徐々に崩れ始めていた。人員も増加したし装備その他の情勢も好転し始めた。ここに幾多の貴重な捨石の後に漸く軌道に乗り始めたラッシュ方式であつたが我々は白馬主稜を期としてこれに一応の終止符をつけたのである。

この昭和24年末は明治の明神東稜、法政、立教の北鎌尾根など正に極地法の全盛時代の観があつた。私達も亦この方式に対して冷淡ではなかつたが、それをやる前に未だしておかねばならぬことが沢山あつた。先ず今迄やつて来た事は「上向き」の登山であつた。今度は3000米の稜線上に舞台を移して「横向き」の登山を「いろは」から始めなければならない。

何年掛つてものになるか判らないが、その為には稜線上にどつかり「あぐら」をかいてみる必要があつた。此処に於て遅れ馳せ乍ら高処露営の課題に頭を突込んだのである。この決定に基いて白馬主稜につゞく春山は上級部員に依る「八方尾根より鹿島槍」への往復（註１）と、下級部員に依る「槍より燕」への縦走（註２）という形で実施され、更に同年冬には杓子双子尾根にテントと雪洞を進めて本格的な訓練期に入つた。

（註１）　昭和２５年３月２７日－４月１３日。メンバー、リーダー徳永、松久、家田、加藤、久保及び大久保先輩。八方尾根雪洞、唐松小屋を経て全員五竜岳雪洞に集合し鹿島槍を往復した。

五竜頂上より１日で鹿島槍の往復を行つたことは常時としては珍らしい記録であつたと思われる。

（註２）　昭和２５年４月２９日－５月６日。メンバー、リーター家田、四宮、川島、田島、小沢、二木。槍平より燕への縦走。下級部員を主体とした隊であつたにも拘らず縦走路に於て２回荒天下のビバークを強行した貴重な山行。

部員全部をいきなり、稜線上に上げる事に就ては一応の危惧もあつたが実際は円滑に運んだ。これ等一連の諸計画に依つて後立山に対する私達の考え方も大きく変化した。これまで浪高－阪大とやつて来たことは「後立」という主題をラツシユアタツクという一つの媒介を以て推進する事であつた。しかし、一度稜線上に舞台を移そうと決めたとき、私達が今迄主題として来た「後立」は最早、部の主題ではなくなつてしまつた。ある主題の下に私達が今まで開拓して来た「後立」はその媒介として登場することになつたのである。

新しい主題は山を離れて私達の部の内部にと移つた。

このことは一つの進歩であつた。八方尾根より鹿島槍以後の一年間の成果は、昭和２６年春の才一次後立山逆縦走計画によつて問われることにな

なつた。（註３）　予め荷上げを一切行わない事を主眼にしたこの縦走は、サポート隊員の負傷により坐折し、鹿島槍や針の木等への散発的な山行に終つた。

（註３）　昭和２６年３月１７日－３月２８日。メンバー、リーダー徳永、大島、加藤、松久、細見、尾藤、川島、坪井及び大久保先輩。大沢冷池、唐松にサポートを入れ計画を始めたが冷池まで行を共にする予定の大沢サポート隊員が、スバリ南方でスリップし右大腿部に打撲創を負つたために中止した。この際現場に雪洞を設けて負傷者の手当をし、主力隊員が徹夜で通報に走つたため撤収を整然と行い得た。
なおこの時後立山に於て積雪期使用可能の小舎は冷、唐松、白馬のみであつた。

この計画に依つて私達は極地法であれば何等問題とならない様なものでも十分重大化する事故に対してもつている縦走形式の弱さや、サポート隊に依る不要な経費面など、縦走がもつている不利な点を学び、同時に食糧装備の面に於て高度の軽装化、合理化等を要請されることになつた。これまで私達は冬と春の双方に同様のウエイトを置いて計画を推し進めて来た。これは年額４０００円という部費しかない経済面からも又部員の心理的な面からも当然難点たらざるを得なかつた。堅苦しい正規の合宿を続けてやつて行くからには或程度の脱落者を覚悟しなければならない。

しかし歴史の浅い私達にはしなければならぬ事が沢山あつた。冬山はデリケートなテント・マナーや積雪状態などの面で、春山はダイナミックな行動的な面で夫々捨て難い異質的な要素があると考えられるからである。

こうした矛盾を打開する策として夏と秋の両シーズンの活用が考えられた。夏山は全く偵察と切り放し剣沢、南股、カクネ里などで主たる合宿をした後、分散して縦走し、秋山は天候の急変しない中部並に南アルプスを主に選んだ。

この間非積雪季のバリエーション・ルートとして北岳バットレスにおいては才2尾根Cガリー側の新ルートを始め、才1尾根、才5尾根東北稜。

鹿島槍においてはカクネ里の直接尾根初登、蝶右岩稜、蝶左岩稜、ピークリッヂ、中央ルンゼ才4登、主稜等を登つた。

昭和26年秋に於ける北岳バットレスへの集中的な山行は引き続いて冬山計画をこの地に持たせた。北岳を経て間ノ岳に向う計画が実施された。（註4）

（註4）　昭和26年12月25日－1月8日。メンバー。リーダー細見、住吉、川島、田島、由比浜。広河原峠を使つて広河原に入り大樺池CⅠ、北岳間ノ岳間のCⅡより間ノ岳へ向う計画。CⅡ破損のため引き返した。別に川島は単独で鳳凰を往復した。

この冬山に於ける収穫は3000米上のCⅡの経験であつた。

バリエーション・ルートの開拓から稜線上へと舞台を換えてから2年の歳月が流れた。発足当時の新入部員は今では部の中堅であり主力となつた。これまで部を推進して来たのは夫々の旧制高校で育つた既成の者であつた。しかし今や、部は、その中で生れ、その中で育つた人々を持つ事になつた。

ケルンの底石を並べる様な気持で登つたあの雨飾南稜から丁度3年の間、成功に喜び失敗に打ち沈みながら私達は黙つて石を積み続けて来た。部員の数も30人を越え、装備も苦しい内に色々と工夫される様になつて来た。ここらで一度本格的に極地法登山と取り組んでみようという事は当然の成り行きであつた。極地法に就ては便利なことに現在の大学全部が先輩であり、私達はそれ等従来の記録を徹底的に渉猟する事より始めた。この際、極地法を運営するに当つて意識的に何処に重点を置くべきかに就て、私達は最終キャンプよりアタツクの行動半径と全計画の運行時間の二つに力を入れようと考えた。北岳から帰ると直ぐこの新しい計画の準備が待つていた。前記の要素

に適合するものとして「杓子双子尾根より不帰を越えて唐松岳」が選定された。（註１）

（註１）　昭和２７年３月１９日－４月３日。メンバー。リーダー家田。久保。尾藤。田島。川島。坪井。山本。東。宍戸。猿倉ＢＣ。双子尾根ＣⅠ。杓子頂上直下ＣⅡ。天狗池ＣⅢＣⅢより不帰を通つて唐松を往復した。

この計画は各隊員の配置が良かつた上。天候を巧みに処理して小規模乍らも理想的な展開と運行を見せた。かくして白馬主稜の偏向解消以後たゞ無暗と稜線上を歩き廻つていた私達はここに初めて部の力をまとまつた形でみる事が出来たのである。

不帰計画によつて極地法登山を手にした私達は発足才４年目を迎えた。

何もかもが手さぐりで一歩一歩考えては動き出すという創生期の状態は漸く終りを告げた。部は自らの経験に基いて自由に活動出来る段階に到達した。この段階に於ける私達の仕事は右手に極地法をもつてこれを正しく発展させる様に努めながら左手で今までやりかけていた仕事の整理と新しい分野への仕事の準備に当ることであつた。やりかけの仕事とは後立山逆縦走や。一貫した「後立山東面」の開拓であり。新しい仕事とは後立山東面より　へと移行する前段階とも云うべき黒部下廊下の偵察であつた。

春の才二次後立山逆縦走計画が決まると。私達は前回の経験に基いて早急にサポート隊の養成にとり掛つた。冬の分散形式の計画は縦走に対処すると共に各個人のコンプリート。マウンテニアとしての成長を助けるという意図の下に生れた。聖（註３）を主体とし。木曾駒。大沢。八方尾根。富士山の五つのパーティが五つの方向に散つた。戦後浪高の跡を承けてつゞいて来た「後立山並に後立山東面」に関する私達の仕事に一応の終止符をつけんとする才二次逆縦走計画は冬山の成果に連つて実現せられた。

（註３）

（註２）　記録の調査が十分ではないが。厳冬期の聖登頂は或いはこ

れが始めてかも知れない。

（註３）　昭和２８年３月２２日－４月７日。メンバー、リーダー尾藤川島、住吉、田島、坪井、山本、東、宍戸、奎中、木村、土屋、大村、鷲沢、小沢、立花。ＯＢ大島、久保。この計画は前回の経験に基づき、過去の気候の統計から最悪の天候でも耐えられる食糧を準備し、サポート隊も単なるサポートに止らず自主的な目標をもつたため、それだけでも八方－鹿島槍往復、大沢－鹿島槍往復という計画となつた。（縦走隊。川島、住吉）

白馬より針之木迄の積雪期後三山初縦走は戦時中関学により行なわれ。逆縦走は我々のが始めてである。

十分の余力をもつてこれが達成出来たのは好転した小舎の条件にも依るけれども何よりもオ一次計画との間の二年という歳月が大きくものを云つたという事は否めない事実であつた。かくしてここに私達は「後立山及びその東面」を一応まとめ上げる事が出来た。

１９５３年はエベレストの登頂に依り永く記念されるべき年となつた。こういう時期に登り尽された日本の山々を真面目に眺める事は苦通でもあり困難でもある。しかし、かかる時にこそ与えられた対象を活用して自らの力を尽さねばならないのは勿論である。徒らに泡立つ内外の情勢に目を奪われた人々は足許を誤つて一挙に谷底へ転落するであろう。飛躍を考えるならば先ずその前に自己の力を知つておく必要がある。昭和２８年冬の「岳川より奥穂を越えて槍」への極地法は後立山を中心に過去四年間を以て培つ来た私達の総決算でもあつた。（註１）　穂高周辺に就ては夏に於てさえも嘗て合宿をもつたことはなかつた。力を験すためにも普遍的な極地法の特徴を生かすためにも穂高は好個の舞台を提供することになつた。

（註１）　昭和２８年１２月２０日－１月１０日。メンバー、川島、尾

藤、山本、土屋、木村、東、宍戸、杢中、住吉、山本（進）広橋、林抱。上高知ＢＨ天狗コルＣⅠ、奥穂ＣⅡ、北穂北峰ＣⅢより槍の往復を行つた。

主稜線上に於ける広範囲な活動とスピーディな運営を目標に掲げたゝめＣⅠ建設のみのサポート隊を使つたり、ＣⅢにナイロン・テントを用いた。（アタツク川島、尾藤）

その既に多数の極地法による記録のあつた穂高ではあつたが、厳冬期に天狗のコルから槍まで足をのばしたのは始めてであつた。

複雑な要素の組立てを狙う極地法の様な形式になると計画が終つてもそれが成功か失敗かという事は即断出来ない。しかし、客観的な条件からも主体的な要素に於ても、夫々ギリギリの線での好機の到来は、決して、自然に生れ出たものではない。部の、いや日本山岳界の先人達の足跡を見つめ乍ら、何処までも、そのレーゲルを踏み外す事なく現代の私達が求めるべき道に、進むべき方向に、小さい乍らも一つ一つの石を積み上げて来た努力が、もたらしたものと云へよう。東も角槍を往復した。私達は下山の途中、中ノ湯舟の中で心から厳大山岳部を随福したのであつた。

かくして、部は全く新しい観点から出発する段階に達して居た。後立山の東面開拓に始まり、後立山逆縦走から、冬の穂高に全力を傾け、今や自分自らの足に立つて自由に山を歩き廻ろうとしていた。そして部の主力は創生期より大きく三代目に移つて居たが、その新しい世代は、知識としてでなく、部の流れを体得していた。そして私達の今迄の歩みは、何処迄も誤りのない道であるという自信を持ち、私達自身が伝統を形成してゆくのであるという自覚に充ち、而も我々が今育つている線を常に打破つて自己の山を築いてゆこうとするファイトに満ちていた。部はどつか腰を落ち着け、自らの判断のもとに全く新しい一つの問題に打ち向おうとしていた。

それは、再び、後立山に戻る事であり積雪期の黒部下廊下を越えて剣に抜けようとする事であつた。全く経験のない穂高の冬山での緊張した生活を経て来た私達にとり後立は全く楽しい我家でありホームグランドであつた。私達はのびのびと足を伸した。かつて主力を後立に集中し開拓して来た事は無駄ではなかつたのである。私達が当初、後立山東面に烈しい登攀を続け乍ら、谷間から眺める主稜線にいつかわと、憧れと闘志を抱いていた事だつた。それがやがて稜線上に計画を進める様になつた時、朝に夕に眺める黒部や剣が無言の魅力となつて登場した。「上向き」より「横向き」の登攀になつたが更に今や下向き」の登攀を加えようとして春の新越沢を黒部へと下つて行つた。（註１）

（註１）　昭和２９年３月１６日－４月５日。前期、後期の二隊に分れ大沢から後立山を越えて、Ａ隊（リーダー川島、山本、土屋久保ＯＢ、田島ＯＢ）は、岩小舎沢岳支脈と、Ｂ隊（リーダー尾藤、宍戸、広橋、山本（進）、西川、三枝、岩永）は中尾根を経て新越沢を下廊下目指して下つた。（中尾根とは、新越沢を上流にて二つに分けている尾根）

初めて眺めた雪の黒部廊下の姿は、私達の脳裏に深く焼き付けられた。そして、その向うに聳える剣がこんなにまで遠く、高く、感じられた事は今までになかつた。私達の方向は定つていたのである。極地法が、ラッシュが等の理屈ではなくもつと純粋な登攀の対称への私達の情熱に燃えていた。時あたかもマナスル遠征隊が出、各地の海外遠征の話に私達の眼前が大きくゆさぶられようとしている時、私達は尚も日本の山をじつと見つめられる喜びを尽々と感じた。そして新しく入つた若い人々を顧みてあく迄オーソドックスに才一歩から訓練指導を始めるべきを当然の事とは言い乍ら着実に繰り返してゆく余裕を持つていた。即ち、夏山では白馬南股ず不帰東面（三峯Ｃ尾根無雪期初登、２峯ルンゼ等）を、又冬山には鹿島槍東尾根より全員鹿島の頂上に立つた。（註１）

（註１）　昭和２９年１２月２５日～１月５日。メンバー、リーダー坪井、広橋、三枝、木村、奎中、鷲沢、関本、山本進、川島ＯＢ。東尾根末端より取り付きＣⅠＣⅡを設け鹿島頂上にＣⅢ（新調ナイロン天幕才二号）を設け全員登頂した。計画としてのＣⅢより五竜へのアタックは失敗に帰したが当時迄の東尾根の記録は単に鹿島槍往復のみを目的としていたのに対し、我々の計画は東尾根を一つのルートとして之を超えて頂上迄テントを進めた所に新鮮さがあつたと思われる。

そして、鹿島槍の冬山合宿とは別に行われた新人スキー合宿には、今年初めて部の中心であるチーフリーダがこれを指導し、関温泉にて起床より就寝までの訓練内容を規定し本当のスキー合宿らしい体制を整えた。山岳部創立以来毎冬、冬山合宿としては部の主題を追求し別に新人のみを対称としたスキー合宿を主に細野で行つて来たが、内容は放置に等しかつた。と言うよりも、それをリードする幹部部員を冬山合宿の方からさくには、どちらから考えても不可能であつたのである。山岳部である限り冬山合宿がスキー訓練より優位にあるべきは当然であり、冬山がギリギリ精一杯のものであればある程尚更の事である。スキー訓練を軽視したのではない。私達はどの合宿をも上を見つめて歩いて来たのである。上を見て一歩一歩と進んでいる限り部の行動に於ても又部員の山行に於ても安らかさがあつた。限られた四年間に一回でも多く山に、特に冬山には参加し度かつたのは部員誰もの欲求であり、又部のギリギリの要求であつた。この前例を越えて兎も角初めてまともなスキー合宿を行つた。冬山にチーフリーダー不参加の犠牲を払つて迄スキーをという論議はさておきそれ自体として山岳部運営に於けるプラスであつた事には間違なかろう。

こうした合宿と共に部は一年間黒部下廊下横断を考え続けて来た。既に夏ハンノ木平に於ける幹部部員の一週間の滞在により下廊下を悉さに偵察

を行つたが、鳴沢の黒部出合点が、後立山側から到るにも内蔵助沢を経て立山側へぬけるにも最適のルートである事を発見出来た。前年の春山に冠氏の「黒部」、立教報告、関西学連報告よりの知識のみにて、後立山より黒部下廊下に下ろうとして失敗したが、これ等の知識経験の集的によりこの下廊下及びその後立山側立山側の切れ込みの深い大規模な地形を会得して、私達自身の横断ルート発見に大いに力となつていた。此処に於て、鳴沢岳にて後立を越え鳴沢の出合にて黒部を渡り、内蔵助沢より内蔵助平に上り、ハシゴ段乗越を越えて長次郎雪渓より剣登頂という線が決定された。更に秋の偵察を経て一年間の成果が春に問われたのであつた。（註２）

（註２）　昭和３０年３月１８日－４月６日。メンバー、リーダー宍戸尾藤、坪井、木村、西川、三枝、山本（涯）、東、四方、岡山、寺田、村瀬、和田。大沢小舎をＢＨとし、新越尾根を登り新越乗越にＢＣ、鳴沢西尾根にＣⅠ、ＣⅡを設け黒部にＣⅢを設けたが、燃料食糧の紛失、吊越の使用不能の為渡河出来ず再びそのまゝ、往路を引返したのみであつた。計画では黒部以遠は五名にて単独に処理し、サポート隊は黒部迄下山して了う予定であつた。

失敗に終つたが私達には自信があつた。黒部下廊下に降り立ち黒部を見つめた時、黒部別山の黒々とした岩壁の彼方の剱が、今迄一年半夢を見続けて歩いて来たその連続として部が達し得る点である事を直覚した。そして部は更に困難な山を求めて夢を描き始めていたのだつた。兎も角北アルプスの恐らく今まで余り人に知られていない山々の一部を我々は歩き、知られない面々に接する事が出来た事は深い経験となつたであろうことに間違いない。

山は拓けて来た。日本の登山界が質的にも量的にも素晴らしい上昇曲線を描きマナスル登頂という輝かしい成果と共に、全く処狭しとはかり日本の山々が歩かれている。そして積雪期にも壁、尾根、稜線には何時も何パーティ

かが互いに譲り合わなければならないという現在ーあのエヴレスト登頂のニュースに、すべての岳人が有頂天になり切れなかつた複雑な気持に有通ずる困難を感ずる時期。この時こそ、ＯＢは部と共に悩んでやらなければならないのだ。先走つた焦りや、地に足の付かない考え方こそ無意味であり、危険である事を私達の先輩は言葉としてでなく導いて来たが、育成されつつある部員は自己の眼を新しいジエネレーションとして新しい観点に向け自分自らの道を見出し歩いて来た。部の主体は合宿であり、事合宿に関する限り常に現役が主であり、ＯＢは従である。従つて部が部として海外の山を見つめる限り次々と主題が登山の対称として出現して来た。この事は、私達の部の若さを物語つているかも知れない。そして何時迄も大学山岳部は若くあるべきなのだ。

夏に北岳バツトレスを完登（才１、才２、才３中央稜、才４、才５、東北の各尾根）した足並は、引き続いて黒部源流に移つて昭和３０年度の山行が始つた。黒部下廊下横断に一応の見透しを得た今日、再び厳冬期の稜線活動を新しい物に求め様として此処に、薬師、赤牛が大きくクローズアップして来た。そしてそれが積雪期の上廊下の前段階に進むであろうことこそ自然の流れと言えよう。下廊下横断を春に握つて、新しい仕事としてのこの薬師、赤牛への冬山計画が決められた時、実は、部はある意味に於て試練に立つていた。異質的な登山形式（主稜線上双六小舎をＢＨとし、厳冬期天幕を持ち、出来る限り軽量化してアタツクの行動半径を短時日に最大限に解決しようとする事であり一切のサポートを用いない）が冬の薬師、赤牛の登頂という主題と結び付き自らの問題の提示としてのこの冬山が２年この方やりかけて来た下廊下を春に控えて大々的に行われ様とした事である。従来、夏山合宿は独自の立場で推し進め、冬、春は異質的な面で同様のウエイトを以て新しい場の追求に進められて来たものの、山としては、その一方に置かれていた。それは、心理的にも経済的にも止むを得ないものであつた。そしてトレイニングのみ目標を持つた合宿というもの

は、在り得べきでないと考える私達にとり、主題及びその主題の変遷というものが部の核心を為すものであり、その他の装備食料高処雪中露営、技術訓練は、すべてそれに向つて集中されて来た。一見トレイニングに見える山行でもそれなりに新しいものを持つものであるべきであるし、不成功に終つたものは将来に問題を提示するものであり、成功した場合は、その上に「あぐら」をかいて静かに周囲と、自らを顧みて、一歩前進すべきであると考えて来た。春の下廊下横断に自信を持つたればこそ、部は更により困難へと、じつとしておれなかつたのである。事実、部のメンバーは充実していたのだつた。毎年毎年の新しい山行目標は決して雑然と並んだものではなく、顧みる時、私達は其処に一本の素直な、納得のゆく線があるのに気付く。その一輪として、この年の山行が秋から冬へ短期間にエネルギツシユに集的された。（註1）

（註1）　昭和30年12月ー昭和31年1月15日、メンバー、リーダー木村、宍戸、関本、坐中、西川、山本（進）、石沢、四方、岡田、村瀬、辻川、山田、片山、尾藤OB。双六小舎をBHとし蒲田左股より全員入つたが悪天候の為、笠岳、鷲羽岳往復に終つて了つた。

不成功に終つたが、この冬山は、私達に色々尊い事を教えて呉れた。この日本の冬山が更に更に私達の登高欲をあおつてくれた事である。そして私達の考えて居た事が無意義でない事を示してくれた事である。私達の、山岳部というものを、又、山を考える基盤に確信を与え私達がこの線に沿つて精神する限り正しいのであるという自信に1ページ書き加えてくれた事である。何時かは、花が咲き実を結んでゆくであろう多くの事柄が私達の心の中に芽生えていた。続く春の才二次黒部下廊下横断は、前回の経験に基づき、スムースに計画は進められた。冬山に即れたとはいえ、精神的なバツクとして徳永先輩がマナスルー遠征隊に参加された意義は歪めない事実だつた。（註2）

（註2）　昭和31年3月20日ー4月5日。メンバー、リーダー宍戸

坪井、西川、岡田、山田、大井、一山、田島ＯＢ、広橋ＯＢ。大沢関電小舎ＢＨ、新越乗越ＣⅠ、鳴沢尾根末端ＣⅡを設け、サポート隊はここよりアタツク隊の黒部渡河を助けて撤収した。アタツク隊は更に内蔵助沢出合、内蔵助平にテントを進め、内蔵助源頭カールより立山稜線に出て越中に越えた。アタツク隊（宍戸、西川、岡田）

黒部を横断し後立山と立山、　とを結ぶ記録は戦前関大、大阪商大、戦後関学、東大によりなされているが、何れも仙人ダムを利用したものであつた。我々の計画は下廊下に始めて横断ルートを求めたものであつた。

計画は当初より可成り縮少されはしたが、一応可成功裡に幕を閉じ、此処に下廊下に終止符を刻んだ。下廊下に一応足を洗つた部は早や足取り軽やかに動き始めている。下廊下の井戸の底の様な圧重の下で登高を続けてきた私達にとり、暫く遠去かつていた積雪期特に冬の岩場は必然の道である。そしてそれが部創生当初より手掛けて来た北岳バットレス（註３）という問題に結び付こうとして私達の心が傾きつつあるのに気付く。そして更に積雪期の黒部源流の山々や、上廊下が私達の脳裏に深く足を入れ動き出しているのを意識せずには居えない。

以上で私達が部を通じて為して来た事、考えて来た事を述べた。何時も上を見て何物かを求めようとする登高であり、部は常に、それを生み出そうとのみ進んで来たことは、今まで一度も遭難に直面しなかつた事と共に何処までも私達の伝統としてこれからも全力を尽さねばならないと考えている。

顧みるにあの終戦の混乱期を通じて私達は、唯自分達の力だけで拓いて来たと思つていた。しかし今こそ私達は健全な日本登山界の伝統の上にその暖い庇護を背景として始めて此処まで歩いて来られた事を悟るのである。

（註３）　昭和３１年１２月、メンバー西川、村瀬、樋下、山田、大

井、広橋ＯＢ、関本ＯＢ、北岳バットレス才四尾根

編者註　これは関西学生山岳連盟報告復刊才１号に記載されたものに書き加えたものです。

リーダー雑感

リーダー雑感

昭和29年度を回顧

宍戸　元

昭和29年正月岩と氷の穂高に全精力を傾けたが、その春には又再び後立山に舞いもどつてきた。このような部の中に、自然に湧いてきたものは戦後の苦しい再建時代に歩んできた後立であり、その稜線からみた黒部であつた。私がリーダーを命ぜられたのは、この春山の帰り中央線の夜汽車の中だつた。このような部の空気をまとめて、黒部にどのような山行を展開するか、これがリーダーとしての最大の仕事であつた。この問題は冠氏らの記録を参考に立山側のもつとも登りやすい内蔵之助谷と後立側を結びつけるルートを発見し、積雪期に下廊下を横断するという形式に発展し、これが春山計画として決定された。当時は就職問題のない医学部の学生が多かつたためか、春山がメイン・エベントであり、その年度の総決算は春山で行われるのが恒例であつた。一方、昭和29年は又別の意味でも飛躍の年であつた。それは多数の新人を迎えたことであり、部員は一躍倍加し賑やかになつた。これら新人は新制中学才1回卒業生であり、新しい教育を受けた彼れらは部に良い意味で、新しいムードを作り出してくれた。

33年以降の積雪期上廊下横断はこの年の新人たちがリーダーシップをとつた。これら新人のトレーニングも又重要な問題であつた。又、忘れてはならない事は前々年のリーダーであつた尾藤先輩がインターンとして大学病院にあり、陰に陽に常に強力なバツク・アツプを与えてくれたことも、部の運営をスムースに運ぶ大きな力であつた。このような背景のもとに夏山は不帰東面を対象とした南股合宿にトレーニングの場を求めた。南股は涸沢、剣沢などと異り、南股にベース・キャンプを設けるだけでも、かなりなアルバイトを要しトレーニングの価値があつた。又合宿の下廊下偵察行の出発点としても、ここは便利であつた。この南股合宿で私達は不帰三

峯C、二峯東南稜、唐松直接尾根のトレースをすることが出来た。

夏山後半から秋にかけて下廊下の偵察に費やした私達は、冬には東尾根から鹿島槍に登つた。これは積雪期白馬主稜を初めとして杓子尾根、鹿島槍北壁の直接尾根など、先輩が開拓してきた後立東面の一連の計画のつゞきという意味と、中堅部員のトレーニングが目的だつた。これにより私達は積雪期の五竜東面のトレースを後輩諸君への置土産としたつもりである。一方、新人の冬山合宿は関温泉でスキー合宿を行なつた。このような贅沢な合宿は部として初めての試みであつた。従来のテント又は山小屋生活のスキー練習ではスキーも積雪期のテント生活もどちらも中途半端になる恐れがあつたからである。むしろ居住性のよい所で徹底的にトレーニングをやり、雪と、スキーになれれば、春山での新人はよりスムースに行動出来るのではないかと考えた。しかしこれは必ずしも予期した結果は得られず、弊害も多く功罪相半場した。

いよいよ年も明け30年の春になると計画は下廊下横断から大沢小屋をBHとし、剣岳に至る膨大な極地法に拡大していた。下廊下横断は計画の最終目標ではなく、少なくとも計画の上では剣へのルートの一つの隘路に過ぎなくなつてしまつていた。これが30年春の下廊下横断計画で、私たちの犯した大きな誤ちで、横断は失敗にきした。下廊下横断はあくる31年春に遂に成功したが、その記録は阪大時報、又は山岳53年に詳しく記した。

"戦後"という文字は最近では殆んど見られなくなつたが、この文章の冒頭にはどうしても使わざるを得なかつた。昭和29年という年はまだすべてが戦後という時期を区つて物語られていた時代だつた。このように8年前の合宿生活を思いおこして書くという事は、もはや正確な報告というべきでない。ともすると美しい追憶に溺れ、すべてを美化してしまう危険性がひそんでいる。だから詳細な記録はわざと私は書かなかつた。下廊下も今やダムも完成し岳人の舞台らら上高地と同じ様なレジャーセンターに変貌しつつある。記録を追う山登も北アルプスに関する限り最早過去のものとなつたと云えよう。

昭和31年度を回顧

木　村　裕一

昭和31年度の活動について語るとき才1に挙げなければならないのは何といつても積雪期（冬期、春期）に大きな計画を立案することが出来たということである。それまでの積雪期の計画は冬春のいずれかに主目標を置き他期はその活動をさまたげない範囲に於て行動していた。私達の昭和31年度春期は3年来の懸案である黒部下廊下横断が成功を約束されて待つて居て呉れて居た。冬期合宿の計画については相当慎重審議した。どうして双六小舎合宿案が決つたという経緯は忘れてしまつたが、参加全員（部の大半数）がその持てる力一杯に行動したいという意欲に燃えていたようだ。14名が双六小舎に勢揃いした時は壮観であつた。而も身の程知らぬもよいとこで重いスキーを双六小舎まで担ぎ揚げたのだから大したものだ。そしてその結果は悪天候の前に敗残の兵よろしく一昼夜かゝつてほうほうの態で敗走したのである。雪の下に全く埋もれた三俣蓮華の小屋の中で乏しい食糧を頼りに一週間も良く動かず頑張つたものだと思う。私は一週間目の快晴に双六小屋から行方の判らないかも知れないアタツク隊を迎えに行き三俣蓮華の小屋の上とおぼしき所でまごまごしている部員の姿を見て思わず"バカヤロー何をぼやぼやしとる"と怒鳴りながら目頭の熱くなつたのを今もしみじみと思い出すのである。そして私をいやという程痛めつけたこの計画が2年后にいとも容易に成功したということを聞かされた時私は山の恐ろしさを始めて実感として味わつたのである。

話は前后するが私が高校生の頃早大の山岳部がペテガリ岳へ登つた。戦后初遠征とかで大変な騒ぎだつた。朝日新聞が後援とかで大阪でも報告会があり珍しそうに聞きに行つたことがある。それから数年経ち私が2年部員の冬、北穂高山頂のテントの中で尾藤、川島の両先輩（当時は現役）が停滞のつれづれにヒマラヤの計画について話されていた。私は遠い夢の国の話の様な気持で聞いていた。それが10年も経たない現在、我々の先輩

後輩に数人もヒマラヤの土を踏んだ者を擁している。真実"ヒマラヤは近くなりにけり"である。終戦直後と10年前と現在の差は大学山岳部に於てもその在り方に変容を与えつつある。私が現役時代に感じていたヒマラヤと現在の現在の現役が促えるそれとはその距離感や計画性に於て全く異質のものであろうし、又そうでなくてはならないと思う。

かいる意味において茲に一巻として纏められた貴重なる資料も時間の推移を念頭において参考にして貰いたい。そしてその推移変遷に値する資料を次々と積重ねていつて貰いたい。さもなければ若し社会人山岳団体がどんどんヒマラヤ遠征をする時代になれば大学山岳部は解散するしか途はないと思う次才である。私はそんな時代には我々の後輩は月か火星の処女峰に挑んでいる様な気がする。

昭和35年度を回顧

田村俊秀

我々は前年度から次の様な条件のもとにひきついだ。(1) 40名近い部員。しかも⅔は3年以上の元気一杯の連中である。これらを下積みに終らせることなく充分に動かす必要があつた。(2)上部下積断が終りを告げ対称の上でも方法の上でも反省と新しい転換が望まれていた。(3)極端に部員が増える直前に極端に部員の少い世代が続き、その時以来伝統と技術の伝承の間に大きな空白があつた。ともかく我々は意欲に燃えて出発した。3年の冬赤沢周辺を事実上の皮切りとして薬師東面、八峰、千丈沢、南ア等いずれも対称として新らしく方法も非常識な位奇抜で。しかもかなりのスケールで行われ、それぞれ当時のエポックメーキングな山行になつている。しかしながら野心的な山行は一方に危険を伴つた。リーダーグループの若さが緩衝なしに暴走した事実も否め得まい。或る雪の朝全く未知の尾根を一斉に多数のパーティが出発するといつた形式が不安を感じさせるのは当然だが。多くの中堅部員に強い使命感をもつてフルに動いてもらう為は一つの試みであつたと思う。

この年の特徴は新しい山と方法を求めて論争が活発であつたことである。中心となつたのは明年度の課題として槍周辺と八峰東面とのいずれを選ぶかということであるが、前者は伝統との断絶を意味し、後者は逆というわけで、部の伝統に対する激しい批判がおこり遂には山登りの本質に対する深刻な懐疑論まで出たのは例年に類をみない。この時まで若干の事故を契機に従来あいまいだつた部の運営に関する規則やとりきめを明白にしようとする試みが生じた。前述した世代の空白は伝統に根ざす慣習法の喪失を意味し、これを補うつもりの上級生の一片のとりきめは大きな拘束力を持ち得なかつた。要するに大世帯の部の運営は多彩であつたが、同時に分裂の危険を絶えずはらんでいたといえる。

１０月に入り予想もしない海外遠征が突然すべてを圧倒した。４年はすべて準備に没頭し、我々の視野は遠くヒマラヤにまで広がり、ヤボな山男に近代的ビジネスが侵入して来た。現役の山行と準備の間で屢々苦境に立つたことも今はなつかしい。遠征の部員に日本の山がいつか海外の山に連なることを意識させた点で重大な影響があつた。かくしてバトンは３６年度酒井等に移る。蛇足だが次の３６年度は我々の時の美点と欠点が拡大して投射されている様な印象をもつ。彼等の歴史は我々の連帯感を強く呼び起させるものがある。

次に我々が遂に如何ともなし得なかつた阪大山岳部の問題点について述べてみる。(1)登山は知性的要素が大きいスポーツで、一定の規準がない為肉体的、技術的欠陥及び山行の不足を「狡猾さ」によつてごまかし得の面が多分にある。山岳部を毒するのはこれである。力と技術の裏付けのない「知性」は往々にして狡猾におちる。(2)テクニツクに対する偏見があり、スキーや岩登りを異端あつかいにする風潮がある。よく技術的劣等感の口実となる。もつとも練習しようにも上級生、ＯＢに伝承者がいないのは事実である。(3)基本的体力の養成が全く無視されている。シーズン外には部でラグビーかボートのチームを組織し、試合をする位になる夢を時々みる。

誰かポートを寄附して下さい。(4)現役4年で巨大な自然に向うにはいささか非力である。冷い批判者でなく現役を哀歓を共にする若いOBの輩出が望まれる。

最後に、私個人の考えでは一つの部にいろいろな個性のいるのが良いと思う。甲はアヴアンギヤルドのクライマーだろうし、乙はロマンチツクなワンダラーであつて思い。丙は権謀術数を得意とし、丁は牛の如き粘ばりを誇つてよい。これらすべてを寛容に包含し、存分に能力を発揮させ、しかも統一を保つ時、素晴しい山行が出来る。人と山と巧みな調和こそ山岳部という組織体の永遠の課題であろう。

合　宿　考

尾　藤　昭　二

昭和24年山岳部創立以来の部の山行は、決してばらばらのものではなく連綿とした流れを形づくつて来た。(下廊下横断迄「山岳」49年53年参照)而もその流れには常に上を向いた山行の積み重ねという伝統が輝いている。この流れの中の一コマ—昭和27年より28年にかけての一年間、私がリーダーとして合宿をどのように考え、部の山行が如何なるものであつたかについて思い出してみたい。

当時部が置かれた客観情勢は、先ず第一に積雪期の後立逆縦走(初登)という当時の山岳界ではAクラスの目標を先輩よりひきついだ事、第二に、はじめて阪大山岳部に育つた者が現役の主体となつた事である。それ迄は—私達を育てた諸先輩は何れも旧制高校山岳部で既に訓練をうけたいわば岳人として完成された方々が交互にリーダーとして私達を指導してきた。この先輩と私達との大きな差は、愈々一人歩きをするこの段階に至つて私達を尚一層奮起せしめた事は否めない。又、当時の部の装備は誠に粗末なものであつた事など、今からでは想像も出来ないものだつた。例えば積雪期の天幕では浪高及び大高山岳部の十数年前のもの2張と、夏用天幕に底をつけたもの1張に過ぎなかつた。し

かし私達は、我々が部を作つてゆくのである、我々の歩みが部の伝統となつてゆくのだと情熱と積極的な意欲にみちみちていた。部のあらゆる活動に於いて如何なる小さな事柄に迄も一歩ずつ前進すべきだと信じた。部の集会であれ、他校山岳部部活動の批判検討であれ、文献的研究、抄読であれ、これらすべてを吸収して部の知識とした。又合宿では、如何なる合宿に於いても「訓練」——即ち〝中堅部員の指導〟とか〝新人の訓練〟というものを決して目標とはしなかつた。合宿の目標とは、合宿が最高の状態に発展した際、上級部員が最大の努力を払つたならば得られるであろう最高のものを常に目標とした。それは初登攀を、又地形的な未知の部分を、或いは何か大きな計画の部分的な解決を目指した。合宿の行動はすべてかかる目標に集中せしめた。この目標を達成せんが為の努力、行動は、自ずと新人、下級部員、或いは中級部員にとり素晴しい訓練になる筈である。雨の中で火を作る技術はロツククライミングや氷雪技術と、山に於いては優るとも劣らぬものなのである。初めから下級部員のトレーニングを目標とするような、上級部員にとりある意味では下向きと考えられるような目標は、断じて合宿の目標ではないと信じた。

夏山合宿はカクネ里で行つた。カクネ里は1年前、部が戦後初めてのカクネ里の開発を行い、2年目として鹿島槍北壁の直接尾根の初登攀と、戦後まだ人の入つていなかつた荒沢の偵察を行つた。冬山合宿は南アルプス聖岳（冬期初登）、中央アルプス縦走、及び大沢小舎の三班に分れた。何れも3人～5人の小パーティで自らを訓練しながら、聖岳の初登と木曽駒登頂、春山に備え小沢小舎より直接後立稜線のルート開拓を行つた。春山の後立逆縦走は準備は出来ていた。既に積雪期の不帰並びに八ツ峰キレツトの通過も部で解決していたし又針ノ木より冷迄の稜線も、大沢小舎よりのサポート隊の登路も開かれた今、問題となる部分はなかつた。しかし成功しなければならないという山行は、たのしいというより寧ろ苦痛を伴うものである。絶対に成功しようと努力した。成功した。しかしこの宿題を残してくれた先輩は、この成功をもつと喜んでくれると思つた。先輩は私達を甘やかしはしなかつた。この1年を通じ漸く一人

歩きの出来るという自信をつけた私達には更に強いムチの如く感じられた。次の年、リーダーを同僚の川島君に渡し私も更に現役として動いたがその自信と愛のムチは尚一層私達を奮起せしめた。翌年の冬穂高槍の稜線に展開した山行は阪大山岳部の名をあげ、第一級の大学山岳部に比肩せしめるに至つたのである。

今思い出してみるに私は、山岳部成長期のめぐまれた時期に現役生活をおくれたものと感ずる。しかし、この力一杯活躍出来たその後には何時も篠田教授とはじめ諸先輩が居られ、御指導、御援助を得られればこそとの感は誠に深いものがあり厚く感謝している。

合　宿　考

山　本　信　樹

合宿がこうでなければならないという基準はどこにもない。大学山岳部としては絶対に破つてはならない鉄則は、死んではならない、ということであつてこのためには如何なる物的、精神的困難をも克服せねばならない。合宿にかぎらず登山に於ては、いつ如何なる状態で死んでも自分は本望であつて、他人に迷惑をかけない、という確信がある者以外は危険を犯す事は許されない。たとえ無知が原因であつても失敗は決して償うことが出来ない。山登りには、危険と困難の二つの言葉がつきまとう。我々は困難というのは、努力次第で解決出来るものだと解釈する。危険とは紙一重のところでなんとか可能だという場合或は、このままの状態では致命的な失敗を犯すかもしれぬ、という場合に解釈する。私は困難には立ち向うべきであるが、危険は避けるべきであると思う。

私自身の現役時代の事をふり返つて見ると、我々が克服した困難が大きければ大きい程山登りの生き甲斐、面白さ、充実感、そういつたものが深かつたようである。同様に、未知の世界に本能的に惹かれていくのを常に意識していた。困難と努力、危険と未知は、互に切り離して考えられないものであつて、山登

りの真の姿はこう云つた要素が非常に強いと云わざるを得ない。又それなるが故に山登りが単なるリクレーションとか、山登り以外の競技スポーツと異り、人を捕えて離さないのだと言えましよう。困難と危険を克服する事に生き甲斐を見出しているのではないか。

しかし、山登りには、最終的には未登攀ルート、処女峰への挑戦へと進む上記の如き楽しみの他に別の楽しみがある。山の中にいるという事自体が楽しみである。我々は、一人で六甲の山を歩いていても退屈しないであろう。二人、三人で歩くのも又楽しい。初雪の上高地の静けさも又格別である。激しいラッセルの最中にちよつと足を止めても空の青さに喜びが見出せる。我々は自然の美しさに心ひかれるのである。

合宿で新人を訓練するという言葉が良く使われるが、山登りに関しては、訓練だけが目的ではない。一年中合宿が訓練であるならば山登りなどやめてマラソンでもやつた方が良い。春夏秋冬の山行きに於てその季節に応じて重点の置き方を変え、上級生は山登の良さをなるべく早く新しい部員に教えてやる事が出来れば新しい部員は各自の能力が増すにつれて自分に適する山登りを見出す事が出来るであろう。

山岳部の山行が多くの場合、合宿という形態を取つている。合宿は部の総力の結集という大きな得点があるが、反面、中堅以下の部員の自主性を犠牲にしている。年間を通じて合宿のみに重点を置く事によつて、中堅以下の部員の自主性を拘束する事は山登りを彼らが行う場合、必要な経験や判断力を養う上でマイナスになる点が多い。

山岳部をまとめて行く上では一年に二度ぐらい部員の総力を結集して、部としての実力を試す事が必要である。現実に、過去に於ても優れた山行は、部全体の総力を結集した型で示されて来ている。将来もそうであろう。それによつてこそ、部全体のチームワークも完全になると信ずる。

学生登山をふりかえつて

岡　田　博　司

学生時代に行つた登山について、当時私はどんな考え方で、どんなふうにやつてきたのかを明らかにし、又現在の時点から振りかえつてみてその反省と、登山にまつわる諸問題について若干の私見を述べてみたいと思う。

我が国の自然条件のもとにおいて、より高い山を考える時、それはより深い山と置換えてみる方が一層適切なように思われる。そうでなくとも〝奥深い〟とか〝人里離れて人跡稀れである〟と云う言葉がいかに山登りを行う人々の心をひきつけてやまないものであるかはよく理解されることであろう。

初登山の夢を遥か彼方の過去のものとしてしまつた日本国内における登山の現状においてすら健全な登山を心懸ける人々においては、いたずらな思あがきに似た状況におちいることなく、飽くまで登山の本質をわきまえて素直な登山意欲の命ずるままに、一歩一歩自分を高みに達せしめるべく努力していることと思う。

山にひかれる心を深く吟味し、確信をうるところあるならば、例え幾度か先人の辿つた道であろうともう一度自分の登山としてやつてみることに充分意義が認められるのではなかろうかと思う。

私自身の心の内にある問題をはつきりさせることによつて、黒部源流の山々への登山は、急に魅力あるものとしてよみがえつた。

私達が昭和３２年の暮から翌年頭にかけての冬山登山を蒲田川左俣から赤牛岳に選んだ理由の背景には昭和３０年度の冬山登山に手掛けた仕事を完成させたいという部の流れにも、そういう意義を有してはいたが、どんな場合にでも物事を新鮮な角度からもう一度見直してみると云つた心懸けは忘れられてはならないことと思われる。

部の歴史についての認識をよく言われるところであるが、表にあらわれた部

の活動の足あとは、あくまで精神的なものの一つの流れが具現されたものである限り、まず部の一員として心におくべきことは登山に対する考え方そのものの歴史についてである筈である。

計画は、前回の試みにおける経験を生かしつつ、当時の部が有していた条件の範囲内において、メンバーの構成、行動計画、食糧装備の準備を慎重に検討したが、それは決して満足すべきものとは思われなかつた。登山の形とか規模についての制約は、山に登らんとする私達自身の側に存するものと思われ、それに加えて気象、積雪等の外的条件が登山の成否を大きく左右するものであることを痛感していた。

そして私にはもう一つ頭を悩ます問題があつた。偶々この年は三年部員が皆無と言う現象を招き、そのことが部の運営の実際面に支障を生んでいたと思うし、私自身の気持としては、部の一員として登山することが喜びをもたらさない場合もあるのではないかと反省し、去りゆく仲間に淋しい気持を禁じえなかつたのである。僅かに登山はその方法、形式において多種であり、目指す目的も人により千差万別と言つても良いのではないかと考えられるが、少々独断的な言い方が許されるならば青春時代の登山において、学校山岳部に属することが最も得るところが多いと確信している次第である。

仮りに部の現状に不満をもち、仲間との間に意見の喰違いがあつたとしてもあくまで部内で問題の解決に努め、ひとたび登山に向わんとする時には、しつかりとした連帯感と協同の責任を自覚することが必要である。その為にまずもつて、部の一員として深く根をおろす覚悟が望まれる。

そうした点から新人部員をどの様に取扱うかについて充分配慮した積りであるが、合宿の前半を赤牛パーティのサポートにあて、後半を槍平生活としたがまずまずの成果を挙げえたと思う。この新人合宿のリーダーを引き受けてくれた村瀬君には今も感謝している次第である。

今後のことについて私見を述べると、栂池に山小舎をえた現在、一年生部員については、入部時から段階をふんだ基礎訓練を行い、栂池小舎での冬山合宿

をもつて一応のしめくくりとすることが望ましく、これを輝やかしい夢を与える独特の雰囲気に満ちたものに育てあげてゆきたいものである。

おわりに、山登りが私達にもたらしてくれる諸々の糧について感想を述べてみたいと思う。

夏山の雨に降られたテントの中で、又明日は停滞と決めた吹雪の夜などに、口々に語られる登山の背景をなしている精神的な問題について、自分はこんなふうに思うが他の人にとつては全く違つた感じ方があるのにびつくりしたことがあつた。しかし、およそ登山がもたらす喜びや精神的啓発と言つたものは、一人一人夫々異つた感じ方があり、身につき方がありそうだ。全く、団体登山、単独登山等々と区別してみたり、又一つの部に属し常日頃ルームにおいて或は山登りを通じて共同生活をやつてきたとしても登山に関する経験ほど本質的に個性的なものはないと思う。

その結果、山登りがその人の人生に投ずる光が強い光であつたり、弱い光であつたりすることであろう。ただ私としては、それらの人々が夫々異つた仕事を持ち、異つた環境におかれているとしても、心の中に登山を忘れることなくなおひたすら登山によつて人生の幸福を得たいと願つてやまない人々であるならば、山登りそのものや、山登り以外の事柄についても互いに親しく話合えるのではなかろうかと考えられるのである。

以上拙文を記しましたが意のあるところを酌んで頂きたいと存じます。

合　宿　記　録

（夏山・冬山・春山）

合宿記録目次

1949年	春山	雨飾東南稜	32
	夏山	剣沢合宿	33
	冬山	厳冬期の白馬主稜	36
1950年	春山	八方より鹿島槍往復	42
	夏山	南股合宿	47
	冬山	杓子、双子尾根	52
1951年	春山	後立山逆縦走計画の失敗	53
	夏山	鹿島槍カクネ里合宿	57
	冬山	北岳合宿	76
		八方尾根	78
1952年	春山	小日向より不帰往復	79
	夏山	カクネ里合宿	89
	冬山	冬の聖岳	95
1953年	春山	後立逆縦走	99
	夏山	剣沢合宿	107
	冬山	天狗ユルより槍往復	115
1954年	春山	春の黒部へ	108
	夏山	南股合宿	124
	冬山	鹿島槍東尾根	125
1955年	春山	鳴沢岳より黒部へ	132

1955年	夏山	北岳合宿	141
	冬山	双六、笠、鷲羽	147
1956年	春山	春の黒部下廊下横断について	154
	冬山	北岳バットレス（その他）	164
1957年	春山	烏帽子より黒部偵察	172
	夏山	穂高合宿報告	178
	冬山	双六岳－赤牛往復	180
		槍平新人合宿	183
		仙丈岳女子冬山合宿	185
1958年	春山	天狗尾根より極地法による王竜、爺岳	187
	夏山	剣岳合宿	194
	冬山	涸沢岳西尾根より奥穂高岳	195
1959年	春山	黒部上廊下積雪期初横断	201
	夏山	千丈沢及び槍ケ岳周辺	211
	冬山	スバリ岳、赤沢岳周辺	213
		白根三山－大唐松尾根	221
1960年	春山	薬師岳東面	224
		真砂尾根より剣岳八ツ峰Ⅰ峰	233
	夏山	千丈沢及び槍ケ岳周辺	242
	冬山	南アルプス	244
1961年	春山	八ツ峰を末端から	250
	夏山	剣沢合宿	255

1949年春山

雨飾東南稜

大島輝夫

49年春は我々の山岳会も未だ公式に発足していず、春山へ行くメンバーは徳永と私の2人だけだつ現ので、長い計画には余り体力に自信がなく、結局西岡一雄氏よりかねてお聞きしていた雨飾東南稜へ徳永を引張ることにした。此処で「雨飾」なる、人の余り知らぬ山について解説しよう。大糸南線中土より3里小谷温泉の北方新潟県境に在り、高度1960m、谷川岳より高い。白馬方面より見るとむしろ可愛いい山であるが、東より仰ぐと威圧的である。東と南に岩壁をめぐらし、その間に東南稜が頂上近くに岩峯とナイフリッジを持つてはり出している。雨飾への一般ルートは頂上北側で傾斜はゆるいが日本海より烈風が直接吹きつけて蒼氷になることもあると聞いた。

此の山について最初に書いた近代登山家は大島亮吉氏であろう。登高行2号(P141)によると「マツターホルンの如き豪壮な山の姿を見た。その絶嶺近くは雪も積り得ない程の凄愴な急崖となつて黝い岩壁を露出している……」と書いてある。その後水野祥太郎氏が東南稜を偵察され、(P.C.C報告及び泉をきく)。他に三田尾松太郎氏(幽水秘峡)や深田久弥氏の夏の紀行があるが、東南の写真はどれにもない。又東南稜は夏も積雪期も登つた記録は無いと思う。

4月3日。晴後雨。テント等全装備を持つて小谷入り。夕方上へスキーに出かけたが、視界悪くみぞれの降る中を帰つた。

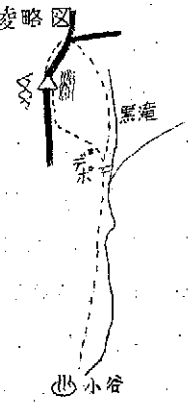
4日。晴後小雪。5時起床。雨の音に寝て又目をさますと青空が見えるのであわてて8時スキーで出発した。10時半黒滝の左側を登ると始めて主峯の全容に接した。尚もスキーで登る中に天候悪化し、頂上が見えなくなつた。右から沢が入つている所で昼食(11.30)を食べる中に我々もガスに包まれ、時々風が雪をたたきつけるが、とにかく岩場迄行く事にしてスキーをデポし12.30出発した。靴のままで表層雪崩のデブリをこえ左側の斜面を東南稜目がけて登り出すと大体膝迄もぐり、次第に傾斜が急になりとうとう尾根の上に出た。依然視界はきかぬが、尾根が相当やせているので岩峯に近いらしい。とにかくこの天候では登れぬから庇の根元に出来た穴に入つて休んでいると、好運にも時々青空が見え出したのでアイゼンをつけて出かける。(14.30—15.00)すぐに岩場となり25mのザイルでアンザイレン。徳永トップ。岩に硬雪のついた悪場をロックハーケン3本を使つて約20m登り狭い所で0を確保。此処に約50分かかつた。次の短いピッチで岩稜の上の3人位立てる所に出た。反対側を見下すと絶壁で下は見えない。第3ピッチはやゝ岩がかぶつているので、ハーケン2本を使つて左側迄ばナ

イフリツジであるが、岩は出ていず、向つて右側は絶壁で（東壁）左側は雪の急斜面が遥か下迄続いている。確保してナイフリツジの左側斜面の方を慎重に進む。試みに靴で稜の上の所をけりこむとぽかつと崩れて穴があき反対側がすとんと見える。最後に傾斜の少し急な所を登り切ると、頂上だつた。(17.15) 天候は全く良くなり夕陽に焼山が白煙を出して輝いている。遅いので休む間もなくザイルをとき、北側斜面を下り、肩を過ぎてから、適当にデポの見当をつけて膝迄もぐりながら尾根を下つた。デポ（18.20－18.40）黒滝（19.20）川を離れて台地迄登る所でシールを又つけるのが面倒なので、かついで靴をラツセルして上つたら全くへばつた。上の平でわかんの跡を見つけスキーは重いばかりなので立てて残し、温泉へ１１時過ぎ帰つた。スキーは翌日取りに行つた。

雨飾は１日行程の山としてすぐれた山であると思う。

（時報１号）

両飾南東稜略図



１９４９年夏山

剣沢合宿

家田千尋

メンバー　大島、加藤、家田、神川、山佐、佐江木、藤谷

7月３１日　２０.２５　大阪発酒田行

8月１日（曇）泊下車。１６時山崎発愛本へ。家田、神川愛本キャンプ、他は山崎泊り。

8月２日（晴）（０５.３０）山崎発一愛本一字奈月一欅平一阿曾原（１１.００）一仙人池（２０.００）一池の平（２１.００）

8月３日（晴）池の平（１０.００）一二股一真砂沢出合（１６.００）一ベースキャンプ設置。

8月４日（晴）真砂沢（０９.００）一小雪渓一源治郎尾根一平蔵雪渓一B.C

8月５日（晴）B.C（８.００）一八峰上半一剣（１７.３０）一B.C（２１.００）

8月６日（晴）神川、佐江木、藤谷、山佐、下山。剣沢一三田平一追分小屋前天幕。

8月７日　三、四峰フエース

8月８日　B.C（14.00）一二股（15.30）B.C移動

8月９日　チンネ

8月10日　休養

8月11日　六峰三の窓側フエース

8月12日　B.C撤収

８月３日、B.Cを真砂沢出合に設置し、源治郎尾根、八峰上半を終えて白馬に廻る佐江

木、山佐、藤谷、神川を8月6日に送り、上記3名（大島、家田、加藤）3名を以て、7日より11日までヴアリエイシヨンルートとしてのフエイス登　を行つた。

8月7日、三、四峯フエイス、長次郎側、

B.C、8.00発剣沢をさかのぼり長次郎雪渓に入る。長次郎岩小屋のすぐ下の雪渓を右に入り大きなクレヴアースを避けてそのまま左の岩場にとりついた。ここで40mのザイルをつけて3ピツチをごく軽くすぎ灌木と草付の間に少しずつ出ている岩場を撰つコンテイニヤスに上つた。この辺は下から見た程のすごさは全然なく直射日光と草いきれにむされ途中わずかの岩影で息をつなぐも2度3度いつのまにか最後の岩壁に来ている。花崗岩の傾斜のゆるいスラブでゴム裏の感触が何とも言えず気持よくスリツプの危険など毛頭ない。ピーク迄100m位の岩壁が続いているがここをコンテイニアスをおりまぜて三峯めがけて一気にかけ上つた。尾根筋から見る剣の姿は全くすばらしい。日光に照りはえて岩が互に陰影を作り合いくろがね作りの偉大な建築物のような感じだ。尾根筋へは11時頃に着き昼食後三、四峯コルの草付と偃松の中を長次郎側に四峯の最後のフエイスにとりつくべく200m程はい下つた。ここも三峯フエイスと同じ様なスラブであるが花崗岩の間に別の岩の幅20cm位の断層が入つていて、三峯フエイスよりも傾斜度は大であるに拘らずこの岩の層がスラブに斜に上行しているため適当なホールドと足場を与えてくれも6ピツチ程、最後は四峯の岩頭に馬乗りになつて再び尾根筋へ出るこの三、四峯フエイスは極く簡単で特別につけるべきルートもなくスラブなる故にどこからでも取付ける。

四峯は三窓側をアブザイレンで下る少し面白い懸垂である。五峯の長次郎側を下つて、五、六の大キレツトからグリセードで長次郎雪渓へ、B.Cへ帰るとまだ日は高く剣沢に映えていた。

8月9日、チンネ

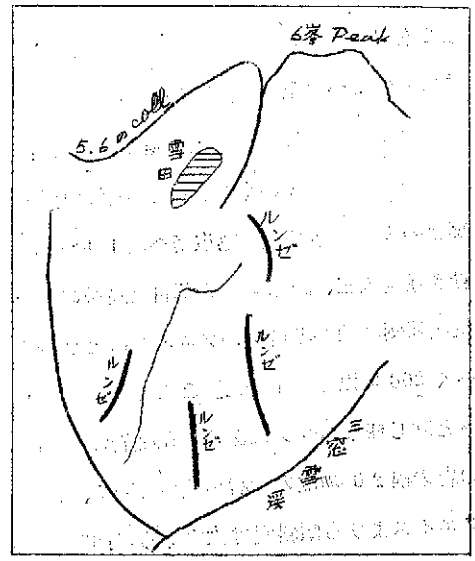
二股に移動したB.Cを（6.00）に出発し、冷風吹きおろす三窓雪渓をコルのすぐ下から左へトラヴアースしてチンネの取付に着いたのが10.00である。ここからは普通のルートの中央チムニーを上つたが大体40mのザイルを3人で使つて上よりジツヘルのセルフビレイ用ハーケンに到着するのが精一杯であつた所より見て、ここでは30mに3人つながるのはちよつと考えものである。

最初の1ピツチははじめが少し悪いチムニーとはいえ広すぎて背中の全然使用出来ない普通の岩場である。それからは細くチムニーらしいが3人とも背中のリユツクを気にしながら体を半分右側の空間にふり出して下から見ているとどうも安定が悪い。それに2人で立てる足場がないのでトツプに続いて2番、それからストツプに続いて三番と3人パーテイの欠陥を暴露しながらとにかく動く時間よりもジツヘルにばかり倍の時間をくつている。

それでも要所要所ばちやんと先従者のビレイピンがあるので我々のハーケンは腰でガチャガチャいうばかり、ハムマーを振る所もないチムニーを斜右上に上つて行き、最後の1ピツチは全くフエイスの上に乗り出した様な形で大テラスのすぐ下のガレ場についた。やはり想像以上に時間をくい、大テラスに着いたのが1時であつた。ここは北面にあたるので日中全然日がささず寒くておちついて飯もくえないしするのでそのまま京大ルートをとるため左へトラヴアースし、そこを少し下つて最左の岩稜にとりつき陽光をあびて飯を喰い終ると変に睡気をもよおした。そこから更に左へ出てニードルに対面するフエイスを斜め上より主尾根に出んとしたが意外に悪く、天候も悪化してきたりして予想以上に時間をくつていたので無理をせずそのまま左方大ルンゼを下つた。ここは簡単でわずか2ピツチでいつのまにかかつたガスのうず巻く中を朝の取付地点に出、そのままグリセードでとばして二股にかえつた。B.C着は18.00であつた。

8月11日　六峯フエイス三窓側

BC、08.20出発、三窓雪渓と五、六キレツトより出ている雪渓の合流点のすぐ上の取付に10.15着、すぐにアンザイレンしたがこの所の約100m上がガレていて、そこからの落石の跡が白く岩の上に無数に残つている。すこぶる気持の悪い所である。取付から少し左へ2ピツチ足場少く摩擦を利用する。そこからコンテニアスで小さいルンゼに入るがここも落石多く浮き石になつている。ルンゼががぶつて少し悪いのでジツヘルするのがたよりない。このルンゼを2ピツチ、それからはルンゼを離れて右上にはい上り百合のはえた気持のよい草付をどんどん上つてから再び左に巻き、チムニー状の左のフエイスを1ピツチ、それから草付、スラブを経て、　松を腕力で強引に上り六峯の見える草付に出た。ここで昼食をし13.15発、この頃より積乱雲におおわれ夕立を思わせる。更に左のリツジのハイ松をこぐと、次第にリツジはやせてその左は大きなルンゼとなつて落ちている。このルンゼは大キレツトからの雪渓に続いているのが最後の所はとても上れない程に悪い、頂度このルンゼと、先に上つてきたフエイスの右にあるルンゼとが集つて来ている頭にあるやせ尾根を少し下り右側のルンゼの続きのガリーにまわり込んだ。傾斜は相当で雨でも降れば完全に滝になる所である。ここをコンテイニ



アスで梯子を昇る如くすぎる。上は草付(14.30)左へ巻いて六峯下の雪渓に出、チヨロチヨロ流れる水に渇をうるおした。この雪渓の横の岩場はコンテイニアスで六峯のピークへ15.10に到着した。天候は更に悪化して今にも泣き出しそうなので急いで五、六のコルへ下つたが、コルへつたい途端長次郎の方から大粒の夕立がやつて来た。白く煙る雨中をアイゼンをつけてクレヴアースの大きくロを開く雪渓を右に左に割れ目をさけながら二股に下つた。

（時報1号）

1949年冬山合宿

厳冬期の白馬岳主稜

徳永篤司

1. 第1次アタツクの失敗と白馬主稜登攀の予測

われわれ阪大山岳会が1950年の冬期この白馬主稜を計画したとき、予め次の如く事が考慮された。

1. 取付点、猿倉台地より杓子支稜の裾をまいて大雪渓に出る以上大雪渓から白馬沢よりに廻り込んで地形上の主稜末端から取付くのは傾斜の緩い長所はあるが時間的に相当なロスである。その為には大雪渓から直接主稜の末峯めがけて横から取付く事。但しその附近で比較的取付けそうな処は夏季草つきとガレ場であるためナダレを考慮して日出前に稜線に出てしまわなければならない。

2. 登攀時間及び隊編成、最高約10時間、テクニツクよりアルバイトに向く2人より3人パーテイを必要とする。

3. 降路、大雪渓、原則として頂上小屋を使用せず、などでこれは1948年の3月と7月、浪高山岳部として登つた三合尾根と主稜の経験に基いて割り出されたものであつた。第1回アタツクに失敗した30日の状況は、冬の主稜が予想以上に頑強であることを教えてくれた。

1. サポートを先頭に立て引返し可能のギリギリまでラツセルに使いアタツクを温存する。

2. 出発時刻を30日の4時より早くする他に全行程のピツチを意識的に上げねばならない。

3. スキーを稜線上まで上げる事。などを附加せねばならなかつた。

結果から逆に見て、以上の予測はまだまだ不完全極まるものだつた。相当過大に評価していたに拘らず実際の主稜はもつともつと頑強だつた。所要時間も予想の倍近く掛つたし、サポートに多くを期待するのは無理だつた。更に重要な点は、われわれが余り問題にしていなかつた最後の雪庇が全く主稜初登の田中伸三氏の云われる通りだつたという事である。田中氏は学連報告の中で厳冬期における主稜を登攀不能なりとし雪庇の切れない事をその理由に挙げて居られる。

2. 出発より猿倉台地まで

元日の夜細見を徹夜させ、食事の準備をする一方刻々の天候変化を観察して貰つた事は非常に良かつた。2日午前2時にたたき起されたわれわれは食事をすまして30分后に全員外に飛びだす事が出来た。細見は殆んど完全に出発準備をやつてのけた。最初1時出発をためらわせた空模様ではあつたが、上るにつれて杓子尾根が鮮かに見え始めて来た。天候が快晴に向つたのではなく、実は猿倉台地の高度に雪の層が狭つておりそれが原因で北股で曇り、猿倉小屋で晴になるというカラクリが判つたのはもつと後だつた。所謂烈風后の晴天でない点で30日と変らなかつたが、しかし冷え切つたように冴えた白馬の全容に初めて接する事が出来るという事が何より心を弾ませた。猿倉小屋では主稜をねらう中京山岳会は既に半時間前サポートをラツセルに送り出し后発のアタツクと残留の人達が残つていた。すぐ上の猿倉台地で我々はこのサポートに追つき先になつた。30日のときはラツセルとルートの選択に時間を食い、夜が明けてから取付いていた。台地から大雪渓まで、杓子支稜の裾をまいて幾つもの沢と隆起が折重なつている。遠近感の不分明な夜間、これを一々気にしていたのでは時間を食うばかりである。少々の登りや下りは問題ではない。長走沢を渡つたわれわれは真一文字に大雪渓へとトラバースを始めた。松久と久保、小沢を交代に先頭に立てて。約1時間后の午前5時、われわれは大雪渓の真中に立つことが出来た。黒々とした山影をその面に横たえて、白銀に光る巾広い帯が杓子の峻部に上つていた。その彼方、ぽつかりと開いた稜線の窓に、氷のリンネに飾られた西の星空がチラリとのぞいた。冷え冷えと音もなく吹き下ろす風と共に、大雪渓の底を伝わつて凍りつく夜明前の寒気が体をゆすぶつた。見通せるかなり上部まで、雪面には1つのデブリもなく、左手に杓子尾根が鋭くつき立つていた。予想した如く、真ぐ右手の一合雪渓と呼ばれる沢の横の傾斜は急であるがスキーで取付くに適していた。

1分の休みもなく、其のまま全員主稜側面の登行を開始した。折からトラバース、ルートにあたつて、中京山岳会の携行する懐中電池が点滅して続いた。風こそないけれども、絶好の登　日和が訪れ様としている事は疑いのない事実だつた。それをわれわれは全く申し分のない完全さで絶好のコンディションでしつかりとつかむ事が出来たのである。全力を本日に傾倒して、どんな事があつても登り切ろう。嵐の様に心の底をかき立てて、吹き荒れる情熱と感激が烈しい闘志に入り交つて全身を流れた。

東の空がいい様のない美しさに映えて、静かに1月2日の太陽が東の涯から微笑みかけた。その清々しい夜明けの陽光は、過去に於て決して報いられた事のなかつたわれわれに

対して、今日を逃がして他に絶対に機会のない事を教えてくれる様な明かるさで照し出した。

3. 白 馬 主 稜

輪カンのラツセルは膝より少し上までもぐつたが、冬としては良くも悪くもない雪質だつた。取付きで小沢に分かれ、稜線直下のスキーデポ地でサポートの松久、久保にスキーを托した。徳永、大島、家田のアタツク3名は、長い長い主稜の稜線を交代でラツセルし乍ら頂上へ出発した。振り返る太い樺の横でひとかたまりになつて準備する中京山岳会の人達から離れた雪の中にわれわれを見守る松久と久保が立つていた。彼等はこれから5人分のスキーを担いで降り、飯を炊いて又迎えに上つ来なければならなかつた。

松久、久保、小沢はラツセルに酷使された体で、細見は徹夜で全員の出発準備に忙殺された身で、4人共見事に晴れた得がたい今日1日をごたごたと麓でサポートに費さねばならなかつた。30日のときの引返し点でアイゼンに代えていたとき中京山岳会アタツクの熊沢リーダーと鈴木氏が追ついて来られた。10時過ぎである。此処から頂上まで別に相談した訳でもなかつたが何時の間にか両隊1つになつて行動した。対抗して競争する他のスポーツに比し、登山に於ては協力すべき点があるだけで対抗すべき何物もない。一面識もなかつた両隊が白馬主稜に対し抱き合つて登る事が出来たのは登山家として無上のよろこびであつた。

夏季、一面に茂つたハイ松スギの主稜、前半は充分に雪が乗つてふわりとした感じの急なリツジが只上り一本に延々と曲りくねつて続いているだけである。左手にあたつて、雪をもつけぬ頂上直下の岩稜が恐ろしい迫力でせまつていた。越後側から吹きつける風に雪煙を巻き上げる頂上の稜線が碧空を区切り、そこから真一文字に大雪渓へ、1948年の3月浪高OBとして登つた三合尾根が岩峰を並べて立つていた。右手には白馬以北の稜線と白馬主稜とに包まれて、白馬沢の雄大な景観が人間の介入を厳として退けていた。足許の雪を巻き上げる烈風は絶えずわれわれを悩ましたが、しかし何処までもウインド・クラストの稜線は出て来ず、却つて不安定な足場は粉の様に崩れた。既に引き返すという事を忘れたわれわれは一度の休憩もなく交代でラツセルを推進した。正午頃、高度から云えば遥か下、大雪渓の上部にあたつた2点、頂上をめざす中京のサポートを認めて双方から呼び合う事が出来た。見返れば視野の始めから深いラツセルの跡が1本、われわれの登行を刻みつけるように延々と足許まで続いていた。

夏季、主稜の後半部はガラガラの岩場と不安定なリツジの連続となり、ルートは3つの岩峰によつてさえぎられる。頂上に接近するに作つて加速度的に増加する傾斜は頂上直下の陰惨な岩場でオーバーハングを作り露出し

ている。ルートは其処を避けて100 m程の一枚岩のガレ場を登りつめ、山頂標より１０m程北側に出るのである。

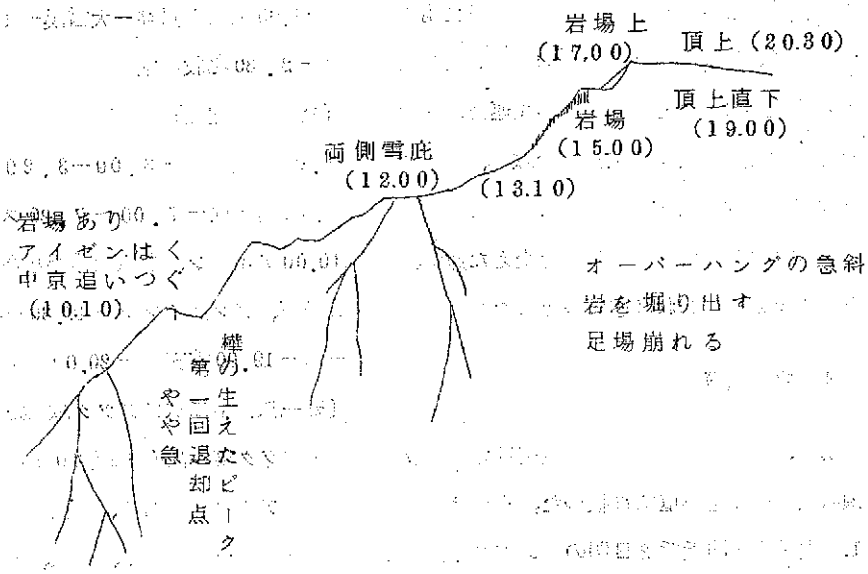
記念すべき最後の悪場は先ず第三岩峰（かりに頂上から順に第一、第二‥‥と名付ける）より始まつた。そこで、われわれは６０度の斜面に着いたパウダースノーを全部払い、岩場を出して進まねばならなかつた。汗ばんだトツプとは反対に后は頭から雪をかぶつて寒気と斗つた。日没が迫つた。第三峰上の稜線では折角苦心して作つたトツプのラツセルを后の者は使えなかつた。足場の雪がずつて、登行に際して落るおびただしい雪のためにラツセルの上に同じ努力でラツセルをしなければならなかつた。ナイフリツジを渡つた第二岩峰を夏季われわれは北側をまいて荷物をつり上げた。今、吹き寄せられて積つた十数米り雪のためオーバーハングは下にかくれて３分の１位をあらわしていた。ここでアンザイレン。夏迄通り右をまいたが上部に上行不能の一枚岩が2．30 m続いているのでやむなく中止し、左側に廻り込んだ鈴木氏が熊沢氏の肩から成功した。その間、３m程の高さである。日は没した。雪かき出して登るのが一番良い方法には違いなかつたが、既に第二岩峰で日没になつたわれわれには、そんな悠長なことは出来なかつた。事実一々雪を払つておれば、明日の朝までかかつても頂上にゆけそうになかつた。膝から下を足の裏の様に使つて、或いは両腕を雪面に突込んで登行を続行した。苦肉の策である。アイゼンの全く効かぬ足場は危険を極めた。偃松を１本１本掘り出して辿り着いた第二岩峰直下で、正面から左手へ続くオーバーハングと右手の一枚岩にわれわれは遂に行手を阻まれて了つた。

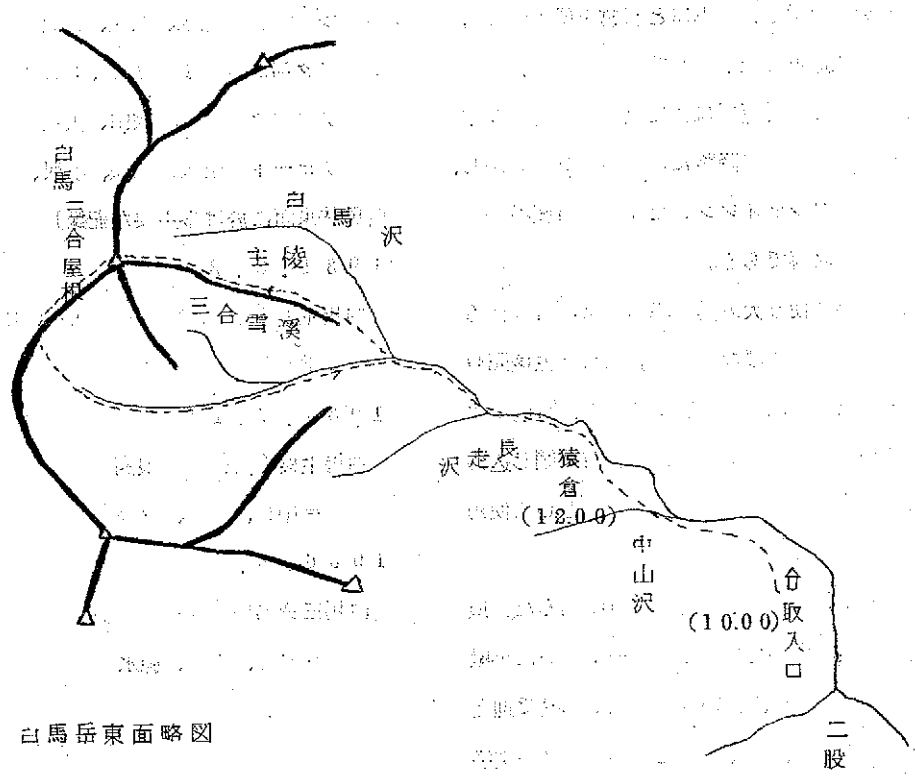
頭上、２，３０mに迫つた頂上まで、１度スリツプでもすれば絶対に助からないと思われる恐ろしい粉雪の斜面―われわれに残されたルートはそれ以外になかつた。

午后７時、くずれ始めた荒天と烈風に吹きまくられて頂上直下に立つたわれわれ５名はここで致命的な、しかも決定的な問題に対面させられてしまつた。約３mの高さに大きくそり返つた堅い雪と氷の城壁が、ぴつたりと完全に上方を閉して、今や灰色に溶け込んだ頂上の稜線の遙か下方まで切り崩せそうな、接近出来る１点として見当らなかつた。

そして落ちないで止つておれるギリギリの処で、左腕を壁の中につゝ込んで雪を抱き、辛うじて振り上げたピツケルの上で、とても届かぬ厚い雪扉が冷く笑つていた。くずれ落る雪を空しく頭からかぶるだけであつた。こうなれば最早トンネルを掘るより方法はなかつた。約１時間の苦闘の後、全く失望した我々は足場に掘つた穴を拡げ雪扉下の壁に５人入れる棚の様な穴をあけた。漸く訪れ始めた睡魔がラツセルに綿の如く疲れた体に抗すべくもない力で襲いかかつてきた。沈黙の中でくずれ落ちないと思う５つの肉体が、何くそと立上る５つの魂と闘つていた。

白馬主稜略図





白馬岳東面略図

「もう1度やつて見よう」棚の底を足場に家田が大きくそり返つて1ふりピツケルを振つた。そのとき ――意外にも、あまりにもあつ気なく、ぽつかりと雪扉が口を開いたのである。退却ではなく前方に向つて運命はその扉を開いた。苦闘する主稜登攀隊と、同時に邁進する阪大山岳部会の前途に向つて。

さつとたたきつけて来る雪を交えた烈風、8時30分われわれは遂に頂上にたつた。

4. 降　雪

初め、本計画でわれわれは主稜自体より登頂以後の行動を慎重に取扱つた。それは

1. 白馬山頂附近で2日間のリングをし、甚だしいものでは頂上小屋と村営小屋の間で道に迷つて遭難したという例がある様に、視界の望めぬ頂上附近では特に尾根が広くて非常に迷い易い従つて降路には山頂標を探し出し、出来ればアンザイレンしたままで雪庇沿いに下る事が必要である。

2. 降路に使う大雪渓は降雪時常に雪崩れるものと見なければならない。これと主稜完登后の頂上着時間とを考慮するとき、雪崩に関して登頂后直ちに下降し、どか雪に閉じ込められる恐れのある頂上小屋は原則として使用すべきではない。

などであつたが実際全て簡単に運んだ。頂上で待機していた中京のサポートの方に小屋へ抱き入れられ、暖い翌朝を山頂小屋で迎えたわれわれは、よく緊つた大雪渓を真一文字に下り、3時間后には元気に根拠地に下ることが出来たのである。

11.00頂上小屋発―大雪渓―1.00デポ地点―2.30北股小屋

〔登攀時間記録〕

2.00北股出発―3.00―3.20猿倉小屋―5.00白馬尻―7.00～7.20スキーデポ―10.00アイゼン、中京山岳会と合流―15.00二峰下、アンザイレン―17.30一峰下トラバース―19.00雪庇下―20.00頂上小屋

〔第一次、第二次アタツク隊員編成〕

アタツク第一次（12月30日）

アタツク　加藤、大島

サポート　家田、松久、細見

残　　留　徳永、久保、小沢

アタツク第二次（1月2日，3日）

アタツク　徳永、家田、大島

サポート　松久、久保、小沢、細見

〔白馬岳東面に於ける主要な記録〕

1931.3.31

白馬主稜（積雪初）神戸商大＝田中、関学＝秋山

1934.7.17

白馬主稜（夏初）　浪高＝中村、河原、盛岡

1936.8.1

白馬三合尾根（夏初）　浪高＝佐谷、中西、徳永

（時報1号）

1950年春山合宿

八方より鹿島槍

久保三朗

昭和25年3月27日ー4月13日

3月27日松久(M4)加藤(S2)家田(M2)久保(T2)23時15分の列車にて大阪発

3月28日、午后7時細野着。大久保先輩及び徳永(M4)大阪発

3月29日、晴天、第1回黒菱荷上。

午前中チツキで送つた食糧、テント、ザイル等を四谷へ取りに行く。一番の汽車にて大久保着。午后以上5名にて黒菱に荷上げ。雪の半ば消えたナギ山の登りには全く閉口する。ナギ山の上にてスキーを捨てワカンをはく。荷が重いためゆつくり登り黒菱7時10着。8時発急いで下り9時10分細野着。高曇りの月明にて月は笠をかぶつていた。徳永2番の汽車にて着。

3月30日、雨、第2回荷上。

朝より雨。いつでも出られる様用意をして待つ中、雨もやんだので4時出発する。やはりスキーを用いず。7時30分黒菱小屋着。

3月31日、曇、下樺荷上。

7時40分発、9時15分第1ケルン、10時40分第2ケルン、11時まで休憩、11時30分第3ケルン、12時30分下の樺着、平川側の斜面に雪洞を掘る。3時間かかる。荷物全部を入れ、徳永、松久、久保残る。加藤、家田、大久保下る。

4月1日　豪雨、強風、停滞。

雪洞では雪、黒菱みぞれ雨、連絡のため家田、加藤、3時5分黒菱小屋発、4時10分雪洞着。ずぶぬれになりものすごく寒い。合議の上久保下る事とす、積雪量1昼夜の間に約1m増加しデポしたスキーが殆んど埋つていた。4時5分発、雨風のやんだ中を滑降し5時10分黒菱着。

4月2日　快晴、烈風、停滞

夜半より強風、9時頃に至り風も少しはおさまり陽もさして来たので4名9時30分に残りの荷物を持つて出発、強風が積雪を吹きつけて顔の痛い中を登る。4名ともスキー、第1ケルンの附近から、ますます風強く雪面もクラストして数度吹き倒れ、伏ては風の間をねらい前進したが第2ケルン手前附近にてかなり長い間待つても風の間なく11時30分に遂に引返す。風に吹きおろされる様に下り12時30分黒菱着、昨日アイゼン、ピツケルを雪洞においてきたのは失敗なり。一方雪洞にては今日は天気が悪ければ下るとの約束により松久10時雪洞発、雪洞内にてかなりの強風と感じていたるもそれ程と思わずワカンにピツケルを持つて下る。クラストの斜面と強風のためピツケルで確保しつつ這つて下つたるもの等を風に飛ばされ、自身もしばしば吹き上げられ苦心惨憺のあげく2時黒菱小屋着、この頃漸次風勢も衰えてきたような

ので再び加藤（フカン）家田（スキー）にて3時出発、第2ケルン附近にて下り来つた徳永は5時30分黒菱着、加藤、家田はなお前進したるも第3ケルン手前の斜面がクラストし加えて強風のため登れず約2時間の奮闘の後諦めて引返す。6時30分黒菱着。

4月3日　曇後快晴、唐松荷上。

昨日の強風の名残あるも大体において天気は良くなりそう故7時30分黒菱発、第1ケルン附近ではかなり吹かれたが10時30分雪洞着、時計が2つしかなくおまけに2つとも狂つたり止つたり随時という代物故今後時間記録は怪しくなる。荷物の持てない分は雪洞に残しスキーは岳樺にくくりつけておく、11時30分雪洞発、風もやみ高曇りのおだやかな天気の中を立ち、2時30分唐松小屋着、この日黒菱小屋、この日黒菱より看松へ往復した3人のパーティー他に1組あり、夕方迄居住性の好転に努む。

4月4日　風雪、雨、沈澱

4月5日　晴後豪雨、五龍偵察

8時起床、高度2500mの一面の雲海、高空には巻層雲あり、風もやや強かつたが剣は朝日を受けて輝き、まず晴天、起床のいささかおそいうらみあり、大急ぎで準備、徳永、大久保、加藤の3名は五龍岳の附近に雪洞を掘るべく9時50分出発。

松久、家田、久保の3人は雪洞へ残余の荷物をとりに下る。10時50分唐松の小屋発、登る時のため小またに足踏して下り11時30分雪洞着、12時頃よりみぞれとなる。荷物は全部もち、スキーは木にくくりつけて残す、もし冬山のテントをここに張つていたならばあの強風で吹き飛ばされて居たことであろう。12時20分雪洞発、風雪は烈しくなつて来て視界は効かず、今朝の足跡も大分わかりにくくなつた跡を登り、ずぶぬれになつて2時50分小屋着、火をこしらえた所へ五龍へ往復した3人が3時30分着、夕方よりものすごい強風となる天井のぬけた所へグランドシーツを張り風の吹き込んで来る隙間に炭俵をつめる等して室温を上げ衣類の乾燥に専念する。

4月6日　風雪、沈澱

4月7日　晴後曇、五龍前進。

6時起床、晴天なれどやゝ風あり、高空には巻雲。5日分の用意をなし、9時5分小屋をしつかりしめて出る。重荷を背負つての牛首の南面下りの悪場は険難、大黒あたりはかなりもぐる。この頃よりガスが出始めやがて捲かれて雪が降り出す、明るく雲のうすいことを感じさせるが晴れそうでなかなか晴れない。2本松ピークから大黒銅山へ下る尾根へ少しはいつたがすぐ気がついて白岳の登りにかかる。白岳を越え鞍部から雪洞地点へ近づいて尾根が悪くなつて来ると共に、天候の方も悪化してきてとうとう本降りとなり風も強くなつて来た。春というのに1日ももたない天候を皆でうらむ。2時30分雪洞地点着、1昨日掘つた分は昨日の雪ですつかりうずめ

られている。ここの位置は五龍の東峰G1とその東側にある小峰との鞍部の信州側で、槍の穂高小屋から涸沢側へ下りかけた所にあるのと同様な氷河によるものではないかと思われるカールの南側圏谷壁である。正面にはG1の東壁を見、前は圏谷底で少し平になりそれから白岳沢へ一気に落込んでいる。雪量は意外に多くて、すぐに岩が出るかと思つたが案に相違してつめれば10人位入れる大きいのを3時間かかつて掘つたがなお相当あるようであつた。外壁のブロツクを積みはじめたのが5時30分頃、天候はますます険悪となり風も強くなり、柱状結晶の細い針の様な雪が吹きつけヤツケもズボンもばりばりに凍つている。鞍部においてあつた荷物を取りに上ると3時間の間に全くうずもれていた。6時30分ともかく雪洞を完成、食事をすませ、寝る。

4月8日　ガス、滞在

明け方寒さに目をさますと夜の間にブロツクの隙間から入つた円錐形に高くつもり、入口のグランドシーツを吹き開けて飛込んだ雪は入口に近い方に寝た2人のシユラーフの上に積つて居る。天候をのぞきに行くと吹雪、今日も沈殿ときめる。ラヂユウスで昨日ぬれた衣服を乾さんとしたが湿気の多いためか成功せずガソリンも惜しいので断念する。今迄10日入つていて、完全に晴れたのは1日だけ、この調子で悪天候が続くとすると明日も吹雪なれば次の晴天には残念ながら引返えさなければなるまい。夕方近く頭が痛くなつたり立ち上ると胸がドキドキするものが出てきたので1度全換気の必要を感じて靴をはき、グランドシーツを取除けに行く、入口を開けると雪はやんでいるので外に出る、霧は流れているが高空は晴れ西の空は剣も見えず雲の高度は高いが夕焼で明日は晴天になりそうである。しばらく外にいると雪洞の中がいかに暖かいかわかると共に、その空気がいかにガソリンと練乳の酸敗した臭で充満しているかがわかり、あわててピツケルをブロツク壁に突き差してベンチレーターを作る、今朝からの積雪に風は途中でやんだので孔が全部ふさがれていたらしい。夜は明日にそなえて7時に寝る。

4月9日　快晴、零度、鹿島槍アタツク

4時起床、昨日の予想通り晴天、炊事をしながら入口を通して見ていると暗紫色の空に黎明の五龍が美しい。7時出発、7時45分五龍頂上、前途に時間をくうことを思えばすばらしい展望にもゆつくりしているわけに行かぬ。直ちに出発相当もぐる粉雪の斜面を下りクラスト雪をかぶつたガラ場を左へ捲き気味にG3の岩稜に取りつきルートを求めてこれを越える。昨日までの悪天候を一気に取りかえした様な晴天だが気温は相当低く着ているものは凍結し岩にふれた手袋は凍りついて引離さねばならない。G4、G5とどれがどれやらわからないままに登つたり下つたりして大体主稜通りに進む、カクネ里降り口9時

３０分、最低鞍部の附近からしばらく大きくトラバースし鹿島北槍を正面に大きく望むピーク（２６２０ｍ）の手前から再び稜線に戻る。これから２つばかりピークを越え急な下降を終つてキレツトの廃小屋に着く。小屋は壁板全部なく中には雪が丈余に積つているがブロツクを積むなれば雪洞よりは余程楽に使用出来るであろう。昼食をすませ出発、小屋の南側の急斜面は相当困難、はじめてザイルを使用する。すでに１１時５０分、これから先キレツトがあるし６人でザイルパーティー２組で行くと非常に時間をとる故、大久保、松久、久保の３人は引返し、徳永、加藤、家田の３名は可能な限り前進することとする。

キレツト小舎より鹿島槍

（登頂隊員の手記による）

全員鹿島登頂をめざす私達６名はキレツト小舎を出発後直ちに小舎側上の登路に掛つたが約１０数ｍをダイレクトにステツプ・カツテイングで登つた処でカクネ里側に張り出した雪庇につづく比較的軟いオーバーハングに阻まれた。不安定な位置のままブロツクを切らずにピツケルを２本使用して急激にやせた尾根上に出る。「小八」「大八」とつづくこの稜線上に立つて漸くこのまま全員鹿島登頂に向う不利を察し、若干の偵察の後やむなく徳永より後続の２名に登頂断念の旨を伝え大久保先輩にこれと同行していただく。登頂隊となつた徳永、加藤、家田の３名はアンザイレンし露出した岩を目印に１尺たらずのアレート上を伝いカクネ里に身を投げ出す「小八」のギャツプをぶら下つて降りる。ここは昔細野の人夫が墜落死亡した処で、夏道はくさりづたいに尾根の下をまき関学の人が昨春使用しているけれども使用不能である。このくさりが埋もらずに使えると丁度「小八」の底にトラバース出来る。キレツト小舎直上の壁はダイレクトに採るよりも黒部側へ草つきを利用してトラバースするのが正しい。「小八」ギャツプから少々態度の良くなつた尾根上を辿ると「大八」即ちキレツトである。稍上向きの雪庇を思い切つて越え雪庇基部のハイマツを頼りに体をのり出すとやつとキレツトの底が見えた。底の見えない下降は危険至極である。晴天の割に気温は非常に低くしばらくじつと立つていても我慢のならない寒気におそわれる。２５ｍの補助ザイルでジツヘルしカクネ里を股間にのぞきながら２ｍ足らず下つた処で真黒にくさつたフイツクスのザイルを見付ける、これがぶら下げてあるのはキレツト降路中唯一の頼り得るハイマツの枝である。日蔭になつて冷やかな黒部へつづくこのギャツプのボーデンは両面を失望的な２０ｍの岩壁にはさまれ、文字通り陰惨そのものという気がする。キレツト小舎よりここまで息をつくひまもない位だつたが１時間近くの時間を喰つている。一応このギャツプの４０ｍ程下つて見たが取付点はなく夏道通りクサリを堀り出してトラバースを開始、いさなり開けた鹿島の山容を得てからは朗らかな？稍々

順調な登攀が出来た。登行に当つて表層の雪面がくずれ落るために、急激に登つてゆく稜線を比較的忠実に辿り、頂上直下を少しまいて午後2時半北槍ピークに立つ。剣、立山の西空に黒雲が蔽い始め、気付いた私達の頭上に大きな雲の塊がつづいて北へ流れていて北へ流れていた。風と共にガスが時折遠くの視界を包み漸く天候が崩れ出す。キレット小舎への帰路は全く難なく至極順調に運んだ。

一方引返す3人は万一前進班がビバークする時の用意に食糧、マッチ、ツエルト等をキレットへ向つて前進する3人を認めヤッホーをとりかわす。

それからしばらくして先の2620mピークの附近からふりかえつて見た時にはもはや何も見えずそこで20分以上まつたがなお北槍に向う稜線上に見当らず引返す道々ふりかえつては姿を求めヤッホーを叫んだが応答はない。天候は相変らず晴だが西方立山連峰附近に積雲が出始めこれが午後から出た風に乗つて五龍のあたりまで流れ来る。もはや五龍をこえてからやつと応答があつて安心した。前3人は日没と同時に後3人は日没後1時間後に雪洞帰着、共に帰りの五龍南面の登りは相当えらかつた。夜は大いに御馳走する。

4月10日　快晴、唐松へ。

なるべく持つて帰るものを少くするため食糧をどんどん食う。11時45分雪洞発、昨日の積雪は消え風も納まつて晴天、安曇野は春霞がたなびいている様でありまことに春らしいのどかな天気である。この雪洞の位置は雪量の点、荷上げの点よりして誠によい場所であつたという事が出来る。昨日で疲れた足には荷は相当重かつたが帰り道の事とて気は軽く来る時はガスにかくれていた五龍に見送られ立山連峰を存分に眺めつつ3時20分唐松の小屋に着く。不帰偵察をもかねて唐松岳頂上に出掛る。この日多数の雷鳥を見る。始め八方尾根でまごまごしなかなか上れなかつた唐松の小屋も今はもうふもとに下つた様な気でいる。

4月11日　快晴　不帰偵察。

昨日午後から西の方より拡がつて来た高層雲でぼんやりした高曇りだがまだまだくずれそうにない天気、又機会もないだろうから午前中不帰偵察に行く事とする。9時30分留守の大久保氏を除いて5人3本刃を通つてそのも1つ北のピークまで行く。11時小屋に帰る。1時小屋発八方尾根を一さんに下り雪洞の所でスキーを持ち荷重のためスキーは出来ず例年より雪の消るのが早い八方尾根を時々腰まで落込みながら4時黒菱小屋着、黒菱より谷道を下り6時細野着。

4月12日　晴

（時報2号）

1950年夏山

南　股　合　宿

大島輝夫

概　説

（昨夏私達の入つた南股は戦後殆ど忘れられた存在となつているので、私の知つている戦前の記録を中心として概説を書き諸君の今後の御参考とし度いと思う。）南股の登山史は昭和五年秋白馬館の手により南股にスキー小屋が建てられた時に始まる。その後甲南山岳部が毎春此のスキー小屋を根拠としてたゆまず合宿を続け輝かしい開拓の仕事をなしとげた。昭和九年スキー小屋がつぶれる迄の甲南の記録は故田口一郎氏により「山岳」（文献①）にまとめられている。地理的に南股といえば白馬山麓二股に於いて合流する杓子鑓、不帰、唐松方面よりの沢を指すのであるが、通常南股よりする登山は天狗の大下りより不帰、唐松東面、八方尾根方面に限られている。之は余程の大雪の年でないと六左エ門の滝が春も埋らず沢通しは通れないので南股を根拠として杓子・鑓方面にはるばると小日向山を越えて行くよりは、むしは猿倉小屋を根拠地として杓子双子尾根のコル（双子岩附近）にテントを張り杓子・鑓の東面を登つた方がよいからである。甲南・関学の杓子の東壁、ヤリの北山稜の輝ける登攀（文献 ㊿ ㊷ ㊸）早大や１９５１年春の京大㊹のヤリ南及び北山稜の登攀も全て後者の方法を採用している。

無雪期に杓子・ヤリ東面を登るのなら南股よりももう少しキャンプを進めて杓子沢の出合かヤリ温泉を根拠地とした方が良い。例えば１１月のヤリ北山稜（関大西島氏㊺）八方の南山稜（浪高㊻㊼㊽）の初登攀はどちらもそうしている。

以上の如く南股奥の登攀史は南股を根拠とする限り不帰方面が主要な目標となる。

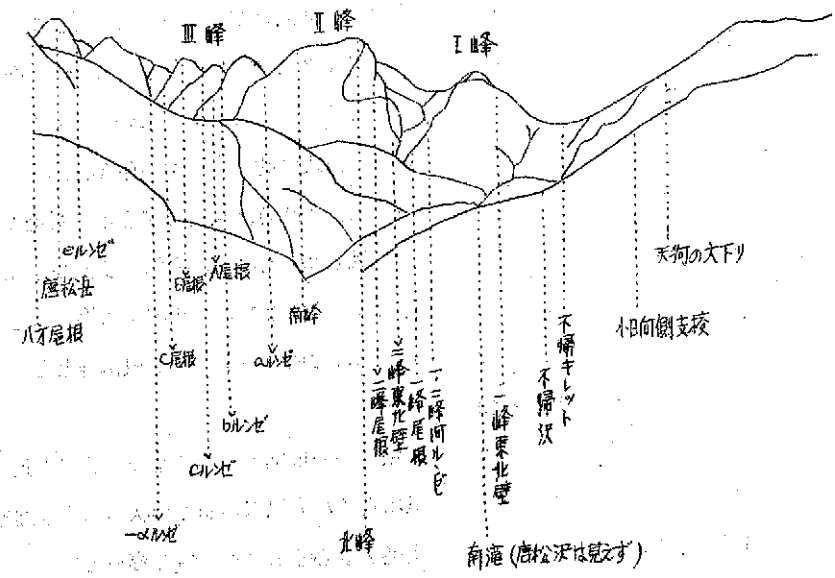
甲南に続いてその流れをくむ東大が此の方面に入り、又大高及びその流れをくむ阪大等が南股をBaseとして登攀を試みている。前記田口氏の文章と共に（①）にのつている「不帰の第二尾根」の写真を第一尾根より撮影された小山義一氏は東大山岳部の方なので東大山岳部も甲南出身田口、伊藤兄弟等と共に此の方面を相当登つていると推定出来るが残念ながら記録を見ていない。

所で積雪期の南股といつても成功した主要な登　は全て春に限定されている。之は例の剣と後立山の冬季における悪天によることは勿論であるが、それに加えて南股をBaseとする時は両岸のきりたつた谷底を取付点迄雪崩とラッセルに悩みながら長い間歩かねばならないという特殊事情も加わるのである。田口一郎氏は昭和六年正月の記事として（①４８１頁）

「窓ごしに見る不帰の岩峰は心をそそる、だが途中の深い南滝の谷は雪崩が溜る溝のよ

うなもので春のクラストの時期でなければ通る気も起らない。鑓岳や杓子岳も六左衛門の滝が此の雪量では通れそうにない以上問題にならず、今の処は正面の八方尾根から唐松岳に登るのが一番良さそうである」と書いていられる。若し冬の不帰東面をねらうとすれば野口栄一氏等の大阪薬専が試みた如く八方尾根にテントを進める。ここをB.C.とする方が勝つていると思われる。まことに1939年正月は此の方面の冬期登山史に於ける一つのクライマックスであつた。即ち八方尾根には前記の如く不帰二峰東面をねらう大薬、同志社の合同パーティが居り、南股には大高と神戸商大がやはり不帰を目標としており、双子岩付近には関学が杓子、鑓をねらつてテントを張つた。（②、㊷エーデルワイス44頁、62頁）然し何れも悪天の為成功しなかつた様である。

春期に於ける不帰東面の最も輝ける登攀は甲南田口一郎、伊藤新一両氏の第二尾根（1933年③）阪大中条徹、島雄昭美両氏の2峰の壁直登（④⑤）甲南小川氏等の第一尾根（⑥）（1941年4月1日）であろう。後の二つは戦時中の為どちらも記録が私的なもの以外発表されていないのは甚だ残念である。中条（理）島雄（医）両先輩の記録は1940年4月1日南股を根拠地として不帰第二峰を甲南と反対に三峰側よりとりつき直登したも



二股附近より不帰連峰　一　山小屋 103

上田敏雄氏スケッチ

のであるが、その年の夏中条氏は大高と共にやはり此の南股の烏帽子尾根を登攀後遭難死され、島雄氏又戦死されたので、一端を中条氏の追悼録中にうかがうのみで直接に詳細をお聞き出来ないのは残念である。八方尾根より二峯の壁を見る度に一体どこをどう登つたのかしらと思うのである。

以上の他に甲南は牛首岳の直登を行つているが（⑦）此のpartyには現在理学部に居られる関集三、山口省太郎両先生が参加されている。次に夏の南股であるが私の知つている限りでは日本登高会と大高が入つている。日本登高会の上田徹雄氏の書かれた「山小屋」103号⑧の夏の不帰東面の紹介は良くまとまつているし、私達も名称は全て同氏に従うことにした。大高も数回入つて居り⑤によれば中条氏は第二峰壁直登・第三峰A沢（上田氏のbルンゼ？）烏帽子尾根を登つているが、二峰の壁も夏は大して悪くないようである。

☆ 根 拠 地

夏のBaseとして大高は我々の如く取入口附近にテントをはり、日本登高会は谷通し登り南滝の上にテントをはつているが我々の経験ではこれは不適当と思う。年により大変異なるらしいが大高の記録によつても従来楽に登れた谷筋が昭和15年夏にはすつかりあれて非常に悪くなつたとある。私達の入つた1950年夏もやはり非常に悪く南滝迄の十回位の徒渉は水も大変冷たく登攀前の闘志をにぶらせた。又、南滝をまく時記録の示す如く落石の危険が大であり、その上やつと岩場にとりつくのである。アプローチは大変長く取入口附近の高度は丁度1000米で唐松は2700であるから高度差1700米、水平距離は約5Kmである。穂高でいえば横尾岩小屋を根拠地として北穂高滝谷の岩場を対象に往復するのと全く事情が同じである。そえより悪いのは帰路八方尾根から直接テント迄下る適当な道が無い。我々の昨夏の記録が雪渓、ルンゼの登高にすぎないのに、途中でビバークしているのも理解して貰えよう。今後夏の不帰東面を目標とする時には八方尾根より入り、水、薪に不便であるが八方池附近にB.C.をはり、適当な下降路をみつけて不帰沢と唐松沢の出合附近をA.C.とすると良いと思う。此の出合には2，3人用の岩小屋があり狩人が使用するらしく茶碗がころがつていた。（然し細野の中村実氏は此の岩小屋の存在を知らぬらしかつた。）此処をA.C.とすると高度差1400水平距離2Kmとなり、凋沢より滝谷を往復するよりやゝ大となる。未開拓の黒部側を目標とするには唐松小屋附近が根拠地として良いだろう。

積雪期の根拠地として南股取入口附近は人里に近く八方尾根の如く猛吹雪により連絡が途絶する心配もなく生活も容易という利点はあるが今後はやはり八方尾根にテント又は雪洞をつくり根拠とする方が多くなると思う。

最後に夏の南股は落石の危険が大であるから充分注意して欲しい。我々が不帰沢を登つ

ている時も霧の間より小牛位の岩がグリセード？して滑り落ちてきたのには全く驚いた次第である。

尚原稿をかく迄に東大、大高の記録及び甲南の戦時中の記録の調査が十分完全には行い得なかつた。

引　用　文　献

①「山岳」　31年第2号　ⓜⓟ

②AAVK　時報11号(1939年2月)

③AAVK　報告4号　ⓟ

④AAVK　時報14号(1940年6月)

⑤真徹　(中条氏追悼録)　ⓜ

⑥甲南報告団誌1号による

⑦AAVK　報告3号　ⓜ

⑧山小屋　10号(1940年8月)　ⓜ

AAVKは関西学生山岳連盟の略称。

杓子face及び鑓岳南北山稜の文献

㊶ AAVK　報告8号　ⓟ

㊷ EDELWEISS 10号(関学報告)

㊸ AAVK　時報14号(1940年6月)

㊹ 京大山岳部時報1号(1951年)岳人47号

㊺ AAVK　報告4号　ⓜ

㊻ ケルン　4号　ⓜⓟ

㊼ ケルン　6号

㊽ AAVK 6号

㊾ 山岳 33年2号　}此の方面のその頃の総報

㊿ ルツクザツクの？　ヤリ東北面

地　図

概念図のあるものは文献目録中ⓜとかいた。

写　真

文献目録中ⓟと書いたものは写真がある。

その他参考となる写真はいくつもあるが、(101)ケルン1号、(102)ケルン14号、(103)「山」24年8月号、(104)「高山深谷」J.A.C編10号ア35

〈記　録〉

夏山　7月19日－8月6日

前半は剣及南股で合宿し、後半、雲ノ平、東沢、後立山の三パーティに分れて行動した。

前　半

(1)南股合宿

家田(L)大島、松久、細井、尾藤、山本、坪井、由比浜

7月19日　湊町発(17.50)

7月20日(晴)(8.15)四谷着、細野(12.20)――南股取入口(16.30)B.C設営

7月21日(晴)第一回アタック

A隊　大島、坪井、山本

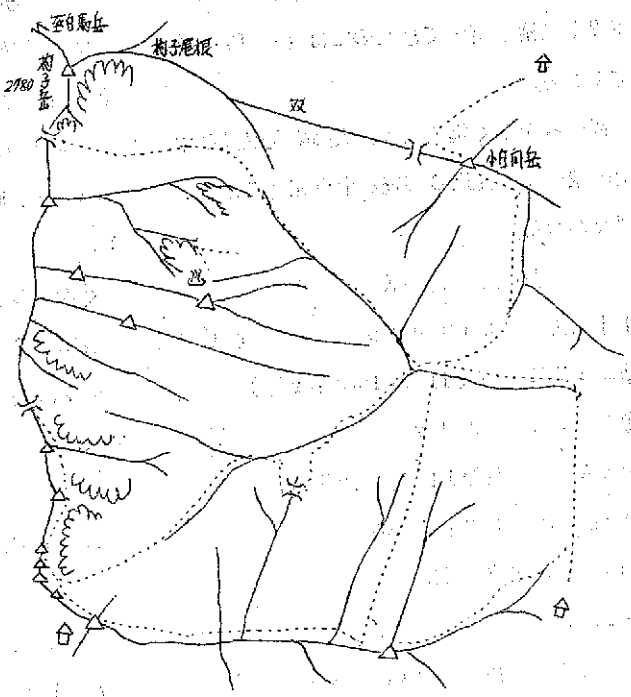
B.C.(7.50)――三日平(10.10)――鑓南山稜下部にてガスの為ルートを誤り引返し(14.00)――鑓温泉(17.20)――B.C.

B隊　家田、細見、尾藤

B.C.(7.40)――不帰沢(11.35)――キレット――鑓温泉でA隊と会い共にB.C.へ帰る。

C隊　松久、由比浜

B.C.(7.40)――唐松沢(11.35)――



松川南股附近概略図

（・・・・阪大ルート（一九五〇九））

dルンゼ（14.30）急斜面で且雪の状態が悪い為、アンザイレンし、ステップを切りつつ登る。唐松小屋（16.00）―八方尾根　八方押出を下ろうとしてルートを誤り滝の連続した沢の中途で日没の為、ビバーク

7月22日（晴）　C隊帰投

7月23日（晴）　第二回アタック

（6.45）全員B.C発、南滝を巻く際に尾根の中腹にある4m程の一枚岩の下迄来た時（9.15）急斜面をものすごい勢で転つて来た石がバウンドし、あつと云う間に尾藤に当つた。耳殻の裂傷ですんだのは不幸中の幸であつたが、この為予定の計画を変更せざるを得なくなつた。即、松久、細見、家田が負傷者について引返し他の者は不帰沢をつめることになつた。

（10.00）発―不帰沢（10.50）―キレット（15.00）―唐松小屋（19.00）―黒菱小屋（22.50）泊

7月24日（晴）B.C帰投、尾藤は手当を終え帰阪。

7月25日（快晴）第三回アタック

山本、由比浜、B.C（8.45）― 三日平―（10.25）―杓子沢― 国境稜

線（16.15）— 白馬岳（18.00）—
大雪渓 — 猿倉（21.50）— B.C（1.
30）家田、大島、松久、坪井、細見
後半計画参加の為細野へ下る。

7月26日　夜半帰りし為終日休養

7月27日　B.C撤収下山

（時報3号）

— 1950年12月冬季合宿 —

杓子 双子 尾根

一隊　家田、細見、川島、尾藤

二隊　大島　加藤、住吉、坪井、田島

三隊　四宮、山本、大村、近、岡田、篠田先生

12月22日　家田、加藤、大島、大阪発。

12月23日　家田等細野着。

先着の細見、四宮は北股水電取入口小屋（B.H.）へポッカ、川島、田島、坪井、尾藤、林、大村、近、山本、岡田、大阪発。

12月24日　家田、大島、細野→猿倉→北股、午后加藤、四宮、細見、尾藤、田島、川島、坪井、北股へ。大島、細野へ下る、山本、大村、近、岡田、林はスキー合宿に入る。

12月25日（高曇）A.C設置

一隊及加藤、坪井、四宮

北股（8.30）→猿倉（10.30〜11.30）—小向コル（14.00）A.C設置、一隊A.C入り、加藤等北股に下る。田島は北股より細野に下り、大島、住吉と共にポッカ。

12月26日（雪）

一隊　偵察の為前進したが視界悪くすぐ引返し二隊を迎え入れるためA.C横に雪洞を作り之に入る。

二隊　北股（11.00）—猿倉（13.00—14.00）—猿倉台地（16.00）ラッセル甚しく引返し — 猿倉（17.00）四宮、北股より細野へ下る。

12月27日（風雪）

一隊　食糧欠乏の恐れあるため下山せんとしたが雪崩の危険を考えて引返す。

二隊　猿倉（9.00）—猿倉台地（10.20）腰迄のラッセルに悩みつつ登るも視界悪くルート不明の為引返す（12.20）— 猿倉

12月28日（晴）一・二隊交替

一隊　A.C（9.40）—猿倉台地にて二隊と合う（10.30）— 猿倉（11.00—13.00）—北股（14.00）

二隊　猿倉（9.00）— A.C（11.30）一隊の作つた雪洞が天井沈下甚しいため新に雪洞を掘る。

12月29日（快晴）アタック

一隊（川島を除く）　北股（7.10）—A.C（9.40）— 二隊に追付く（10.30）

二隊　A.C（7.30）— スキーデポ（8.00）

―局部的な天候激変に会い引返す（10.00）
―一隊追付き共に再び登高（10.30）―
奥双子コル（12.30）昼食 ―ジャンクシヨン直下（14.30）時間が遅い為引返す―
A.C（17.30）家田、尾藤、住吉は北股へ下る（19.30）
三隊 細野（13.00）―北股（15.30）
川島、北股より下山。
12月30日（最後雨）A.C撤収
家田、尾藤、山本、近、大村、北股（8.40）
― A.C（11.30）―加藤等5人と共にテント撤収 ―北股（19.00）
篠田先生‥‥住吉、四宮は北股より下山
12月21日（雪）
近、大村、田島、山本、岡田下山
1月1日（大雪）B.H撤収
家田、大島、加藤、尾藤、坪井、細見下山。

（時報3号）

―1951年春山―

―後立山逆縦走計画の失敗―

徳永鶴司

終戦后、私達が部の充実と高揚の全てを賭けて目指して来た目標は積雪季に於ける後立山の縦走であつた。後立東面を主とする冬の合宿や1948年春の八方―鹿島槍の往復の後に漸くこの計画は具体化された。

私達が計画した後立逆縦走の原案は次の通りである。

〔A〕L加藤、川島、坪井、大久保（O.B）
〔B〕CL徳永、松久、細見
（3月20日以后細見A隊に編入）
〔C〕L大島、尾藤

以上の三編成の下に、Aは大沢より針ノ木―冷小舎へ雪洞前進。Bは鹿島より冷小舎荷上げ。Cは八方より唐松小舎に入り、A・Bより選抜の二～三名の縦走隊を迎える。縦走隊は晴天を待つて唐松より一気に猿倉へ、という骨子であつた。

本計画は3月17日より実施されたが（詳細記録）サポートの配置も終えた後3月22日にA隊の坪井がスリップし負傷した為に中止された。計画を中止した事は正しかつたけれども、スリップを機として幾多の誤りが計画自体の上に反省されなければならなかつたのである。例えば、訓練のために行うという見地からすれば縦走計画はサポートの長期の

待機、補充食糧等に於て必要以上の出費と日数を伴う様に考えられた。又一面から云えばこの事故の後の行動は我々の意を強くするに足るものでもあつた。本春山について記すべき事も多いが、こゝにはその反省と事故当日の隊員の手記を記し、詳細は記録に述した。

春季後立山縦計画失敗に対する反省

加藤記

後立逆縦走を試みた我々は針ノ木でつまづいて鉋気なくも計画を断念せざるを得なかつたがこのアクシデントの原因を振り返る必要があると思われるので一言茲にのべてみたい。

直接の原因は重荷を負うた体で黒部側の急斜面をステップカットせず斜に降りつつあつた事にあるがこれは全くリーダーたる私の責任である。彼の落下地点に至る迄の我々の行動を考えてみると肉体的疲労は相当大きい様である。即ち明かに無理をしすぎている様であつた。

大阪一松本一大町間夜行列車にゆられ大町で5，6時間居ただけであり、この間も出発準備に忙しく更に午后4時頃大出から大沢迄強行したのであつた。種々の事態から許されないかも知れないが大きな山行をやる前は少くとも一日山を前にして休む位の余猶は今後必ずとる事にしたい。大沢小舎の不備な生活はこれに拍車をかけ翌日は一日雪で休養しているが過労が回復していなかつたのであろう。又、我々の期待していた針ノ木小舎が完全に雪がつまつて使用出来ず落着けなかつたのも一つの因子であろう。然し小舎から針ノ木岳頂上迄の稜線が最も体に大きい疲労を与えた事は間違いないし頂上の烈風が丁度昼飯時の我々に食欲を起させなかつた事は後から考えると憎むべき天の仕業と言える。私は針ノ木ースバリ間の最低鞍部で信州側に風を避けて昼食をとるつもりで先を急いで降りていつた。現場は黒部側を少し捲き気味に下る所であるが確に最悪の所であつた様だ。足首に自信のあを私はすたすたと降りて行つたが他の隊員に注意を与えんとした突嗟の間にTは落ちたのである。私の行動を見て油断したTの一投足が不慮の結果を起した事は全く私の罪と云えるのであつて、隊員各自のコンデイシヨン及びテクニツクを絶えず念頭に置いて行動する事が如何にリーダーとして重要な事か痛感させられる。我々の持参した装備についても考えるべきは幾らでもある。

アクシデントの後の隊員の行動は良くやつて呉れたと思つている。特に大久保先輩の適切な治療は全幅の信頼をおかせるものであつたし連絡に活躍した細見、大久保氏を助けた川島の奮闘は目ざましいものがあつた。医学者の参加がかくも有難い事とは不覚にも始めて知つた次第である。

要するに今回の失敗は計画そのものに大きな欠陥があつた様である。例えば大沢迄はサポートさせなければならなかつたが如きである。然し多くのアクシデントは起るべくして

起るであるという事及び我々の行動の中には平素は見逃がされてはいるが一度事故が起ればそれと指摘されるような多くの危険性を含んでいる事は深く胸に刻まねばならない。

事　故　当　日（手記より）

川島記

3月22日（晴午後雪）2.00起床。4.00出発。雪面はクラストしていて殆んどもぐらなかつた。ランタンに照らされた5人の影がゆれていた。吾々がこの谷を登るについて、最も注意したのは雪崩であつたけれども何日も続いた晴天の後なので出るべきものは出尽したのか吾々の大沢滞在中その音一つ聞かなかつた。今歩いてみても全くその憂はなく、古いデブリを乗越えるのに少しばかり苦労しただけであつた。新しいのがスバリから出て居たが問題にならず谷の中央迄達して居なかつた。その中夜が明け始め、マヤクボのあたりで全く朝になつた。振返つて見る後立の峰々は朝日に輝き、白と赤と青とそして黒々とした岩の織成す色感はいかにもすがすがしい。此処から針ノ木迄は40°以上の斜面が数百米続いている。左岸より真一文字に登つて行つた。雪庇を嫌つてその右側に出ようとそのまま左岸をたどり、黒部から送られる吹き溜りをラッセルし、8.00稜線へ出た。とたんに猛烈な風と雪煙に出迎えられ小屋に逃げ込もうとしたが小屋は天井迄も雪がつまつて中に入ることは雪洞を掘るようなものなので天気の良いのを幸い風の中でみじめな朝食をとる。

9.00何か物足りない様な気持で出発、すぐ稜線に取付いた。東向きの尾根は太陽の直射を浴び雪がゆるんでかなりのラッセルをしなければならない。思つたより急峻なリッヂを交代してラッセル。くさつた雪と露出した岩との混つた悪場では30分以上の時間をかけて数メートルも行くか行かぬかであつた。頂上より一つ手前のピークの肩迄来てベルグシュルンドに阻まれて取付の岩が越せず遂に信州側をトラバースする事にした。予想と反対に雪の状態はよく足首迄しかもぐらず全装備を荷つている吾々は怖い岩場を行くよりずつと気が楽であつた。楽々と頂上手前のコル迄行けた。

コルからは雪の避が頂上へと二段に続いているが滅込みとピッケルで切つたハンドホールドで難なく乗越えた。そして12.00針木岳頂上に着いた。天気は下り坂であつたので少し休んですぐ出発した。リッヂを下り、それの切れた所から左へ下り黒部側斜面を10米ばかりトラバースして再び国境線へもどるのである。此処で我々の計画にとつて致命的な事故を起してしまつた。此の斜面は非常に急で、且つガレていてそれが露出している所があり雪は固くクラストしている所とくさつた所とが不規則にまじつていた。而も100米程下で本谷と合し黒部川迄落込んでいる恐しい所であつた。オーダーは私がトップ次が加藤、大久保、坪井、細見の順であつた。中程迄来て私は進めなくなりステップを切り始めた。

それで加藤、大久保が私を助けようとして私の下をまわり前へ出た。その時突然坪井スリップし転倒、滑落して行つた。くされ雪に右足をかけ、体重を移した時、足場がくずれたのである。振返つた時既に横倒しになり危険な姿勢で数米滑り落ちていた。間もなく横転しながらピッケルともつれ合いゴロゴロ転がり数十米落ちて露出したガレで停止した。残りの4人は、始めの中こそ「ピッケル！ピッケル！」と呼びかけていたけれどもその中棒の様に突立つて唯見守るばかりであつた。停止した彼が少しばかり体を動かすのを見た時は縮まつた寿命が再び元に帰つた様な気がした。もう1米後か前でスリップしていたら巨岩に体をぶつつけるか或は黒部迄落ちて行く所だつた。直ぐ加藤、大久保、細見が下りて行つた。私は荷物の番をしていたが、この頃より天気は崩れ、風が吹きつのり雪さえまじえて寒くてしかたなかつた。負傷者は直ちにスパリとのコルに運ばれ岩の間でツエルトとシュラーフに守られた。我々は信州側へ5米程下りた所に雪洞を堀つた。作業半ばにして坪井がしきりに寒さを訴えるので雪洞に移してそのかたわらで作業は続けられた。全員が腰を落ちつけたのは16時をまわつていた。細見と私は炊事をし、大久保、加藤は手当にあたつた。傷は右股付根をピッケルでえぐつたもので出血は相当あつたが動脈は外れていた。他顔面や頭部に擦傷や裂傷が所々あつたが大した事なく精神的ショックが弱つている最大原因らしかつた。手当一切は大久保先輩にやつて戴いたが当然の事とは云え有難かつた。手当がすむと楽になつたらしく物も食べ元気になつたので不恰好な雪穴の中ではあつたが急に皆ほがらかになつた。20時折り重なつて就寝。

3月22日（雪後晴）昨夜雪が降り続いたらしく薄かつた雪洞の壁や入口が分厚くピッケルを突込んでも外迄とどかない。シャベルで堀つて息抜きを作り空模様をうかがうと、どうやら雪は止んだらしい。下山の腹を決め用意したがぐずぐずしている中に時が経ち外に出たのは16時であつた。最大傾斜線に沿つて真直ぐに下りて行つた。湿潤新雪で膝迄もぐるラッセルだが下りの事とて何でもない。細見と私がルートを開き細引きでつなぎ合さつた加藤、坪井、大久保が続く。雪崩の恐れは充分あるのに後の3人は情なくなる程進まない。18時に私達2人は大沢小屋に戻り、細見は炊事を始め私は直ぐ迎えに行つた。19時無事小屋に全員着いた。相談の末、加藤、細見に連絡に下つてもらう事にし食事と休息の後（24.15）2人は月明の中を里へと下つて行つた。2人を送り出してから坪井の手当をし右股後にもう一つの傷のあるのを発見した。

〈記　録〉

A隊　加藤（L）　川島、坪井、OB大久保

B隊　徳永（CL）　松久、細見

C隊　大島（L）　尾藤

3月17日　B隊大阪発

3月１８日　Ｂ隊大町より鹿島へ

〃　１９日　両股より冷小屋荷上、ガスの為稜線直下に荷を置き、大町泊。

3月２０日（晴）〔Ａ隊〕早朝大町着、Ｂ隊の細見を加え（15.30）大町発ー（バス）ー大出（16.00）ー大沢小屋（24.00）

〔Ｂ隊〕細野へ。

3月２１日（晴）（Ａ隊）休養（Ｂ隊）鹿島泊。

3月２２日（晴後曇）（Ａ隊）大沢小屋（4.00）ー針ノ木峠（8.00）ー針ノ木岳（12.00）ー坪井スリップ負傷（12.15）ーSh収容（16.00）。（Ｂ隊）二股迄往復、鹿島泊。

3月２３日（雪後曇）（Ａ隊）Sh（16.00）ー大沢小屋（19.00）

加藤、細見連絡の為下山（24.15）

（Ｂ隊）鹿島滞在、丸山に遊ぶ。

3月２４日（晴）　加藤、細見、大町着（5.10）

（Ｃ隊）大島、早朝大町に来る。

相談の末、加藤、細見は冷へ連絡の為（17.20）大町を発つ、大島は丸山庄司を伴い大沢へ向い、ヨセ沢より少し上手の営林小舎にて休憩。

一方大久保、坪井、川島は13.45大沢、20時ヨセ沢近くを通行中、大島、庄司に発見され小屋に入つて休む。

（Ｂ隊）鹿島（4.00）ー二股（6.00）ー長ザク沢ー冷小舎（10.30）

3月２５日（晴）（Ａ隊）営林小舎（12.45）ー大町（9.00）、大島、庄司は今朝到着した尾藤と共に細野へ、大久保、坪井、川島は大町泊。加藤、細見は鹿島（5.25）ー冷小屋（12.15）

（Ｂ隊）冷小舎より鹿島往復、加藤、細見より事情を聞き直ちに下山。

3月２６日　坪井、松久を除く全員細野へ。坪井、松久は大町泊、２７日帰阪す。

3月２７日（雪・曇）　休養とスキー練習

3月２８日（雪）徳永、加藤、細見帰阪

3月２９日（曇後風雪）残つた大久保、大島尾藤、川島の４人で八方尾根より唐松、白馬の縦走を行わんと（9.00）出発したが、第２ケルンより風雪烈しい為退却。細野へ帰つた。

（時報３号）

１９５１年夏山

ー鹿島槍　カクネ里合宿ー

家　田　千　尋

１９３０年頃から幾多の先　者により、無雪期更には積雪期に開拓せられた鹿島槍北壁は、戦前関東、関西各学校山岳部の集中を受けて居たにも拘らず、主稜の厳冬期登攀が解決するや戦后は更に訪れるものなく、関学法政浪高等により僅かにトレースされたにすぎ

ず北アルプスの雑沓に比し現在は静寂そのものを誇つている。之等先輩の域に到達せんと努力する我々が、その昔彼等の情熱を傾倒した北壁を再検討することも無駄ではなかろう。種々の記録及び我々の1943，1951年度の合宿記録により先輩者のトレールを辿ろう。

地　形

カクネ里は鹿島北槍を起点とし後立稜線と天狗尾根により囲まれた北東に向う略菱形のU字谷である。大川沢は北槍から東に派成する天狗尾根が遠見尾根に迫つて極端に狭められた後、白岳沢とカクネ里に二分する分岐点に夫々滝が有り、関門の如くその入口に控えている。白岳沢が細い雪渓で主に左（以後右左はすべて下から之を見上げていう）から大きな支沢を受け折れ曲りながら続いているのに比し、カクネ里は北壁全体に等分にフトコロ深く喰い入り出合からバットレスと雪渓は一望の中にある。入口の狭さにくらべ奥はガスのヴェールに、北壁は見えがくれに源流地的な幾分のびやかな気分をかもし、昔平家の残党がかくれ住んだという伝説も又宜なるかなと思わせる。出合より見るバットレスは上下二段に分れ、上部はブッシュ帯の緑色に、下部はくろずんだ岩壁が雪渓に続いている。北槍を中心とし、大小のガリーガリッヂをはさんで左右斜めに下り、やがて雪渓に向つて雪渓上端を抱き込むが如きカーブをなして落ちている。左肩には見上げるばかりの天狗尾根が頭上に迫つて来ている。出合からカクネ里中核部迄は、左の天狗尾根は約十本の沢がすべて浅く残雪をごく僅かに上部につけ、急傾斜でカクネに落ちている。後立国境稜線側はキレット沢に至る迄、ロノ沢、中ノ沢の二本の大きな沢を入れ、その間の尾根も相当大きい。ロノ沢はカクネ本谷に負けない位の長さを有し、最上部のガレ場は特徴的だ。後立稜線側は下部は猛烈なブッシュで、上部は岩質もろく、従つてカクネ里は雪渓の左側は平坦な所は少く、右側は緩傾斜で幅は広いがブッシュの為快適なキャムプサイトは極く限られている。

通　路

従来三が計えられている。即ち

一、大川沢溯行

1908年7月三枝氏が此処を下られた（冠氏後立山連峰）そうであるが、1918年浅井氏が初めて溯行して白岳に出られた（山岳15年1号）。その后1930年頃から立教、神戸商大、R.C.C.、京大、東京商大、甲南等が入られたが、京大は天狗尾根側へ甚しく高廻りを余儀なくされ、之はトレースするルートとは見なされない。

此処に東京商大小谷部氏の記録をあげて置く。ルート図も同氏のものである。「殆どが白岳沢を下降している様であるが、8月中旬迄大した困難もないから、どうせ2日

費すなら此処を選んだ方が楽ではないかと思う。殊に6月中旬頃迄なら雪渓が二俣下流の険悪な河床を蔽い、更に下流もスノーブリッヂが処々にあるので一層容易である。尤も豪雨等による増水時には絶対困難だからどうしても他ルートに依らねばならぬ。鹿島造林小舎から大川沢左岸の林道はやがて消え沢伝いの潮行が始まる。大体始めの内は一寸悪い所でも高廻りしないで徒歩する方が楽で早い。右左に渡り返して進む内に沢は西方に彎曲し傾斜も急になる。やがて両岸は険しい岸壁になり廊下状を呈して来て滝や深淵の為どうしても高廻りを余儀なくさせられる。だが辛いのは前后2、3回で大地獄小地獄の名所があるそうだがよく分らない。二俣近くに来ると右岸が非常に悪く左岸が一帯におとなしい草付で河床から2、30米の上を楽に捲ける様になる。更に右岸の草地を少し捲き岸壁にぶつかり一旦河原に降り右岸の木の生えた草付迄登れば楽にカクネに入れるが、河原からこの草付の取付きが悪い。而し河通しに行くのは相当のアルバイトを要し、水を避けて天狗尾根を捲けばブッシュに悩されていたずらに時間を喰う事当然である。而し今夏（1951）鹿島部落で聞いた所によると林道は更に大川沢上流迄のばされる相であるから、やがては楽なルートとなろう。なお我々の二股から唐松窪附近迄の踏査記録があるから本文を参照されたい。

二、白岳沢下降

最も適当と思われるルートである。白岳の南の鞍部（恐らく白岳小舎は此処に建つのであろう）からすぐに広い雪渓の上を二股出合に下るもので、傾斜ゆるく長いだけで落石の危険もない。カクネの出合のすぐ上迄雪渓は続き出合の10米程の滝は左岸を捲けばよい。7月中旬迄は滝も埋まり楽々と下れる。出合からカクネに上る滝も右岸を捲いて越せる。カクネは沢通しに左右両岸とも歩けるが左岸は出合より200米位上流で1ケ所高廻りを要する。唐松小屋を朝出れば合宿用全装備を持つてもカクネ里ベースキャンプ迄ゆつくり一日コースである。

遠見尾根の切り開きが出来れば（今年中に出来る予定であつたが）小遠見から正面に北壁、カクネ里を一望の中に収め得るし、国境線迄登らずに大遠見の上から白岳沢に下れるので労力も省ける。

三、キレット沢下降

カクネ里の核心へ国境から下るこの雪渓は上部で三分する。この中、中央のが通路になる。之はキレット小屋よりすぐ北のピークを一つ越した鞍部から下るものでコルからカクネ側に10米も下ればすぐ雪渓だ。7月中旬迄は切れないが、それ以後で切れた場合には大体北側（五龍側）のシュルンドに入ればよい。上部は相当急傾斜である

から荷物が重ければ注意を要する。グリセード30分程でカクネの本谷に入れる。此のルートはバットレス登攀后ベースキャムプに下るものとして用いられる。下部は落石に埋められているが之は左右の分岐した雪渓を落ちて来るもので、何れからも天候に拘らず落石がある。

根　拠　地

一、キレット小舎

之をベースにする時は上記のキレット沢を下降してカクネ里に入る。而して夏季は稜線を縦走する人が多く小舎は狭いからお互いに迷惑にならぬ様開設期間中は遠慮すべきであろう。而し6月頃なればカクネ本谷は雪に埋めつくされるので、雪上にテントを張るより此処を根拠にしてキレット沢を一気にグリセードで下るのが好いであろう。天候の悪いカクネ里の合宿で暴風雨の時等絶好の避難所である。

二、天　幕

長期滞在には天幕をカクネに張り北壁の懐に抱かれるがよい。出合附近両岸の上流の左岸中ノ沢に至る間迄適当にキャムプサイトは見付けられる。出合上部は雪渓は切れ、水薪も豊富でロノ沢上部も左岸から水は流れている。長期に亘つて天幕生活をする時は、霧と雨の王国カクネ里に対し充分抵抗力のあるのを用うべきでフライの威力も発揮出来よう。此処から見るバットレスは終日我々を倦かしめない。

三、二俣岩小屋

見ていないから分らないが針葉樹8号に詳細に記録されている。二股出合から2丁程下れば右岸の河底から20米程の岩壁があり、その上は帯状のなだらかな草地でその上縁は急な崖や樹林にのり出して突起している丸い樹叢の下にある相であるが、此処からカクネに行くにはどうしても上縁の急崖を20米程登らなければならず、川に水を取りに下るにも岸壁を20米程下らねばならない。而し5，6月頃なら全部雪渓続きで20米の岩壁も雪に埋まり僅か2，3米上れば岩小舎に入れる。

北　壁

北壁は北槍を頂点とするほぼ三角形のバットレスで、雪渓上端から700〜800米の高度で8，9本のガリーが北槍及びその左のピークから左右両側斜下に向い約2300米の当りから真下又は幾分両手で懐を抱き込む様にカクネの中心に向つて折れ曲り、上部に残雪を有するものはここで滝となり雪渓の上端に落ち込んでいる。北壁は之等のガリーによつて低いリッヂを形成し、2100〜2200の間で帯状にバットレス全面に殆ど垂直の壁を作つている。この帯は北壁の特徴をなすもので、所々オーバーハングとなり登攀に際して大き

な問題になつている。即ち北壁に如何なるルートを取ろうとも殆どが取付附近のこの帯に悩され過大の時間を取り、之を乗越して更に上に向う際に時間的余裕を無くし、又登り切れば引き返す事は不可能である。パットレス登攀の鍵は総てこのバンドにかかつて居る。取付いて下を見ればスラブ線の岩盤と残雪が底知れぬ程深いベルシュルンドを成し、乗る岩は信頼が置けず、ハーケンを打てば楔を入れたように岩はえぐれて1，2回バウンドした后は音もなくシュルンドに吸い込まれて行く。而しこのバンドを切りぬけると上は傾斜はゆるくなりブッシュがふえて安全性は増大する。リッヂの敍や、ガリーのガレ場草付をこなして行けばよい。高距にしてバンドは壁部の三分の一位だが所要時間は半分又はそれ以上多くかかると見てよい。即ち之等の登攀は岩登りとして決して快適ではない。パットレスは極めて稀にしか踏まれて居らず、岩質は不良急峻である。ルートに取り得るものはすべてブッシュを混じ岩稜と云い得ない。

名　称

カクネ里全般の名称は殆ど仮称に過ぎず、慣習された2，3の共通のものを除けば各報告夫々統一したものはない。我々は此の中適当と思うもの及び我々の仮称に依つている。例えば白岳沢は本当はシラタケと呼ぶらしいが白岳が存在するので故意に之を避けている。ルート図に仮称を記載したから以下に述べる個々のルートについては図を参照されたい。

北壁をカクネ里から見て特徴的な扇形残雪（パットレス左寄り天狗尾根側中腹に扇形又は頂点を下にした三角形）と奥の雪渓（パットレス右寄りに最も深く喰い入る）とにより両者に囲まれた間を正面パットレス、扇形残雪の左を天狗尾根側、奥の雪渓より右をキレット側と称する。

正面パットレス

ルートは扇形残雪側即ち左からはじめて順次右に移る。

一、ピークリッヂ　peak ridge

扇形残雪の右肩に著明な三角形の岩壁が二つ並んで見える。天狗尾根のちよつとしたピーク（荒沢の頭）から始まり、2本のP_1 P_2リッヂとなつてパットレスの中腹に展開した2つの岩壁は扇形残雪右横に於て再び稜となりカクネの雪渓に至つて居る。

P_1 リッヂ

1930年夏京大今西氏が初めてカクネ入をされた時登られたルートであるが、天候悪化の為岩壁下で引返されている。1931年秋京大は同地点で引返し、1932年甲南関氏は同地点から左の扇形残雪へトラバースし天狗尾根に出て居られる。1951年夏我々も之をトレースし同じく天狗尾根に出たので岩壁より上部は未完成の儘残つている。カク

ネからの取付は扇形残雪より出ている目立つた滝のあるルンゼの真下から右に取付くか、ずつと下の末端からである。取付よりわずかに登るとリッヂは岩壁迄視界をさえぎるブッシュ中の登攀に終始し悪場はない。我々は扇形残雪寄りに岩壁に取付き残雪の上にある沢の滝の右を乗り越して岩壁の左寄りに岩壁上のリッヂに出ようとしオーバーハングに阻まれ退却したが、リッヂをそのまま岩壁の右寄りに上ればさして困難ではなさ相である。岩壁の上は下部と同じく天狗尾根ジャンクション附近を除いて藪の連続だ。天狗尾根に簡単に出るには残雪上をトラバースし残雪の左側の草付を登ればよい。（関西学連報告3号及び4号及び本報告記録参照）

P_2 リッヂ

1931年京大はP_1の引返しルートとして之を下つている。リッヂは上部で更に右側の蝶型岩壁に向いP_3稜を派生する。この間は極く僅かに草を付けたスラブで少し水が流れている。P_2の取付はP_1と同じく花崗岩に始まりすぐに草付ブッシュになつて居る。岩壁はP_1よりもリッヂとしての感が深く藪の中を直登し得るであろう。之も岩壁から上部の記録は無い。P_3はスラブに深く入つている雪渓から取付きスラブの右側リッヂの側面を登り蝶型岩壁を右奥に見るリッヂ上に達しP_2の岩壁を左に見て扇形残雪とP_1P_2のジャンクションの中間の高さで尾根はP_2に合す。P_3は次に述べる蝶型岩壁左尾根の下部の登路となるものである。（関西学連報告3号）

二、蝶型岩壁左尾根

蝶型岩壁とはバットレス中央やや左雪渓の上端に一目で夫と分る蝶の羽根の様な赤茶けた岩壁で、上部の残雪のある大きなルンゼ（蝶ルンゼ）は岩壁の中央で滝となり中央部には岩洞が認められる。岩壁の左尾根のオーバーハングに下から見えないかすかな滝が別にある。之はピークリッヂと蝶型岩壁左尾根の間にある上部は割に傾斜のゆるく見える残雪のあるルンゼ（天井ルンゼ）から落ちているが、下からはP_3尾根の為滝の落口は認められずルンゼも中途で消失し、或いはP_2とP_3の間のスラブを流れるわずかな浅いルンゼに続くかの様な感を抱かせる。蝶型岩壁左尾根はP_3に続いてカクネに下つている様に思える程上部のバットレス中最も雄大なリッヂは下部に於て貧弱にわずかに蝶型岩壁の左羽根の一部を形成するに過ぎない。故にこの尾根に取付くには末端たる蝶型岩壁よりなさんとするは不可能で上記のP_2のカクネ里側側面から取付き、蝶型岩壁を右奥に見るリッヂ上に出、100米足らず尾根通しに行くとバットレスの帯に当るオーバーハングに行き当る。此処でリッヂは蝶型岩壁左尾根の縁となり直登は不可能で更に帯の下部を左へP_2と派生尾根の間の小ルンゼの方へ70米程トラバース

し、所々大きな樺を交えた岩と草付から登る。此処が此の尾根の悪場で30米5ピッチ程でフエースを切り脱け、再びP_3リッヂ上に出る。すぐ右下に天井ルンゼが北壁中にこんなゆるやかな所があるのかと意外に思わせる位ゆつくりとピーク尾根側から蝶型岩壁上部にかけて斜に流れている。このルンゼを簡単に乗り越えて真の蝶型岩壁左尾根が始まるわけであるが悪場は最早過ぎ去つて居りあとは大きなリッヂをブッシユを漕ぎ或はガレ場を過ぎどんどん登ると天狗尾根とのジャンクシヨンに着く。なおこの尾根は1936年1月1日立教に依つて完登されている。（立教報告5号8号本報告記録）

三、蝶型岩壁右尾根

岩壁の右に主稜と並んで下部はカクネの雪渓中に突き出ている。登行目標を主稜にとられ隣の目立たぬリッヂなるが故に未だ登攀記録が無い。下部は岩壁の右羽根の縁をなし上部は蝶ルンゼの残雪上端から大きく右にカーブし殆ど消えかけた低い稜となり北槍左のピークに終る。取付きは主稜と並ぶ岬の末端からがよい。蝶型岩壁に向つて余り深く入るとクレバスに行手を閉される。蝶型岩壁の右側同高度の部分が帯に当るリッヂ通しに行つても、ブッシユは安全に体を支えて呉れるであろうし、右側主稜との間のガリーの岩壁（京大が主猿のルートとして登つている）上部から再びリッヂに出てもよい。この岩壁下部は岩硬く中程逆層でもろく傾斜も強い。上部は再びサウンドになる。悪場は帯の乗越して稜の上部は左尾根と同じく藪リッヂである。

四、主　稜（京大ルート）

1931年秋京大の完登以来余多の岳人を北壁に誘い込んだ記念すべき此の尾根は北槍のすぐ左のピークから最も長くカクネに張り出している。即ち下端は蝶型岩壁の右に一番深く岬状に突出する。京大以后夏季浪高、甲南にトレースされ、又1936年1月1日早大に依つて積雪期登攀が完成された。バツトレス中困難なルートの中に数えあげられ長さからしても所要時間は今迄述べたルートをはるかく抜くものである。以下京大の報告に依り要旨をあげておこう。「右寄りに主稜に取付き浅いガリーを左に見て40米ばかり上で左にトラバース左ガリーに入り、70米上に第一のテラスがある。此の上のフエースを左寄りに第二のテラス此処から真直に立つた尾根の下を左にトラバースガリーを登り切り第三のテラスへ、右へ今の尾根続きのテラスを越して右側のガリーに出る。このガリーの右続きが主稜だ。之に取付き岩場を10米過ぎブッシユに入る。之を50米（最も難場）ナイフエッヂを通りぬけると再びテラスがある。此処からはリッヂ通しに又左のガリ寄りに更には左の小さな尾根からその左のガリーに這松を漕ぐ。あとは草付、岩、這松を登り切ると頂上すぐ左のジャンクシヨンに出る。なお此

の時ジャンクション直下でビバークをなす。第二登浪高は主稜右のリッヂに取付き右のガリからリッヂに出其の后リッヂ上を最后の岩塊を右へトラバースし右リッヂからジャンクションに出ている。京大は11時間（3名）を費している。

五、正面尾根（甲南ルート）

主稜の右バンドの部分はテラテラの岩壁で殆んど手がつけられ相にないがわずかにリッヂと云えるものが主稜右に深く喰い込んだ雪溪上端に認められる。此の岩壁の主稜よりから右上方に向い全高距の三分の一（下から）の所で切れて壁となりブッシュに続き北槍の左下ピークから右下に下る判然としたリッヂど"＞"字型に合している。1935年夏甲南パーティに依つて登られたと学連報告に記載があるだけで甲南報告を見ていないのではつきり尾根の性質がつかめない。而しパットレス核心に深くある中央壁及び僅かの隆起として認められるリッヂはブッシュをもつけず険悪さ登攀の困難さは想像に余りある。

（学連報告7号）

六、中央ルンゼ（関学ルート）

中央壁の殆ど右に寄つた部分に深くえぐれて常時懸瀑を形成している中央ルンゼは2,300米最后のオーバーハングを乗切り上は頂上迄小さな沢リッヂのブッシュ帯で北槍頂上に続いているカクネ里下部より見て北槍ピークの真下中央壁に一際深く喰い入る陰影として容易に認め得る。ルンゼの高さは全高距の半分に及び右側にはつきりした稜がルンゼの上迄有る。1934年夏関学塩津氏等により登行を開始されて以来、1936年夏同じく関学によつて初登攀がなされ1940年夏、1948年夏と全部関学の手によつて第二、三登されている。ルンゼは7つの滝を有しルンゼ右側の草付から取付く滝はすべて右側（左岸）を捲いて通過するが就中第三滝上のトラバース第五滝左の垂直の草付き第四第六滝の完全なオーバーハング登行中の絶えざる落石、退却の殆ど不可能の事等は登攀者の最大の努力と慎重を要するであろう。ルンゼ左側（右岸）岸壁は登行不可能でルンゼの中心通し及び左岸の壁をルートとしなければならない。

（関西学連時報20．山小屋153）

七、直接尾根

中央ルンゼ右のはつきりした稜の右の岩壁の更に右の北槍ピークよりダイレクトに斜右下に下つているのが之である。即ち下部は奥の雪溪の入口より少し入つた所に終り、カクネから見た時此の尾根と更に右の右リッヂ（次項）とが北槍頂上に最もダイレクトに続いているので我々は之を直接尾根と呼んでいる。上部は殆んどブッシュにおゝわれているが、正面パットレスの左側の各尾根に比し上部も急傾斜で下部は中央壁と同程度に殆ど垂直に

切り立つている。加うるに取付に至る奥の雪渓は7月以降に於てはずたずたに割れ覗けば深淵は挑戦者を呑むが如くその険悪なる様相は名立たる剣穂高の諸雪渓に比すべくもない。脆岩の取付に至る迄クレバースに悩まされ、取付地点が帯の一部をなし、一端雪より岩に移ればベルクシユルンドの底知れぬ深さに思わずセルフビレイのハーケンを打たずに居れず其処からは登る者も取付で確保する者も常にシユルンドに引きずり込まれ相な感を抱かせる。正面バットレス中主稜と同じ位目立つ稜でありながら未だ登攀記録を聞かぬのも大体以上の様な理由によるものであろう。尾根は主稜程長くなく取付の岩壁の登行如何にかかつている。1951年夏我々は2回之を試登し共に失敗に終つた。1回目はリッヂの末端に取付き雪渓とほぼ平行に右上に登り右から迂回気味にフエースを直接リッヂに目がけて直登し何とかブッシユ帯に入ろうとしたが撃退され下降は更に困難を増し取付から4ピッチ程(30米2名)の往復に6時間以上を費してしまつた。第一登より見て此のフエース上部の登攀は不可能となり更に雪渓に沿い岩壁下部を右上に登ると直接尾根の右に右リッヂとの間にわずかにコンカーブしたフエース様のルンゼ(我々は赤茶けたルンゼと云う)があり此のルンゼの岩壁20米程上部に僅かなテラスがある。此のテラスの上でルンゼはオーバーハングをなすが之を避け右リッヂ側のフエースを登り再びオーバーハング上に出て直接尾根に出んと第2登を試みたのであるが赤茶けたルンゼに達しようとルンゼの右リッヂ側のオーバーハングと脆岩に行手を阻まれ敗退した。而し未だ試みないルートとしてはルンゼのテラスに達する20米程のフエースにルンゼの中心に僅かなリスがテラスにのびて居りルンゼの核心伝いに直登すれば恐らく達し得ると思うものがあるもビレイ地点に欠く事及びすぐ下に口を開くベルクシユルンドを考慮に入れなければならない。ハーケンは正面バットレス中この尾根に於て最も多数を必要とする。

八、右リッヂ

奥の雪渓に入れば直接尾根、赤茶けたルンゼの右寄りに雪渓に凸角的に出ている此の尾根の上部は北槍ピークにダイレクトに至るもバットレス中右に偏している為位置的に認められることの少ない尾根である。上部は七に比べ傾斜はゆるくバットレス右に大きく張り出し尾根の中程にはつきりとブッシユの暗緑色中に白く欠けた部分を認める。此処でリッヂは一亘テラス状になつている。取付は赤茶けたルンゼのすぐ右の突角部から尾根の中腹の白い斑点に達し、その后はブッシユ中を北槍ピークに至るがこの尾根は6月末迄に登られるべきものでそれ以后では取付にさえも達し得ない。尾根の下部の取付の右側はフエースを形成し雪渓に落込む困難な岩壁である。

九、右ルンゼ（浪高ルート）

右リッヂの右のルンゼで北壁中最も右に位する。１９３５年３月浪高今西、中村両氏により積雪期に於ける北壁初登攀が此のルートに依つてなされた事は特記に値する。北槍ピーク直下から奥の雪渓に入る最奥のルンゼで之の右支稜はすべて国境尾根から出ている。夏季ルンゼは無水なるも赤茶けたルンゼと共に降雨があれば完全に滝になろう。浅いルンゼの落口は短いが殆どオーバーハングに近い様に思われフエースの登攀は夏期に於ても敬遠したい程のもので積雪期は之が埋つているとしても垂直に近いホールドの悪い殆ど皆無と迄思わせるルンゼの中半が更にその上に続き登行の可能性を益々少くしている。初登攀以后夏期に於ても未だトレースされて居らず之をルートとしてあげる事も幾分躊躇される。

（学連報告６号　浪高報告３号）

十、奥の雪渓

七、八に大体書いたが総括的に云う左側右岸）はすべて北槍に続く岩壁、正面は国境東側の悪崖で特に国境尾根を歩けば夫と分るキレット北槍の中間の赤褐色の岩塔の左に雪渓は曲り一つの稜上のアンカレッヂに出る。此岩塔の右側は国境から覗くと垂直に雪渓を見下せる岩壁で之の登攀は絶対に不可能である。ルートは岩稜の左に入る雪渓からリッヂに出るがこのリッヂの下部は垂直なるもしつかりしたブッシュで懸垂の連続である。雪渓の右側（左岸）は洞窟尾根第一登第二岩峰の側壁をなす。第二岩峰直下の草付及び第二岩峰上部のリッヂの側面から洞窟尾根に出、国境線に達することも可能である。奥の雪渓は下から見れば北壁の右上に上る最も深いルンゼとして認め得るがカクネ里からの入口は洞窟尾根の下部最左端に限られて見えない。７月以降はルートにならず登路とする以外に錯雑した上部の景観及びクレバースは一見に価するものである。１９３５年６月初旬小谷部氏の単独行の記録を見よう。「周りが物すごい岩壁だらけなのとこの雪渓自体非常に急で狭いので何だか上から圧え付けられる様な息苦しさを感じる。国境東面の２０米余の壁にぶつかり雪渓は左に這入る雪渓が無くなつてこのルンゼ上部の１０米程の草を交えたアンサウンドの岩場を乗り越すと北槍寄りの国境から一直線に奥の雪渓へ落ちる険しい稜の途中一つのアンカレッヂに出る。此処から３０米垂直で所々にある小さな板により第２のアンカレッヂ、其処からはしつかりした岳樺がありやがて傾斜も５０°弱となり密生した篠を漕いで国境へ出る。」（針葉樹８号）

キ　レ　ッ　ト　側

一、洞窟尾根

奥の雪渓の右に在り今迄の様な稜でなく立派な尾根である。下部はカクネ里雪渓中に最も長く突出ている此の岬の部分の左上端から

ルートは始まる。取付の岩壁に二三の洞窟が有り下からも黒い斑点として見える。取付の岩からリッヂに出る4ピッチ程が面白い。リッヂに出ればあとは楽で下から第一、第二岩峰有り第一は直登もしくは左へ第二は基部を右に捲いて再びリッヂに出るか其の儘草付のフエースをジャンクションに向かえばよい。（針葉樹8号、関西学連報告7号、本報告記録）

二、キレット尾根

洞窟尾根第一第二岩峰右横の極く小さいルンゼは尾根末端の岬の右の雪渓に入つている。その右寄りはブッシュを交えて洞窟尾根のザイテングラートをなしている。グラートの右に急傾斜の細い雪渓があり雪渓の右にドームの如くそびえているのが此の尾根である。カクネから見た時ドームから2本のリッヂが左右に足を張りこの間の下部は僅かに雪をつけたルンゼとして認められるも上部は威圧的な岩塔の壁面で特に左上部の赤い岩は今にもカクネの核心に居る我々におそいかからんとしている様に見える。而しこの尾根は岩塔から国境尾根に至る間で恰度馬の背の様にすつかり傾斜を無くし横腹に上記の雪渓の上部の大きな残雪をべつたりとつけている。洞窟尾根からのんびりした鞍部を見、キレット小屋からすぐ目の前に馬の背を眺めた時一度あの上へと如何にも登行欲をそそらずには居れない。而し国境尾根のキレット左のジャンクションに達する所は馬がたてがみを振り上げた如く垂直に近い細い稜となつている。岩塔から左足に張つた稜は足にたとえようか、右足はキレット沢下部の左側壁をなし途中一つのピークを越えるとカンテの如く岩落にのびている。下部のピークの部は笹が密生し途中はまばらな灌木をつけて登行の可能性を示している。我々の登つたのは左足であり洞窟尾根との境をなす雪渓に入り100米も登ると沢は二分する。右に入りガラ場草付から左足リッヂ上に出、下から見て岩壁左上部の赤いくずれかかつた岩のすぐ上のリッヂ上に達し垂直に近い岩稜をブッシュに助けられて岩落に出た。このリッヂの左寄りに雪渓の分岐点からの側稜が略平行に上つている。

岩落から真正面に見るキレットはくつきりと青空を覗かせ壮大さは予想外だ。キレット小屋の鞍部も目の前でキレットから発する雪渓と鞍部から出る夫が馬の背の右で合しキレット沢に通じている。この沢は立教が積雪期に下降路として用いられた事のある滝はないが始終落石に見舞われる雪渓だ。（本報告記録）

三、キレット沢左尾根

キレット沢は中程で三分し、(1)は左に、(2)中は下降ルート、(3)右はキレット沢右尾根側面のガラ場に終るキレット沢左尾根は(1)(2)間の短い逆層のだが傾斜の急でない稜で1943年夏浪高加藤（現阪大）等に依り記録さ

れている。キレット側一帯にそうであるが特に落石は甚だしい。

四、キレット沢

先に書いたが(1)は最も深く切れ込み、両岸（キレット尾根及びキレット沢左尾根）は倒れかからんばかりの岩壁で落石烈しくクレバース多いがキレット尾根岩塔に向うフエースは岩も堅そうでホールドも好く岩登りによかろう。(3)は特に云う事もない。(2)(3)の間(2)寄りの所から岩登りに極く適した短い岩稜が伸びキレット沢右尾根ジャンクションのすぐ左に一寸した岩峰を国境尾根に突立たせているがこの岩峰はサウンドで多種のフエースを有し岩登り練習に快適の様である。(2)については下降路の項及び本文記録を参照されたい。

五、キレット沢右尾根

キレット沢(3)を左側面に喰い込ませているこの尾根は国境線五龍鹿島間の最も高いピークに続くので相当長い下部カクネに面した部分は切れて相当の岩壁である(3)の下はごく平凡な斜面で之からリッヂ上のブッシュ帯に出ればよい。ジャンクション近くは相当急なフエースで最后の箇所が少し悪い。１９４３年夏浪高徳永、家田（現阪大）及び今夏の２回の記録がある。（本報告記録）

六、ロノ沢尾根

中ノ沢を隔てた五龍側の尾根は上部の中ノ沢側は大分ガレている該尾根だ。ロノ沢はカクネ里の雪渓中側方にのびている最も大きなもので中頃迄おとなしいが上部は一直線に国境尾根に上り上部は赤い土砂のガレをなしている。ロノ沢の右にあるロノ沢尾根も長い下部は該上部はガレ場で１９３５年夏浪高佐谷氏等の登攀記録があるので之を掲げておく。「雪渓（ロの沢）中途で右尾根に取付き途中這松の茂つた壁で中断され右へトラバース浅いルンゼに入り草付より再び尾根に出草付這松を漕ぎ国境へ」高距が大で相当時間を喰い相だ。（関西学連報告７号）

天狗尾根側

カクネから急にせり上つている小さいヤブのリッヂと短い雪渓の幾つかの連続である。中ノ沢に恰度相対して天狗尾根側では最も長く雪渓の続いている沢がある。上部のガレ場からの落石が畳々と積み重なり雪渓はくの字形にガレ場から右に折れ天狗の鼻に向うが稜線へ出る100米程は熊笹と灌木の密生で殆ど登攀の対象とならず、稜線に出れば大川沢に入る曲り沢をはるか下方に認め得るだけの尾根の見通しは全然効かない。次は天狗尾根最底鞍部（天狗の鼻から２段目のコル）に上るもので扇形残雪下のルンゼ左のリッヂの該漕ぎにより之に達す。詳細は本報告の記録の部を参照されたい。第三に前記したピーク尾根P_1から扇形残雪をトラバースし扇形残雪左の草付を十分登ると容易に天狗尾根に達す。時

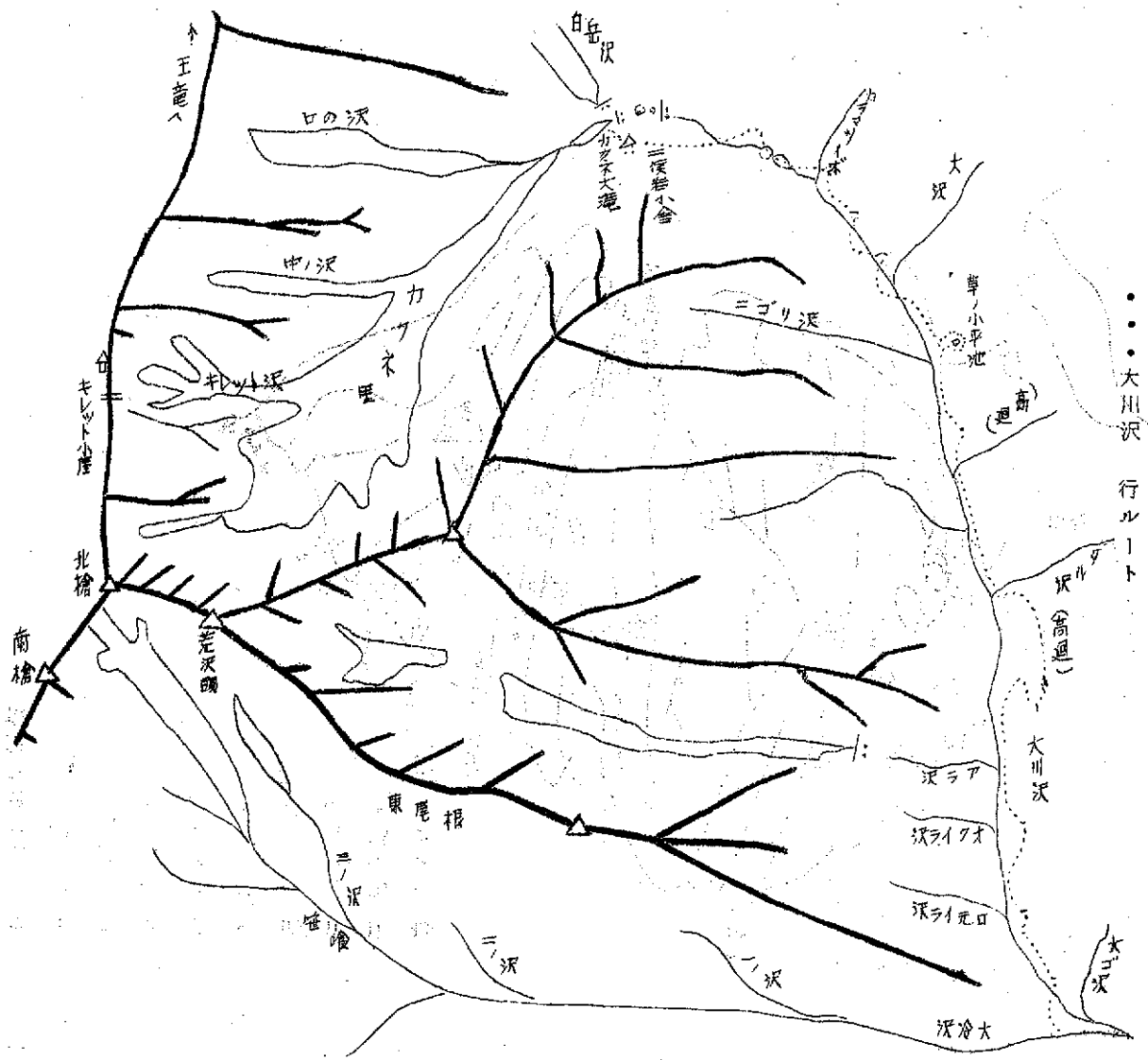
間的に天狗尾根に達する最も早いルートである。すべて天狗尾根側は国境キレット側と異り藪密生し岩質は堅硬である。

天　狗　尾　根

１９３２年５月同志社児島氏が東尾根荒沢の頭から天狗尾根を下りビバークしてカクネに至られたのが最初の記録であり、１９３７年３月浪高松林氏が遭難された尾根である。天狗の鼻より下つた最底鞍部から藪をつけた瘤を３つ位越した上に四角の特異な岩が目につく。之はその形から小合岩と称せられ扇形残雪左端殆んど真上にカクネからも見える。荒沢北俣北稜のジャンクションに当る小合岩の上に二つの岩峰が相接し下から第一第二岩峰と云われる。扇形残雪の真上に認められ、天狗尾根から見ると二つのドームにより形成されている様だ。最底鞍部から岩峰の辺り迄は藪が密生し殆んどカクネ側に之を潜いで行く。荒沢側はすとんと落ち荒沢の雪渓が落石で殆んど褐色に変色し、北俣南稜北稜は北壁バットレスを遥かに凌駕する険悪さで荒沢奥壁をかざり之等にアタックを敢行した浪高今西、小林氏等更には想像だに絶する積雪期完登の東大佐谷氏（浪高ＯＢ）東京商大小谷部氏等の努力に対し感慨は尽きぬものがある。東尾根第一第二岩峰を荒沢を隔てて左に見、ルートはカクネ側に割に傾斜のゆるい藪中を過ぎ、小合岩はどちらを捲いてもよい。第一第二岩峰は真正面から取付き大体荒沢側即ち左上に向つてフェースを登る。此処から上は荒沢側もゆるく這松程度で藪も少くガラ場がふえてくる。荒沢の頭（天狗尾根、東尾根のジャンクション）に至れば僅かに踏跡もあり気持のよい尾根筋のピークを三つも越せば北稜の頂上である。（針葉樹８号、本報告記録参照）

文　　献

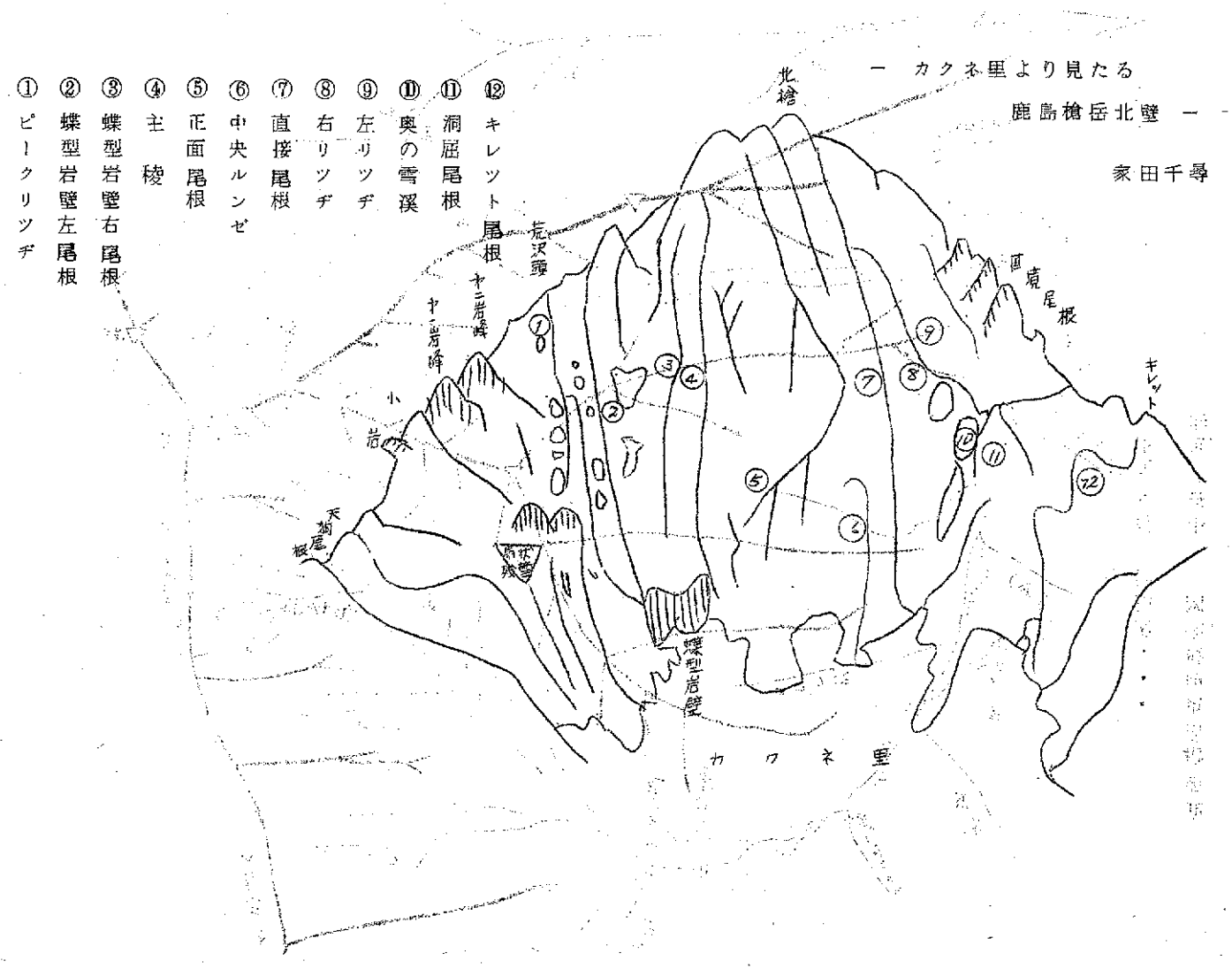
「山岳３６年２号」「山五号通刊１４１」
「山小合１５３」「ケルン１３」
「関西学生山岳連盟報告 3, 4, 5, 6 号及び時報 20 №3」「針葉樹８号（東京商大報告）」
「立教報告 5, 7, 8 号」「浪高報告３号」
「リツクサツク（早稲田報告）９号」
「大阪薬専報告１，２号」



鹿島槍岳東西概念図

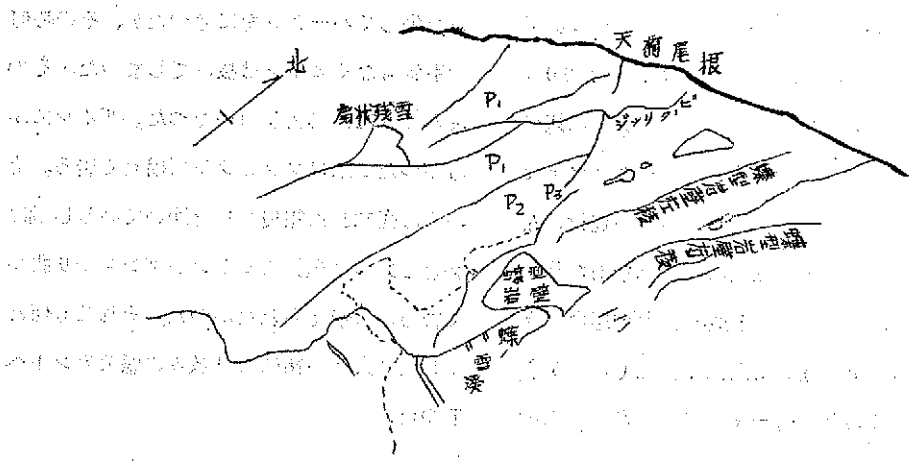
・・・大川沢　行ルート

小谷部全助



— カクネ里より見たる
鹿島槍岳北壁 —

家田千尋



蝶型岩壁左稜

― 登 攀 記 録 ―

○ 蝶型岩壁左稜

久保 記

7月28日（快晴）パーティ家田、林、久保、大村

B.C（6.35）―洞窟尾根の岬左下端（7.40）―雪渓を左にトラバース、蝶の雪渓一つ下の俣（P_2 P_3 間の雪渓俣）に入る。正面は大きく口を開いた縁割れと岩の垂壁で取付き得ず、左端雪と岩の接したる所を見つけて渡り、左へトラバースしてリッヂP_2上に出、藪中を少し登つてから小さなバンドを伝つて右へ下りP_2、P_3間のスラブに出る。アンザイレン。浮石の乗つた緩傾斜スラブのトラバース。終つてP_3側面の藪岩場を登りP_3上蝶の羽根の左下、P_3稜がやや平になつた部分に出る。稜上前進、すぐ蝶の岩壁を含んで横にひろがる急傾斜に行きあたる。若し蝶の雪渓にクレバースが無ければ雪渓をつめて左へとりここに達することが出来ると思う。

急な壁の裾に沿つて藪中を左へトラバース。小ルンゼ（ひどく凹凸だが完全な岩溝）を一本見送り次の岩場から上へ向う。傾斜は急だが気味の悪い位良いホールドがあり登りきると草付。これも急だが藪まじりだからどうにか登れる。再びP_3上に出るとすぐ向う側に天井ルンゼの豊かな水が流れている。蝶の堅い岩が侵蝕を妨げた為にこの様な緩傾斜の浅いルンゼで残つたものであろう。天井ルンゼ又はひルンゼなる名称も底高で両側は切落ちて居るここの横断面を想像してつけた名である。ルンゼ水辺へ簡単に下り昼食（10.30－11.00）左稜側面に取付いてコンティニュアスに藪の中を登り少し左へ捲き気味に取つて左手のル

ンゼ（Ｖルンゼ右俣の一つ）入り登りつめて完全に左稜上に出、ザイルを解く（12.00）ここより左手ルンゼをへだてたリッヂは甚だ顕著な岩峰を有しているのでピークリッヂなる名をつける。這松と岩との稜上の登行。左稜が上部で天狗尾根側面に消え込むあたりの風化した岩場はちよつと厄介。天狗尾根直下の硬い岩場を直登して天狗尾根上（1.05）後はぶらぶらと北槍ーキレットーB.C（5.00）

○ 直 接 尾 根

細見 記

7月23日　　二木・細見

合宿前に調べた文献に於けるリッヂの名称の混乱、即「針葉樹8号」は此の直接尾根をG_4 主稜と名づけて居るのに対し、浪高報告に於ては針葉樹G_2 にあたる尾根を主稜（現在我々はこれに従つている）として登攀文をかかげて居る為、この両者を混同した私達は合宿の手初めとして過去に登られた主稜をトレースして居るつもりで実は未登の直接尾根へ取付いて居たのである。B.C（6.30）発—洞窟尾根末端7.50—これより雪渓の数多いクレバスの乗越に非常な苦労をなし、11.30赤褐けたリンネ左下のフエイス直下、二木トップ、フエイス右端のクラックに取付いたが極めて困難。更に右のフエイスを試す。私はセルフビレイして確保。5m上つてオーバーハング乗越しにハーケン打つ。釣上げを行うが手懸りつかめずやり直す為に下る時バランスを失してハーケンをにぎつたが、その時何の手答もなくピトンは抜けてしまつた。その後の2人はみじめな有様だつた。ザイルにぶら下つた二木はブラブラ下で揺れて居る。その下は底知れぬ龜裂が口を開いているし綱は胴をしめつけ確保のピトンがグンニヤリ曲つて居るのは耐えられなかつた。それでも何とかして2人は一緒になり放々の態でテントへ下つた。

○ 再 度 の 企 て

細見一仁

7月25日　　家田、二木、細見

第一回の失敗より直接尾根の困難さは再確認され吾々も本腰にならざるを得なくなり、困難な雪渓登攀には2人より3人のパーティが安全であるとしてチーフリーダーが加わつた。

6.50 B.C発。赤褐けたリンネには容易に入れた。二木トップ、リンネが垂直に落ちる所、右のチムニーに入る。チムニーが開き過ぎ更に岩質もろく困難さは最上級の言葉があてはまるだろう。結局駄目と知り戻る事にする。とに角なんとかして3人相会する。すでに正午を廻つて居るので次の機会を志して下る心は重い。

カクネ里合宿　　7月18日—8月1日

家田（L）、久保（S.L）住吉、細見、二木、山本、近、林、大村、宍戸、広橋、

北川、辻川　以上１３名

7月１８日　大阪発

7月１９日（晴）

細野12.30—黒菱（6.20）

7月２０日（晴後曇）外刻雷雨

黒菱（8.25）—唐松（5.30）

7月２１日（晴）高度低き断雲

唐松（8.40）—白岳鞍部（14.30）—白岳沢下降カクネ中ノ沢出合下手左岸B.C地（20.00）出合の滝が出て居らず大いに助かる。

7月２２日（曇）ガス去来

午後グリセード練習、家田、久保、住吉、細見、二木のみ天狗尾根偵察

7月２３日（晴後曇）午後雷鳴を聞く

○直接尾根　細見、二木（cf本文）

B.C（6.30）—洞窟尾根末端（7.50）—尾根取付（11.30）ピトン脱落の為二木墜落、退却す。

○洞窟尾根　家田—山本（cf２４日の項）

○キレット沢降路雪渓より南槍往復

久保、住吉、近、林、大村、宍戸、広橋、北川、辻川

B.C（8.45）—キレット沢入口（8.50）主稜線（11.15）—南槍（14.00）引返し—北槍（14.50）—雪渓下り口鞍部（16.00）B.C（17.30）

7月２４日（曇）ガス去来、午後遅く俄雨

○P_1リッヂより扇形残雪トラバースによる天狗尾根　住吉、林、（林）

B.C（6.45）—扇残の俣よりP_1裾の取付（8.15）—P_1を登りトラバースして一旦扇形残雪右横に出（11.50）残雪を左へトラバースの後直登天狗尾根（13.15）昼食—小舎岩（14.20）—第二岩峰上（15.50）—北槍（17.00）—キレット小舎（18.00）

○洞窟尾根　久保、近、広橋

B.C（7.00）—取付（8.40）—稜上（10.00）—第一岩峰（10.35）—再び稜線（11.25～12.00）—主稜線（12.25）—B.C（14.50）

○岩登り練習　残り全員

B.C向い右岸の岩壁にて

7月２５日（朝薄曇後晴）午后相当な夕立あり

○直接尾根　家田、細見、二木（cf本文）

B.C（6.50）—取付（11.00）岩質もろく退却（12.30）

○キレット沢右尾根　林、大村、北川、（林）

B.C（9.30）尾根取付（10.30）昼食（12.00）その上は5米位の垂直のフェースで中段にテラスがあり、その上はカブツて居る。テラスから左上の木につかまつて登り、荷物は後でつり上げたので1時間半消費した。（14.00）雷雨のため（17.30）引返し途中よりキレット雪渓に降りて下る。（B.C 18.00）

○大川沢唐松窪手前附近迄往復

久保、山本、近、宍戸、辻川

B.C (9.25)—右岸下降—白岳沢との出合 (10.00) 唐松窪手前引返し点 (12.00)—B.C (13.30)

7月26日(晴)

○P_1リッヂより扇形残雪トラバースによる天狗尾根　家田ー近 (cf 7月24日の項) (近)

B.C (8.05)—P_1下取付 (9.00)—扇形残雪右横 (10.40)—扇形残雪上側岩壁をトラバース、扇残上ルンゼ滝の右側より上部に出んと志したるもオーバーハングに阻まれて果さず、扇形残雪に下る。天狗尾根 (12.40)—小屋岩下 (13.00) 鞍残左稜パーティを待ち (15.30) 合流—荒沢頭 (16.30-17.00) キレット小屋 (18.10)、家田、久保、洞窟尾根パーティを (19.30) 迄待つて共に下る。山本、近下り B.C (20.00)。

○鞍部残雪左稜天狗尾根　久保、山本、鞍部残雪とは扇形残雪とは別に、天狗尾根最低鞍部下にあるやはり扇形をなした残雪でこれより落ちるルンゼは扇形残雪より落ちるルンゼと同じ雪溪の俣 (扇残の俣) 左端へ落ちる。鞍残左稜は取付の岩壁をのぞいては大部分藪と草付ではあるが急な為洞窟尾根等よりは困難である。B.C (8.00)—扇残ルンゼと鞍残ルンゼの間より取付かんとしたが、縁割れと岩壁で取付けず俣の左端より取付く。約1ピッチの岩場でリッヂに出る。ブッシュ中の登攀、ルートを求めて左へトラバース後直登して白色の岩につきあたる。右側をまく。岩の上を薄く地衣類がおおつた急傾斜、次いで右側の溝状の草付に入り登りつめてリッヂに出ると鞍部残雪左横であつた (12.00)—天狗尾根上 (12.30) 荒沢偵察をかね天狗鼻の方へ向う。(13.40) 天狗鼻手前にて引返す。(15.30) 家田パーティと合す。

○洞窟尾根　住吉、二木、細見、大村、宍戸、北川、辻川

B.C (9.00)—取付 (10.00)—キレット小屋 (19.30)

7月27日(快晴)

○キレット尾根　家田、林　(林記)

B.C (10.15)—洞窟尾根との間の雪溪に入り左側の稜に取付く (11.30)—岩塔の頭 (14.00) 右側の雪溪へ下り小屋への俣をつめてキレット屋へ入る (15.00)

○山本、広橋は鍋ノ平行計画の為、大阪よりのパーティと大町で落合うべくキレット沢より下山。

○休　養　残余

下流左岸で水晶掘り

7月28日(快晴)

○鍋型岩壁左稜　家田ー林、久保ー大村 (cf 本文)

B.C (6.35)—洞窟尾根下端 (7.40) P_2

P_3 間雪渓に入りスラブでアンザイレン、天井ルンゼ（10.30）昼食—左稜上（12.00） ザイルを解く。天狗尾根（13.05）—北槍—キレット—B.C（17.00）

○五龍岳往復　近、辻川、北川（北川）

B.C（7.30）—降路雪渓最上部で右俣をつめ稜線（9.45）—五龍頂上（13.30～14.30）—キレット沢下り口（18.00）—B.C（19.00）

○槍型岩壁右稜　住吉、細見、二木

クレバスに阻まれ取付も得ず引返す

7月29日（晴）断雲

撤収、出発（10.00）—キレット沢登りの途中小事故で負傷者が出たため、近、林、北川、辻川は冷迄、残余はキレット小屋泊。

7月30日（晴）ガス去来

冷を経て下山、近、林は帰阪、北川、辻川は大町で一泊の後美ケ原へ、残余は細野へ。

7月31日（晴）断雲　細野発

8月1日　帰阪

（時報3号）

1951年冬山

北　岳　合　宿

大島輝夫

我々は発会以后2年の冬、春の4回の合宿を全て後立山で行つて来たが、正月の白馬附近は剣と共に天気が日本アルプス中でも最も悪く、穂高で一日晴れの時でも半日しか晴れず、従つてラッシュに適した日は合宿中1回しかなく多くの部員が下でラッセルに終始するというのが普通であつた。それで今度の冬山は皆が何回も登れる様に、比較的天気の良い南アルプスで行う事に決つた。南の中でも49年11月新雪に全くおおわれた東北尾根下部側稜に新ルートを開拓していた北岳バットレスを目標とする事となり、9月に4名が先ず入つた。此の時は従来登歩渓流会松濤氏等によつて第一尾根側から登られたのが唯一つの記録とされていた第二尾根に対し、反対側からの新ルートを開拓したのを始め、第五尾根、第I支稜、東北尾根等を登つた。

次に11月には荷上げに広河原小屋に3名で入り、第一尾根支稜を登つた。所がこの頃から有力な隊員中に家庭の不幸や、卒業実験の都合で冬山に参加不能の者が出て、冬山は参加者5名、しかもその中2名は中途下山の必要があるということになつた。又南へ行く機会にバットレスよりも広大な冬の稜線を歩き、我々に不足していた3000米における冬

季の高処露営の経験をつむ必要があるという以前からの考えが再燃し、部長先生もその考えを支持されたので、バットレスを中止し、北岳頂上にテントを建設し、農鳥を目標とすることになつた。予定通り5名で赤ナギ沢より広河原小屋に入り、大樺に第一キャンプ、北岳頂上に2人用のテントをはり、2人泊り3名は広河原へ下つた。一方先に下つた3名の中2名は予定通り広河原峠より下山し、1名は単独で広河原峠より鳳凰に縦走してヴイバークし、広河原小屋へ下り頂上よりの2名と合体し下山した。以上が我々の秋、冬の北岳の概要である。北岳バットレス、第二尾根及び冬山の詳しい報告は紙面の都合上春山と共に次号（6月発行予定）にゆずることとした。

尚以上の外10月と12月に奥穂高に各1パーティを送つた。

尚冬山は北岳隊の外に一隊は八方尾根にテントを張り、唐松往復及びスキー練習を行つた。

記　　録

1. 北　岳　合　宿

メンバー　細見、住吉、川島、田島、由比浜。

12月25日　湊町発（19；50）

〃　26日　（雨）韮崎着（7；00）—駒ケ岳林道飯場（16；35）。

12月27日　（晴）　飯場（6；00）—赤薙沢—尾無尾根2200米（18；00）フォーストキャンプ。

12月28日　（晴）（10；00）発—広河原峠（11；30）—広河原小屋（14；30）。

12月29日　（晴）　荷上げの為大樺小屋往復（9；00〜16；00）

12月30日　（晴）（11；00）発—大樺小屋（13；40）C1設営、御池は草ズリよりの大デブリに埋没。

12月31日　（雨）　停滞。

1月1日　（晴）　物干。

1月2日　（晴）　C1（5；00）—小太郎尾根（7；00）—北岳（9；00）—中岳との鞍部（10；00）。C2設営。アタック細見、住吉入る。サポート川島、田島、由比浜、C2発（12；00）—八本歯沢—C1（15；30）撤収—広河原小屋（19；00）。

1月3日　（雪、後曇）　アタック、中岳往復（14；00〜16；00）。夜に入つてC2風の為破損。

1月4日　（晴）　アタック、間ノ岳手前まで往復（8；00〜10；30）。後C2放棄。北岳頂上（12；30）—草ズリ—広河原小屋。サポートは、（7；10）発—広河原峠（11；00）由比浜、田島、ここより下山。川島、早川尾根を鳳凰に向う。（17；20）鳳凰サイの河原でビバーク。

1月5日　（晴）　川島、観音岳往復（10；00〜13；20）—白鳳峠（16；00）—広河原小屋（17；40）

アタツクは広河原小屋停滞。田島、由比浜は横手より帰阪。

1月6日　（雪）　停滞。

1月7日　（雪）　小屋発（7；30）—広河原峠（11；30）—赤薙沢ビバーク（17；00）。

1月8日　（曇）　（8；30）発—横手（14；20）。菲崎より帰阪。

2. 八方尾根合宿

12月24日　（曇）　先発隊として大村、近、東、宍戸、北川、辻川、佐谷、柴田、大阪発。

12月25日　（曇）　先発隊細野着、四宮を加え午后黒菱小屋に入り、四宮は細野へ帰る。大久保先盟、山本、大阪発。

12月26日　（雨）　先発隊終日スキー練習。大久保先盟、山本、細野着、雨の為停滞。

12月27日　（風雪）　大久保先盟、山本、四宮、黒菱へ正午着、先発隊と共に上の段に5人用天幕設営、大久保先盟、四宮、山本、大村、近、残り、他は黒菱へ下る。篠田先生、久保、宮本、細野より黒菱へ。

12月28日　（雪）　篠田先生、大久保先盟、山本、大村の4名第二ケルン附近迄、他は第一ケルンまで往復後、篠田先生、大久保先盟、大村、近、宮本は天幕に残り、他は黒菱へ下る。

12月29日　（風雪）　全員で上の段附近に雪洞を堀開せんとしたが、積雪量少く失敗。午後篠田先生、大久保先盟、久保、四宮、佐谷、北川、柴田細野へ下る。他はイグルーを試築せんとして失敗、大村、宮本黒菱へ下り、他は天幕に泊る。大島細野着。

12月30日　（快晴）　山本、大村、近、宮本にて唐松へ、朝濃霧に眩惑されて天候を誤認し、出発大いに遅れる。出発（9；10）—下の樺スキーデポ（11；30）—国境稜線（14；30）—スキーデポ（16；00）—テント帰着（17；00）

大島は第三ケルン附近で下山し来る前記4名と会う。他は第三ケルン迄往復後スキー練習。前記4名に宍戸の5名の他、黒菱へ下る。

12月31日　（雨）　大村、宍戸、東、辻川細野へ下る。大島、山本、近、宮本天幕に停滞。

1月1日　（曇）　上の段天幕撤収、夜に入り細野に下山。

（時報3号）

1952年春山合宿

小日向より不帰往復

家田千尋

阪大山岳会結成を機とし過去に行なわれて来た登山は、漸次計画的綜合的登山に切り変えられてきた。即ち徳永等が戦時、戦後の社会的悪条件中にも可能としたラッシュ形式の登山は、期間、費用、技術、目標、根拠地等幾多の条件に制約され、会員数の増加に伴う下級会員の育成を行いつつ目標を下げずに行う此の種の登山に我々は疑問を抱き、その意味からも厳冬期白馬主稜は多年研究した後立山東面のラッシュに終止符を打つものであつた。それ以来我々が現在まで行つてきた稜線上の行動は当然の事ながら、サポートの活用、装備食糧配分の拙劣、連絡、行動すべき晴天の把握、高所露営等、徹底的に研究すべき全ゆる問題を与えた。就中高所露営は天幕の不足故に雪洞以外は等閑視され、又我々の単なるアドバンスにのみ用いて居た悪弊も加わり、1950年、51年度冬山を失敗に導いた最大原因を為すものであつた。そこで比較的長期に、又幾分余裕を以て、全員で此等の諸問題の解決の糸口を見出すべく、極地法を採用し、春山の計画がなされた。

極地法については従来の文献により運営方法を徹底的に研究する事とし、特に戦前より伝統的に之を行う早大と、戦後急速に極地法による実績をあげている明大に重点を置き、その他戦前の慶応、京大等の報告を「山岳」その他により歴史的に意義、思想、運営を各会員が研究し、略確信を持つてから具体的計画を建てた。

(1) 計　画

始めて行う極地法なので場所は我々が熟知している白馬方面になつた。会結成以来我々が目標の1つとする積雪期後立山全縦走に備え、春のキレット通過を済せた現在不帰を計画に加えるべく杓子双子尾根から唐松往復に定まつたが、なお不帰については徳永等の強い提言により事前に唐松側から偵察を行う事が条件となつた。杓子双子尾根は文献並に、途中迄ではあるが我々の1950年12月の行動とによつて地形は完全に近い程熟知して居るが、只、ジャンクションより上のCⅡ設置場所について疑念があつた。不帰は発見し得れば関学井上ルートによるが、而らざれば従来のルートを踏襲すべく研究された。白馬北俣に入り猿倉小屋をB.Hとし、小日向双子岩にCⅠ、上記ジャンクション上、出来る限り国境線に近付けてCⅡ、鑓天狗池にCⅢを設置し、各キャンプは4人用1張りずつ、CⅠは6人用雪洞を併用、全行動日数11日とした。

行動については

1. 計画自身の運営と食糧輸送の分業

2. 全装備ＣⅠ荷上完了と同時に、すでに国境線迄のトレースをつけておく事から計画を単純化する。
3. ＣⅢ設置後は各キャンプが計画に従つて自主的に動く。人員交代（主としてＣⅢ）も原則として行わぬ。
4. アタツクは快晴でも烈風の日は行わぬ。
5. 全般的に見て計画の山はＣⅢ建設にある。ＣⅠ，ＣⅡへの荷上げは悪天候を犯さず楽な気分で行ない、ＣⅢに全力を傾け随性でスピーデイにアタツクを行なう。
6. 各キャンプ間の荷上連絡は可及的早朝出発を原則とする。

以上を骨子として各キャンプに要する重量計算の後、之に人員を振り当て行動表を作成した。雪崩の危険は殆どが尾根筋の行動であり、只、猿倉台地から双子尾根東面に取付き小日向ゴルに至るまでの間を問題とし、従来の中山沢をつめるルートは取らず、側稜を登路とした。

(2) 行動記録

メンバー

リーダー　家田千尋、尾藤昭二（食糧係）田島汎（装備係）、川島勇（装備係）、坪井圭之助、山本光二（食糧係）、東雍、宍戸元、久保三朗

3月１８日

予定により家田は3月１２日大阪を発ち、細野に居た細見、大村と3月１５日より唐松小屋に滞在、同１７日不帰偵察を完了し、此の日黒菱に居た久保、及び前日大阪を発つた坪井、山本、宍戸と細野で合同し先発隊となり午后から荷物の整理に暮れる。

3月１９日　曇後雨

細野（１０；００）—二股（１３；００）—細野（１６；００）

四宮は腰部痛の為計画不参加大阪に帰る。細見は前日唐松からの帰途の膝部痛の為休養。残る5人が70貫の荷を2台のそりで二股発電所前迄荷上に往復す。そりひきに滑るので細野からのアイゼン着用は前代未聞。

3月２０日　小雪

細見依然調子悪く、計画不参加を表明、計画から2人減つたのですぐ大阪に帰り、後発隊と連絡を取らせる。

細野（8；30）—二股（9；30〜10；10）—取入口（12；00）—猿倉（14；40）—二股（17；00）—猿倉（19；00）

人夫2人を使用し、昨日の5名が猿倉に行く堺谷と共に荷上、1回ですまぬので家田、久保、坪井、山本は再び二股へ往復し、ＢＨへの殆んどの荷上を終えた。

3月２１日　晴

ＢＨ（10；00）—ＣⅠ（13；30−14；30）—ＢＨ（16；30）

第一キャンプ予定地に荷上げ。中山沢を遡行せず沢から上へ2本目の尾根に取付いて双子尾根に出る。奥双子手前のピークの下より中

山沢にデブリが出て居た。後発尾藤、田島、川島、東、大阪を発つ。

3月22日　晴

先、BH(10;30)—CI(13;00—15;30)—BH(16;10)

後、細野(13;45)—BH(19;30)

ストーブ調子悪く情無くなる程出発が遅れる。BHパーティは昨日下りに捻挫せる坪井を残し4名で荷上、及びCIを建設す。CIは夏用改造4人用を双子尾根から出た白馬側の側稜上の台地(1800米)に設け、家田、久保CIに入り、山本、宍戸はBHに下る。午后坪井は単身元気にCIに入る。

後発4名は残りの装備を細野から荷上しBHへ。

3月23日　雪

BH(10;30)—CI(14;00—15;30)—BH(17;10)

晴れればCI隊は杓子までラッセル、及びCII地点偵察の予定なるも停滞す。久保は卒業式参加の為下山、帰阪。2人は雪洞構築にかかり昼食中に荷上げのBHパーティが来たので未完成の雪洞内に荷を整理し、久し振りの再会を一同風雪の天幕内で喜び合う。家田、尾藤、宍戸を残し他は吹雪の中をBHに下つた。

3月24日　晴後雪

CI(10;00)—奥双子(14;30)—CI(16;00)

BH(11;00)—CI(16;00)

天幕除雪後、春とも思えぬドカ雪の稜線をワカンでラッセルしながら杓子迄トレースをつける為に出発し、途中猿倉台地のBHパーティと呼びかわしながらカンバ平に至る頃から天気はくずれ、奥双子の頭から引き返す。予定の全装備CI荷上完了と同時に杓子岳に至るを得ず、荷上の連中はもうCIに着いて皆で雪洞建設をしている事だと呑気に下りながらCIを見るも人影無く、雪の間に間に枝にとまつた小鳥の如く側稜に遅々と動かぬ彼等を発見し、急いでCIからトレースをつけに下ると雪風呂に入つた様に雪まみれに悪戦苦斗する皆を再びCIに先導し、直ちに雪洞構築にかかつたが、昨日堀つて荷物を入れた所が全然埋まつてしまつたのをスコップの先で探出し、8人で交代すればみるみる内に出来上つた。雪洞は天幕から10米離れた双子尾根稜線のすぐ下を白馬側に入口を向けて例の片屋根型を掘る。夕食には8人がやつとひと所に揃つたのでコンパの後、不帰偵察の結果や、之からの行動予定につき討議した。

3月25日　吹雪

昨日午後からの降雪は夜中より本格的な猛吹雪になり天幕に入つて居た山本は雪洞に逃げ込み居住性の良好を楽しんだが、天幕に残つた家田、尾藤は息もつけぬ天幕の除雪に何回か苦労し、寝てはシュラフもろともゆり動かされて1日を過した。

3月26日　快晴

先、CI(7;30)—奥双子頭(9;00)

—ザイル固定（9；30）— CⅡ地（11；00）—杓子頂上（11；40−13；00）— CⅡ（13；30−14；30）— CⅠ（15；45）後、CⅠ（9；30）—樺平（10；50）— CⅡ（13；30−14；30）— CⅠ（15；45）

今迄積つた雪は昨夜の風で完全にしまり、快晴の中を今日こそ前途の見通しを得ようと家田、川島は固定用ザイル、標識のみを持ち早々にとび出した。白馬唐松間を一望に収め、奥双子の頭から2つ目のピークの悪場に30米1本を固定し、ジャンクション附近より問題のCⅡ建設予定地を求めつつ登る。ジャンクションより3つ目のドーム型のピーク上、双子尾根が此処で最後の杓子の肩の登りにかからんとする所で大雪渓へは60度、杓子沢へは45度の傾斜を有する地点に絶好の設営地を見出し、約束通り後続パーティに予定地用の赤旗を立て、そのまま杓子岳に向つた。ジャンクションから傾斜を失つた尾根は此処からは杓子フエースの右端となる為傾斜は増大し、ザイルをつけクラストした雪面を後の行動の為丁ねいに1歩1歩大きなステップを切りつつ30米2ピッチで斜左上に上り、岩の露出した鋭度にやせた稜を1ピッチですぎると、小さなコルになり再び1ピッチの雪面の登行により尾根は小雪渓に向うリッヂと共になり、再びやせた雪稜を左上に2ピッチ、岩壁1ピッチで杓子、白馬間の国境線を全部見通せる部分に至り、杓子頂上の大きな雪庇の右端を更に1ピッチで頂上に出た。此処からは北岳頂上を思わす黒部側緩傾斜の広い頂上を更に鑓に向い最早悪場のない事を確認し、杓子から下らんとする頃に後続パーティをジャンクション下に認めた。CⅡより杓子頂上間のザイル固定を中止しCⅡ地に下つた。尾藤等6名は荷上用の荷物の整理後、CⅡ予定地に荷上に向い、CⅡ地で偵察隊と同時になり全員がCⅠに帰投した。本日で前途の計画もほぼ確信をもつに至つたので今迄混成であつた全員をCⅡ建設を控え、CⅢ隊尾藤、川島（以上アタツク）、山本、CⅡ隊田島、坪井、CⅠ隊家田、東、宍戸に編成す。

3月27日　晴後雪

CⅠ（9；00）— 奥双子頭（10；30−11；00）— CⅠ（11；50）

早朝から天候の変化を思わせたが今日中にCⅡを建設すべく8名がCⅡに荷上に向う。予定は此の日CⅡ隊及び家田はCⅡに入り、翌日CⅢ隊はCⅠ隊支援の下にCⅡよりCⅢに向い、CⅡ隊3名はCⅢ建設後CⅡに帰り待機連絡に当り、CⅠ隊はCⅡに荷上を行う筈であつたが、予想通り天候悪化し奥双子頭に荷を置きCⅠに全員が帰つた。帰途相談の結果、先日からの積雪状態はトレースを一挙に埋める可能性がありCⅢ隊がCⅠを出発してCⅢに至るにはCⅡ迄のラッセルが消された場合、時間的に難があり、又　CⅡ隊が連絡を待たずにCⅢ建設に向う可能性もあり、此の場合CⅢを建設しても即日CⅢ隊がCⅢに入り得ない事も想像されるので予定計画を変

更し、明日はCⅡ，CⅢ隊6名が雪洞を併用する事によつてCⅡに入り、その翌日確実にCⅢ隊をCⅢに入れる事にした。

3月28日　ガス後晴

各隊とも、CⅠ(8;30)—CⅡ(13;00)

CⅠ隊、CⅡ(14;30)—杓子頂上(15;00)—CⅡ(15;30−16;00)—CⅠ(17;30)

2500米以下は雲海の中にあり、登るにつれて眼前のガスの中に霧氷をつけた樺の間から天国の様に国境稜線が蒼空を背景に浮び上つた。やがてガスも去りさんさんたる陽光が心おきなくふりかかる雪の上を今日こそCⅡに入る喜びに胸をふくらませながらトレールを辿りゆく。昨日の荷を途中で拾いCⅡ予定地(2700米)に至り、直ちに天幕を建設し、CⅠ隊はステップを踏み固める為に杓子頂上に往復し、他は雪洞構築に専念した。CⅡ，CⅢ用の荷上も全部終つたのでCⅠ隊宍戸、東は翌日晴れればガソリンの補給に、又、大阪へ29日CⅢ建設の旨連絡の為細野に下るべく指示されCⅠに下り、6人はCⅡに入つた。

3月29日　曇ガス

CⅡ，CⅢ隊　CⅡ(8;15)—杓子(9;00)—天狗池CⅢ(11;00−12;00)—杓子(12;45)—CⅡ(13;25−15;20)—CⅠ(16;30)

CⅠ隊　CⅠ(7;30)—細野(11;30−12;20)—CⅠ(19;00)

天候思わしくないがCⅢ建設すべくCⅡから2名ずつアンザイレンして出発す。杓子頂上に至る頃から風強くガスも加わつてきたが歩きなれた国境線を鎖をすぎ所々出た夏道をどんどんとばしてCⅢ予定地(2750米)の夏なれば池のある天狗平に着き天幕を張る。幾分信州側に寄り、国境線の高き7，8米の雪壁にさえぎられた平坦部でCⅡよりはかえつて安全感の多い場所である。カチカチのシャベルの歯も立たぬような雪を苦労して切りブロックを積みだしたが、天候は更に悪化しだし帰途が案ぜられるので後事をCⅢ隊に託しCⅡ隊3名はアタックの成功を祈りつつガスの去来する中を、今日で態勢のととのつた事を喜びながらCⅡに下つた。CⅠ隊はCⅢ建設を信じ細野に下りガソリンを持つて再びCⅠに帰つたのが日も落ちた7時、連絡の為更にCⅠに下つた家田と翌日の晴を念じつつ夜を過した。

3月30日　晴後ガス

CⅢ隊　CⅢ(4;45)—最低鞍部(5;50)—ⅢⅡ峯コル(6;20)—エボシ岩(Ⅱ峯A)キレット(8;00)—Ⅱ峯C(9;10)—唐松岳(10;10)—Ⅱ峯(11;00)—ⅢⅡ峯コル(13;00)—最低鞍部(13;30)—CⅢ(14;50)

CⅡ隊　CⅡ(9;00)—鎖(10;00)—CⅢ(10;30−13;00)—CⅡ(14;30)

CⅠ隊　CⅠ(9;30)—CⅡ(12;00−13;00)—CⅠ(14;30)—CⅠ(16;30)

— C II (12;10)

C III隊、山本が1時から出発準備をしてくれていたので予定より少し遅れただけでC IIIを出発した。天候はよく、東天に赤味がさして電灯は要らぬ程明るかつたが、只、風のきついのが気になつた。旗を4本天狗岳迄立て帰途の目印とした。日の出直後に不帰最低鞍部に着く。天狗の大下りから見る不帰II峯の黒々とした岩肌は力に満ちあふれ、II峯信州側の雪面のひだは、朝日を浴びて見事な明暗を作つて居た。I峯は稜線上の夏道を簡単に辿り、I IIのコルでアンザイレン、2ピッチで針金の出て居る所に着き、之につかまり山形鋼製の橋を渡り、右へトラバース5米、氷のガリーを7米直登すると又、山形鋼製の橋があり、之をくぐりぬけて上り左へ2米トラバース、夏道はここから信州側を巻いてII峯C直下に出る。我々は稜に沿い5米登りエボシ岩(II峯A)基部に立つた。此処に家田、細見が3月17日唐松側から固定したザイルの端が雪に埋まつていた。エボシ岩はリッヂ通し及び黒部側がオーバーハング気味の岩が積み重なつた様で手がつかぬ。信州側は上部を除きべつたり雪をつけ、又、井上氏の所謂卵型雪の堆積である。信州側雪面のトラバースをしようとして一歩踏み出すと共に雪面にぽつかり孔があき5米下の孔から雪片が流れ出してはるか下方の南股へ落ちて行つた。上面の雪と、岩に密着した雪との間に隙間があるのだ。私は何時落ちるとも知れぬ大きな雪板の上に立つて居たわけである。後退しピトンを打つたが硬いリスに3分の1位入つたのを頼りに信州側の岩を登ろうとしたが阻まれ、再び信州側雪面のトラバースにかかる。固定ザイルの1端をつかみ漸くエボシ岩のトラバースを終えキレットの底部に着いた時、僅か10米程のトラバースに可成り疲労していた。此処から7米程の垂直に近い岩稜II峯Bを登り、リッヂ沿いに左方信州側の雪庇を避けつつ進むとII峯Cの基部に至る。黒部側にわずかにトラバースして針金を見出し、固く凍つた雪面に所々顔を出している針金を目印にステップを切りつつ10米程直登し、左上方に登つて稜線に出るとII峯Cはもう目前である。ピークより1米下のテラスに2人辛じてすわり風を避けつつ食事をとる。天候は1時間程前から険悪の相を加えていたが、補助ザイルのみを持ち可成り強い南西風に叩かれながらIII峯A, B, Cは黒部側斜面を巻いて唐松岳頂上に至り引き返す。II峯尾根を登つた慈恵医大パーティにII峯Cで会い、エボシ岩の固定ザイル撤収に可成り手間取つた以外はスムースに往路を辿り、I IIコルでザイルを解いた。天狗大下りを登り切つた頃から風雪となつたが、風にひるがえる旗を次々と目標にC IIIに帰着し、サポートの山本と成功を祝し合つた。山本は朝アタックを送り出した後、天狗の大下りに至りアタック隊の行動を偵察した。 (川島記)

C II隊、C IIIに10時半着き、山本からアタ

ツクがすでに不帰を乗り越えた事を聞き午後1時迄共に待つも帰投せず。天候変化に心を残し、CⅠ隊と連絡の為CⅡに下る。

CⅠ隊、早朝快晴に本日アタツクの行なわれた事を確信し、今迄散らかされたCⅠを整理後、東、宍戸は午後4時までCⅡでCⅡ隊の連絡を待つ様に指令されたが、2600米以上の局所的天候変化に眩惑され帰途を案じ連絡を待たずに引き返した。家田は鑓北南稜、杓子フエース等の登路をCⅠから望見中2時過ぎCⅡ隊を杓子の肩に認め、帰つて来たCⅠ隊に明日撤収予定の為、必ずCⅡで待つ様に言い残し、夕刻強風の中をCⅡに登る。CⅡに至り本日アタツクが行われ、恐らく不帰も無事通過した事を知り約束通り午後7時足下に安曇野の灯を見下しながらCⅠと電灯による信号を行うも背後に皓々たる月を頂き、連絡取れずに終る。

3月31日　晴後雪

CⅡ(7;00)—CⅢ(8;30)撤収(10;00)—CⅡ(11;50-13;30)—CⅠ(15;15)

CⅠ(8;40)—CⅡ(11;00-13;30)—CⅠ(15;15)

CⅡ隊が1刻も早く成果を知ろうとノンストップでCⅢに馳け込むと連中は昨日のアタツク成功に気を許し、ゆうゆうと朝食の最中であつた。CⅢ停滞用食糧を腹一杯につめ込み直ちに撤収作業に着手し、純白の雷鳥の群れ舞う稜線を心も軽く荷も軽く6人は喜々として帰途についた。鑓につく頃から天候は変りはじめCⅡを見下す杓子頂上で雪が降り出して来た。CⅡにCⅠ隊2名を認め大声で成功を叫びCⅡ撤収準備させる間、CⅡ，CⅢ隊は2名ずつアンザイレンし、次々とCⅡに下つた。CⅡから撤収せる荷を加え、1物も余さず、再び8人が1隊となり、最後の固定ザイルもはずし、何回も通いなれたトレースの登り用足場も今はどんどん踏みつぶし乍ら大きなストライプでCⅠに着いた時、全員が心からの安堵で声もなくすわり込んだ。

4月1日　雪後晴

CⅠ(11;00)—デポ(11;40)—CⅠ(12;50)—デポ(13;30)—BH(15;00)—デポ(16;40)—BH(17;50)

風雪が舞い上つているが最早天候も気にならぬ。山本はアタツク完了を連絡に細野に下り、再びBHに上る事になり、他はCⅠ撤収、中継行進によつて全荷を猿倉BHに、夜10時に山本は細野から上つて来た。

4月2日　雪

予定通り休養、食つては寝、それでも昼からは粉雪の降りしきる猿倉の林間滑走を雪崩の音を聞きながら楽しんだ。

4月3日　晴

BH(8;30)—細野(17;30)

昨日の雪もからりと晴れ、朝、小屋の前の樹林を縫う陽差しを体1杯に受け、小鳥のさえづりを聞きながらひしひしと蔵の春の感触に身をゆだね、やがては雪まみれ汗まみれのこ

ろげつ、まろびつの行進が始まる。田島、川島、宍戸は軽装で細野へそりを取りに帰り、他は沼池平に荷の中継を行い、細野から来たそりに殆んどの荷をのせ、8名1隊となり細野に下り、全行程を終了した。

4月4日　晴

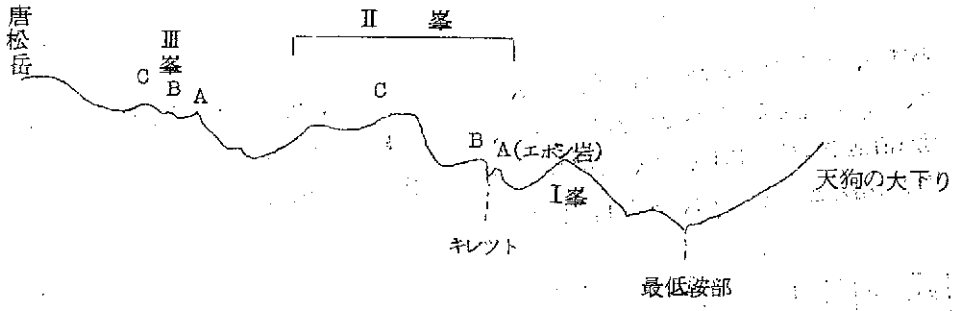
午後四谷発帰阪。

行　動　表

3月 日	天候	細野 三段	B H (1800)	C 奥子(2700) I 双頭	C 杓子(2750) II	C III	唐松岳
19	曇後晴	5					
20	小雪	5					
21	晴		5				
22	晴	4	3 2				
23	雪	1	1 4 2	停1			
24	晴後雪		5	3			
25	吹雪			停8			
26	晴			2 6			
27	晴後雪			8			
28	曇後晴			2 6			
29	曇	2			3 2 1		
30	晴後曇			2 1	2	停1 2	
31	晴後雪			2	3 3		
4月 1	雪後晴		1 7				
2	雪		停8				
3	晴	3 5					

不帰連峰概念図 ── 信州側より

川島 勇



予 定 行 動 表 （改案）

日	細野	B 猿 H 倉	C Ⅰ	C Ⅱ	C Ⅲ 唐松
1	← 5				
2	5 →				
3		← 5			
4	3 →	2 → ← 3			
5		3 → 3 →	← 2		
6			2 → ← 3 ← 3		
7			← 2	3 ← 3 →	
8			← 2	2 ← 1.	2 ← 1.
9			←	3 ← 3 ←	
			← 2		
10		← 8			
11	← 8				

個人行動表

名＼日	3月19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	4月1	2	3	4
天候	曇後雨	小雪	晴	晴	雪	晴後雪	吹雪	晴	晴後雪	曇後晴	曇	晴後曇	晴後雪	雪後晴	雪	晴	晴
家田	H ニ	H B	B C1	B C1	停	C1 O	停	C1 S	C1 O	C1 C2	C2 C1 C3	C1 C2	C2 C1 C3	B C1	停	H B	
尾藤				H B	B C1	〃	〃	C1 C2	〃	〃	C2 C3	C3 K	C1 C3	〃	〃	〃	
田島				〃	B C1	B C1	〃	〃	〃	〃	C2 C3	C2 C3	C2 C1 C3	〃	〃	〃	
川島				〃	〃	〃	〃	C1 S	〃	〃	C2 C3	C3 K	C1 C3	〃	〃	〃	
坪井	H ニ	H B	B C1	B C1	B C1	〃	〃	C1 C2	〃	〃	C2 C3	C2 C3	C2 C1 C3	〃	〃	〃	
山本	〃	〃	〃	B C1	B C1	〃	〃	〃	〃	〃	C2 C3	C3 天狗	C1 C3	H C1 B	〃	〃	
東				H B	〃	〃	〃	〃	〃	C1 C2	C1 H	C1 C2	C1 C2	B C1	〃	〃	
宍戸	H ニ	H B	B C1	B C1	B C1	C1 O	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
久保	〃	〃	〃	B C1	H C1												

H：細野　　O：奥双子頭　　ニ：二股
B：猿倉 B.H.　　K：唐松岳　　S：杓子岳

（第4号）

1952年夏山

カクネ里合宿

1951年夏戦後初めてのカクネ里に足を入れ、カクネ奥壁に手を染めた我々には、尚、其処に残された幾多の問題を持つていた。その上1952年度の最終目標として後立山逆縦走を目指したのだから、その事を考え合せて、『カクネ奥壁の完登』と夏山合宿を目論んだ訳である。即ち未登の直接尾根を主目標とし、その他の尾根及び荒沢の方をもつけ加えた。

さて今夏の合宿は丁度切開の出来た遠見尾根より白岳沢を経て、容易にカクネ里に入る事が出来た。そして爾後の合宿を極めて円滑に展開出来た事は、昨夏1回のカクネ合宿経験の尊い贈物と言えよう。

さて、主な登攀報告を次に記し、その他は、山行記録にゆずつた。

直接尾根　　パーティー　川島・坪井

7月22日　晴

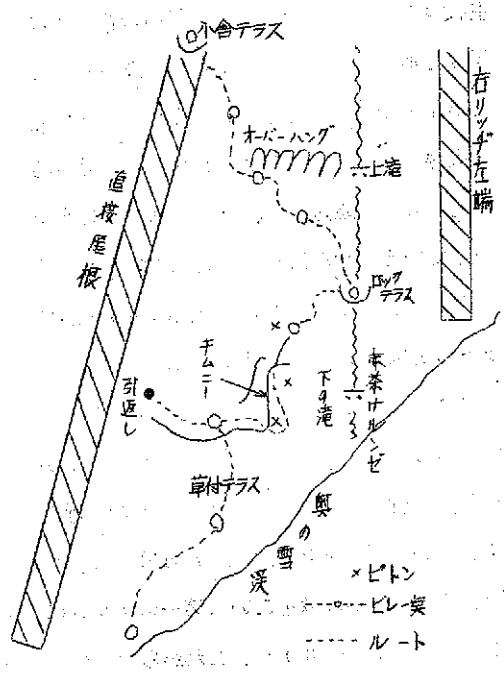
B.C（5.00）—洞窟滝（6.00－6.30）アンザイレン—直接尾根取付（7.00）—草付テラス（7.25）—ロツクテラス（8.55－9.30）—小台テラス（10.30）—中央ルンゼとのジャンクション（11.00）ザイルを解く — 北槍頂上（12.40）

昨日の偵察で、取付迄の雪渓の様子はよく分つていたから、楽な気持でBCを出た。夜は明けていたが未だ日は射していなかつた。洞窟尾根の裾をまいて奥の雪渓に下り立つ。すぐ目の前の割目から洞窟滝の不気味な姿が僅かに見え凄まじい水声が洩れて来る。ここでアイゼンをつけアンザイレンしてコンティニュヤスで登る。滝は完全に埋まつていたから左端迄トラバースするだけで簡単に済んだ。45度の急斜面を持つ奥の雪渓は、至る所クレバスで引裂かれていたが、大体右端が通れる。雪渓中央より右寄りに、赤黒く土の着いた落石道は、落石の量と速度の大きな事を明瞭に示していた。滝から30分で取付点に達した。赤茶けルンゼは敬遠して、かなり下方から岩場に取付き雪渓に平行に右上へ2ピッチ簡単に登つて草付テラスに達した。長さ10米にも及ぶ大きなテラスでビレイ用の木もある。正面は垂直に近いスラブ、左は恐しく急なブツシユ帯に消えている。テラス右端に上から落込んでいる草付チムニーを登るつもりで下迄行つた所、チムニー外壁をなすフエースが登れそうに見えたので、テラスから1米右へトラバースした後直登する。足場悪く、やり直してピトンを打ち、左足をのせる。岩は硬く適当なホールドもあり、又リスも多い。更に1米登つてからもう1本高らかに歌わせて釣上を行い、右へ1米トラバース。手を思い切り上方に伸ばして大きなホールドにかけ、力まかせに捩じ登るとチムニーの上に出た。脆いが順層の緩斜面である。ザイル一杯に登

つて第3のピトンを打ち、ルツクの釣上を行う。第3のピトンから右にルートを取つて赤茶けルンゼ「下の滝」の上に出ると、ここに1坪に近い完全に平な岩のテラスがあつた（ロツクテラスと呼ぶ）岩床の凹みには水も溜つていたのでここで食事をとる。ここまで4ピツチ2時間を要した訳であるが問題の岩壁が思つたより早く済んだので気楽であつた。

赤茶けルンゼはここから再び傾斜を増し、下から見るとオーバーハングに見える程急な「上の滝」になつているが、この滝及右リツヂ側は、まばらに草の生えた急斜面で登攀不可能である。「上の滝」上部は右リツジ直接尾根間の浅くて緩い草付ルンゼで赤茶けルンゼの名に反して緑一色である。「上の滝」の左側に、上端が庇の様に突出した完全なオーバーハングが続いている。之は縦走路からもそれと認められる程顕著なものである。

食後、我々は左上方直接尾根のブツシユに入るべく、オーバーハング直下目掛けて登り出した。じめじめした土混りの脆い草付の岩場は気持のよいものではない。2ピツチでオーバーハング直下に出るとすぐ左側のブツシユに入り直登1ピツチ。傾斜が急な為ルツクの重みで空中へ投出される危険がある。しかし直接尾根登攀は、実質的にはここで終りであつた。後は傾斜の緩くなつた尾根のブツシユ漕ぎに終始するのである。次の1ピツチを簡単にすませると広く開けた小舎テラスに出た。ここからカモシカ道らしいのについて尾根の右側をからみながら8ピツチブツシユ漕をして又かなり開けた所に出た。左眼下には中央ルンゼ左岸をなす直接尾根側稜の丸いピークが見える。之はカクネ里から見る時、顕著な鋭い岩峰となつて見えるものである。右上方には右リツジの特徴ある白いガレが近々と見られた。此処が中央ルンゼの終端であることは3日後に中央ルンゼを登つた際に分つた。ザイルを解いて更にブツシユ漕を続けたが、間もなく左の中央ルンゼに下りた。北壁もこの辺りまで来ると尾根とかルンゼとか区別するのも大げさで、一寸した壁に過ぎなくなる。硬い階段状のルンゼをどんどん登り、



直接尾根ルート図

ルンゼが開いて草付に消える所で小さなテラスを見付けて休む。辺り一面お花畠で之こそ我々2人だけの花である。右にトラバースして再び尾根上に出てみると、ここは右リッジと直接尾根とのジャンクションの上部で、尾根の向う側、即ちルンゼ側は低いブッシュと散岩と柔かい地衣類に覆われたカモシカの牧場であつた。牧場をゆつくり登り北槍頂上で坪井と握手をかわしたのは未だ1時前であつた。　（川島記）

主稜登攀記録　　パーティ　田島・山本

7月22日　晴時々ガス

午前5時BC発一路雪渓をつめる。主稜向つて右の雪渓に入り正面尾根末端付近に至ると主稜はこの辺りに於て2ケ所程馬の背の様な部分を形造りしかしその1つは雪渓から手も届かんような高さしかない。そしてこの付近の状態は小石まじりのザラザラの斜面であるが充分安全に通過出来、上部は草で少し藪をつけている。此の部分にはシュルンドもなく雪渓から直ちにザラザラの斜面に移り僅かに2〜3分でリッジ上に出られた。

リッジのすぐ左下（向つて）はルンゼとなつておりBCからもそれと認められる残雪がある。主稜初登の京大パーティは末端付近より取付いてこのルンゼを登つた様である。私達はリッジ通しに藪をこいで第一のテラスに出る。取付より約30分、これからは大体京大と同じルートを辿る。ここから左下に見えていたルンゼは2つに分れ、その中央に小尾根が1本急角度に落ちている。ルンゼは左右とも滝となり、左は紫黒色のオーバーハング、右は甚しく困難な容相を帯びた一枚である。一方主稜リッジは急傾斜の岩稜にブッシュをつけよしんば登れるとしても不必要に体力を消耗するだけである。結局私達の採つたルートは向つて左のルンゼへ少し廻り込んで例の小尾根の左側の草付に取付くものである。少し登りかけたが極めてアンサウンドで山靴をワラジにかえ浮石をより草根を握つてようやく草に覆れたテラスに這い上つてホッとする。

次のピッチで例の小尾根の裾をまたいで右側のルンゼに出る。丁度滝の中途にあるテラスが格好のビレイポイントを提供する。ここから滝を直登するのは無理だし、例の小尾根に再び取付くことなど問題外、唯一のルートは主稜リッジに向つて右斜上に登るもののみである。アンサウンドと草付の苦しい登攀、幸に主稜リッジのすぐそばにテラスの存在に気付く。このテラスの上は主稜リッジ上のブッシュを潜いで登る。結局第一のテラスからここ迄の3ピッチが前後を通じて最も悪い所だつたわけである。1ピッチ登つてテラスに出たがこの上はブッシュが硬い為に少し登つて左のルンゼにトラバースする。例の右側の滝の上部のルンゼである。3ピッチ程登り悪い草付となつたので更に左のルンゼ（紫黒色の滝の上部に当るもの）に移る。丁度そこに残雪があり水がある。ここで第一の昼食、時

間は10時半、そこから上のルンゼはBCから見るとガラガラの様に思われるが実際は快的なもので6ピッチを45分で登りザイルをとる。ルンゼを出来るだけつめて右側のリッジに出て偃松を漕いでポッカリ東尾根の稜線に出る。すぐ踏跡を伝つて北槍のピークへ12時55分に着くことが出来た。直接尾根パーティと堅い握手。　（田島 記）

中央ルンゼ登攀記録

7月25日　晴後曇・雨　（パーティ）川島・山本

時間記録　BC（6.30）—取付（8.00～8.45）—第五滝上（12.15～12.45）—直接尾根ピーク横テラス（16.15）—北槍頂上（17.30）—BC（20.15）

昭和9年7月の試登以来第三登（昭和23年7月）に至る迄関学パーティによりしかトレースされていないこのルンゼは、北壁中心部に鬼神の斧で切裂かれた様に狭く深く喰込み、群飛ぶ岩燕の鋭い羽音が両側の垂直に近い岩壁に跳返り恐しい落石の風を切る音、陰惨な暗い谷間の様相と相俟つて登攀者の心理を極度に圧迫する。

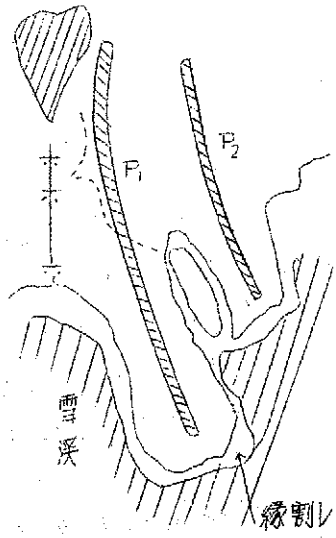
ルンゼ入口までは、雪渓が続いていたので非常に容易であつた。右側のアンサウンドな岩場に取付いたが非常に悪くここでザイルをつけワラジにはきかえた。右側からトラバースし、ピトン1本使用して2ピッチでルンゼの底に立つ。第一第二の滝は既に下になつている。ルンゼ一杯に転つているスノーブロックを乗越えると短い第三の滝があつた。滝の底右側を登り、第四の滝は滝底チムニーを簡単に登る。第五の滝は左右岩壁とも登攀不能で滝正面右側の70度位の草付を登る外ない辛じて立てる小テラスにピトンを打ち、山本を上げる。この上及び右側はオーバーハングの脆い岩に草付を交え登攀不可能である。草付をはずれまで登りそこから左へトラバースせんとして錆びたカラビナのついたリングハーケンを見つけ、それに依つて滝底チムニーに達した。開ききつたチムニーを2米漸くのことで登ると落口のテラスであつた。この滝は2ピッチで2時間15分を要している。昼食をとり、だらだらの登りを2ピッチ右へ曲り込みながら進み、2米と6米程度の滝を乗越すと黒く湿つた15米程の滝があつた。BCから見るとだらだらの登りの中途あたり迄見えるだけであつて、この滝あたりから日光が非常に乏しくなり、ルンゼの様相はことさらに険悪に感じられる。滝底チムニーはチョックストーンのため登れない。第三登の関学パーティが雨中ビヴアークしたのはこのチムニーの中らしい。右側の岩を直登し、打込まれてある2本のハーケンを利用して左へトラバース、岩を抱くようにしてチョックストーンの上に出た。滝の落口はガレが一杯詰つている、人が踏むのは勿論、ザイルを少し動かしても物凄い落石が起る。最後の5米程の滝は発見した3本のピトンを利用してチムニー

を簡単に登り切つた。この滝の上、正面及び左側は垂直の脆い岩壁で登れないので、右上へのバンドをトラバースし、2ピッチで直接尾根のブッシュに入つた。すぐ眼の下に直接尾根支稜のピークが見える。ピーク横テラスから左側のルンゼに下りてこれをぐんぐん登り北槍頂上へ真一文字に駆上つた。

ピークリッジ

7月22日（晴時々ガス）　パーティ　大村・宮本

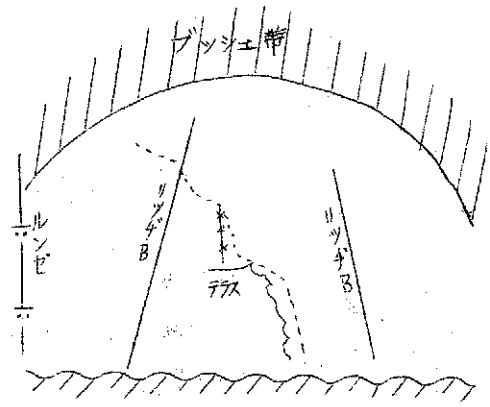
BC出発（5.30）広い雪渓をつめてP_1 P_2間の雪渓に取付く（6.00）その雪渓をつめ雪渓上部の砂まじりの岩の斜面を左へ取りつきP_1 リッジのブッシュの中に飛びこむ。



ピークリッジ

しばらく左へトラバースして扇形残雪下のルンゼ途中のテラスに達す（7.00）これより薮混りの草付を少し登り再びP_1 リッジのブッシュ中に入りルンゼの滝を左に見つつ這松の中をこぎ扇形残雪に至る。（7.40）

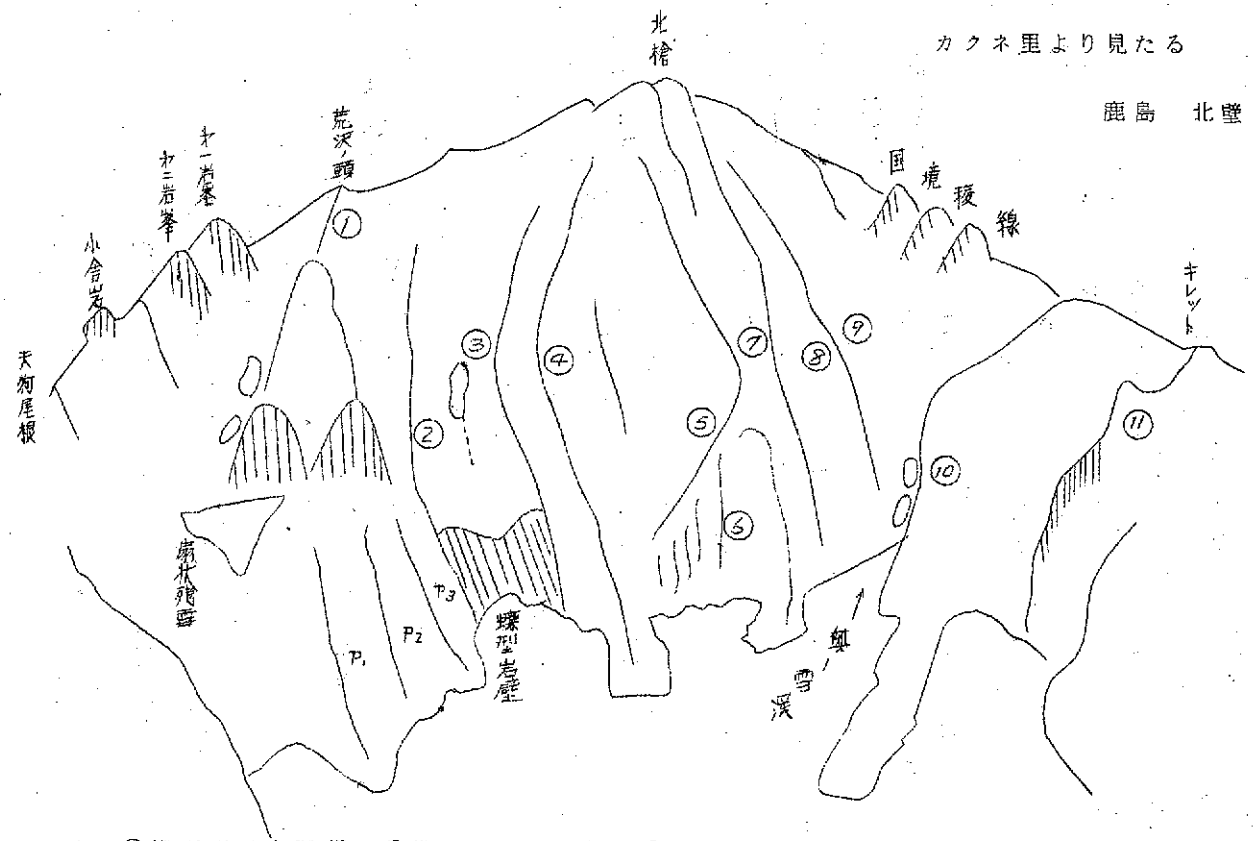
扇形残雪上部にてしばらくルート偵察後リッジA、リッジBの中央少し右寄の所に取付く（アンザイレン、地下足袋に代る。）階段状の岩場を登り楽にテラスに至る。この頃よりガスの去来がはげしく見通しがきかず前途に不安を感ぜしめる。このテラスの上はかなり急な岩で真中に1本リスが通つている。テラスから手のとどく所にセルフビレー用のピトンを打つて立往生少々オーバーハング目の岩にはばまれたのである。仕方なくトップを交替、然し又不成功、幾度か交替してようやく3本目のピトンを打つことに成功、これを手がかりに岩をだく様にしてリッジAの上に



ピークリッジ

カクネ里より見たる

鹿島　北壁



①ピンクリッジ　②蝶型岩壁左尾根　③蝶型岩壁右尾根　④主稜　⑤正面尾根　⑥中央ルンゼ　⑦直接尾根
⑧右リッジ　⑨右ルンゼ　⑩洞屈尾根　⑪キレット尾根

出る。リユツクを釣上げる。この高さわずかに10米足らずだが、可成りの時間を要した。ここより岩のバンドを左へ上り気味にトラバースしてリツジAを越え扇形残雪上部のルンゼ側に出る。この所から見るとルンゼの岩壁が切立つて居り登攀は不可能若しくは相当の困難な模様である。更に大きな岩の積み重なつた斜面を40米ザイル一杯に登りブツシユ帯に入る。下向きの這松が思いの外密生して非常に腕力を要する。ようやくにしてピーク前につく。このあたりはP_2側は草のわずかに付いた急な傾斜で登攀はかなり不安定な状態で、P_1稜上はリツジから数米の下で這松が密生している。ピーク正面リツジの登攀は、さして困難ではなさそうであるがガラガラに風化して居り不安に思えたので敬遠、左側斜面をトラバースしてピークの上に出る。後は難なく荒沢の頭より頂上に至る。(3.30)

(大村 記)

(時報5号)

1952年 冬山合宿

山岳部というものは、本来山に登り、且つ登ろうとする人々の集りである限り、もつともつと自由を呼吸した"我"の登山こそ見られるべき筈なのだ。こうした登山に於ける真の個人性が、によきによき確立している様な山岳団体こそ、より高度な営みを為し得る団体であると私は考える。この考えと、冬山合宿の具体的問題処理—即ち正月を含んだ日数の取方とか小人数での冬山訓練—毎冬合宿に問題になるこれらの解決と一緒になり、主目標を春山に置いた現在、この冬山こそ、自由に分散して、能率的なより好ましい冬山合宿を展開しようとした。

即ち

第1パーテイ	聖赤石方面
第2パーテイ	木曾駒
第3パーテイ	大沢方面(春山にそなえ
第4パーテイ	スキー合宿

の4パーテイに分け、尚その他先鋒のみによる冬富士登頂が行われた。

これらの山行自体は小規模ではあるが、こうした1回の合宿でさえ、今後の部の姿に前述の如き意味での前進が必ず見られるものと確信している。夏山では余り問題にならないが、冬山での小パーテイの動きの中こそ真の意味での個人の実力がためされ、且つのばされるのだと思う。私は報告会で耳を傾けながら、私を含めた阪大山岳部現役の実力がどの辺にあるかを明かに認める事が出来た。決して思い上つてはならない。何はとまれ記録等問題外の極めて有意義な冬山合宿であつた。

冬の聖岳　　尾藤昭二

"南アルプス特有の味"とよく言われるの

だが、それは観賞的乃至純感覚的のものだけではなくて行動としての登山自体の中に独特の〃匂ひ〃を漂わせる。季節を変え、場所をかえ、ルートをかえて違つた〃匂ひ〃かぎたさに、我々は「次は」、「次の山は」など頭にえがくものだ。実際、一昨年の北岳以来南アの匂は捨て去る事の出来ないものになつて了つた。しかし長々と刻み込まれた渓谷や、南特有の峠にへだてられ、3000米の稜線も簡単には取付けないのだが、遠山川からの聖岳方面こそ冬でも軌道が利用出来峠もなく容易なアプローチで私達は此処に着眼したのである。此処も夏季漸く一般化して来た程度で、麓の人々も冬の登山など夢想だにしないという程度である。だから小舎も冬山として何等の考慮もなされていないものだ。私達はこのルートより稜線に上り南冬山の好天を利用し、能ふ限りの広範囲な3000米の稜線の行動を展開しようと企てた訳である。即ち遠山川をソ行し大沢尾根より百間洞小舎に入り、其処をベースとして、聖、兎、赤石、出来れば荒川迄も足を延そうと考えた。これにはベース迄を如何にスムーズに行うか—それは登路の地形と積雪に密接に関連し—而も広範囲の行動の展開—それは一に天候に左右され—の二つの要素に大別されるものなのである。

昨秋東君と2人で登路の大沢尾根と小舎その他の下調べに行つた。その時は薄く新雪を戴いた彼方の北岳に何時かの秋のピークを思い出し乍ら大沢尾根より稜線に出、赤石、荒川、悪沢を経て、転付峠を越えて行つた。又一方積雪状況と、冬季天候は、文献を調べて計画の基準とした。

実際雪は予想通り少かつた。汽車を下りバス、軌道を利用しながら黒や茶の色で表わされる晩秋の様な山々に向い乍ら、我々は〃いや冬山へ行くのだ〃と強いて冬山を意識しなければならなかつた。暗い寒々とした遠山川と彼方の白銀の兎岳のスカツとした明さとの対照は、我々に変な錯覚を感じさせる。それでも大沢尾根に取付いた時、2〜3寸の粉雪が全く粉の儘靴にけちらかされる姿に抑え切れぬ喜びを感じた。しかし2500米も越せばラツセルだ。1尺も2尺もある。思わず日当り良い所に腰を下したくなる。一休みしたとたん全くの静さに、吸い込まれる様になる。ぶるつと身のすくむ様な寒さに思わず腰を上げた。寒暖計は零下13度、正にきびしさそのものの中に徹底した〃静〃自体がにじみ出ているという南の冬山の姿なのだ。そこに秋山の感覚の見事な破壊がある。やつぱり冬山なのだ、と覚えせしめる所に南アの南アたる所が—いや、山の山たる生々としたその巨大な生命の実感がうかがわれるのである。

記　録（1952年12月）

〔パーティ〕　尾藤昭二（L）　田島 凡（S.L装）　宮本貞雄（食）　木村 裕　土屋 直

12月23日　大阪発

１２月２４日（曇）　飯田線平岡下車—木沢村（14.00）村役場観光課及び営林署に連絡する。

２５日（晴）　木沢村梨元（8.30）—軌道—大沢渡飯場（10.30～12.00）—荷上げ—唐松峠（15.40～16.20）—大沢渡

大沢尾根に取付いて初めて２～３寸の雪の上に出た。高度と共に雪は増さないが、陽の当らない森林帯中では凄い寒気と乾燥した空気が静寂その物の中に溶け込んでいる。唐松峠（約2000米）で荷を置いた。雪も３寸程。

２６日（快晴・朝－１℃　百間洞夜－２０℃）

大沢渡（7.00）—唐松峠（10.00、－１０℃）—荷物デポ（16.00）—大沢岳肩（17.50）—小舎（19.40）

－１０℃の寒気に追い立てられる様に峠から全荷を背負つた。１時間余登つた時、急に雪が増し、足が重くなつて初めて気付いた。１尺余の雪に愈々ラッセルが始り益々ピッチは遅くなつたが皆黙々と頑張つた。しかし、疲労と寒気が強り始めた時もう４時頃だつたがまだ雪の中にうごめいていた。而もこの先は細い尾根の這松の上に出なければならない事を知つた時とてもこの儘では駄目だと思つた。大沢岳岩壁がのしかかる様に夕陽に大きく浮んでいる。ともかく小舎に入らねばならないと考え、ガタガタ震え乍ら荷をデポして稜線へと急いだ。最後の岳樺をぬけてアイスバーンの急斜面を登り稜線に出た時は６時。もう陽は残影のみを残し、夕闇が辺りを包んでいた。黒々とした闇の海に塁、赤石が恐しい様に浮んでいた。私達は吸い込まれる様に百間洞の彼方に下つて行つた。ラッセルこそ問題ではなかつたが道が分らない現在、疲れた体には、何とかうまく小舎に出たいと眼を光らした。ふと気付くと具合よく月光が青々と雪面を照していた。百間平のガレと丸山とを結ぶ線上大沢岳から百間洞への小尾根の末端附近に小舎があるのだという秋の事を思い出し乍ら、見当をつけて下るとやがて、ポンと小舎の前に出た時はさすがにうれしかつた。２尺余の雪の中にポツンと建つていた。７時４０分－２０℃の寒暖計を見て、身震いしながらシュラーフに入つたのは、10時も過ぎていた。

２７日（晴後雪、－16℃朝）

小舎（9.00）—デポ地（10.40）—小舎（13.00）

全荷小舎迄上る。

２８日（風雪、１日中－16℃）

停滞。

２９日（快晴、朝－20℃）

塁岳アタック）

小舎（6.00）—丸山（8.00）—兎岳（10.30－11.00）—塁岳（12.30）—小舎（17.30）

尾藤、宮本（塁岳）田島、木村（兎岳）土屋（小舎）

昨日の雪もラッセルは大した事なく、トレースをその儘稜線に出た。中盛丸山を越え—その下降は相当の急傾斜だ—氷、堅雪、板状雪の落し穴の交錯の中を上り下りを繰り返して兎岳に立つた。のしかかる様な望岳を前にして、ボーデンも見えないコル迄の下降は実際ユウウツだつた。ラッセルこそ問題にはならないが何処迄も下つて行く様に見た。さて望岳は、右半は岩壁部で西沢に落ち込み、左半は雪の急斜面だ。私達はこの境目の部分を選び乍ら一気に1時間で頂上に登り切つた。快晴の眺望を恣にしながらも、寒さにすぐ下降に移らねばならなかつた。兎、小兎と上り丸山の最後を登る時には疲れた体は自由にならなかつた。登り切つて下降一途になると、足から力がぬけた様にころび乍ら雪まみれになつて、小舎に帰つた。

30日（晴・風）

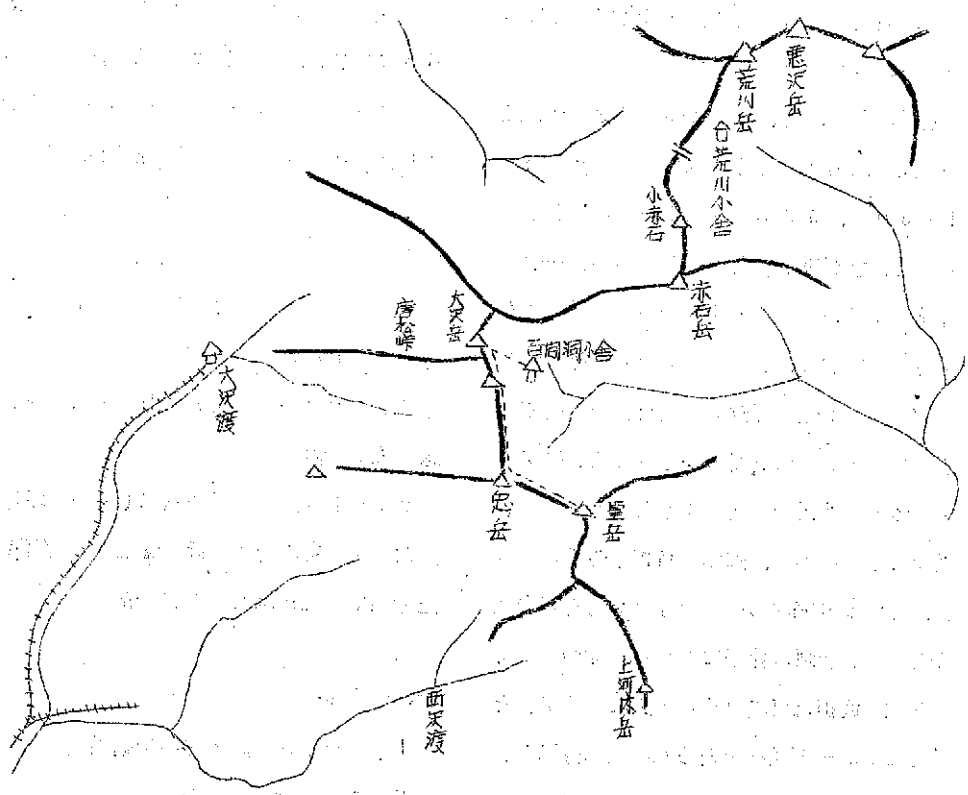
小舎（10.30）—大沢渡（17.30）

事故者大半の為撤収。

31日（高曇）

大沢渡—木沢村—平岡上車。

（時報5号）



1953年春山合宿

後立逆縦走

尾藤昭二

まえがき

積雪期後立縦走は、既に戦前立教大が冬季2度試みて惜しくも失敗せられ、その後昭和18年春に関学大の井上氏等により、白馬より針木に到る正縦走が成功せられた。私達は数年間主力を後立山に注ぎ針木より白馬に到る逆縦走を目標にして来たが、殊に1951年春の逆縦走失敗以来は、部員全体のそれへの情熱は固かつた。

縦走に際しては、従来共問題にせられ、且つ常識的に考えられる八峰キレットと不帰は1950年、52年の春山で我々も一応積雪期の問題を解決した訳なのであるが、一般に看過されている針木・冷岡の問題の重要性を推察した私達は、これを加えた3点を中心としてサポート隊の配置を考えた。一方縦走隊は、サポート隊の進展に歩を合して、純アタック形式に各区間前進しようとするもので、従つてその精神的、肉体的負担を能う限り除き、必ず縦走完遂し得る十分な余力を縦走隊に残す事が計画の骨子であつた。従つてサポート隊の負担は可成重くなる訳であるが、その為にサポート隊を出来るだけ大部隊にし、その大半を全く荷上げのみに使用して稜線迄のボッカを円滑、且つ容易にし、更にボッカ進展に伴い、次々と下山せしめて縦走隊と縮少したサポート隊が稜線上で長期間堪え得る様に計画した訳である。勿論必要の場合はサポート隊全員が荷物を各小舎に残して下山し、縦走隊独力で行う事を考に入れてのすべてであつた。此のサポート作戦には稜線迄の登路として極めて容易にして便利な良きルートが不可欠の条件であつた。それが一方を八方尾根、他方を冬山テイサツ以来一応新越尾根となつた訳である。

尚先述の針木、冷岡はそれ自体としての問題と言うよりも、それの全縦走に於けるウエイトが極めて重大と考えたのである。私達は偵察隊を送り、大沢小舎から新越乗越えの容易な登路を発見し、それを解決出来た事は全計画をスムーズに進める大な誘因であつた。

計画

縦走隊　川島　勇（L）　住吉仙也

サポートA隊　田島　凡（L）　山本光二（食）　大村一生（会）　宍戸　元　鷲沢忍　杉中　勝

サポートB隊　尾藤昭二（CL）　坪井圭之助　東　雍（食）　近　瑋三　小沢逞夫　土屋　直　立花直治　木村　裕

一、縦走隊

Ⅰ．大沢小舎—針木岳—新越乗越

Ⅱ．新越乗越—冷小舎

Ⅲ．冷小舎—キレット小舎

Ⅳ．キレット小舎—唐松小舎

Ⅴ．唐松小舎—白馬岳—細野

二、サポート隊

Ａ．大沢小舎をベースとし、新越乗越に雪洞を進め冷小舎迄サポートし、鹿島槍釣尾根迄縦走隊に同行する。

Ｂ．八方尾根より稜線に上り、五龍を越えて不帰をサポートする。

三、連　絡

両サポート隊の境点を鹿島槍釣尾根とし、標識を立てる事。尚、その他あらゆる場合を想定してその連絡を決めた。

四、偵察隊

偵察隊を全計画行動開始前に先発せしめ、新越乗越えの登路及び扇沢を偵察せしむ。

行動記録

3月２３日（小雨）

縦走隊、Ａ隊‥‥大町（11．30）—蓮沢（13．30）—黒沢営林署小舎（14．30）

Ｂ隊‥‥細野（14．00）—黒菱小屋（17．00）

昨２２日夜全員大阪を出発し、大町では偵察に加つた縦走隊と最後の打合せを行い隊編成を行つて、お互の完斗を祈りつつ分れた。

午後小雨の中を縦走隊・Ａ隊はバス、トラックを利用して蓮沢附近迄入り、容易に黒沢の営林署小舎迄荷上げ出来た。一方Ｂ隊は久保先輩も加つて頂いて全員細野から黒菱小舎に入つた。

２４日（晴）

縦走隊・Ａ隊‥‥黒沢（9．00）—大沢小屋（15．30）

Ｂ隊‥‥黒菱（7．00）—唐松小舎（13．30）

縦走隊・Ａ隊は途中新越尾根末端に荷をデポし、一気に大沢小舎に入つた。Ｂ隊は尾藤、近の２名のみ唐松小舎に入り、小沢、土屋は唐松小舎迄荷上げ他は上樺に荷をデポして黒菱小舎に下つた。午後尾藤、近は再び上樺の荷の一部を小舎に荷上げした。久保ＯＢ下山して頂いた。

２５日（曇後風雪鷲は雨となる）

Ａ隊は雨の為新越尾根下部に荷上げて引返す。

Ｂ隊坪井等６名は早朝黒菱を出発、途中風雪化してきたので小沢、木村、立花の３名を上ノ樺に荷をデポせしめて計画通り下山せしめ坪井、東、土屋の３名は唐松小舎に入つた。午後風雪中を尾藤、坪井は、牛首偵察、東、近、土屋はデポした荷を全部小屋に運び入れた。稜線迄の荷上げはスムーズに進み、風雪の音を聞きながら明日は休養と皆の顔がほころんでいた。

２６日（風雪）　Ａ，Ｂ隊共停滞

２７日（稜線は風雪、鷲はガス後晴）

Ａ隊、大沢（10．00）—国境稜線（15．30～16．20）—大沢（18．30）

天候を誤り出発はおくれたが、午後は完全に晴れ、稜線の雪洞予定地迄荷上げ完了出来愈々次の晴天には縦走隊出発という段取りに

至つた。

B隊、停滞。

28日（高曇）

縦走隊　大沢（4.30）—針木峠（7.00～8.00）—針木岳（10.00）—スバリ岳（11.40）—赤沢岳（14.30）—鳴沢岳（16.00）—新越雪洞（17.30）

鶯沢の準備により縦走隊は、満天の星空を仰ぎつつ小舎を出た。凍みのある籠川本谷をチラチラ2ケの電灯が進み、ワカンでのラッセルも、もどかしい様だが、黙々と峠に向つて直登、5時電灯を消す。最後の電底を右に巻いて峠に立つた。朝食後間もなく空模様がおかしくなつてきたのですぐ出発した。ボコボコもぐり乍ら稜線を進み、10時縦走第一峯の針木岳頂上を踏んだ。白馬は、遥か彼方に頭をのぞかせているのみだ。下降はアンザイレンして慎重に下つた。堅雪にゆるんだ新雪のあるのは危険極りない。更にスバリへは雪と岩のナイフリッジや急な雪面を上り下りしながらそれを越える。次は夏道を利用して漸く赤沢岳に着いた。ほつと一息入れていた時、新越尾根上部を進む点々としたサポート隊を見付けた。如何にも頼もしい姿に見える。

更に同様な上り下りを繰り返して鳴沢岳を越えた。その下降の急雪面も非常な注意を要したが、愈々雪洞も間近くなつてきた新越乗越附近はラッセルがひどくおあずけされた犬の様に眼ばかり先に進む。5時半漸く迎えられて雪洞に入つた。

A隊　大沢（9.00）—雪洞（14.30）

夜中から炊事して縦走隊を送り出した鶯沢以外の5名は、残余の荷を持つて出発。国境稜線到着後は、直ちに雪洞建設5時半縦走隊を迎え入れた。折から降り出した雪の中を田島、杢中は大沢小舎に下つて行つた。

B隊　唐松小舎（8.30）—白岳小舎（12.30）

高曇で風もある変な天候であつたが、B隊の5名も出発し、牛首もアンザイレンして稜線通り下り昼過ぎ白岳小舎に着いた。近、土屋を往路を帰りて直ちに下山せしめ、尾藤、坪井、東の3名は五龍頂上まで荷上げし、鵬朔会の雪洞に入れぶらぶらと下る頃より雪が降り出した。

29日（風雪）　停滞

30日（風雪）　停滞

31日（ガス・強風）　停滞

薄日がさす様でガスも間もなく晴れる様に思われたのでA隊は出掛けたがやはり引返し、B隊も五龍頂上迄行き、荷作りして待つたが遂に引返した。夜さえ渡つた月光は実に物凄く山々を照し出していた。

4月1日（快晴）

縦走隊・A隊‥‥新越雪洞（8.30）—種池（11.30～12.50）—冷小舎（16.00）

雪洞を撤収して、岩小舎沢岳のラッセルをすまして種池へ着いた頃は風もなく、ポカポカと日が照り、皆車坐に坐り込んで茶をわかしたりして昼食を摂つた。爺岳を過ぎて冷小

舎を目の前にする頃より再びラッセルに悩まされた。冷小舎は屋根の2/3を出しているのみで堀り出しに1時間半要したが奥の部屋は雪もなく、少し手入すると気持良い小舎になつた。

B隊‥‥白岳小舎（9.00）—五龍岳（10.00〜10.30）—キレット小舎（19.30）

五龍頂上で荷作りして出発した時8貫の荷があつた。五龍の下降は、アンザイレン40米4ピッチで急雪面を直降少し右へトラバースし、夏道に沿つたりして上り下りを繰り返したが、重荷の我々のピッチは遅く、夕闇迫る7時半漸く小舎に着いた。愈々計画も本道に入つた感がある。

2日（晴後ガス）

縦走隊・A隊‥‥冷小舎（9.00）—南槍頂上（11.20〜12.30）—冷小舎（A隊のみ）

B隊‥‥キレット小舎（8.30）—釣尾根（11.00）—南槍頂上（11.30〜12.30）—キレット小舎（14.30）

何れの隊も今日こそ会える様な気がしていた。縦走隊・A隊は冷を出て、南槍頂上に向う頃よりガスが出だし、頂上に立つた時には、釣尾根の方向さえわからなかつた。何気なく「ヤッホー」と呼んだ時、丁度釣尾根から南槍に向つていたB隊には聞き慣れた声だつた。俄然B隊のピッチは上りヤッホーを呼び乍ら一歩一歩ステップを切りながら頂上へ、遂に11時半頂上で喜びの握手を交した。車坐になつて昼食、相互の苦労を語り合い乍らも、誰の眼にも明日への喜びが輝いていた。記念写真もすんで、縦走隊はB隊に導れてキレットへ、A隊はそれを見送り乍ら彼等が一人ずつガスの中に消えて行き、声も届かぬ様になると急に歯の抜けた様な寂寥感に包まれ、黙々として冷小舎に引上げた。さてキレットは我々の予想より遙かに良く、小舎から小八迄は、北穂会のトレースがあり、夏の針金が使用出来、又大八はその頭の岩角にザイルを巻き京大のピトンに確保して40米のザイルを下げ、キレットボーデンより黒部側を巻く所は、一部針金も出て居り、更に10米ザイルを固定して簡単に通過した。又釣尾根よりキレットへの下降はガスに包まれていた為でもあるが、トレースがなかつたら仲々容易でないと思われた。

3日（曇後雪）

A隊‥‥冷小舎（8.00）—新越乗越（14.00）—大沢小舎（18.40）

不安定な天気で夜明け前から考えていたがラッセルとシュプールの事を考え遂に冷小舎を撤収何日振りかで大沢小舎に帰つた。

B隊、縦走隊‥‥休養停滞

4日（風雪）

A隊　大沢小舎撤収下山。

B隊、縦走隊停滞。

5日（大体晴）

縦走隊・B隊‥‥キレット小舎（11.00）—白岳小舎（15.00〜16.00）—唐松小舎

（17.40）

天候を見ながら出渋つていたが遂に出発、身も心も軽い5人の足取も早く4時間で白岳小舎に、1時間40分で唐松小舎に入つた。素晴しい御馳走をして明日を祝福し、サポート隊は夜おそく迄明朝の準備を行つた。

6日（ガス後風雪）

縦走隊‥‥唐松小舎（7.00）—不帰二峯（9.30）—鑓ケ岳（13.30）—雪庇下ビバーク（16.30）

B隊‥‥不帰二峯より引返し—唐松小舎（10.20～11.30）—黒菱—細野（15.00）

朝から剣に雲がかかり風もあつて思わしくない天気だつたが出発は誰の心にも固く決つていた。縦走隊・B隊は7時出発唐松岳を越えて、三峯の黒部側を巻き、二峯の下降は針金を利用出来たが更に末端に30米ザイルを固定して全員で下り、尾藤は更にエボシ岩上部に上り、同ザイルで縦走隊のエボシ岩信州側トラバースを確保。此処で縦走隊はB隊と分れを告げた。時刻は9時半、折から雪がちらちら降り始めていた。

不帰を越え、天狗に上つた頃より本格的な風雪化し、夏道が僅かに浮き出して見えるのを頼りに漸く天狗池に着いた。それからは磁石と地図とカンを頼りに2時間近くも掛つて鑓岳登路の夏道に辿り着いた。兎に角出来る限り白馬の小舎迄行こうと鑓岳を越える迄はよかつたが、更に杓子に向う稜線が分らず一時黒部側への尾根を下つたり又雪の斜面が全面判別出来なかつたりして、3時間近くも行き来したが、遂に断念ビバークに決した。少し逆戻りして鑓岳を下り切つたコルの雪庇の下を少しならしてツエルトをかぶりもぐり込んだ。夜になつて降雪が烈しくなり両側及び正面から圧迫され遂に2人共体を接して身動きも出来ぬ迄になつた。それでも少し眠れた。

一方B隊は縦走隊を案じ乍ら、風雪中を唐松小舎を撤収、八方尾根を下り細野に下山した。夕方坪井は細野に居た大村と雨の中を猿倉の近く迄迎えに行つたが、縦走隊は下りて来ず、明日の天候を気にし乍ら夜中細野に帰つた。

7日（快晴）

縦走隊‥‥ビバーク地（6.45）—白馬頂上（9.30）—白馬尻（10.40～12.00）—細野

日出前より準備を始めていたが快晴の朝の寒気は烈しく、出発迄2時間も要した。晴れた稜線では白馬迄の進路がその儘目の前に置かれ、昨日探した尾根も今朝はアイゼンも快く瞬く間に過ぎて白馬頂上に縦走最後の足跡をしるした。一気に大雪渓を下り、馬尻で長い間休み後はもう下界の道だとボコボコもぐり乍ら猿倉を過ぎて下つてゆくと、北股取入口少し上手で尾藤、坪井、東、大村に迎えられ無事成功の握手を交した。どつかと雪の上に下した腰は、もう容易に上らなかつた。ポカポカと春の陽を浴びながら川の水音に無精

に聞耳を立てた。細野に帰つた時はもう5時も過ぎていた。

新越尾根について。

新越尾根（仮称）とは、大沢小舎の少し下手から乗越の岩小舎沢岳寄りの所に上る尾根である。冬季の偵察によりこれを認め、今回春山行動開始前に偵察隊を出して、これが登路として容易な尾根である事が分つた。

偵察隊は大島輝夫 OB (L) 久保三郎OB、川島勇、住吉仙也、田島凡のメンバーで、当尾根及び扇沢偵察の目的で3月16日大阪を発ち、17，18日で大沢小舎に入り、19日快晴を利用してこの尾根を登り更に岩小舎沢岳を越えて種池、扇沢を経て下降し一気に偵察を完了した。

さて此の尾根についてであるが寡見にして殆んど耳にした事がないので、その詳細を説明しよう。

先ず取付は尾根末端から行うのが最も簡単である。大沢小舎から本谷を少し下ると新越沢出合に出、更に行くと本谷が稍左に曲り、次に右に曲ろうとする所の附近が末端部で、蓮草側稍上手の河岸段丘に、大きな数本の木が見えるのが良い目標である。この取付点から、この尾根をぐんぐん登ればよいだけで大した所もない。大部分ブナ、モミ、更にカンバに覆れて居り平均傾斜も大した事もなく大沢小舎から6時間足らずで登り切る事が出来る。2、3注意を附加すると、枝尾根が多いから下降の際間違わない様にし、特に標識等をつけた方が良いだろう。又、ルート図の①②の部分は注意すべきで特に雪の状態の悪い時は警戒しなければならない。

更にジャンクションでは雪庇というより左図の如く雪が盛り上つた程度で、簡単に国境稜線に出る事が出来る。

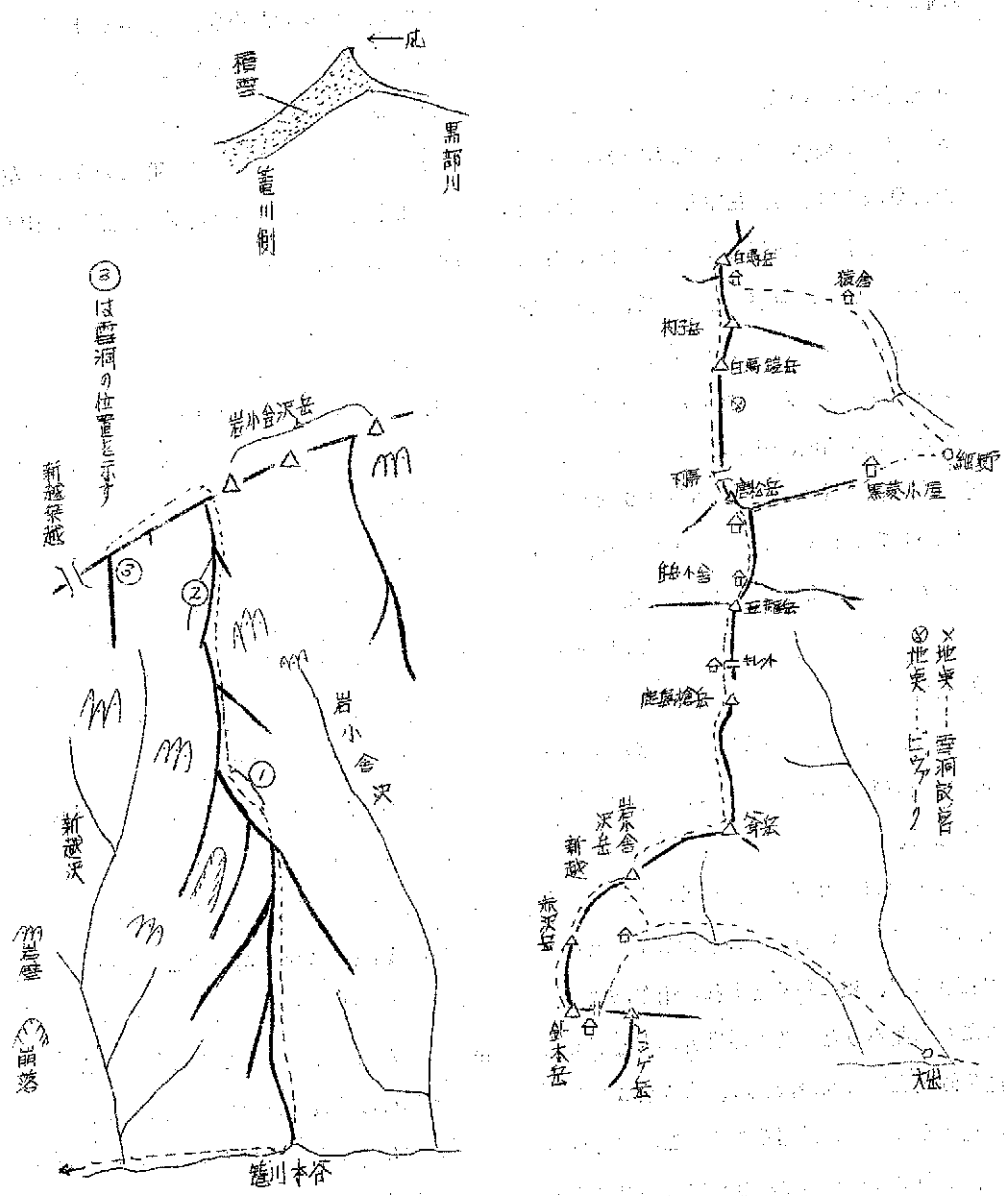
あとがき

1. 稜線の雪の状態は一般的に良好で特に不帰キレットは、可成針金を使用出来た。その他種池附近のラッセル及び鳴沢針木間が案外悪い事には留意すべき事である。

2. 小舎について特に記すべき事といえば針木小舎は雪が入り使えないのは例年の事であり、又冷小舎は今春は屋根の⅔のみ出ていたのであるが埋つている場合も十分考えられるから予め位置を確めておく必要がある。

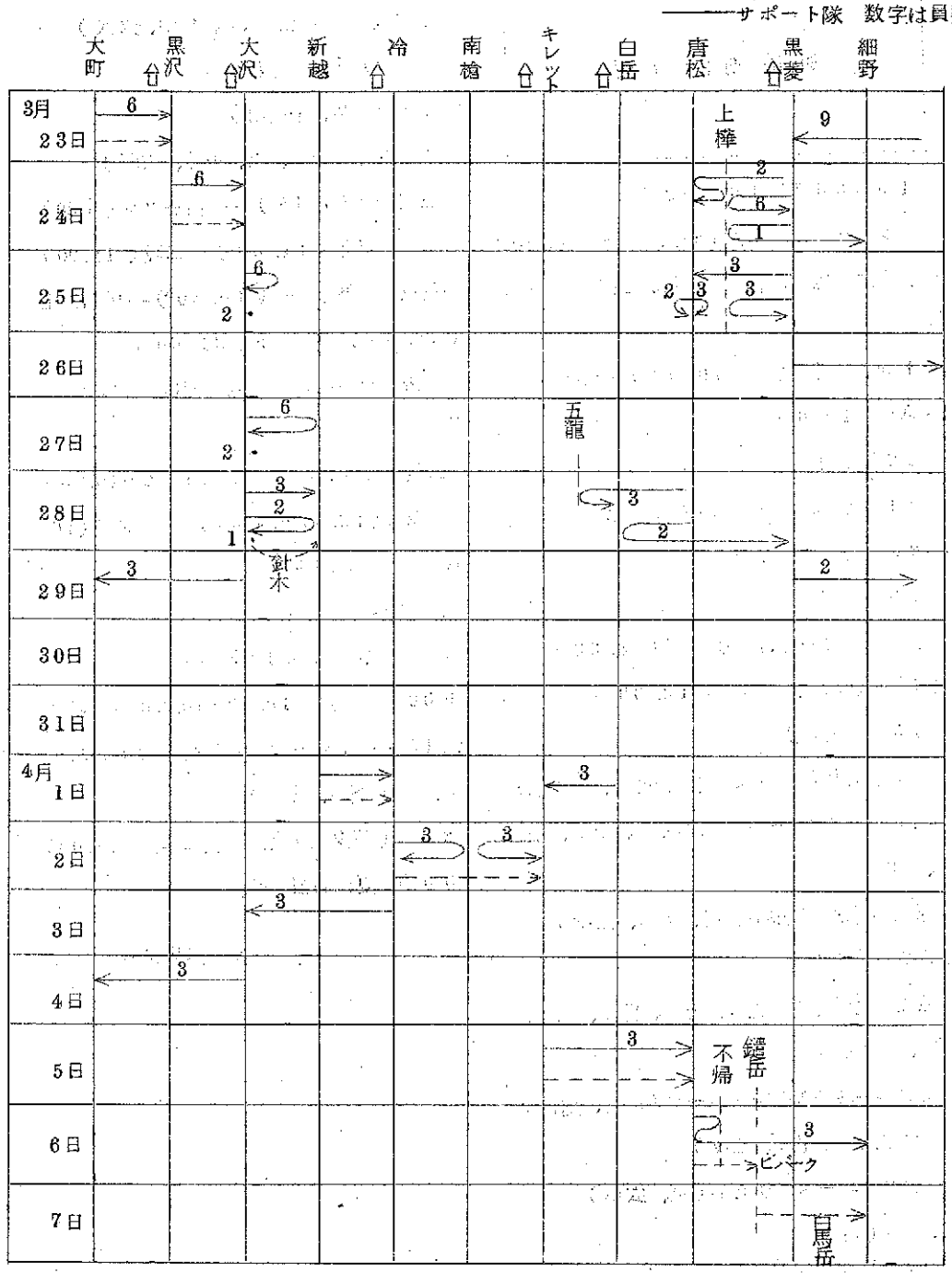
3. 全行動をふり返つて見る時、何といつても開始に先立つ新越尾根の発見とサポート隊に於る運営特に稜線迄の荷上げを一気に進める事が出来た点などが成功の一番大きな要素であつただろう。しかしこの計画がこうした縦走に於ける最も良い物とは決して言えない。私は登山に対するフィロソフィから尚一層好ましく且つ高度な計画 ― 縦走計画 ― を考えながら筆をおく。

（時報5号）


風
積雪
黒部川
篭川側
③は雪洞の位置を示す
岩小舎沢岳
新越乗越
③
②
①
岩小舎沢
新越沢
岩壁
崩落
篭川本谷
白馬岳
猿舎
杓子岳
白馬鑓岳
下駒
駒鳥岳
黒菱小屋
細野
白馬小舎
五竜岳
キレット
唐松岳
岩舎沢岳
新越
赤沢岳
鉢木岳
ヒラゲ岳
大出
×地点……雪洞設置
⊗地点……ビバーク

行　動　表

- - - - 縦走隊２名
——— サポート隊　数字は員数



（時報５号）

1953年 夏山合宿

剣岳剣沢合宿

1953年7月19日～29日

メンバー　川島(L)、尾藤、山本(光)、東、土屋、宍戸、広橋、李中、鷲沢、三枝、山本(進)、西川

19日（雨）称名（10.00）—彌陀ケ原に幕営（12.00）

20日（雨）　追分小屋に入る。

21日（曇後雨）別山乗越え荷上げ

22日（雨）　停滞

23日（雨）

24日（曇一時雨）追分小屋（8.30）—真砂沢出合にB.Cを設置（13.30）

25日（快晴）

八ツ峯上半（川島(L)、宍戸、鷲沢、山本(進)）

八ツ峯六峯フエース（山本(光)(L)、土屋、李中、西川）

源次郎尾根（尾根(L)、東、広橋、三枝）

26日（晴）

源次郎尾根（山本(光)L、土屋、李中、西川、宍戸、山本(進)）

源次郎—峯長次郎側フエース（川島、鷲沢）

八ツ峯上半（尾藤、三枝）

八ツ峯フエースより上半（東、広橋）

27日（晴）

B.Cより三田平（尾藤、東、土屋、宍戸）

二股（川島、三枝、山本(進)、西川）

三ノ窓（山本(光)、広橋、李中、鷲沢）

にそれぞれテントを移す。

28日（晴、午後雨）

東大谷（尾藤L、東、土屋、宍戸）

三田平発（7.45）—黒白谷コル（8.30）—中ノ谷出合（11.30）—二股（12.00）—左股より早月尾根（16.30）—剣岳頂上（18.30）—テント（21.00）

剣岳主稜縦走（川島L、三枝、山本(進)、西川）

二股（7.00）—小窓—（9.30～10.30）—小窓頭（12.30～13.30）— 三ノ窓（16.00）— 二股（18.00）

池谷右俣（山本(光)、広橋）

三ノ窓A.C発（8.10）—剣尾根取付き点（9.00）—二俣（10.00～10.30）—剣頂上（17.30～18.00）—三ノ窓（20.15）

剣尾根（李中、鷲沢）

29日（晴夕立）全員二股に集合（18.00）

30日　夏山合宿解散。

（時報6号）

1954年春山合宿

―春の黒部へ―

尾藤昭二

昨年の春の後立縦走の時、連日の稜線上生活の合間合間に眺めた内蔵助平や黒部に実際吸い込まれる様な力を感じていたが、それが記憶という箱に入れられ、意識という俎に乗せられてみると、冬の穂高に迄足をのばして再び後立に郷愁を感じつつある私達を一言の文句もなしに黒部へ―後立を越えて黒部へ―と引つぱつて行つた。勿論黒部といえば直ちに私達の脳裏に浮ぶあの岩小屋沢岳から西北に伸びる岩小屋沢岳支脈は、昨春私達が開いた新越尾根と共に概に記憶という箱に深くやきつけられた内蔵助平と結び付いて、私達の進む方向に太い1本の黒線として、私達をひきつけて行つた。其処には何のまざり気もなく直ちに今春は大沢小屋に入ろう。そして新越尾根を登り岩小屋沢岳のあの尾根を下り、黒部へ近付こうと春山に向つたのであつた。

所が計画、準備の不備の為、黒部の河原に立つ事も出来ず、僅かに木の間から遙か下方に黒部を眺めたに過ぎなかつた。しかし私達の今日の偵察の要点を詳細に報告し、その基盤の上に若干の考察をなして今後の指針への参考ともなればと思い夏の黒部下廊下さえ知らない私が筆を持つた次第です。

◎偵察隊行動概況

春山合宿は参加者の都合により、A・Bのパーティに分れA隊は5名にて3月16日から10間、B隊は7名で3月28日から10日間の大沢合宿を行つた。夫々の期間中、A隊は岩小屋沢岳支脈の高度約2100米附近にA.Cを出したが、準備不足から十分下れず。一方B隊は、A隊の偵察行の結果、当支脈下降をとり止め、中尾根の途中、高度約1800米余の処にA.Cを出して新越沢を下降し、僅かにその末端から岩小屋沢岳支脈末端に到達したに過ぎなかつた。

◎中尾根新越沢報告

中尾根（仮称）は岩小屋沢岳南肩のピークから新越沢に向つて下り、当沢を右と左の二股に分けている尾根を指している。上から下つてゆくと、初めは何でもない尾根であるが、高度1850米附近よりは急激に落ち込み、尾根通しは悪く、私達は図示した如き雪渓を一気に二股下つてしまつた。私達はこの雪渓の始まる処にA.Cを設けたのである。此の雪渓は平均40度、傾斜が一気に連続し、且つ途中に小滝があり雪崩の危険性もあり、その上見通しが出来ない。全くシンドイ処である。私達はこの直上にA.Cを置いた為、帰途、正味2時間余直登しなければならないという事が、どんなにか前進を妨げたか知れない。所が一旦二股に下ると、其処は広々として、真白の波の大きなうねりの上に椈の大木が一本二本とたくましく腰をすえている全く快適の場所なのだ。此処迄下ると、宍戸が「尾藤

さん、此処へテントを出せばよかつたですね」と云う。一も二もなく、この快適さによう気持は、何年か前の冬、冷沢で同志社パーティが遭難した大雪崩の記憶に跡かたもなく消えてしまうという様な辺りの地形なのだ。此処から一見した所では鳴沢岳に上つている右股は、岩小屋沢岳に到る左股より悪そうだ。

沢の広々としているのはほんの僅かで、少し下ると河巾は狭められ、両岸共雪崩のデブリの上をトラバースしなければならなくなる。而も所々沢の真中に水が顔を出し始める。一方見上げる両岸の斜面の雪は、うつすらとして殆んど落い尽し、融けた様であるが、尚所々大きな塊として残つているのが、今にも滑り落ちそうに春陽に輝いていた。そこからの雪どけの水は次第に嵩を増して、トラバースするデブリの雪と、斜面との間に容赦なく流れ込む。このトラバースは傾斜が急で、而も雪がくさり、安定した足場は勿論、ピッケル、アイゼンも効目少く全くいやな所なのだ。バランスを保ち体を宙に浮かす様に。こうなると、あんなにほしかつた沢の水にも手が出なくなる。かくして左岸を、右岸と、1曲点に達すると8米位の滝に出合つた。此処はアンザイレンして左岸を行き、2曲点を過ぎて3曲点迄下ると、大ダテガビンが目前に現われ、愈々黒部も近い事を知る。此処から岩小屋沢支脈末端に上る真直の2本の雪渓が並んで居り、これは主稜線からも眺められたが、新越沢から当支脈に登降し得る最下端の物であると思う。デブリは、累々として上部は雪層もうすく、急傾斜な地面と何のかかわりもなくて今にも割れて崩れそうだ。

3曲点を過ぎると、次は今度は大きい20米位の滝に出た。その先は再び新越沢は右折して見えない。黒部別山を眼前に見乍ら黒部が見えないのを残念に思つて左岸を行きかけたが、状態が余りに不安定なので止むなく先述の雪渓を登り（直登1時間余）尾根に上つたのである。高度約1600米足らず。

此処で初めて黒部を望む事が出来た。

◎榛の木平附近と黒部別山沢落口附近を中心として考察。

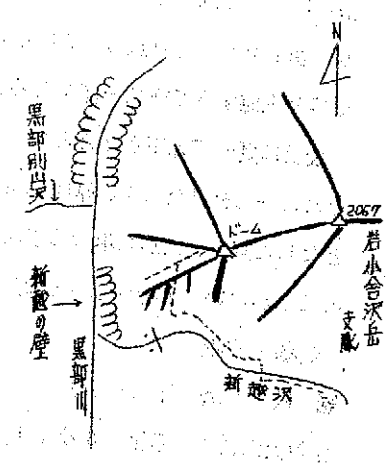
私達が木の間から望み得たのは、これら附近のみであつた。榛木平は、みるからに広々として木も点々と見られるいい所だ。冠氏が始めて黒部下廊下唯一の野営地として使用せられた。その榛木の疎林は、大ダテガビンの斜面にはい上つている。所が其処より下流に来るに従い大ダテガビンの斜面は傾斜を増し岩肌となる。それと共にその黒部の河岸は大きくデブリが横たわり、上には、今にも落ちそうな雪のブロックが点々掛つている。その最も危く見えるのは、大ダテガビンピークから黒部へ真直に落ちている沢の所だろう。何しろ黒部別山大ダテガビンの斜面の雪崩？雪のブロックの崩壊という奴は、何時とはなしにどんどん落ちているのだから。冠氏が春の黒部では特に"石なだれ"を注意されているが（尤も冠氏の言われる"春"とは5月〜

6月を指して居られる様だが）私も曲型的な雪崩ではなしに、雪の崩壊、それも急傾斜面に残つた雪のブロックが、土砂と共に落ちるのには特別に注意しなければならないと思う。その意味から、当所の通過には可成の緊張が必要であろう。

それから黒部別山沢落口の少し上手に隣合して大きなスノーブリッヂが見られた。恐らく通過可能と思われる程度だ。又別山沢右股は、可成奥迄雪渓が続き、上部で右側（下から見て）の岩尾根に取付きさえ出来れば、登行可能と思われる。

○岩小屋沢岳支脈の黒部下降路についての考察。

私達が立つた岩小屋沢岳支脈末端から黒部へは、斜面の途中迄見透し得るも下部は見えない。私達は、上はドーム—1700米位の高度で、積雪期には其処だけ木がなくて真白のコブの様な高まり—迄行つてみたが、それより北の黒部に面する斜面は、下る気にもならない所で、且此処からは見えないが、その下部は黒部別山側と共に絶壁をなして、黒部は全く廊下状となつているそうである。それは、ドームから派生している小支尾根の北に当ると思う。又我々の立つている尾根の末端が黒部へ落ち込む所は所謂"新越の壁"となつているのだから、冠氏が秋黒部から岩小屋沢岳支脈に取り付かれ、又上から下降せられたのはその中間であろう。今一度その著書を開くと「徒歩点の少し上流の後立山側に、珍しく川近く迄下つている灌木の茂つた尾根に取付き、アンザイレンし、木をつかみ全くはう様にして直登3時間、やつと傾斜がゆるくなり唐松の大木も現れ始め、間もなく黒部川に向つて尾根が2つに岐れた所に出た」（要約）とある。徒歩点とは、黒部別山沢落口より少し上手にあり下廊下唯一の所である。私の推測では、多分ドームから出ている小支尾根を直登してドームに達したのであろうと思う。私に見えた部分について言うならば、灌木の生えた細い実に物凄い尾根である。



○黒部のスノーブリッヂについて

文献的知識から言うと、東谷落口、雲切谷落口、人見平には通過可能程度の大きなスノーブリッヂが、1937年、39年の3月2度共見られたのであつたが、今春54年は（関学の報告による）東谷、雲切谷何れも見られなかつたそうである。東谷落口には、ガンドー尾根から落ちる雪が、ブリッヂを形成するらしい。それから今春私達が見た先日の黒

部別山沢落口より少し上手のスノーブリッヂは、大正１５年６月にも見て居られ、その事から相当おそく迄残る大きな物らしい。その他の場所については、全く分らないが、下廊下の春のスノーブリッヂと言えば一応この３ケ所は確実にあると認めてよいと思う。推測すれば、丸山谷落口、黒部別山北峯が黒部にはり出している処所、又ガンドー尾根の末端部分など相当可能性があるのではないかと思う。

◎内蔵助沢についての推測

冠氏の言葉を借りると「丸山と大ダテガビンとのU字峡は、落口迄雪に埋もれ、大残雪の下から激流は滝の如く本流に向つて落下している」—大正１５年６月—とある事から、私は漠然と沢通しに下から雪の上を行けるかも知れないと想像していたが、今春私達の新越沢の事から考えると恐らく下半分は沢通し通過不能であろうと思う。然しながら、内蔵助沢には滝がなく、唯急傾斜の河の流れである事から考えると、丁度滝のない雲切谷が下からずつと埋もれて雪の上の登降が出来たという今春（５４年）の関学の報告（３７年３月にも登行可能と偵察された）の如く、内蔵助沢も‥‥案外行けるのかも知れない。何はとまれ夏道は十分研究しておく必要があろう。

◎内蔵助平について

此処の雪崩については、唯、真砂岳尾根及び内蔵助谷からのが平の中程にも達せぬ程度のが見られる位で梯子段乗越側も大ダテガビン側も問題にならない様だ。まばらな疎林こそは、如何にも雪の山奥の平和郷に、親しみ深い魅力を点じている。其処に於てさえ、かつて昔立教大の内蔵助平生活では〃丸山北峯より２５０米突北下した所〃にベースを設けられた慎重さに今更ながら尊敬の念を感ずる。

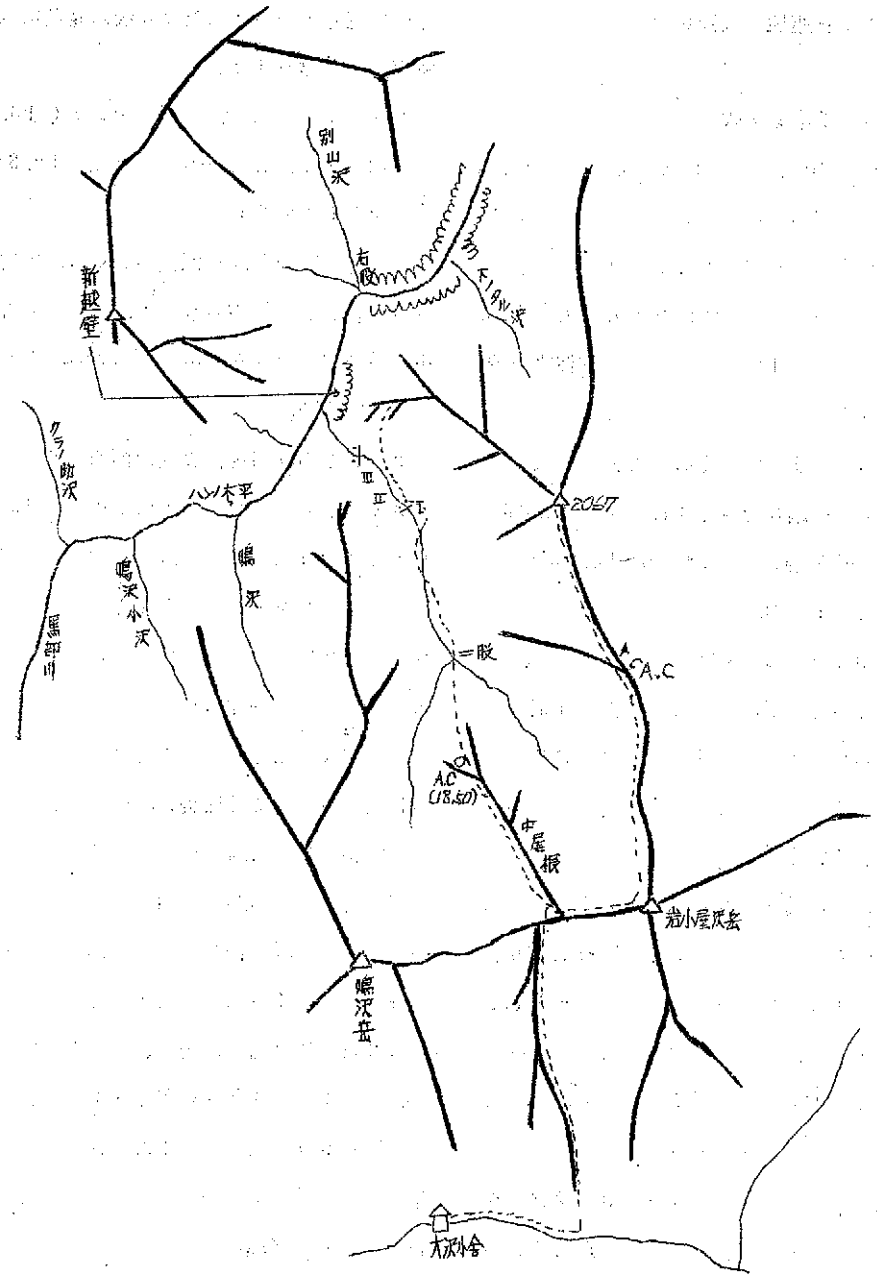
◎其の他

望見した所、鳴沢岳から黒部に出ている尾根は、黒部直前迄十分下降出来る物である。又鳴沢は、滝連続で有名な鳴沢小沢と異り、その落口附近の黒部に面する岩壁も他よりくなつているそうである。案外こういう所に、ルートがあるのではないかしらと以前考えていたのであつたが、実は２年前に、鳴沢落口の右岸で黒部か後立山側に上り、１６００米高度附近をトラバースして東谷落口に到る道が作られたという事を、最近而もこの春山後に知り、全く驚いた次第であつた。夏道が出来る程度であれば、可成り容易に下れるだろうから、その場所さえ調べればたやすく鳴沢岳から黒部に到するであろう。私の不勉強な為、春山をもつと有意義にあらしめ得なかつた事を後悔する気持で一杯である。

最後に夏の下廊下さえ知らない私が、春のそれの一部を見たので、厚顔にも種々の考察となした訳で、だから単なる参考といえるものでしかない事を特に強調したい。

◇参考文献

冠　松次郎著　「黒　部」
立教大山岳部　部報　３号，４号


別山沢
右股
下ノ沢
新越屋
クラノ股沢
ハノ木平
Ⅲ
Ⅱ
Ⅰ
2067
鳴沢小沢
鳴沢
馬蹄川
二股
C.A.C
A.C
(18.50)
中屋根
荒小屋沢岳
鳴沢岳
大沢小舎

関西学生山岳連盟　報告6号

記　録

○A隊黒部偵察（失敗）

メンバー　川島、山本(光)、土屋、久保OB、田島OB

3月16日　大阪発（23.10）

17日（晴）松本（12.00）—大町（13.20）—大出（16.00）—黒部営林署小舎（18.30）

18日（晴）小舎—（8.30）—白沢出合（9.00）—扇沢出合（11.30〜12.30）—新越尾根末端デポ（14.00〜14.30）—大沢小舎（15.30）

所によつて積雪の多少はあつたが、白沢、扇沢で流れが雪の下になつていたのは好都合だつた。鳴沢出合附近は冬に大きなデブリが出てその上に雪が積つたらしく快適な広い斜面を形成している。

19日（高曇）小舎（9.00）—デポ（9.15〜9.45）—昼食（11.45〜12.30）—稜線（16.00）—岩小屋沢岳ピーク（16.30）—山本、久保OB大沢小舎に下る—テント（18.10）調子悪く新越尾根の登りに時間をくう。

岩小屋沢岳支脈は予想通り可成りのラッセルだ。上部では東方に雪庇なども発達しているが、巾も可成り広い。下ると間もなくカンバと針葉樹の交わる森林帯になるが、木は専ら西斜面に生え尾根筋はあいている。テントは一下りして、ここから尾根がしばらく傾斜をもつて続く所の一寸したコル状の地点に林を風上にして建設する。

20日（雪）川島、土屋、テント（10.30）—三角点より少し西方へ下つた点（12.30）—テント（13.30）

調子の悪い田島を残し偵察にいくも視界悪く果さず。しかし粉雪舞う〝もみ〟の木の林に兎が飛び出したりWonder land をさまよつている様。

21日（雪）停滞、食糧の窮迫を発見

22日（晴）テント（10.00）—昼食（12.30〜13.00）—稜線（13.30）—新越尾根ジャンクション（14.00）—龍川谷（16.00）—大沢小舎（17.30）

折角晴れたのに一寸した手違いによる食糧不足から撤収せねばならぬことは甚だ残念。しかし天気は飽迄よく且暖い、剣や立山のすばらしい姿、お伽の国の様な内蔵助平も手に取る様に見える。しかし別山沢には雪崩の音が絶えない。大沢小舎で久保OB、山本も連日の降雪に空しく下山したことを知る。

23日（晴）田島、土屋、小舎（12.00）—扇沢（12.30）—白沢（13.30）—寄沢（14.00）—大出（16.00）

午前中新越沢でスキーを楽しみ午後下る。結局何も出来ず至極残念。

24日（曇）川島　小舎（10.00）—大町（16.00）・

B隊春山合宿報告

メンバー　尾藤、宍戸、広橋、山本進、西川、三枝、岩永

3月27日　大阪出発

28日（曇後雨）　生吉都合悪く不参加となり、計画を縮少して本合宿の主目標を小規模な黒部偵察に変更する。

大町出発（12.00）大出（2.30）雨の中を上り、黒沢出合少し下手の河原の無人小舎に入つた。（15.30）

29日（雪）　小舎を8時半出発。籠川も扇沢出合を過ぎると風雪となり、先頭が大沢小舎に入つたのは4時なるも、最後尾は8時半だつた。風雪の中では、殊に好ましくないことであつた。本日宍戸単身で大町より我々に追付く。

30日（快晴）　広橋、西川を小舎に置いて他は新越尾根肩迄荷上げ。

31日（高曇）　偵察隊（尾藤、宍戸、山本）サポート（広橋、西川）ハウスキーパー（三枝、岩永）大沢小舎9時半出発、岩小屋沢岳南肩ピーク（14時）でサポートは分れ、偵察隊は中尾根下降、高度約1850米位の所にA.Cを設けた。（16時）

4月1日（晴）

○偵察隊　9時半3名にてA.C出発、雪渓を下り途中の小滝で時間を要し、二股11時半に着く。新越沢下降3曲部に13時半到着。左岸のトラバースを試るが不能と断じ15時引き返す。A.C18時に帰る。

○大沢パーティ　広橋、西川、岩永、三枝

岩小舎沢岳に登る。

小舎発（8.50）新越乗越（12.50～13.10）—岩小屋沢岳（15.00～15.30）乗越（16.30）小屋（18.20）

2日（ガス後晴）

○偵察隊　休養

○大沢パーティ　休養、スキー練習

3日（晴）

○偵察隊　尾藤、宍戸の2名にて下降

A.C8時出発、二股8時半、3曲部滝上に9時半到着す。其処より雪渓を急登して岩小屋沢岳支脈末端に立つ。当尾根をドーム迄上下して黒部を偵察す。A.Cに午後5時帰幕す。

○大沢パーティ

小屋発（4.50）途中ワカンをアイゼンに変え、針木峠着（7.50～8.50）

小屋は尾根が出ており、入口が開いて中は天井迄雪が一杯つまつている。雪をかき出して4人入つた。小屋発（8.50）蓮華岳頂上（10.30）—風強い為直ちに引返す。小屋帰着（11.40～13.00）三枝嬢1人残して3人で針ノ木岳に向う。アンザイレン、尾根はフワフワの粉雪が全然雪庇も作らずに鋭い刃状にあり、アイゼンは団子になり、ピッケルはきかず、慎重に一歩一歩と尾根の右手をとつて進んだ。意外に時間が掛り針ノ木頂上（15.20～15.40）帰途はトラバースして小屋（16.30）着。大沢小屋（18.10）

4日（晴）　A.C撤収。13時半出発。17時半大沢小屋に帰り久方振りに全員顔を合して、行つた山の話に夜おそく迄花を咲せる。

5日（高曇）　大沢合宿を終了して引上げた。大沢（9.30）黒沢（12.00）大出（14.00）大町（16.00）

大町迄歩かねばならなかつた。

春山合宿後記

偵察隊を反省して、滝のある事の分つていた新越沢下降は第一歩からして間違つて居り、岩小屋沢岳支脈で黒部に近付く所期の構想からは当然当尾根を下降すべきであつた事、又A.Cの位置及び高度が高きに過ぎあの様な場所、状態の所で黒部に到ろうとするならば、出来る限りA.Cを黒部に近付けねばならない事。又偵察行動の如何により移動し得るA.Cならしめる為に岩小屋沢岳支脈を下降すべきであつた事等が特に強く反省せられる。とも角A.Cを出来るだけ（黒部に到る所要時間からのみ考うべきではない）黒部に近付ける事は、必須の事と思う。

鳴沢右岸に黒部から上つてくる夏道の事を春山以後に正確に知つたという不勉強さは鳴沢岳からの尾根を下らなかつたという大きな失敗をして了つた。根本的な面に於ける怠惰には誠に面目ない次第である。

又大沢パーティに残つた春山初めての人達には、春山としてのトレーニング特に高所雪中天幕、雪洞生活を行えなかつた事は残念であるが、好天に恵まれて春山を可成歩き、味わえた事は幸運であつた。しかしこの好天の春山を以て、春山を認じて了わない様特に留意されん事を切に望んで止まない。

（時報6号）

1953年 冬山合宿

天狗のコルより槍往復

山本光二

昭和28年の春、数年来の夢であつた後立山縦走に成功した我々は、積雪期に於ける次の目標を何処にしようかという事に就いて少なからず迷つていた。唯皆が理解していたのは春の稜線上での行動がさしたる支障もなく行われ得る様になつた今、次は冬の国境稜線こそ会の進むべき当然の方向だということと、我々の後立山での諸々の成果は一度は他の場所で確かめられなければならないということであつた。極端に云えば、後立を除いた冬の稜線であれば何処でもよいといつた気持をもつている者さえいた。しかしながら我々の休暇は限られており、天候の悪い剣や、アプローチの長い北岳で長期間稜線で生活し得るとは思われなかつた。結局遠山川の軌道を利用できる南アルプスの南部と穂高とが対象として残り、種々議論が尽されたが、何れとも決しかねた。冬の目標が未決定の儘に、夏山合

宿は剣で行われたが、その頃から未だ見ぬ冬の穂高の国境稜線が次第に強い魅力をもつて仲間の間に意識され始め先輩の中にも、今こそ幾多の山岳団体の記録ある穂高で、阪大山岳会の実力を試す絶好の機会だと云われた人もあつて、秋山を前にして、冬山は穂高にすべく決定をみた。

ルートは最初西穂から北穂が考えられたが、西穂から奥穂を計画しているところが三校もある様子なので、天狗のコルから槍往復に決められた。但し天狗のコルは天幕を設置し得る場所が少いので、此処に他のパーティの天幕が2つ以上ある場合には、明神最南峯より北穂を第二計画とすることにし、その決定は専ら先発隊の偵察結果によることとした。

先に述べた如く、種々の学部より成る我々のパーティは時間的に非常な制限を受けており、我々の行動可能の期間は正月の前後に約2週間あるのみであつた。この様な状況の下にあつて、天狗のコルより槍往復という、かなりの長大な計画を実行するには、ある種のスピードを必要とした。それは、最先端キャンプを出発した刹那に、ポーラー・システムから完全なラッシュ・タクティックに移行し得る程大きな攻撃力をもつたアタック隊を、如何にして最もスピーディに北穂頂上まで前進せしめるかという課題との対決を意味した。このため我々は、一方でナイロンテントの購入や8ミリの細引の使用による装備の軽量化をはかると共に、他方、先発隊のデポと、サポート隊の活用によつて岳沢には何ら中継キャンプを設けず、天狗のコルまでの荷上げを全員1日13時間の行動という一種のラッシュにより一挙に解決せんとした。かくしてポーラーシステムでもなくラッシュ・タクティックばかりとも云えない、一種奇妙な計画は次第にその形をととのえて来た。

最後に問題となるのは、現役の中で穂高に経験のある者が極めて僅かしかいないことでアタック隊の川島、尾藤ですら北穂から槍の間は夏も通つたことがない程であり、一時は夏山を穂高にするべきだつたと後悔した位であつた。しかし他面、我々の大部分にとつて未知の場所、しかも冬の稜線ということは大きな魅力でもあつた。そしてそれだけに文献は一層の熱心さで輪読され、秋の三度にわたる偵察の後、大体ルートについての成算を得たときは実に嬉しく期待で胸がふくらんだ。

○メンバー

CⅢ隊

アタック　川島　勇（CL）　尾藤昭二（SL）

サポート　木村　裕

CⅡ隊

山本光二（L 記録）　土居　直

CⅠ隊

東雍（L）　宍戸　元（食糧）　李中　勝（装備）

サポート隊

住吉仙也、広橋茂、抱忠男、林伸一、山本進一郎

○ 行動概況

12月22日　先発隊山本(光)、土屋、木村、抱、大阪発

23日（曇時々雪）　先発隊中の湯泊

24日（晴）　帝国ホテル木村氏宅に入り装備の点検。釜トンネルの上からスキーをはいた。

25日（高曇）　先発隊はホテルで天狗のコルには現在、学習院パーティのみしか天幕を設けていないことを聞き、計画は第一案に決定、以後はボッカに専念することにし天狗沢出合より少し上穂高2200米附近に荷物をデポする。（デポⅠ）

本隊の川島、尾藤、住吉、東、宍戸、広橋杢中、林、山本(進)　大阪出発。

26日（風雪）　先発隊は前日と同じ場所まで荷上げ、本隊は沢渡泊。

27日（快晴）　先発隊は今こそ天狗のコルに達しようと思つたが、前日の降雪のため天狗沢のラッセルは胸までもあり、遂に午后4時あきらめて、天狗沢が左俣に分れてから少し登つた左側の尾根の末端附近にデポする。（デポⅡ）

本隊は帝国ホテルに入る。

28日（小雪）　土屋、木村をテントの整備と飯焚に残し、他は全員で天狗のコルに荷上げし、CⅠ設営後川島、住吉を残してホテルに下る。この日尾藤、東はラッセルのため一同より1時間早く午前5時先行したが、デポⅡ附近で学習院パーティが下山されるのに遭い、ラッセルは大いに助かつた。尚デポⅡに於けるちよつとした手違いのため、本来のCⅠ用テントをデポに残してしまつたので、CⅠには止むなくCⅢ用のナイロンテントを張つたが、このことは後に計画を実質的に1日遅らせるに至つた痛恨の失敗であつた。

29日（高曇）　川島、住吉はロバの耳までのザイル・フィックスを行い、他は林、抱を除き全員残余荷物の一切と共に再び天狗のコルに至り、4人用テント一張を増設して、午后4時CⅢ、CⅡ、CⅠの各隊はCⅠに入り、住吉、広橋、山本(進)は夕闇迫る天狗沢を下つて行つた。

30日（風雪）　停滞

31日（風雪）　停滞　午后5時気温零下28度

昭和29年1月1日（快晴）　凄い風の音にだまされて天候判断を誤り出発が遅れる。8時半、川島、山本は先行し午后3時奥穂小屋までのフィックスを完了する。尾藤、宍戸、杢中はテントの張替及荷物の整理を行い、東、土屋、木村は奥穂頂上のCⅡ建設予定地にボッカしたが、ボッカ隊がスコップを上げるのを忘れたため、CⅡ用のブロックを予め切つておくことができなくなつた。第2の失敗であり後にCⅡがつぶされる原因はこの辺にもひそんでいた。この日は一日中、春と間違う様な実にのどかな快晴であつた。

2日（晴後風雪）　7時朝食中に東が右腹の痛みを訴える。盲腸炎らしいのでペニシリンを注射し、クロロマイセチンを服用させ、宍戸、李中をつけて下山せしめる。ところが全く幸運なことに、このとき太田敬代と共に徳永、大島両先輩が天狗沢を登つて来られ、外科医たる徳永先輩が天狗沢の途中で直ちに東を診察された結果、東は正しく盲腸炎であることが判明した。一同少なからずがつかりしたが、東のことはOBで引受けようという大島先輩の確言を有難く聞き安心して10時半出発する。奥穂に着き（12時）尾藤、木村はアイツクスのため涸沢槍の下りまで行き（午后3時）残る3人でCⅡを建設する。CⅡ設営場所は始め奥穂頂上の前穂側の予定であつたが、岳川側よりの風が強い上に雪量が少くブロックが切れないので、テントが老朽していることも考えて奥穂小屋側へ少し下つた処、登高9号にある慶応の方がかつて高所露営研究のためにテントを張られたという位置に変更した。吹雪が烈しくテント設営はかなり困難であつたが、午后5時には完成し、アイツクスに行つた2人も帰り漸く落着くことができた。

尚、東とこれに同行した徳永先輩及び宍戸、李中はホテルに泊り、太田氏と大島先輩は奥穂まで我々と同行された後、涸沢へ下られた。

3日（快晴）　CⅡ設営位置が悪く起きて見ると奥の3人は動けない程埋められていた。堀出しや荷物の整理に手間どり10時出発する。CⅢへのポツカは1人約4貫、午后3時半北穂頂上に着く。山本、土屋は直ちに引返し、6時CⅡに帰着、CⅢは北穂頂上に快的に設営された。遂に攻撃態勢はととのつた訳である。

一方、東には徳永先輩が同行して沢渡へ下り、大島先輩、宍戸、李中は中の湯附近までこれに同行し上高地に泊る。

4日（風雪）　CⅢ、CⅡは停滞。宍戸、李中は大島先輩及び太田氏と共に天狗沢を登り、2日朝以来たたんであつたCⅠを再建設して太田、大島両氏と別れてこれに入る。

この頃よりCⅡの生活条件は次第に悪化しつつあつた。設営場所が吹き溜りの底にあるためいくら除雪しても四方からさらさらと際限なく雪が滑り落ちてき、30分足らずでもと通りになつた。おまけにCⅢ建設後持ち帰つてCⅡに置くはずの大シャベルをCⅡで日没に迫られたためキャンプ完成前に帰途についたので持つて帰れず、十能の様な小シャベルでは除雪の能率はてんで問題にはならなかつた。さらにもつと悪いことにはラヂウスが3日朝以来調子悪く、よく見るとハンダが破れ其処からガソリンが吹き出していた。

5日（晴後風雪）　CⅢ隊川島・尾藤は槍アタツクに成功した。CⅢには食糧が4日分しかなかつた。従つて3日目にアタツクを

することはその次の日には是が非でも撤収しなければならないことになり、斯様な冒険は許されないから、2日目のこの日晴天にめぐまれたのは全く幸運であつた。

CⅢ（6.20）—南岳（11.00）—肩の小屋（12.40）—大槍登頂（2.00）—南岳（5.00）—横尾本谷北壁直下（7.00）

（以下アタック隊川島の手記による）

「尾藤も私も北穂から槍迄の稜線を一度も歩いたことがなかつたので明るくなるまで待つてCⅢを出発した。キレットへの下りは昨日の新雪がふわりと乗つていてコンデションはよくなかつた。北穂小屋すぐ下のルンゼで突然板状雪崩が発生し私の足許からかなり大きな雪板が音もなく滑り落ちて行つた。少し下つてからアンザイレン、信州側を絡み乍ら下降を続けた。北壁はどこにあるのだろうか。我々は文献によつて北壁中のルンゼを下りれば横尾本谷に出られることを知つていた。どれがそのルンゼだろうか。突然絶壁の上に出た。眼下には広いカールが見え、対岸には南岳が聳えていた。そしてその遥か向うには、我々が望んで止まない大槍が穂先を覗かせていた。

目的のルンゼは一目で分つた。針金を伝い、岩峯を巻いてルンゼ詰のコルに出ようとしたとき、尾藤が軽い叫び声を上げた。ピッケルのシャフトが折れたのである。この儘アタックを続行すべきか、引返すべきかに暫迷つた。引返せばもはや再びアタックするだけの余力は我々にはなかつた。

「行こう」

彼の決然たる声で、我々は又前進を始めた。ルンゼを真一文字に駆け下り、カールの底でザイルを解く。昨日の新雪で膝を没するラッセルである。ワカンはCⅠから先へは全然上げてなかつた。それで南岳から一つ手前のピークへのリッヂを直登し、ここから稜線を辿つた。南岳の登りも恐ろしく悪い処である。南岳からは広い稜線を中岳、大喰岳と処々ラッセルし乍らも快適に突走り昼過ぎ槍岳の肩の小屋に着いた。大槍登頂は午后2時であつた。

少し前から天候は悪化し始めていたので大急ぎで帰途についたが、大喰岳にかかる頃から風雪になつた。中岳の下りでは下り口が分らず少し迷つた。南岳手前のピーク辺りより風雪は烈しくなり、ルートを失うことが屢々で、全く磁石とカンだけが頼りであつた。漸く南岳肩のコルに着いたときは既に夕闇が迫つていた。ルンゼを真一文字に下つてカールの底に出た。腰迄のラッセルである。日は全く暮れ風雪は一向に衰えない。岩蔭で小憩の後電灯を頼りにCⅢ迄強行しようと北壁のルンゼに向つたが、往きにはなかつた岩場にぶつかり前進困難となつた。あきらめて少し引返し、岩を背にツエルトを被つてビバークする。小型のプリムスがあつたので、まずまず快的なビバークであつた。（手記中断）

アタツク隊が苦斗を続けているとき、C2では、はるかに陰気な生活が始まつていた。吹き溜りの底に埋もれて昼でもローソクをともさねばならない程暗いのは前日と変らないが、ラヂウスの調子はいよいよ悪くなり、使用中はまるでピストンの如くポンプを押さねばならず、ケロシンの不完全燃焼による悪臭はテントに充満した。カバーのない土屋のシユラフはバリバリ凍り、腹の冷えた彼は腹痛を訴え出した。無理もない。C2ではこの日から湯も飲めないようになつていた。昼過ぎC1の宍戸、李中が連絡に来たが、C2には彼等の渇をいやすだけの水すらなかつた。

6日（風雪後晴）　アタツク隊C3に帰着する（アタツク隊川島の手記続き）「完全に明るくなるのを待つて8時ツエルトから外に出る。未だ雪は止まないが地形の判断は出来た。我々は北壁の直下、左寄りにビバークしていた。昨夜の岩場は北壁左端の岩稜だつたわけである。腹迄のラツセルに苦しめつつ往路のルンゼを登る。稜線に出た途端に物凄い風雪に迎えられた。漸くの思いでC3に帰りついたときには、2人共指先を軽い凍傷にやられていた。（11時）（手記終り）

C2では夜が明けると、薄明りの中に殆んど身動きも出来ないでいるお互いの姿を見出した。ローソクをつけ、カチカチのフランスパンをかじりながら相談する。昨日の晴天にアタツクが行われたことは間違いない。その成否はとにかく、C3の残余食糧より考えて次の晴天には撤収が行われるのは確実である。だからなんとかこのテントであと2日程生活し得ないだろうかと思いめぐらした。ラヂウスは殆んど使用不能になつている。その上ラヂウスの故障のため意外に多くのローソク、マツチを費したので、ローソクは1本、マツチは15本足らずになつていることを知つた。ここに至り、漸く奥穂小屋への避難を真剣に考え始めた。今C2を抛棄することは、ポーラーシステムの完全な破綻を意味する。しかしそれは安全性の限界を超えて行動する理由になるだろうか。2時間近くも考えたが、遂にC2抛棄を決定し、シユラフ、食糧等の必要品を持つて物凄い風雪の中を奥穂小屋に入つた。

C1隊、停滞。

7日（風雪）

C2，C1隊共に停滞。C3隊は我々の計画はぎりぎりのものでC3には食糧の余裕が余すところ1日分しかないことを考え、昼頃薄日が差してきたのに力を得て、独力でC3の撤収を行つた。（13時半出発）気温低く何もかもバリバリに凍つていて、かなりの重荷であつた。涸沢槍にかかる頃より予想に反して再び風雪は烈しくなり、涸沢岳の登りではフイツクスが深く雪に埋まり、ピツケルで掘り出すのに半時間もか

かつた。顔面は吹きつける雪に凍りつき、思考力も凍結したかの様に、前へ進むことだけ頭にあつた。最后のフイクス2本は抛棄し、漸く涸沢岳に立つことができた。ここで電灯を出し、何度もルートを誤りつつ辛うじて穂高小屋に辿り着いた。（午後6時半） そして、其処で彼らは始めてC2の破綻を知つたのである。それでも人数が5人に増すと少し陽気になつた。木村だけは、指先をかなり強い凍傷にやられ「痛い痛い」と云いながら、指を湯につけていた。

8日（快晴） 快晴だが風が強く気温も低い。C3隊員はCⅢ撤収を今日にすべきだつたと後悔したが、昨日のアルバイトのおかげで、今日は一部上高地まで撤収しようということにする。10時、川島、山本は前日残して来た涸沢岳のフイックスを取りに行く。その間に残る3名は折から登つて来たC1隊の2名と共に雪に埋もれたC2を撤収し、午後1時半C1に向つて出発した。皆荷が重いので、悪場ではかなり緊張させられた。川島、山本は最後尾からフイックスを撤収しながら来たので知らなかつたが、ジャン・ダルムのトラバースで土屋が頭に落石を受け危く滑落しそうになるという全くぞつとするような場面もあつた。フイックスが細引3米程とピトン1本を残して、他は完全に撤収されたのは4時半、その頃先頭はすでにC1に着いたが、C1撤収に時間が遅すぎるので、土屋、宍戸、木村は、上高地に下り、他はC1に泊つた。一同やれやれといつた気持だつた。

9日（曇） 天気は悪いが、いやに暖い。荷物を大きく4つに分け、各人がそれを引きずつたり転がしたりしながら天狗沢を下る。岳沢には上高地から3人が迎えに来ていた。

10日（雨） 装備の乾燥がすんだのは昼。春山の計画に必要なため全装備を7人が背負うと1人宛12貫程にもなつた。午後2時雨の中を上高地を出発、坂巻までと思つたが、中の湯に来たときは真暗であつた。

中の湯に着くとすぐ湯に飛び込んだ。湯の中で歌をうたいながら今度の山行を回想した。今冬の計画は文字通りぎりぎりのもので、そのためか反省すると枚挙に遑のない程失敗があつた。たしかに厳しさという点では過去に阪大山岳部が行つた如何なる計画も及ばない程のものだろう。それだけに不完全な面もあつたが、これをとにかくやり終らせたのだ。全く嬉しいことだつた。こうして湯に入つている今でさえ、問題は山積している。第1明日は1人当り12貫の荷を沢渡まで下ろさなければならないし、卒業試験は迫つている。先輕は勿論、そこら中に借金があるだがそれにも拘らず自分も含めて、皆によくやつたと拍手でもしてやりたい様なほのぼのとした気持が湯の香と共にお互の間にたちこめていた。－終－

ザイル・フイツクスに就いて

何度も述べた様に、今回はスピードある行動ということに特に力が注がれた。しかしこれとて安全性の限界を超えることのできないのは云うまでもない。そこでザイル・フイツクスは充分にし、しかもそれに要するザイルの重量により行動の敏活性を欠かしめないために8㎜のザイルを思い切つて用いた。唯強度の点より考え、トラバース以外の場所では12㎜のものを用いた。従つて全長300米を超えるフイツクスを行つたにもかかわらず、ザイルが重荷になつたり、つかまつているザイルの強度が気に懸るという様なことはなかつた。以下フイツクス個所を羅列する。

ジヤン・ダルムのトラヴアース（8㎜40米）

ロバの耳の下降（12㎜　40米）

ロバの耳のトラヴアース（8㎜　40米）

クラート・ツルムへの登り（8㎜　30米）

ロバの背（5㎜を2重にし20米）

奥穂から小屋への下降（8㎜　40米）

涸沢岳の下降（8㎜　40米　12㎜　30米）

涸沢槍の下降（12㎜　40米）

北穂南峯の下降（5㎜　20米）

尚、比較的安全度の高いところでは補助的に5㎜のものを、傾斜の緩い上下にはトラヴアースでなくても8㎜のものを使用したことを附言する。

あとがき

今回の計画は大きく三段階に分けることが出来る。第一段階は天狗のコルにC1を建設するまで、次は攻撃態勢完了まで、最後の段階はアタツクと撤収である。第一段階は先発隊の行動が予定より手間どつた他は、一応支障なく完了することが出来た。ところが、第一段階から第二段階に移ろうとしたとき、C1隊のリーダーたる東が、盲腸炎を起し、第二段階の展開に必要な2名の隊員がその対策のため計画から除外され、計画自体大きな障害に行き当つた様に思つた。ところが幸運にも先强、しかも外科医を含めたメンバーが登つてこられ、2名を除いた5名の隊員は全く後顧のうれいなく、折からめぐまれた2日続きの晴天を利用して第二段の攻撃態勢完了に力を集中することが出来た。かくして第二段階は成つたが、その成功の中にはC2の建設位置が悪いという失敗の因子を含んでいた。そしてそれが、アタツク隊が横尾谷のカール・ボーデンでビヴアクしている頃頭をもたげ始めていた。続くC2の抛棄と、C3隊の天候を誤認しての撤収により、5名が奥穂小屋に入る事態に陥り、アタツクの成功を別としてポーター・システムとしては致命的な破綻を見た。しかし、続く快晴で事故なく撤収を完了出来たのは幸であつた。

斯様に幾多の欠陥を露呈しながらも、とにかく、槍往復に成功し得たのは、隊員各自の登攀能力もさることながら、OB達の幸運な出現と、正月に続く例年にない好天気によるところが非常に大きいと思われる。このこと

行　動　表

		上高地	天狗コル CⅠ	ジャン	奥ホ CⅡ	北本 CⅢ	槍
12月 25日	高曇	4 ↔ デポⅠ					
26日	風雪	↔ デポⅠ					
27日	晴	↔ デポⅡ					本隊上高地入り
28日	小雪	7 ↔ ·2	2 ↔				ジャン迄 ガイルフイツクス
29日	高曇	6 → 3 ↔ ·2	↔ 2 ロバの耳				CⅠ建 全員全部CⅠに集結
30日	風雪	停	·8				
31日	〃	〃	·8				
1月 1日	晴		2 ↔ 3 ↔ ·3		奥ホ小舎		奥ホ小舎迄 ザイルフイツクス
2日	晴後 風雪	1名盲腸炎ニテ3名上高地ニ下ル ←	3 →		2 ↔ 涸沢ヤリ		涸沢ヤリ下り迄 ザイルフイツクス CⅡ建 3名入る
3日	晴				3 → 2 ↔		CⅢ建 3名入る
4日	風雪	2 → ↔ OB他1名			·2停	·3停 横尾谷カールボーデン	CⅠ再建
5日	晴後 風雪		2 ↔ 連絡		·2停	·1 ↔ 2	アタツク隊 ビヴアーク
6日	風雪 後晴		·2	2 →	奥ホ小舎	← 2 ·1	アタツク成功 CⅡテント拋棄
7日	風雪		·2		← 3 ·2		CⅢ撤収
8日	快晴	2 ↔	2 ↔ 1 1		涸沢ヤリ		CⅡ撤収 2名涸沢岳 ザイル撤収
9日	曇	·4 ← 3 ↔					CⅠ撤収

は我々の培い来つた強い神経は応々にして粗雑な神経と誤解され勝ちであり、弱い神経を厭うことは、精緻な精神まで失わしめるのを示している様に考えられる。この点こそは会の今後にとつて大いに反省すべきことであり、次の機会こそは、我々の持つている強い神経に悔なき山行を求める精緻な精神を加え、より一層力強い欠点のない登山を行いたいものである。

（時報6号）

1954年夏山合宿

―南　股　合　宿―

宍戸　元

後立を知り尽した先輩も殆んど卒業してしまつた。現役の間に一度は後立の合宿生活をするのも有益なことと考え南股合宿を計画した。なお南股に関して詳しくは時報3号「南股概説（大島輝夫氏記）」を参照されたい。

宍戸（CL）　木村　広橋（会）　三枝
李中　鷲沢（装）　山本（食）　石沢
辻川　高木　岡田　村瀬　四方　寺田
佐谷　大村（OB）　細見（OB途中より）

7月20日　晴

細野、丸山与兵衛氏宅で食糧、その他の準備ののち、黒菱まで上る。

7月21日　晴

唐松、旧発電所中継小屋跡に幕営、宍戸、木村、広橋dルンゼまで南股への下降路偵察に行く。

7月22日　晴

木村、李中、鷲沢、山本、関本を先発させIII峯間ルンゼの偵察・兼ボッカ。他は唐松黒部側カールでグリセード練習の後、同ルンゼより全員、唐松沢・不帰沢出合のBCに入る。

7月23日　晴

III峯偵察、木村、山本。
II峯偵察　李中、鷲沢。
南滝より南股取入口方面、大村OB、関本
不帰キレットのデポよりボッカ、宍戸他。

7月24日　晴

III峯Cアタック（初登攀）　木村、広橋。
II峯東南稜阪大ルート。李中、鷲沢。
唐松直接尾根　宍戸、西川。
aルンゼ　関本、山本。
I II峯間ルンゼより白馬鑓往復。大村OB
村瀬、四方、佐谷、岡田、寺田、三枝。

7月25日　晴

II峯東南稜阪大ルート　広橋、山本。
II峯ルンゼ1　鷲沢、関本。
南滝方面　木村、李中、四方
dルンゼ　宍戸、岡田、寺田
eルンゼ　大村、村瀬、佐谷
aルンゼ　西川、石沢、高木
細見OB、単身白馬よりaルンゼ経由BC入り。

7月26日　ガス

南滝方面　木村、辻川、細見ＯＢ

不帰沢　　西川、三枝

その他停滞。

7月２７日　雨

停滞。

7月２８日　ガス後雨

ａルンゼ経由、唐松、八方尾根より細野へ下山、合宿解散。

（時報６号）

１９５４年 冬山合宿

鹿島槍東尾根

坪　井　圭之助

１９５５年春に懸案の黒部横断剣往復のポーラーをひかえて、この今迄にない大規模のポーラーの実施に対して、我々の冬山の経験は一部上級部員に限られていた。特にこの春山には大人数の完全なボッカが成功の条件であつたし、又このボッカに下級部員を使用するとすると、当然ここに強力な中監が必要になつて来た。このため特に荷上、高所露営に重点を置いたトレーニングを目的とした冬山が計画されるに到つた。

計　画

春山に主眼が置かれていたため冬山は直前まで未決定できまつたのは１２月に入つてからであつた。今回の山行の目的から云つて大規模のバリエーションは考えられず、どの尾根を対象とするかで種々議論された。後立東面各尾根と八ケ岳と考えられたが、結局所要日数、アプローチ、尾根のレベル、キャンプが２３箇所設営し得る等の点と、更に白馬主稜に始まつた一連の後立に於ける我々の登攀の最后に残された尾根として鹿島東尾根が決定された。しかしながら尾根が決められた後になつて問題となつたのは、一体どこへ登頂するかということであつた。実さい東尾根そのもの即鹿島槍往復はこの方式では満足出来ないし、さりとて爺は遠く且低い。五龍はキレットと距離の点で考えざるを得なかつたが結局問題となる第３キャムプの位置が北槍頂上ならば五龍往復も可能と考え之を主とし、Ｃ３の如何により南槍又はキレットの往復に終るも止むなしと結論した。けだし第１，第２両岩峯の通過が文献に於いても荷上の形では全く未知であつたからである。

従来この尾根はラッシュの対象とされていたけれども、我々は之を国境稜線への足場と考えたわけで、従つて雪崩をさけるためにも完全に末端よりトレースし第１，第２岩峯も直登することにしたのである。

具体的には１１月下旬の偵察により、ＢＨを冷沢―大川沢出合（１０８０）とし、Ｃ１を１８００米附近、Ｃ２を第１岩峯直下（２３７０）、Ｃ３を荒沢頭（２７１０）より北槍間（２８３０）に設置することにし、第１，

第2岩峯はボッカのためザイル固定を行うことにした。パーティ編成は3名ずつ3隊に分け、アタック隊を先頭に後続隊は1キャムプずつ後れて前進、アタックはC3（3名）、C2（6名）、同時に出発、各々五龍、南槍往復することにした。キャムプは全部テントによることにし、ナイロン1，2号大高テントを用いた。

計画日数については、稜線におけるアタックは4日の内1日は晴があると判断し、4日計上、東尾根上部に於ける行動日は2日の内1日は必ず行動しうると考え正味全日数8日に対し最大14日とした。

大要以上の如く計画し、1. キャムプ運営の迅速化　2. 食糧パッキング、荷上の合理化を主眼として実施した。

参考文献としては関西学聯、神大、法政、立教、鵬翔、岳人の報告を参考にした。

尚東尾根上部の地形については陸地測量部のもの又各文献の地図共全く相互関係高さ等はデタラメであるため、写真、スケッチを参考にしてこれを判断した。

メンバー

坪井圭之助(L)、広橋茂（会計）、三枝礼子（記録）、木村裕一、李中勝、鷲沢忍、関本靖治（装備）、山本進一郎（食糧）、川島勇（OB）

行動記録

12月25日　晴

（先）大町—大川沢出合昭電小舎

先発隊　広橋、李中、大町着、午后鹿島入

本隊　大阪発

12月26日　晴後曇後小雪

本隊大町着バスで源汲へ、ばかに荷物が多いので源汲へ2往復、昭電小舎使用不能のため丸山小舎に入る。積雪2尺。

12月27日　雪

本隊　小舎（2.00）—デポ（4.20）—小舎（5.30）。木村、鷲沢（1.30着）。鹿島往復川島先發（8.30着）。

丸山小舎が満員で向いの飯場に午前中移動、午后偵察兼ボッカに1400米附近まで登る。登路は大冷沢昭電取入口の手前より右手の土堤を越え沢をつめる。登り切ると平坦な台地になり、ここより尾根に平行に高度を高め暫くして右折約1時間で尾根に出た。我々は大いにラッセルを予期したのであるけれども、4、5日前に京大脇坂君のパーティが通過した后で殆んどラッセルもなくトレース出来た。夜食糧計算の結果、砂糖不足の為、明朝三枝嬢に大町へ買出しに行つてもらうことにする。9時川島先發着、全員集結。

12月28日　晴

BH（8.00）—デポ点（10.00）—CI（2.00）。

C1建設に快晴の中を出発。デポ点より上は本格的ラッセルになつた。1800米、尾根が急に広くなつたあたり、森林中にCI設

営、1号と大高テントを入口を向合せに張る。之は全く都合がよい。連絡出来ると尚良いのだが。関本、広橋をBHに帰し残りは再びデポ往復、坪井、木村、山本、杢中、鷲沢、川島C1に入る。

12月29日　晴後雪

C1 6名、C1(8.00)—C2(2.00)

山本、鷲沢、川島　C2(2.30)—C1(5.30)。

BH 3名　BH(11.00)—C1(3.00)

朝やけで午后のくずれを予想させたが、一気にC2建設せんものと出発。一の沢頭の手前ヤセ尾根になつた所で始めて第1，第2岩峯なるものに見参、その圧倒的な高さと傾斜に一驚した。一の沢頭、二の沢頭間はほとんど雪庇は発達しておらず、木株にワカンを取られながらも快適に通過、途中のコブで京大パーティを抜く。二の沢頭附近より天候くずれ始めたためピッチを上げ荒沢尾根分岐点で昼食、ここより完全にトレースなく更に天候益々悪化猛吹雪になり始めたため、坪井、木村のみ荷物を持ち、残りはデポしラッセル隊を編成、目前の小岩壁を左にまき完全な雪のナイフリッヂを一丸となつて突破、第一岩峯直下C2予定地に坪井、木村がリッヂの曲角に斜面をけずつてナイロン2号設営、残りは再デポ往復。坪井、木村、杢中C2に入り残りは又吹きすさぶ風雪の中をC1へ下つた。一方BHより関本、広橋、三枝C1へ入る。

12月30日　風雪

C2 3名　停滞。

C1 6名　C1(10.00)—C2(4.30)

内関本、広橋、鷲沢　C2(4.40)—C1(7.30)

C2は風雪のため停滞、C1 6名は雪の中をC2へ移動を敢行し夕刻C2着。川島、三枝、山本、C2へ入り、関本、広橋、鷲沢、再びC1へ下る。

12月31日　曇後雪

今日は岩峯のザイル固定と決めのんびりかまえていたら早朝より、九大、京大パーティキャムプ前を通過、あわてて飛び出したが何しろせまい尾根の事で順番をまつ始末。旧帝大三校が一尾根に会すとは珍しい事だ。

東尾根のナイフリッヂが第1岩峯の南大斜面に直角に交わる点の東側5米位に荒沢へ落ちるルンゼを京大の荷物つり上げを左に見て木村が約60米ザイルをカンバの木に固定し、これを登り切つた后は第1岩峯頂上まで広大な雪の斜面を直登、雪がしまつて居らず非常に苦しむ。第1，第2の間のコルで九大隊に追いついたが、其の頃より天気くずれ始め雪がちらつき出した。ここより先は細い岩尾根が約40米ゆるやかに続き更に約30米の岩壁となつて第2岩峯を形している。下部の岩稜に40米固定し、更に上部は直登が不能のため、せまいテラスを左に6、7米移動、小さなガリーを越え、斜下につき出た一枚岩の上に出たが、益々激しくなる吹雪に思うにまかせず、30米固定して荷上げも短時間で通

過しうる見通しを得て荷物はコルに置きC2へ帰つた。C1関本、広橋、鷲沢C2着。これで全員C2に再び集結、明日は全員でC3建設に向うことにする。

1月1日　雪

C2(8.30)—第2岩峯(11.30)—北槍頂上C3(12.45)。サポート隊C3(1.30)—C2(4.00)

昨日の見通しもあり天気はよくなかつたけれども、とにかく第2岩峯を越すことにして出発。第1岩峯は何なく越せたが第2は意外に手間取り、後はただ登るほど強くなる吹雪の中を先頭のラツセルに従う。全くどの辺に居るかさつぱり分らない。一段と急斜面を登り切つた所で見覚えある北槍頂上に出た。折から我々を祝福するかの様にガスの間から五龍と剣が顔を見せた。

風の中で大至急昼食をすませ、頂上のほぼ真中に新鋭ナイロン2号をはる。雪が固まらないため張線がはりにくい。設営后サポート隊は明日の成功を約してC2へとガスの中を姿を消した。

一方後に残つたC3隊はテント整備を李中にまかせ、坪井、木村、キレットへ偵察にすぐ出発、一度コルへ降り夏道通りトレース、キレットの入口は簡単に発見、針金を出してキレットへ、小舎まで行くつもりで北側の岩壁を登り始めたが又天気が悪化しそうなので上部のピトンに補助ザイルを固定、大急ぎでうす暗いキレットを抜け出し走る様にC3に帰つた。途中より猛烈な吹雪になり、北槍のすぐ下で2，3度迷つてようやくC3に飛込んだ。

所がテントの中とは云えこの後立の風にはナイロンテントも無力だつた。やはり防風壁を作るべきだつたか、ラヂウスをいくらつけても全然暖くならない。おまけにシラフがぬれているとあつては全くすばらしい元旦の夜だつた。

1月2日　風雪

C3，C2共停滞。

相変らずの吹雪。テントの黄色い布地はどうも具合が悪い。何時見ても外が明るく陽がさしている様に見えごまかされる事甚しい。

昼すぎシラフを乾かすためラヂウスを点火中過熱のため安全弁のハンダが融けて使用不能になつた。李中が頭をしぼつたがなおす方法がない。全く予期しない事ではあつたが万事キユーすである。1日や2日ならこのままで細々と行けるが只でさえも悪い条件で更にラジウスがないとなると之は考えざるを得なかつた。起つた事は小さかつたけれども、その影響は甚大であつた。全く心臓を止められた様なものだ。我々は計画を放棄して明日下りねばならない。C2より川島先発・三枝・山本下山。

1月3日　風雪

C3隊　C3(10.00)—C2(2.00)。C2停滞。

夜が明けても風雪は一向衰えてない様だ。

今日も恐らくＣ２からの連絡はないだろう。火がないので恐しく寒い。心残りながら意を決して撤収開始。何も見えない。テントの支柱が凍つて抜けないので、そのままリユツクの上にのせ全くトレースの消えた尾根を腰までもぐりながら下りる。第２岩峯を慎重に下り、ここより凍傷にかかりかけた本中を先行させ、Ｃ２隊を呼びにやる。残りでザイルを回収、雪崩の出そうな第１岩峯の南斜面をゆつくり下り、出て来たＣ２隊に下のザイルを頼みＣ２に入つた。夜は帰着祝で盛大にゴチソーし、久し振りのラジオのオトミさんに正月気分にひたる。あの寒々とした、すべてがぬれて凍つたＣ３に比べるとまるで天国の様に寒じられた。

１月４日　快晴後曇

Ｃ２（11.00）—ＢＨ（5.00）

夜半１２時すぎより吹き出した風は物凄かつた。短いインターバルを置き、一瞬地鳴の如き前奏と共に襲い来る風に対して我々は風前の灯そのものであつた。支柱は波の様にゆれ、布地は風船の如くふくらんだ。半時間位で先ずナイロン１号の支柱折れ、テントたおれ、続いて２号もペグが抜け倒された。恐らく瞬間風速３、４０米位はあつたであろうか。只、皆支柱をかかえて風の止むのを待つのみであつた。４時すぎ風おさまる。

夜が明ければ全くの快晴、今はもう二次アタツクの望全くなく、寝不足の眼をこすりながらのんびりと撤収準備、昼前Ｃ２発、往きのラツセルの固められたバーンは夜来の風のため反対に雪面より飛び出しアイゼンを快適に効かして存分に後立を眺めながら、途中Ｃ１のテント撤収、往きと異なり取入口の上手に出る小ルンゼを半分滑りながら下り、夕刻ＢＨに入つた。

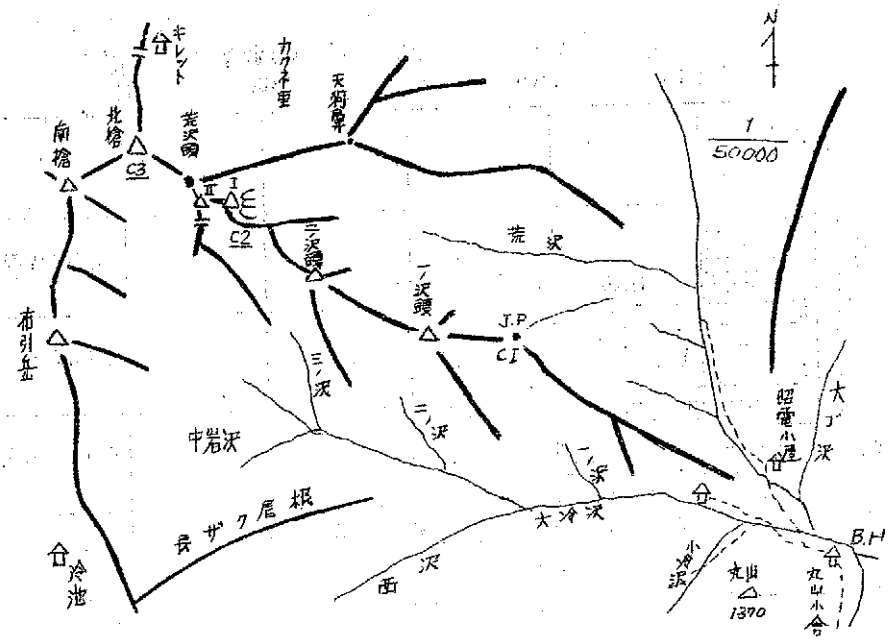
１月５日　雪

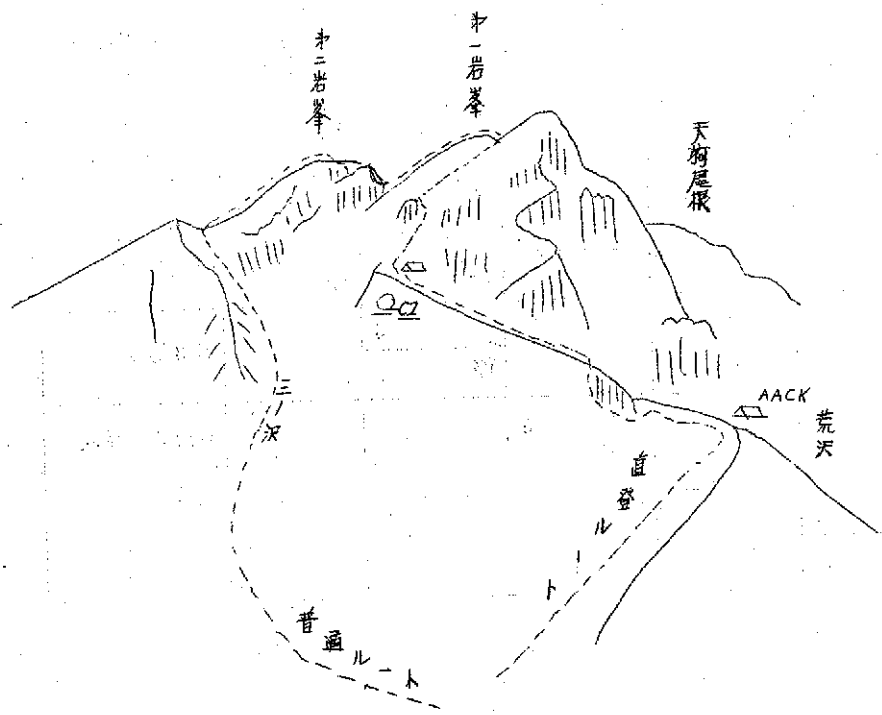
ＢＨ（8.00）—鹿島—大町。

小雪の中をスキーを引張つて鹿島へ、トラックで大町へ出た。

（時報７号）

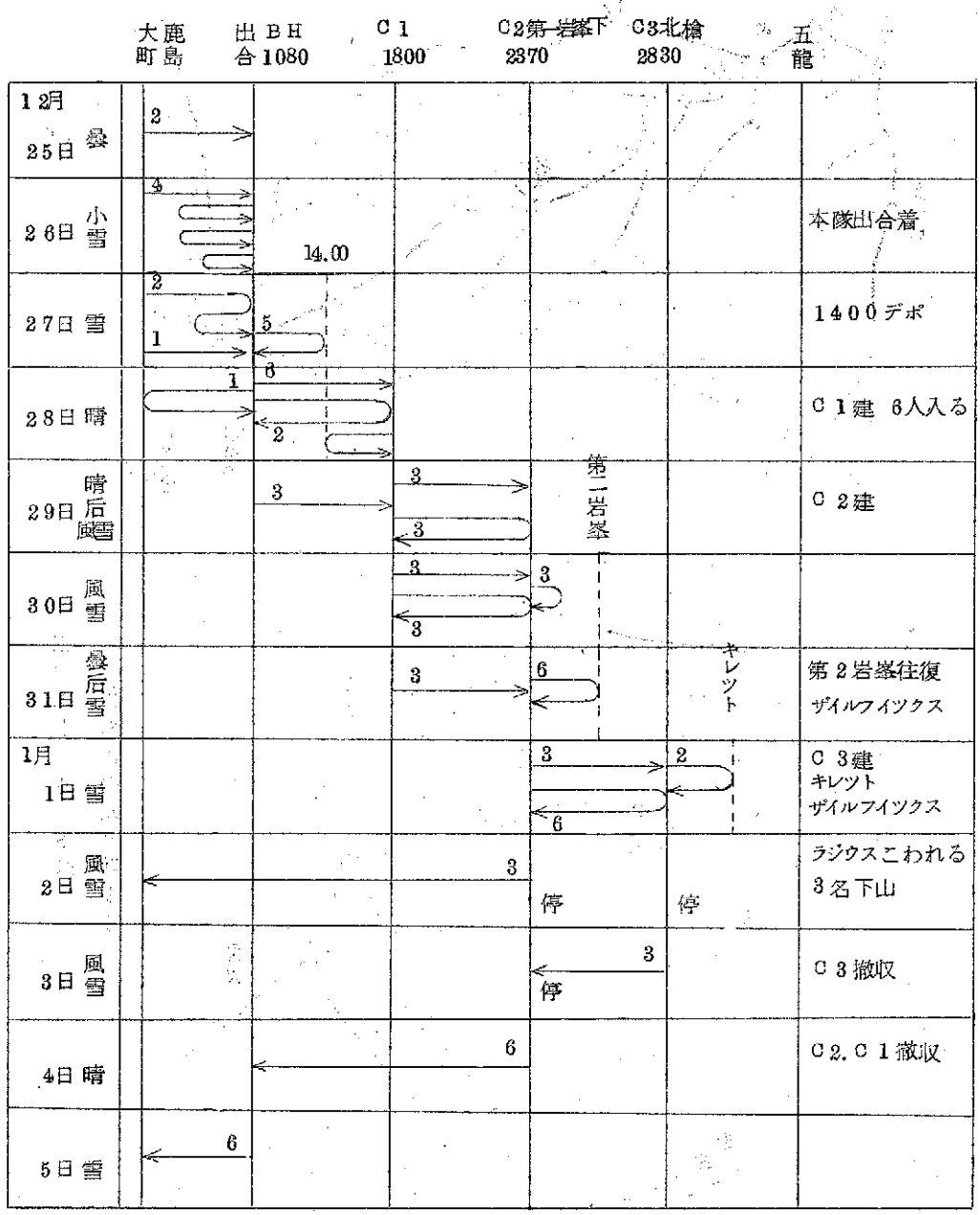
鹿島　東南東尾根概念図





三の沢上部ルート図
（二の沢の頭付近より）

東尾根　行動表


大町
鹿島
出合
BH 1080
C1 1800
C2第一岩峯下 2370
C3北槍 2830
五龍
12月 25日 曇
26日 小雪
14.00
本隊出合着
27日 雪
1400デポ
28日 晴
C1建 6人入る
29日 晴 后 風雪
第一岩峯
C2建
30日 風雪
31日 曇 后 雪
キレット
第2岩峯往復
ザイルフイツクス
1月 1日 雪
C3建
キレット
ザイルフイツクス
2日 風雪
停
ラジウスこわれる
3名下山
3日 風雪
C3撤収
4日 晴
C2.C1撤収
5日 雪

1955年 春山合宿

「鳴沢岳より黒部へ」

宍戸　元

まえがき

後立から春の黒部へという、我々の願望は年と共に高まつていつた。昨春冠松次郎氏の記録を頼りに、新越沢を下り、黒部を横断しようと考えたのは、今にして思えば、余りにも安易な計画であり、黒部の急流を樹間にわずかに望見するのみで敗退したのは、むしろ当然のことであつた。

そこで54年の我々の課題は

(1)後立山から黒部への最後への最良のルートであり

(2)横断地点並びにその方法

(3)横断後に通過する内蔵助沢の偵察である。

これらの解決のため夏1回（L尾藤OB）、秋2回（L宍戸、L坪井）の偵察隊を出し、その結果

(1)鳴沢尾根を使用する。

(2)鳴沢出合の吊越を使用する。もし不能なら樹を切つて橋をかける。

(3)横から出る雪崩さえ注意すれば、行動は夜間に限る。

という結論に達し、秋には全ルートのトレースを行い、吊越には補助ザイルをフィックスするなど、一応は問題は解決出来たものとしたが、ここに大きなミスが潜んでいたわけである。

春山に際しては、今年のメンバーから考えて、昨年の横断計画を剣往復に計画を拡張した。そこでBCと5つの前進キャンプを進めていくに当り、複雑化を避けるために、黒部までのサポート隊とそれより先のアタック隊に分け、サポート隊は横断地点にアドバンスBC（ABC）の建設に全力を傾け、その後はアタック隊（5名）独力でアタック撤収をすることとし、又、根拠地から長いポーラーを展開するために、速かに、且つ円滑にABC建設（40貫の荷上げ）を完了する必要がある。それ故

(1)可能な限りサポート隊の人員を増し、アタック隊は少数精鋭とする。

(2)従来必要性を痛感しながら、実行しえなかつた食糧の梱包を完全にし、ボッカを円滑にする。

ABC設置まで長期間耐えうるよう荷上げするが必要な場合はサポート隊を下山せしめC2からでもアタック隊独力で行動可能にする。

以上のような要旨によつて計画を樹てた。

計　画

○アタック隊

宍戸（CL）　木村裕一（SL会・食）　坪井圭之助　西川元夫（装）　尾藤昭二（OB）

○サポート隊

木村裕一(L)　西川元夫　三枝礼子　山本進

一郎　四方大中　岡田博司　寺田満洲郎
村瀬泰弘　和田　東雄（OB）

◇アタック隊の任務

ＡＢＣ建設

ⅠＡＢＣ—内蔵之助平（Ｃ４）

Ⅱ内蔵之助平—ハシゴ段乗越（Ｃ５）

（真沙沢までの偵察）

Ⅲアタック　（長次郎谷をつめて）

ⅣＣ５，Ｃ４撤収ＡＢＣに戻る。

ⅤＡＢＣ撤収Ｃ１に戻る。

ⅥＣ１撤収ＢＨに戻る。

◇サポート隊の任務

大沢小屋をＢＨとして、ＡＢＣを建設し、Ｃ１にアタック隊用帰途食糧をデポし、Ｃ２Ｃ１ＢＣを撤収する。

行動記録

3月１８日

実に繁雑極りない最後の梱包をすませ、サポート隊第１陣（西川、岡田、寺田、村瀬、和田、東ＯＢ）は午後大町発。初め予定していた黒沢小屋は営林署の人夫がはいつているので使用出来ず、寄沢の飯場小屋迄ポッカする。籠川林道は雪融けで大出からは車も橇も使用出来ぬ悪条件のため、予定通り荷上げ出来ず、全員寄沢泊。

3月１９日　雨

つめたい雨にずぶぬれになりながら泥沼と化した道を、大出寄沢間２往復のポッカ。実に長く感じられる道である。西川、東ＯＢは午後より扇沢出合少し下手まで偵察を兼ねて、ポッカしデポしてくる。黒沢から上は全く雪に蔽れていて歩きやすい。寄沢までのポッカ完了。

3月２０日　雨

豪雨をついて大沢小屋（BH）までの第１回ポッカ。木村、三枝、山本昨夕大阪発でサポート隊第１陣に合流する。

3月２１日　雨のち曇

３日目の雨は停滞、皆の顔がほころぶ。東ＯＢ、山本は連絡の手違いで木村などがポッカする筈の荷物が大町に取残されたため、取りに行くが、途中、大出で自動車で荷物を運んで来た宍戸と連絡がつき、３名で寄沢までポッカ。全員１１名寄沢小屋に合流なる。

3月２２日　晴のち曇

２日の遅れを取もどすべく、大馬力をかける。全員で大沢小屋までのポッカを完了するが、天候は少しも回復の徴がない。しかし後立山縦走以来３度訪れる大沢小屋になつかしさがわいてくる。小屋の中の雪も処理され、居心地のよくなつた小屋から、明るい話声が針の木谷に響き渡つていく。

3月２３日　小雪

雪が降つてはいるが明るく、視界もきき、小屋の前に出ると、岩小屋沢岳の稜線が望見出来る程である。行動か、停滞か、一番判断に迷ういやな天気である。兎に角登りうるところまでポッカをしておくに越したことはないと思い、予定通り出発する。ＢＣの位置は

1昨春の後立逆縦走の時の新越雪洞地点（時報5号参照）にする。緩傾斜で風雪によりすぐ雪洞の入口が埋没する危険性があり、それで1昨春もにがい経験をしたのだが、他にそれ以上の候補地がないので止むを得ない。ラッセルに時間を喰つてＢＣ到着が遅れたのでデポ用の小さな雪洞をほる。その間雪に風も加つて来たので木村、三枝、山本、村瀬、岡田、四方、寺田、和田、東ＯＢを下山させ、宍戸、西川は風雪の中かなりの苦心を払つてナイロン２号テントを張る。なおこの日坪井、尾藤ＯＢ大町より大沢小屋にはいる。

3月24日　快晴

久し振りに見る青空、ＢＣの2人は夢中でシャツターを切る。剱、立山、遠く日本海も見える。信州側は一面の雪海で、その上に針木、蓮華が浮き出ている。宍戸、西川は予定に従いＣ１までのトレース。鳴沢のトラバースは古い雪と新雪がなじんでいず緊張を要す。

木村、三枝、山本、四方、岡田、村瀬ＢＣにはいる。尾藤ＯＢ、東ＯＢ、坪井、寺田ＢＣ往復ＢＨに帰る。和田停滞。

3月25日　風雪のちガス

停滞、ただしＢＨの5名はＢＣに上る。これで全員ＢＣに揃う。

3月26日　晴時々ガス

風のつめたい日である。全員でＣ１までポッカ、宍戸、西川、山本はＣ２に進み、他はＢＣに帰る。サポート隊員とは大阪までさようならだ。

3月27日　快晴

Ｃ２の3人は真近に見える黒部別山、その下に白く光つて岩と岩との間を流れている黒部にテントを出るなり眼を奪われる。しかも今日はその待望の積雪期の黒部の河原に降り立つことの出来る日だ。鳴沢尾根の末端から鳴沢に降る傾斜は高度が下つたためか腐つた雪に悩まされ、それに加えて密生した樹林帯、このためしばしばルートの判断を誤らされる。偵察隊のつけた鉈目を発見してホッとする。午後0時鳴沢出合に着く、吊越は滑車が対岸の雪に埋つて簡単に動きそうでもない。何かしら心も重くＣ２に帰る。東ＯＢ、村瀬、岡田、四方、寺田はＢＣよりＣ１にはいる。尾藤ＯＢ、木村、坪井はＢＣよりＣ２、三枝、和田はＢＣより大町に下山する。

3月28日（Ｃ１‥風雪、Ｃ２‥雨）

停滞。

3月29日　快晴

山本が単身Ｃ１に引返し、Ｃ２には宍戸、木村、西川、坪井、尾藤ＯＢの5名だけとなつたためか、幾らかリーダーの重責も軽くなつたような気になつたのが間違いだつた。朝は早出を原則とする、山の戒律が破られ出発したのは9時を過ぎていた。もつとも昨日の朝でぬれた物を乾したり、今日明日の2回に分けてポッカする荷分けのために閉どつたのも事実だつたのだが…。尾根末端の特長のある馬の背様の岩（これを我々は馬の背と呼んでいるのだが）を越えて鳴沢側に向つて森林

帯の急斜面を下つて行く。左手にはべたつと雪のついた猫の耳が西洋のオトギの城廓の如くそびえている。一昨日のトレースは雨のため跡形なく消え去つて、雪のくされ方は更にひどくなつている。坪井、尾藤、木村、西川、宍戸の順に降る。坪井は1昨日の偵察隊にこそ加わつていないが、夏、秋の偵察に参加してこのルートを切り開いた熟達者でもあるし、オーダーは別に決めていなかつた。このような腐れ雪と草つきのため、皆は慎重に一歩一歩足場を作つて降つて行く。高度のバランスを要求する岩と氷のコンビネーションの稜高の稜線よりもかえつて神経を疲労させるということがつくづくよくわかる。トップの坪井は自己の技術を信用してか、ともすればピッチを上げ、後の4人との間を開ける。彼がとある小ルンゼのトラバースを始めると見るや、ざ—つという音と共に姿を消してしまつた。「坪井、坪井」と云う尾藤ＯＢのドラ声が樹々に響いた。「お—い」と下から元気な声が返つて来た。草つきの上に薄くかぶつた雪に足をとられて転倒、ピッケルで制動をかけながら１０米ばかりスリップ、更に幾く高さ10米位のオーバーハングの岩のため、体を中に投出されてその岩の下で止まつたらしい。4人は元気な声を確認してオーバーハングの岩を左にまいていやな草つきを下降し、奇蹟的に元気な姿を見てホッとする。しかし、彼れのポッカしていた大半の食糧（食パン30斤）とザイル2本はリック共そこから一直線をなして鳴沢大滝の上に落ちるルンゼを落ちていつてしまつた（以下棒沢と呼称）。しかもバウンドしながら落ちたためか、そのトレースすら判然としない。我々はとりあえず、周囲に残つていた眼鏡、帽子等を拾つて、兎に角一旦正規のルートである我々の末端尾根に戻り、鳴沢を下からつめてリックを捜すことに決め、0時鳴沢出合のＣ３予定地に到着することが出来た。しかし鳴沢大滝まで出合から予想外に遠いのと、Ｃ２に数百米登らなければならない負担を荷つた我々は充分な捜査も出来ず重い足をひきずつてＣ２に引き上げた。（略図参照）

3月３０日　晴のち曇

鳴沢大滝を登ることは非常に困難であることを昨日の捜査で悟り、昨夏からの偵察などで比較的この辺りの地理に明るい尾藤ＯＢ、宍戸、坪井が空身で棒沢を降れるところまで降つていくことにし、木村、西川はＣ１にデポしてある食パン３０斤をとりに行く。食糧は例え失つても当座の食糧に困窮をきたすこともなかつたが、篠田部長、新保先輩の心尽しのナイロン・ザイルは部として是が非でも発見しなければならない大切なものである。昨日のオーバーハングから下に、２つの滝がある。初めのはどうやら左岸をまいて降れるが、２番目の滝は２つに分れて、１は鳴沢大滝の下に、１つはその上に続き、どちらも到底降れそうもない。岳樺に登つて下を見ると大滝を音もなく幾条かの白糸のように水が流

れその先は真暗なシュルンドの中に消え去つている。我々のリツクもそのシュルンドの中に吸い込まれていつたのではないのだろうか、それらしきものは見当らない。

3月31日　雪のち晴

積雪が多いとリツクの発見も殆んど不可能になるのではないかと気をもませたが、ほんの数糎で止んでほつとする。予定通りC3を設け、じつくりと腰を据えて捜索に当ることにする。坪井はリツクがないためサブを使用した無理なバツキングのためか、又同じ場所でガソリン罐を（約3升）落す。これもリツクと同じ運命をたどつた。燃料はもはや数日の滞在しか我々に許してくれない。

4月1日　雨

燃料を考えると1刻もじつとしていられないが、雪崩を警戒して停滞。

4月2日　曇りのち晴

今朝までの間に新たなデブリが出た。ここと思われる所をシャベルで掘り返して見たが、小さなデブリとは云え、5人の人力と1個のシャベルではとても及ぶものではない。捜索を打切ることにする。一方、黒部の渡河工作も見切りをつけ、撤収に5人の意見が一致する。

4月3日　晴のち曇

C1まで撤収

4月4日　風雪

気温いちじるしく下るが、燃料が豊富でない今では充分な保温も出来ない。

4月5日　快晴、風強くつめたし

我々の遂に到達し得なかつた剣に雪煙が舞い上つている。BHに戻る。

4月6日　快晴

黒沢の営林署の小屋も間近かになると黒い土が、今まで周囲に雪の壁をはり巡らしたような黒部生活、水の音と、雪崩の恐怖と、共すれば我々を圧し去ろうとする、苛酷な大自然の中から抜けだして、単調で長い鹿川林道を歩いている。只の同じ大自然がここでは黒い土を現し、小鳥の声と温い空気で微笑みかけている。もう大出のバスの停留所も間近かだ。

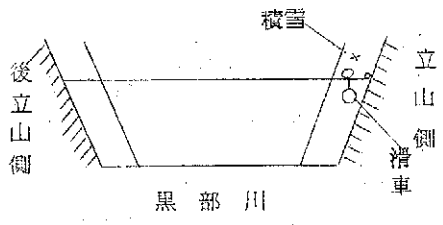
あとがき

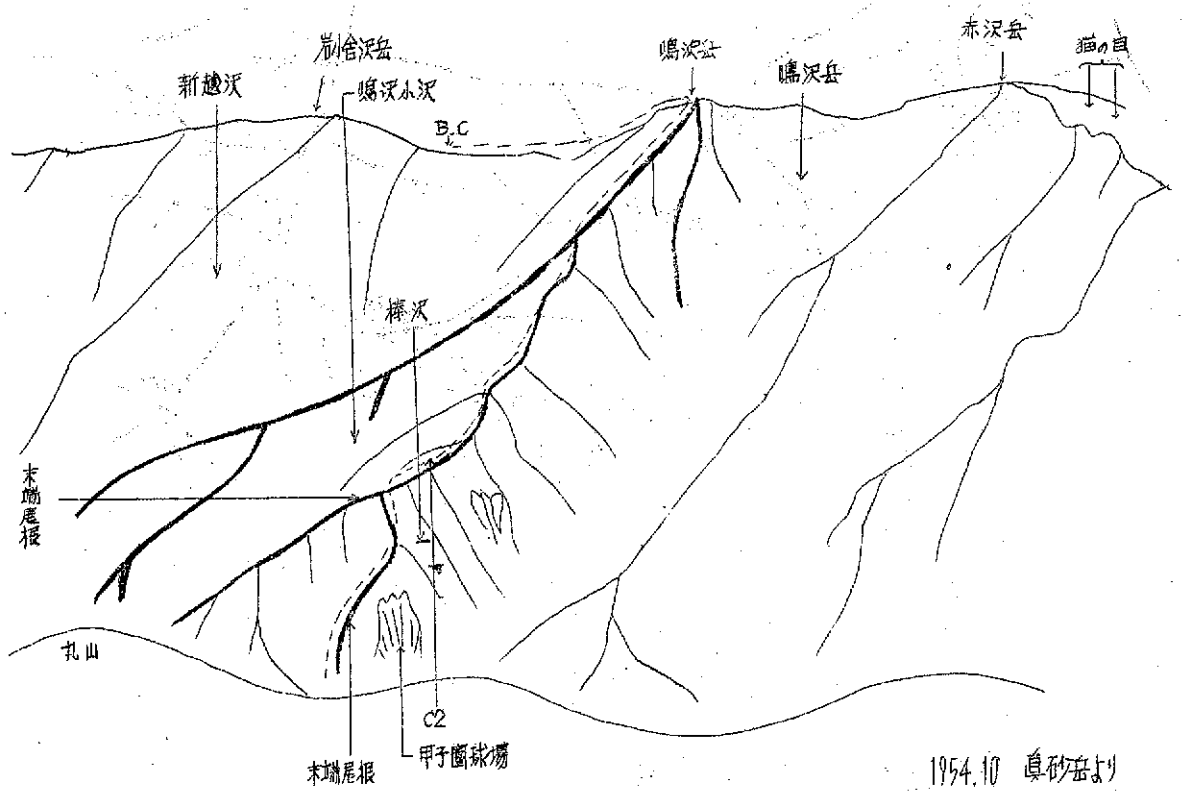
春山に於ける失敗の原因としては、

1. 黒部横断点に於ける認識の不足である。我々は鳴沢出合の吊越を唯一のものとして信頼し、他の横断の対策を講じなかつたのが大きな原因であつた。現実には吊越は予想外に多い雪のため（下図参照）使用不能だつた。立木を伐採して架橋するような事は黒部のスケールの前にはもろくもついえ去つた。又、吊越も滑車がなければ絶対に渡れないことも今後のためにも強調しておきたい。黒部を（鳴沢出合で）横断するには吊越が必要な条件であろう。第2には、リツク（食パン30斤、ザイル2本）とガソリン罐を1人の隊員のスリツプによつて失つた点である。せめてザイルを2人で分担してボツカしていれば、

事故後の捜索に於て効果をあげ得た。しかし食糧に関しては、各学部の都合でサポート隊とアタック隊に分けた変則的なポーラー形式を取らざるを得なかつたためと、我々が始めて経験する長いポーラーのために、あらゆる場合を想定し綿密な計画を樹てたので事なきを得た。

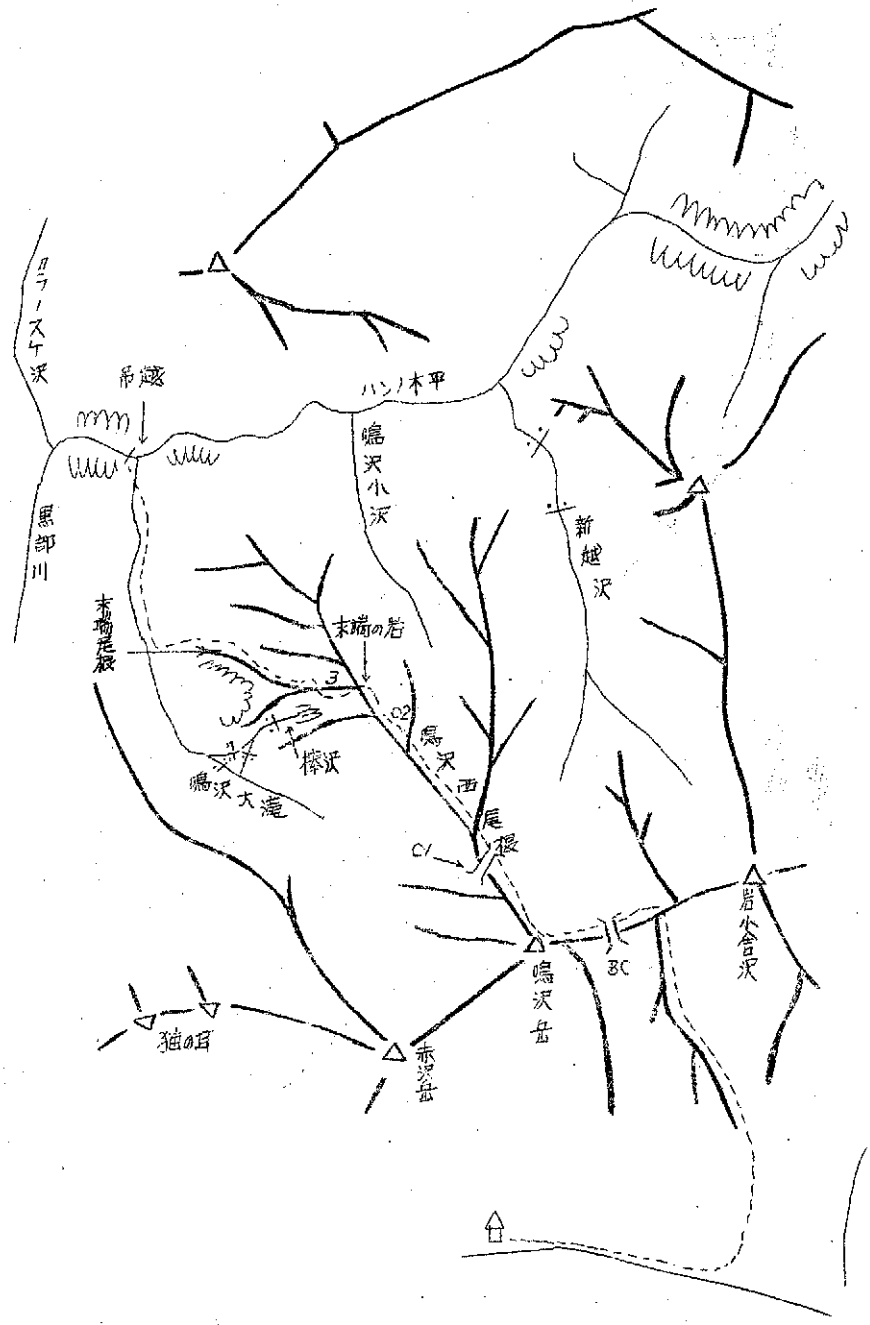
実際に鳴沢出合に立つて、１３００米という低い高度であるのに雪量の多いということは常に念頭に入れて置かねばならない。それも稜線に於けるような粉雪とか、クラストした雪と異つてその雪は靴をずくずくにしてしまうような湿つた重い雪である。このような雪が不安定な場所に不安定に乗つている際のテクニックを熟知している必要があるのではないかと思われる。





---- 春山トレース

鳴沢西尾根略図


カラースケ沢
吊越
ハンノ木平
鳴沢小沢
新越沢
黒部川
末端尾根
末端の岩
鳴沢西
棒沢
鳴沢大滝
尾根
岩小舎沢
鳴沢岳
猫の目
赤沢岳

春山合宿　行動表

	大町	寄沢	大沢 BH	新越乗越 BC	鳴沢尾根 (2350m) C1	鳴沢尾根 (1550) C2	鳴沢出合 C3(ABC)
Ⅲ 18	7 →						
19	7 → / 5 →	2 扇沢下 / ←					
20	3 →	← 7					
21	2 → / 1 →	停8					
22		11 →					BH設
23	2 →	→	2 → / 9 ←				BC設
24			6 → / 4 ←	2 ←			C1偵
25			5 →	停6			
26				10 ←	3 →		
27	← 2			←	3 → / 3 ← / 2 →	3 ←	C3偵
28					停5	停6	
29			←	1 ← / 5 ←		5 ←	
30	←		←		2 →	3 ←	
31						5 →	C3設
1							停5
2						鳴沢大滝 5 →	
3					←	5	
4					停5		
5			←	5			
6	← 5						

（時報7号）

1955年夏山合宿

北　岳　合　宿

木村裕一

南アルプスに夏山合宿をもつて行つたことについて、関西学生山岳連盟の報告会の時、いろいろ質問を受けて戸惑つたのであるが、別にそれ程大きな狙いがあつた訳ではない。部員の最大公約数が他人に煩わされない、落着いた合宿を希望したまでのことである。只ここで留意すべきことはかかる潔癖性、孤独性が我々の弱点ともなるということである。

以下は山行記録

日時　1955年7月18日～
　　7月28日

参加部員

（CL）木村裕一　（SL）宍戸　元　（装）山本進一郎　（食）西川元夫　（記）辻川真　村瀬泰弘　岡田博司　四方大中　寺田満洲朗　高木俊夫　山田良平　樋下重彦　飯田　稔　大井孝和　河合　松本保枝

（OB）大村一生

7月18日

大阪発17時10分（身延線廻り）

7月19日　小雨

甲府着7時46分

買物の後、貸切バスにて夜叉神トンネル入口に向う。途中芦安部落にて食糧調達のため先発の大村、宍戸が合流す。

トンネル入口発11時55分

夜叉神峠小屋着1時30分

鮎差し3時30分

荒川口6時30分

夜叉神のトンネルは八分通り完成、トラックは入口まで往復していた。

夜叉神峠で初めて現われる北岳方面の眺望は典型的な南アルプスの姿であり、折から立ち昇るガスを加えて我々の眼を奪うに充分であつた。一旦鮎差に下り、岩へつりの後、吊橋を一つ渡つて荒川小屋に着く。小屋前の河原にて幕営。

7月20日　晴後雨後曇

荒川口出発　8時　後発　9時

野呂川は径らしきものなく、河原沿いに行く。時々出喰わす岩場では重い荷物に苦しむ。なかなか道ははかどらず。後発隊宍戸、西川、辻川、大村は何時迄も追いつかない。先発隊でも寺田、高木の調子が悪く遅れる。4時頃後発隊の連絡あり、故障者が出来た為、深沢から少し上つた所の岩小屋にて一泊を決定。止むを得ず。寺田、高木は立石の岩小屋にて泊るよう連絡す。本隊は赤ぬけ沢手前にてキャンプ。6時30分。

陸地測量部の地図5万分の1の大崖頭の北側から巻いて野呂川に下る点線道は少し荷物を持つと通過不能なるも近き将来には立派な道が出来る由。

7月21日　晴後夕立

キャンプ地出発　9時

広河原小屋　11時発　2時30分

白根大池　3時

朝、後発隊を援助すべく村瀬を下らす。

キャンプ地より危つかしい渡渉を2度、視界が開けたと思うとそこが広河原であつた。荒川口から広河原まで都合4度の渡渉を必要とした。

白根大池着後、木村、山本、岡田が広河原まで後のものを迎えに行く。後発隊の広河原着が非常に遅れた為、山本のみ大池まで登り、後は小屋に泊る。

7月22日　晴後曇

広河原発　6時

大池着　9時　発　9時40分

大樺沢二股　11時

午後から新人グリセード

大池から大体等高線沿いに進む。踏跡は身軽な装備でバットレスに行く人達のものらしく定かでない上に急傾斜のトラバースなので非常に苦しかつた。

大樺沢両股附近にはキャンプサイドらしき場所は全くない。右股上流約300米に4，5人用の長衛の岩小屋があるだけ。止むを得ず傾斜約7度の草地を手入れして設営。

大樺沢左股の残雪は傾斜が緩く、最上部短距離がグリセードの対象となるのみ、従つてグリセードの本格的練習は望めず、形だけの練習を行う。

7月23日　雨　停滞

7月24日　雨　停滞

雨天でも炊事当番は5時に起床し、朝食の用意をする。朝食が終つても雨が止まず、2日を無為に過す。

ポリエチレンをフライに使つたが非常に調子が良かつた。

7月25日　晴後曇

北岳上部はガスに包まれ、何時降り出すか判らない様な天候。加えて中央バンドへのルートが不明の為、木村、宍戸、山本、西川、村瀬、四方の6名が北岳バットレスの中央バンドより各尾根の取付き附近を偵察す。

木村OB、他新人6名は8本歯沢より北岳—2段窪を踏査。

辻川、岡田は、東北稜—北岳—左股を踏破

7月26日　晴

第一尾根　宍戸、村瀬

第三尾根　木村、寺田

第四尾根　山本、西川

第五尾根　①辻川、高木、山田

②四方、樋下

東北稜　木村OB　大井　飯田　松木

7月27日　晴後曇

第一尾根　四方、山田

第二尾根　宍戸、西川

第三尾根　辻川、飯田

第四尾根　大村、岡田

第五尾根　寺田、河合、樋下

村瀬、大井、松木

中央稜　木村、山本

7月28日　晴

両股発　7時30分

白根大池　8時30分

広河原小屋　9時30分　発　9時50分

広河原峠　1時10分　発　1時40分

赤薙沢出合　5時1·5分

横手　7時25分—(バス)—韮崎駅

以　上

北岳合宿雑感

重い荷物を担ぎ1770米の峠を越え、径なき沢を何度か渡渉し、再び胸突く坂をあえぎ登り、大樺沢両股に着いた時、正直なところ、ほつとした。7月25日偵察に終始したのもかかる気持が全部員にあつた為に起因する。

新人にとつて南アルプスのスケールの大きさは想像外のものであつたろう。非常に苦しく、而も酬いられる所の少ない合宿であつたと思うかも知れないが、かくして得た山の初印象がやがては正しき自信を生み、立派な岳人を育て上げてくれる源泉となつていることに気づくであろうと信ずる。

南アルプスの夏の天候は北アルプスよりも悪く、北岳が完全に姿を見せたのは1日しかなく、毎日午後になるとガスが下りて来た。我々は両股に入る日から5時起床、6時出発を厳守し、3時頃にはBCに帰つている様にした。総括的に合宿を反省すると、例年のややもすると観念的になり勝な形式的な合宿形態を打破し山全体を把握するのに役立つたと思つている。かかる合宿を4年に1度位行うのも良いと思う。

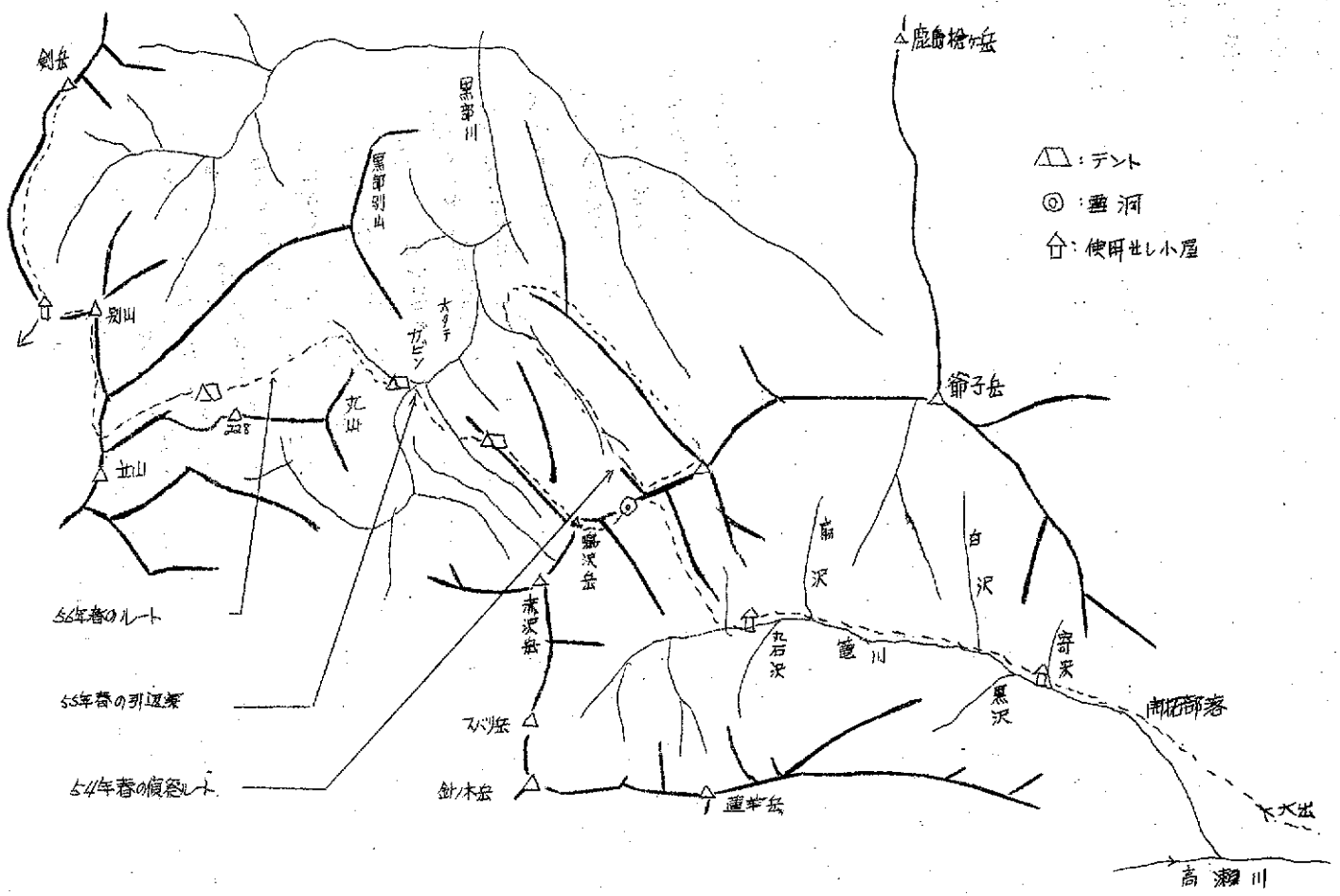
—終—

第一尾根　　四方　記

7月27日　晴

パーティ　四方、山田

午前9時、取付きのバンドに着く。少し休んで早速登り初めた。最初の1ピッチで第一尾根を横切つているハイマツのあるテラスに出る。それを左にトラバース、尾根の左側に出る。昨日の宍戸、村瀬の両氏がリッヂ通しで途中のオーバーハングを乗切るルートを採つているので、今日は左側面のガリー沿いに登る。此処は岩が非常に脆い。あまり快適とはいえない。3ピッチ程上げた所より、リッヂを目指して脆いルンゼを詰める。今日の岩場はガスが巻いており、時々その切れ間より第二尾根がすごい容姿をのぞかせている。注意はしていたが、案のじよう、小さかつたがホールドが1つくずれた。それにつられた様に次々と落石。凄まじい反響を残して岩が落ちて行く。ジッヘルをしていた山田君にも2、3当つたようだが幸い怪我はなかつた。小生は右手首をちよつと切つた程度で済んだ。まずまず運がよかつたと云えよう。すぐに手近かな割目を探してハーケンを打込む。この悪場では意外にも又、幸運にもぐつと吸込まれるようにハーケンが効いてくれた。やがて小さな少し傾斜のついたテラスに登りつく。そこから右にトラバースして主稜に出る。2ピ


剣岳
別山
五山
丸山
黒部別山
黒部川
オリテ
ガビン
鹿島槍ヶ岳
爺子岳
△：テント
◎：雪洞
⇧：使用せし小屋
56年春のルート
55年春の引返線
54年春の偵察ルート
赤沢岳
スバリ岳
針ノ木岳
蓮華岳
鑓沢岳
鑓沢
白沢
九右沢
篭川
寄沢
黒沢
南沢
南沢部落
下大出
高瀬川

ツチでザイルを解く。後はお花畑のある快適な尾根だ。途中食事を摂り稜線に着いたのは12時30分であつた。

（中央バンド　9：00　頂上12：00）

第二尾根　　西川　記

7月27日

パーティ　宍戸、西川

昨日、一昨日と中央バンド迄は通いなれた道である。bガリーを少しつめて左側第二尾根のカンテ状側稜にとりつき途中でアンザイレンして主稜に上る。主稜をおおうブッシュもこの辺が上端である。主稜はまもなく傾斜が増し、フエース状となるが、cガリー側をからんで登る。次のピッチで釣尾根からも顕らかに認められる赤茶けた大チムニー下のテラスに立つ。第二尾根はここから約80米垂直に高度を増している。ピトン1本きかせて第一尾根の落石の音を耳にbガリー側へ1ピッチトラバース。つるつるの逆層のスラブでフリクションだけを頼りにカンテの手前にあるミヤマハンノキの生えたテラスに着く。途中ピトンを2本打つたがここで更に1本をうたわせてカンテを乗りこえそこから上にはしつている草つきリンネを登りハンノキの生えたバンドを右へトラバースしチムニーにはい込む。5米ですぐチヨークストーンにぶつかるがこれは乗り越える。岩と岩とにはさまれた青い空は明るく少しのぞいたハイマツにはげまされる様に更に10米上り左へ5米ばかりトラバースしてハンノキのテラスに立ち左のカンテを乗越えると逆三角形の下の頂点あたり40米ザイルが伸び切つたところでザイルを解く。主稜に出てから30米ピッチの登攀だつた。ハイマツに囲まれたお花畠で昼食。頂上で既に到着していたパーティに迎えられた。

（BC　6：00　中央バンド　9：00　頂上　14：00）

第三尾根　　木村　記

7月26日

パーティ　木村、寺田

BCから左股を登り、バットレス沢の出合まで約1時間を要す。そこからルンゼに沿つて登る。中央バンドの下の壁は沢を右に採つてゴルジを登る。危険とまでいかないが非常に不安定で落石頻り、不安定な草付きを登ると左手に第一尾根から草のついたルンゼが入つている。灌木につかまりながらオーバーハングを越すと急な草付きの斜面に出る。登りつめた処が第一尾根主稜である。そこを越えた所から中央バンドが幅広く横に走つているが相当急斜面である。しかしやはりバンドらしくお花畠が拡がつている。そのバンドに沿つて大きく迂回するとC沢に入る。少し登つて急な雪渓をトラバースすると、第四尾根の取付きがある。第三尾根へはもう少しCルンゼを登る。何処から登つても良い様な取付きである。コンティニアスで暫く登ると這松の

ブツシユ漕ぎが始まる。終つた所で第一回の昼食をとる。第二尾根の途中は、マツチ棒の頭位の大きさに見える。第四尾根のパーテイは快調なピツチで登つているのが割に近く眺められた。昼食後、Cルンゼ側のV字型の岩の割れ目を2ピツチ程登ると赤茶けた脆い岩質のオーバーハングに出喰わす。それを右に迂回し、第二尾根の方に廻ると、そこが逆三角形の一辺である。そこから頂上までコンテイニアスで登る。頂上で全パーテイの集結をまつて八本歯沢よりBCに帰還す。4時30分。(BC 6:00 頂上 13:20)

中央稜　　木村記

7月27日

パーテイ　木村、山本

第三尾根と第四尾根の間のCルンゼをそのまま登りつめると、象の肌を思わせるような茶褐色のオーバーハングが巨大に張出している中央稜直下に至る。時々落石が大きな反響と共に中空から降つてくる。周囲は薄暗くじめじめした感じで余り気分の良い所ではない。

オーバーハングの直下を横に走る大きなリスを利用せんとするも不可能と思われたので少し左手の第四尾根側の侵蝕された赤茶けたクラックを試登しピトンを打つも利かず、元のルートに戻る。リスの間に2本のピトンを打ちトラバースする。足場がないので全く腕力に頼つて3米位、微妙なバランスでテラスに立つとオーバーハングが体を外へ押し出す。片腕がバランス保持のために必要なのでピトンがなかなか打てない。隣の第四尾根のパーテイはどつくに頭上を通過し、遠くヤホーが響く。ガスがだんだん濃くなる。時間が遠慮なく経過する。気休め同様のピトンを打ちやつとCルンゼに入る。下から40米のザイル1杯、後の山本は時間をかけないため、殆んどザイルをたよりに登る。次にV字状のルンゼを2ピツチ登る。ここから上部は岩質が硬く、手に快感さえ与える。早くリツジに出るとオーバーハングが2，3あるようである。3ピツチ程、稜側を登つてからリツジに出る。後は高度感があるだけで技術的に困難な処もなく頂上に至る。

(BC 6.00 取付き 10.00
頂上 15.00)

第四尾根

7月27日

パーテイ　岡田、大村OB

第四尾根を末端から取付くならば手に負えないオーバーハングが連続していて相当時間が掛かるものと思われる。dガリー側からの取付きは横に走る2、3のバンドを利用すると聞くが私達は中央バンドを経て、cガリー側から取付いた。cガリーを埋める豊富な残雪を跡んで少々登ると、第四尾根へはどこからでも容易に取付ける様に見える。トラバース気味に草付きを登り尾根に出た所は、マツチ箱から約80米下部のテラスで、ここでア

ンザイレンする。灌木はこの辺りで終りここより上部は小さなハイ松と高山植物におおわれて明朗な尾根となる。マツチ箱の壁は右壁をからみ問題はなく、第1コルの上も容易である。第2コルの上も直登出来るがフリクションをきかせて右からみに登るとすぐマツチ箱の最高点である。第二尾根から第五尾根迄一望のもとに眼下に見渡し仲間にコールを送る。Cガリーで別れて中央稜に向つたパーティはまだ取付き点で困つた様子をしている。第三のコルへの下降はアブザイレンし、そこから中央稜パーティへルートを示唆するが、洞窟の様に陰気なこのバットレスの核心では反響するこだまも不気味である。第三のコルの上は滑らかなスラブのカンテであるが、左側の側壁に縦に走る小さなクラックを一息に登り、行きつまつた処で左側の狭い草付のガリーに入る。このガリーは次第に傾斜を落し上部のハイ松まじりのお花畑で消えている。アンザイレンしてから11ピッチでザイルを解き、後は鼻歌まじりで高山植物を踏みながら、緩斜面を主稜線に飛び出した。

（取付き　9.40　頂上　12.15）

（時報8号）

1955年　冬山合宿

「双六，笠，鷲羽岳」

木村裕一

3年越の懸案である春の黒部横断、剣登頂という大きな目標を持ちながら、更に1つ厳冬期に大きな組織的計画を持つた理由が2つある。1つは最上級部員が多数春山に参加出来ないかも知れないということ。今1つの理由として冬春の二季共に大きな計画を樹て、無理なく動けるだけの部員をようするまでに私が山岳部が成長したという確信を持つたことが挙げられる。

夏山が終り、冬山計画を本格的に練る頃、夏の北岳バットレスを消化したのだから引続き冬の北岳に入つてはという案も出たが、中堅部員の実力養成に主眼を置こう。我々は双六合宿を固執した。

夏山合宿の後半として、木村、松木が蒲田川右股を歩き、東OB、岡田が大沼乗越から蒲田川左股を歩いた。秋になつて尾藤、田島両OBが下から大沼乗越を通つて双六小屋に入り、冬用の薪を作つて置いて下さつた。続いて辻川、樋下2君が食糧の荷揚げをし、新雪の頃、宍戸等女子部員を含めて最終的な偵察と荷揚げを行つた。一方ルームでは、計画として最終目標を雲の平より黒部を渡り、薬師沢より薬師岳往復に置き、余力で赤牛岳往復、笠ケ岳、槍ケ岳往復の放射状登山並に烏

帽子への縦走を立案していた。その間、関本、山本が東京より三枝OGの参加を得、春山の準備をして昨年度失敗した吊越しの準備に御前谷より阿曾原に抜けていた。かくして我々は12日を待つたのである。

メンバー

先発隊　木村（CL）、宍戸（SL）、石沢　村瀬（記）、四方、山田、片山、石野カメラマン（毎日新聞）

後発隊　関本、山本（装）、杢中、西川、辻川、岡田、尾藤OB　以上14名

行動概況

12月24日

先発隊　中尾部落　中畠氏宅泊

12月25日　晴後曇

二俣から少し上までトラックに乗るも積雪のためそこから歩く。木村、石沢、村瀬、石野カメラマン4名は雪の少ない中に一気に双六に入るべく、個人装備と食糧少々及びスキーをもつて出発するも2000米附近から積雪が深くなり、小屋へは行けそうもないので引返す。後の4名は中崎橋の上の飯場に荷物を揚げ終り、一部を大沼沢の左俣出合まで揚げていた。

（註）左俣には立派なトラック道が左岸を走りその道は大沼沢出合と二俣中央部辺り（右岸に岩小屋のある手前）で橋（中崎橋）を渡り、そこからまだ500米以上も伸びている。

大沼乗越とは陸地測量部の地図（5万分の1）で剣沢岳と笠岳を結ぶ尾根中の標高2588.4の三角点のあるピークの西南にある2450位の鞍部を云い、そこから蒲田川左俣に入る沢を大沼沢という。夏道が今年開通した。

12月26日　曇時々小雨

宍戸、石沢、四方及び石野カメラマンが再び双六小屋に入るべく7時半には飯場を出て行つた。残りの者は大沼沢出合（これから出合と略す）まで荷揚げをする。連日の好天と雪の少いうちに双六小屋に入るべく木村、片山が後発隊を中尾まで迎えに行く。しかし10日位に続いた好天はそれ以上我々を待つていて呉れなかつた。10時頃飯場に帰ると丁度宍戸と石野さんが下山して来た所だつた。

宍戸の報告によると上の状況は次の様なものである。

出合を10時、乗越に3時半、そこから山腹を巻いて双六に出る秋に通つた新しい道を進むも深雪が胸近くあり、30分で100米位しか進めなかつたという。4時過ぎ断念して下山した。時間を稼ぐため極力装備を軽くする必要があつたとはいえヒバークの装備をも割愛したのは、稜線の積雪を過少評価したことと共に、我々の犯した第1の失策であつた。

石沢、四方は我々のボッカして置いた出合のテントに泊る。

かくして、我々のデスクプランは最初から

完全に狂つたが、飯場の雰囲気は後発隊の連中を加えてなかなか意気盛んなものがあつた。

12月27日　曇後晴

下に長く居れば居る程、我々は不利な立場に置かれることは明らかである。木村、関本山本、李中それに尾藤OBの4人が10人のサポートを受け万難を排し小屋に登ることにする。サポート隊は小屋に揚げるべき荷物の殆んどを持ち、後の4人は個人装備にビヴアーク用装備とスキーを持つ。途中で石野さんの注文のポーズを創つたりして時間を喰つたが昨日のラツセルが相当役に立つた。

飯場発7時　大沼乗越4時半。

横巻道が使えないので稜線沿いに行く。2588.4米のピーク迄は腰辺りまでもぐりその頂上に至る頃にはとつぷり日が暮れていた。稜線は風が非常に烈しかつたが、幸に天候が良くなり月光が明るく、槍穂高連峰を浮彫りにしヤツケに着いている雪の結晶にダイヤモンドの様な輝きを与えていた。

双六小屋着　8時半。

石野氏は本日帰られる。カメラマンとして非常に苦労をされた割に収獲が少なかつたことは我々としても心残りであつた。

12月28日　風雪

下では8時に出発。吹雪のため出合で引返す。上では正午、昨日の約束に従つて猛吹雪を衝いて飛び出したが、全然進めず小屋に引返す。

12月29日　風雪

小屋には主食豊富なるも副食乏し。下では食物が乏しく雑炊。但し石野氏の置土産の野兎を喰つた由。

12月30日　風雪（双六小屋）雪（中崎橋の小屋）

12月31日　同上

1月1日　同上

1月2日

停滞中毎日の如く下では中尾に食糧を調達に行く。と云うのはこんなに長く下に居る積りがなかつたので食糧は全部大沼乗越に揚げてあつた。

上では木村、岡本が正午頃からガスと風が少し弱くなつた間を衝いてコルの食糧をアタツクする。岡本、顔面に軽い凍傷を受く。

1月3日　快晴　稜線も無風

下では炊事当番が2時半に起床、出合でやつと夜が明ける。5日間の降雪の為、抜戸から下りている沢には幾本もの雪崩跡があつた。この沢は降つたら深く積ることなく雪崩ている様子である。従つて降雪中の通過は絶対避けるべきである。

乗越に着いたのが16時頃であつたがそこから荷物が増えた為、小屋に入つたのは最終22時であつた。

小屋では朝この快晴が夜半まで続くという見通しを立て、後発隊へのサポートは木村、李中に任せ岡本、尾藤OBは笠ケ岳を攻撃した。

小屋出発12時、大沼乗越13時半、抜戸

15時40分、笠岳17時10分—17時15分、双六小屋23時30分

1月4日　小雪

動いて動けない天候ではなかつたが、昨日は遅くまで行動したので休養日とし、今後の計画を練ることにした。双六岳の双六池側の斜面でスキーを楽しむ。

今後の予定として、明日天気になればテントを出せる所まで出し、次の晴天を利用して撤収する。明日行動出来ない天候なら次の行動出来る日に下山することに協議決議する。かかる決定の是非には非常に問題があつたようである。というのは我々の数少い冬山の経験によれば、ここ3、4年の雪期登山に1週間も閉じ込められた例は殆んどなかつたし、あつた時でもその後は2、3日の行動日に恵まれていた。故に公式的には冬山の悪天候は重々理解している積りでも実際を判断する時、経験を偏重し、希望的観測に傾く結果となつた様である。かかる反省は停滞中の無聊が重なるにつれ激しくなり11日、山日記の気象の頁を再読した時、最高に達した。

1月5日　高曇

出発　8時30分、三俣蓮華頂上11時、鷲羽—三俣蓮華コル着13時、テント設営後出発13時40分、小屋着16時30分。

A隊　鷲羽岳頂上15時、テント帰着15時20分

B隊　黒部谷　15時までスキーで下り、テント帰着16時20分

強風がガスに雪さえ混えていたがトレーニングという意味で一応出発することにした。多分小屋の背後の山まで天候はもたないだろうと思つていた。双六岳の傾面を巻き、三俣レンゲから南へ数えて2つ目と3つ目のコルに出る。非常に雪が深く、道がはかどらないため、始め計画した夏の横巻道を通るのをやめ稜線に出、アイゼンをつける。

この稜線をスキーで飛ばすことなどは我々のスキー技術をもつてすれば到底望めないことである。天候は何処まで行つても悪くも良くもならない。ラッセルで時間をつぶしたので三つ俣蓮華小屋を通過した所で早くも引返さねばならなかつた。赤牛隊も黒部隊も同じ所に天幕を張つた。かくして1週間の吹雪との根気較べが始まつた。

A隊（赤牛隊）メンバー　杢中（L）石沢　四方

B隊（黒部隊）メンバー　宍戸（L）山本　西川、岡田

夕方の完全な無風状態、微かな音をも吹い込むが如き山波の佇こそ正に来るべき1週間の嵐の前の静けさであつたようである。

1月6日　曇後風雪

小屋では8時に槍に向け出発。

剣沢岳頂上9時

剣沢岳頂上までとにかく強風を衝いて登る。北方後立山は黒雲に覆われ、本格的な嵐の来襲は時間の問題であつたのでそれより小屋に引き返す。この日、天幕の連中が敏速に動い

て居れば小屋まで帰ることが出来たであろう。

1月7日　風雪　停滞

1月8日　同上

天幕では少し風が弱くなつたのでテントを撤収したが蓮華小屋に辿りつくのがやつとであつた。2時間程かかつて小屋を掘り出し中にもぐり込む。

1月9日　風雪　停滞

1月10日　同上

小屋でもいろいろなものが欠乏し出す。

1月11日　風雪　停滞

1月12日　ガス後晴

46時中、食事の時と便所へ行く他は眠つているので、昼と夜の区別が判然しなくなつてくる。度々、暫く止む風に欺むかれたが遂に3時過から星が見え出した。今日を逃せば本当に大事に到ることを実感として感じながらアタック隊を迎えに行く準備をする。

8時小屋出発、蓮華小屋着9時40分、双六小屋12時30分着、13時30分出発、乗越16時着—16時30分

大沼沢の積雪は下りでも腰まで没する為、行程は非常に渉らない。30分程遅れた最後部は300米位で先頭に追いつく。日はすでに没し、たそがれが間近く迫る。そこで我々はスキーをはくことにしたが、荷物と技術の相違から先頭と最後の間隔が非常に開く。しかも先頭でさえ出合に程遠い中腹で暗闇に追いつかれ、再三道に迷う。懐中電灯は殆んどが用をなさず、2、3個が鈍い光を発しているのみ。加えて雪崩の為地形が一変し、四方、石沢が天幕を張つた登山口等跡かたもない。抜戸から落込んでいる急な谷は降つただけの雪を随時、押流すらしい。先頭は出合に20時頃着く。1時間程待つたが寒さに耐えきれず出発。午前1時頃、例の飯場に着く。後続も2時半には揃つたがスキーの調子の悪い西川、片山は遂に出合迄下れず、途中で穴を掘つてビバークする。

1月13日　小雪

石沢、四方、山田は一挙帰阪すべく7時半出発、残りの者は後の2君を待ち、中尾3時半に帰る。

後　記

1. 大沼沢及びその周辺

大沼沢自体が雪崩ることは先ずあるまいと思われるが、その中腹から抜戸の方へ入つている沢は雪が降るとその都度雪崩れている様子であるから、降雪中は絶対近寄れないし、左俣出合に天幕を張ることも出来ない。然し、平年なら12月1杯なら何んとか使えるであろう。それ以降の登路は2588.5米のピークより東南にカギ形に出ている尾根しか考えられない。大沼乗越から双六小屋へは横巻道より稜線の方が絶対有利である。

2. 双六小屋より三俣蓮華への稜線はワカンよりもアイゼンの方が快調な位雪がしまつている。しかし小屋からの横巻道は雪が深くスキーが最有利であるから計画的に非常にむず

かしい。

3. 黒部源流（雲の平遠望）

4. 鷲羽の稜線（手元にデーターにし）

かくして、雲の平の雪もふめず、薬師沢の影さえ知らず、我々の計画は壊滅した。悪天候にはばまれ、行動日には殆んど夜明けから真夜中迄行動し、悪戦苦斗を重ねたが報いられなかつた。然しこの計画が不可能と断定する材料は何もない。希わくば我々の遺した未完成な山行を、いつの日にか補い、喜びを共に頒ち合う日の来たらん事を。

冬山停滞1週間（於．三俣連華のコル）

四　方　大　中

1月6日

朝7時頃目を覚した。天気はガスがあるが視界は利く方で風が少々ある。テントを撤収するつもりで食事の支度にかかつたが、この間に天気は次第に悪化して、風雪に変つて来た。隣にナイロンテント1号（宍戸、山本、西川、岡田）を張つていた黒部源流隊と相談をして天候を見ることにして、この日は停滞と決定、午後7時頃星空が見られ、明日は撤収が出来ると、皆喜び眠りに就く。

1月7日

午前4時頃、隣のテントより、宍戸リーダーの腹痛を知らせてきた。天候は又悪化し外は風雪になつている。宍戸氏自身（医学部3年）虫垂炎ではないかとの判断で、取りあえずナイロンテント2号（金中、石沢、四方）より石沢氏が手当をしに行く。兎に角、抗生物質でおさえ、2号テントで両テントの朝食を作り、風雪の止むのを待つてベースキャンプへ知らせに行く準備をする。昼頃になつてこの薬の副作用の下痢で腹痛はとまり、一同ほつと安堵の胸を撫でおろす。この日も結局停滞。

1月8日

目を覚すと風はあるが、ガスが少しうすれ、その間からぼんやり鷲羽の頂上が望まれた。早速テントをたたみ出発（午前10時）。しかし、出発して間もなく天気がくずれ、風雪がひどくなる。視界は30米位しか利かない。やつと雪に埋れた三俣連華の小屋を発見、風雪の中を2時間程かかつて入口を掘り当てる。中はあまり雪が入つておらず、無風状態である。やれやれといつた所、小屋の中にテントを張り薪を燃して暖をとる。（尚石油はテント撤収の際2つのラジウスに一杯満して残りは捨てる）

1月9日

天候は相変らず悪い。この日より停滞が長びくことを考慮して、食糧の食い伸ばしを始める。トースト1人4枚（1日2食）。砂糖が欠乏しはじめたので塩ミルクにする。燃料は少しはある。煙突を屋根から出し小屋中に充満した煙の逃げ道を作る。

1月10日

今日で停滞5日目。風と雪はやまない。頭の上をごうごうと風がかすめる。小屋の戸

口は幾ら除雪をしても2、3時間も経てばすぐ埋れてしまう。この日、朝起きると全員頭痛を訴え出す。小屋の中で薪を燃やすので炭酸ガス中毒にかかつたらしい。立ち上ると心臓の動悸が激しく、ふらふらする。交代で戸口の雪かきをする。外に飛び出すとすぐ平常にもどつた。この日はトースト3枚に減食、副食物は塩とコショのスープ。

1月11日

相変らず風雪が続く。目を覚ますと無汽味な風の音が聞えるだけである。食糧はだんだん乏しくなる。停滞日は2食だが、今日から1食につきトースト2枚になる。この調子で後2日の食糧が残るにすぎない。勿論皆、個人装備の食糧は出し合う。ストーブを囲みながら、皆いろいろ今後の検討をした。終いには、「我々は何の為にこのような困難を敢えてしてまで山に来るのであろうか。」等、云い出す者もあり、お互いに話し合つたが結論には達しなかつた。又結論が出る筋合のものでもないだろう。結局、「何でもいいから腹一杯食いたい。」というのが皆の本当の気持であつただろう。しかし、皆互に励まし合つて我々の現実の立場をそれ程窮迫したものとは考えていなかつた。全員明日の快晴を祈つて眠りに就く。

1月12日

6時に目が覚めた。風の音はやまない。又今日も停滞かと皆げんなりした顔になる。突然外に様子を見に出ていた者が「槍が見えるぞ!!」と叫ぶのが聞えた。皆先を争つて外に飛び出た。ガスはうすれ、槍ケ岳がくつきりとその姿を現わした。朝日がさす。皆んなこの感激は一生忘れられないものとなるであろう。

残つた食糧を全部つめ込み、我々を救つてくれた小屋に別れを告げた。その時、「ヤッホー」と、皆の安否を気づかう木村リーダーのコールが聞えた。皆元気な喜びに溢れたコールを送り返した。迎えに来た仲間と手を握り合う。再会の喜びに胸を震わせているお互の目には涙が光つていた。

鷲羽岳アタック

四方大中

風は可成りあつたが天気は晴、我々はアタック隊、サポート隊を合めて総勢14名、午前8時過ぎ双六小屋を出発、稜線沿いに三俣連華を経て鷲羽岳と三俣連華とのコルにテントを設営したのは正午を30分廻つていた。何しろベースキャンプにはいるのに1週間の停滞を余儀なくされ、結局11日をかかつているだけに、最初の目標であつた水晶、赤牛のアタックは不可能と見られ、その結果、目標を鷲羽岳に切り換えた訳である。

さて鷲羽のアタックは金中(リーダ)、石沢、四方の3人、サポートは木村リーダ、村瀬、片山の3名で、結局アタック隊のテント地出発は、午前1時30分、鷲羽の登には相当長く、稜線の風は強い。ルートは大体夏道

を採つたが、頂上に近づくにつれて風の当る所は凍りついており、所々岩肌が顔を覗かせている。途中一度休んだが寒いのですぐ又黙々と登りだす。3時遂に頂上に着く、視界はよく利き槍穂高をはじめ、北アルプスの峰々がきれいに見える。20分程頂上に留り記念撮影などを済ませた。この間写真のフイルムを入れ換えていた石沢の手が見る見るうちに紫色になつた。

何だか物足りない感じがしないでもなかつたが、これ以上アタックを進めることは大した意味もないと考えられ、又帰りの時間も考慮して吹きやまぬ風の中を凍り初めた雪にアイゼンを利かせながらテント地に向つた。

（時報8号）

1956年 春山合宿

春の黒部下廊下横断について

宍戸　元

雪晴れの朝新越乗越から見る景色は実にすばらしい。その中でも剣が源次郎を中心に平蔵谷、長次郎、八ツ峰と、凸凹を激しく浮き出させ、これを男性に例えるなら、そのずつと下、黒部渓谷との間に座を占める内蔵之助平は清らかな乙女にも例えて良いだろう。その純白な肌を見せる乙女の前には右に大タテガビン、左に丸山の大岩壁のナイトが聳え立つている。私達はいつしかこの乙女の魅力、いや魔力の虜になつてしまつていた。

冬の穂高で多大の成功を収めた私達は、欣喜雀躍として"ふるさと"ともいうべき後立山へと、又再び大沢小屋に立戻つて来たのである。

この行動は意識的に考え出されたというよりも、知らず知らずの間に期せずして私達お互の心に芽萌えた、もつとも自然な流れであり、誰の脳裡にも不思議さも、疑問も生ずる余地はなかつた。

かくて、私達は後立生活の間に記憶に残つた岩小屋沢岳北峯から西北に派生する長大なしかもゆるやかな尾根（岩小屋沢岳支脈）に眼を注いだのである。更には又、岩小屋沢岳といえば、すぐに新越尾根に結びついていつた。この尾根は既に逆縦走の際サポートに使用し、既に私達の自家薬籠のものになつていた。次第に考えはまとまり、大沢小屋をベースとして新越尾根—岩小屋沢支脈—黒部下廊下—内蔵之助沢—同平という線が地図の上に書き込んだ。

54年

54年春は、多数の卒業生を送り出すなど参加者の都合により、A隊（川島(L)、山本(M)土屋、久保OB、田島OB）
B隊（尾藤(L)、宍戸、広橋、三枝、山本(M)、西川、岩永）に分け、A隊は岩小屋沢岳支脈の下降偵察行を計画した。しかし、同支脈2

１００米にＡＣを出したが、計画不備と食糧不足のため、数日振りの快晴の日に撤収を余儀なくされた。肝心の黒部への下降路を発見出来ぬままに終つた。

Ｂ隊は３名の横断アタツク隊を出す予定だつたが、アタツクメンバーの中に病気、不参加が出るなどしたため、計画を放棄し、翌年に備えてＡ隊の果せなかつた偵察を続けることとした。そこで新越中尾根にＡＣ（１８００米）を出し新越沢を下降したが、黒部別山の壁を間近かに望む所、黒部本流への落口も間もないと思われる地点で、止むなく滝のために下降を断念し、岩小屋沢岳支脈末端から新越沢に出ている２本の平行ルンゼを登つた。—このルンゼは主稜線からも一眼でそれと分る特徴的なもので、このルンゼの頭が支脈のほぼ末端であろうと思われる。— 私達はこの頭（ドーム．１８００米）より下廊下唯一の泊場である櫟林平を樹間にちらちらと見るに止まり黒部本流の河原にさえ降り立ち得ずに引返した。（ルート図参照）

この５４年の偵察の結果、私達は無雪期の間に徹底的に後立山から黒部への下降路の偵察、特に実際に下廊下から逆に後立山側に取付いて見る必要性を強く感じた。何故ならば、どこにルートをとるにしても下廊下右岸を形成している１３００米から１８００～２０００米までの壁が常に問題となるからであつた。そこで夏の下廊下偵察となり、尾藤（Ｌ）小沢、坪井、東、李中が櫟小屋沢より櫟木平にはいり、そこにベースを設置することとなつた。その時の尾藤の記録から引用すると、下廊下横断に関し、全く白紙に戻つて考え始めた。櫟木平生活１週間の偵察活動の推移は、黒部下廊下横断に関する決定的なことは、先ず渡河自体は吊越の出来た現在、スノーブリッジを利用するよりは吊越が優先する事は問題にならず、その存在する場所であること。次は立山側に於いてはクラノ助沢を利用するのが最も容易である事から、此処に鳴沢小沢出合にて渡河し、クラノ助沢に出る線に対して後立から如何にしてこの部に下り立つかという点に焦点はしぼられた。勿論逃げ道の事も考慮に入れてである。

即ち、鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定したが、其処より内蔵之助沢出合までの部分及び吊越使用不能を考えると鳴沢出合の方が有利なので、一応鳴沢に下るルートを考えた。次に鳴沢両岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙かに傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸より高度が低いので極めて条件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登つてみると、何とか春の登降が出来るだろうということが分つた。所が主稜線よりの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので赤沢岳に近い部分は非常に傾斜が急で而も鳴沢右岸をなす。鳴沢尾根より遙かに長いものであつた。恐らく春にはＢＣとなるであろう新越乗越の事を考え合せると、一層鳴沢尾根の方が良いと言えよう。

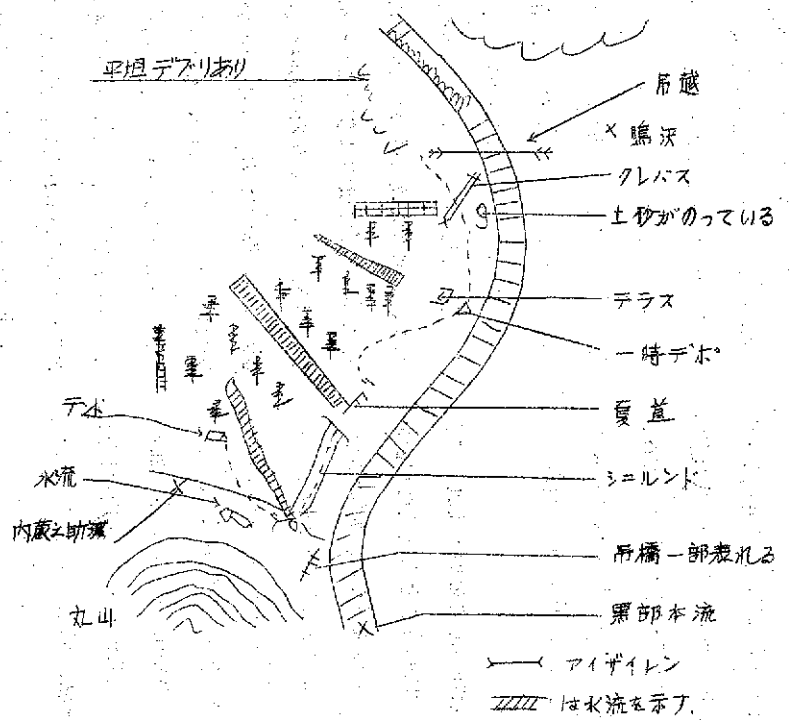
かくして此処に新越乗越より鳴沢岳に登り鳴沢尾根を下つて、その末端より急斜面を鳴沢に下り、その出合の吊越を渡つて、立山側は内蔵之助沢より内蔵之助平に至るルートを考えた訳だつた。

しかし谷底とブッシュに視界を妨げられた偵察は、盲人の象を触るの図に等しかつた。鳴沢尾根を登つた時などは、その帰路に於いてさえどうかすると道を誤る位で、複雑な地形で、しかも5万分の1でも細部に至るまで正確であるとは云い切れない後立山黒部側において、とてもそのルートを正確且精細に把握することは至難な技だつた。

そこで黒部渡渉点（鳴沢出合の吊越）を中心に全ルートをトレースすべく同年秋偵察隊を2パーティ（立山側・宍戸（L）。佐谷、住吉OB、後立山側・坪井（L）、西川、戸井、田島OB）を出し、鳴沢尾根の全貌を知ることに努めた。

ここで私達は未知の土地を歩き且偵察することにより部分的に知ることの出来た知識を一つのものに、集結していくのが如何に興味あるものであるかということがわかり出して来た。それとともにもはや既に登り尽された感がないでもない北アルプスに於ても、まだかかる未知の世界の存在することに驚き且喜ぶと同時に、冠松次郎氏・堀田小原氏など先への努力に敬意を払わずにはいられなかつた。

かような状態において55年春の黒部横断計画（宍戸CL、木村SL、坪井、西川、山本進、三枝、四方、岡田、村瀬、寺田、和田、尾藤OB、東OB）となつた。この時は有力メンバーをフルに使えたため、大沢小屋をBHとし、内蔵之助平に最終キャンプを置き、剣をアタックしようという遠大な計画であつた。だが、1200米という高度にある下廊下の積雪について若干の予備知識に欠ける点がないでもなかつた。ただ前年の春新越沢を歩いて見た感じから、ピッケルもアイゼンも役に立たない湿つた重い雪であろうと推測した事は誤りではなかつたのだが、同じ位の高度にある滝川谷の扇沢出合とか、彌陀ケ原称名滝に比べて3000米の山々に囲まれた下廊下は前者に数倍する積雪量のあることは、全く予想外のことであつた。そのため前年秋に補強工作を行つておいた吊越は滑車が立山側で雪に埋まつていたため働かず、スケールの大きな下廊下にあつては他の渡渉の手段もなく、計画は失敗に終つたのである。それに加えて下廊下は積雪は多いにもかかわらず、気温は矢張り1200米並の温かさのため、湿つた重い腐つた雪は私達にいろいろと不愉快な思いをさせた。樹間、陽の当る場所、北斜面、ラビーネン・ツーグと雪の性質は千変万化の態度を示し、私達は片時もそれに注意を払わずにはいられない。更には雪崩とシュルンドの間から見られる怒濤に気を配らなければならない。換言すれば、岩と水の稜線と


平坦デブリあり
吊越
× 鳴沢
クレバス
土砂がのっている
テラス
一時デポ
夏道
シュルンド
吊橋一部表れる
黒部本流
デポ
水流
内蔵之助滝
丸山
アイゼイレン
は水流を示す.

同様にいやそれ以上の精神の集中を必要とするのである。即ちかかる積雪期の谷歩きに於てこそ、自然は我々人間にもつともデリケートな神経を要求してくるのかもしれない。又しかしその反面、春の黒部のようにどこを通つて帰るにしても３０００米の稜線を越えなければならない。いわば井戸の底にあつて絶え間ない水の轟音を聞きながらも、それに動じないタフな神経を持ち合せていなければならないのである。

５６年

下廊下について知るものを知つた私達に、５６年春には「成功」という一言がやつて来るのである。前年の秋に前回の轍を踏まないよう滑車を後立山側に留置いたのが功を奏したのである。この横断ということにおいて、吊越の状態如何が成否の鍵を握るといつても全く過言ではないとつくづく思うのである。

この年の春は参加者が少数のため、前回のような往復ということは不可能であり計画を大幅に縮少し、アタツクが鳴沢出合より、内蔵之助沢、立山稜線、弥陀ケ原と考えることになつた。

行動報告

メンバー

アタツク隊（Ｌ）宍戸　元、（装）西川元夫、（食）岡田博司

サポート隊　Ｃ２（Ｌ）坪井圭之助、山田良平、広橋　茂（ＯＢ）

Ｃ１　大井孝和、一山幸代、田島汎（ＯＢ）

３月１９日

宍戸、坪井、岡田、山田、大井、一山、大阪発。

３月２０日　雨

２０年振りの大雪とかで開拓部落のはずれ辺りからラツセルがある。寄沢飯場泊り。

３月２１日　晴

新越尾根と雨沢のほぼ中間、籠川本谷左岸の台地に関電の小屋が新築された。新越尾根を使うに際し、大沢小屋より万事都合がよいので此処をＢＨに変更した。

去年大出・大沢間の荷上げに貴重な５日間というものを浪費したため、今度はこの間だけ人間を雇うことにした。私達は寄沢から大沢にはいるが、人夫は大出からトレースを伝つて追いかけさせることになつている。宍戸は人夫との打合せのため単身大出へ下る。約束の人夫３名は既に大出にやつて来ていた。大町案内人組合の規定で自分の個人装備（２貫）を含めて６貫しか担げないというのを、事情を説明し、１０貫ずつ担がせた。やつと荷造りし初めたかと思うと、今度はこの荷物では関電小屋まで３日の行程だといい出す、止むなく日が暮れたら途中にデポし、荷を軽くして関電小屋にはいるという線で納得させる。１人の人夫においてはカメラを肩にかけ一体何をやりに来たのかと詰問したくなる。白沢に大半の荷物をデポし６時頃到着した。

3月22日　晴

後発、田島OB、広橋OB、西川、10貫の荷を持つて到着、前夜、夜汽車に揺られてきたこと、昨日の人夫のことを考えながら、3人の労をねぎらう。

先発隊は荷物の整理を完了する。

3月23日　晴

BH—C1荷上げ、C1は例年雪洞を設営している主稜線の信州側に建設する予定で取りあえずデポする。今春は沢では積雪が極めて多いにもかかわらず、稜線上では鳴沢岳、岩小屋沢岳辺りでは既に夏道が顔を出している。

3月24日　雨　停滞

3月25日　雨　停滞

3月26日　雨　停滞

3月27日　晴

全員C1に入る。雪の少いため9名はいる雪洞を作るのはいささか難渋する。いつもやる阪大方式をやめて斜面と平行にトンネル式の雪洞を苦心して作る。少々時間がかかつたが快適なのが出来た。

3月28日　晴

雲海の上に針の木、蓮華が朝日にかがやいている。一面の雲海が少しずつ薄らいで先ず大沢が見え、次いで籠川が大町へと姿を露してくる。出発する日には雪で覆れていた大町が黒く見える。朝　が一条の煙がたなびいている。更に遠くは四阿、根木、浅間、八ツ岳富士山が雲の絨壇の上に頭を出している。カシヤ、カシヤとシヤツターの音を響かせている。

黒部はと見ると内蔵之助平、丸山、黒部別山、剣と昨年のままに、白と黒の縞模様を巡らして静まり返つている。アタツク隊とC2隊はC2にはいり、C1隊の田島OB、大井がサポートしてくれる。一山はC1、C2間は鳴沢岳を越える悪場のある上、昨年よりテント間隔を延した所でもあるし、帰りに時間を喰い、悪場を越える前に、日が暮れた時のことなどを考え、キーパーをさせる。この様な快晴に1人雪洞にいるのはさぞ退屈でたまらないだろうが、彼女なりに能力に応じて山の味を満喫してくれれば幸いである。

3月29日　雨　C2停滞、C1停滞。

田島OBは会社の休暇がなくなるので単身大町に下山。

3月30日　曇一時雨

C2のテント場は、南は針葉樹の大木に囲れているが、北は断崖をなして鳴沢小沢に落ち込み、左手から鹿島槍を始めとして後立山の遠望が出来るすこぶる見晴しの良い処である。西はといえば剣は樹の影で残然ながら見えないが黒部別山と、その正面に別山沢を懐き、その下には下廊下の心臓部が続いている。ここに昨年は2ケ所のスノー・ブリツヂがかかつていたが、今年はすつかり埋つてここでも大雪の年だということがはつきり理解させられる。しかし空はと仰げば乳色を呈し、それが鹿島槍のあたりから次第に稜線に融け込んで、山と空の境界が不鮮明になつてくる、

というあまりはかばかしくない空模様である。西の空がいくらか明るいのに望みをかけて出発する。

アタック隊は個人装備、サポート隊の3名は、アタック7日分の食糧装備をもつて、1人平均3～4貫の至つて軽い荷で鳴沢尾根を下降する。やがて私達は前衛華道のオブジェにでもなりそうな白骨樹をメルクマールに左折し、鳴沢右岸の急斜面へとルートをとつて行く。例の混つた雪と岩、その間に永年の間に累積して出来た腐蝕土がはさまつて、この両者が何の関連もなく混在しているこの斜面は昨年同様私達に苦渋を与える場所である。ザイルフイツクスして、雪の上にはステップを切つて一歩一歩慎重に下るが、そのステップも腐れ雪のためバカでかいのを作らないと物の役にたたない。馬蹄状の岩壁の上を右に2ピッチトラバースすると、この斜面から徐々に隆起し、次第に大きな尾根をなす私達が末端尾根と呼ぶ尾根の起始部に到達する。

ここには一昨年秋の偵察隊のつけた大きな鉈目が残つていたので、地点の確認に役立つた。ここからはザイルの助けもはなれ鳴沢へ一目散に降ればよい。

午後1時、又1年振りに鳴沢出合にやつて来た。対岸はと眺めれば水面から氷雪の壁がオーバーハング状に切り立つている。その高さは30米もあるだろうか。その壁の上から2、3米のところに私達の頼りとする吊越のワイヤーが顔をのぞかせている。しかし私達が秋に補強した両岸にわたして置いたたぐり縄は見るも無惨に後立側で切断されて奔流の只中に垂れ下つているではないか、だが滑車はちやんと手のとどく所に健在であるのは何よりだ。早速渡河用に用意した補助ザイル（60米）を出して工学部の西川が技師長となつてさつそく渡河工作にかかる。

落ちついてもう一度対岸を見ると氷雪の壁の下には雪融けのためか濁流が渦を巻いて流れている。昨年は印象的だつた雪帽子をかぶつた流れの中央の岩も、ザイル・フイツクスをして水汲みにさえ、降りられた河原もすつかり濁流にかくされている。更には氷雪の壁に黒くべつとりと印されている土砂の具合から一時の物凄い増水が推察され、ただただ自然の威力の大きなことと、その壮観さを想像して今更ながら驚くばかりである。

1時半、トップの坪井が10の疆と1ケのレンズの注視のもとに滑車をたぐつて行く。立山側がやや低くなつているので思つたより楽に進んでいく。60米の補助ザイルの延び切つた時に思わず両岸から万歳の声があがる。私達の仲間にしかわからないこの感激のシーンを記念すべく折りから降り出した雨にカメラのぬれるのもかまわず何回も何回もシャッターを切つた。吊越は小さな滑車とそれに吊り下げられたブランコ腰掛を連想するような粗末な止り木から出来ている。それに身を委ねて急流の上を渡るのは決して心持良いものではないが、1人ずつ、それからリユツクを

1個1個と渡し、3時、私達は濁流をはさんで東と西に別れた。

〈以後アタック隊の記録〉

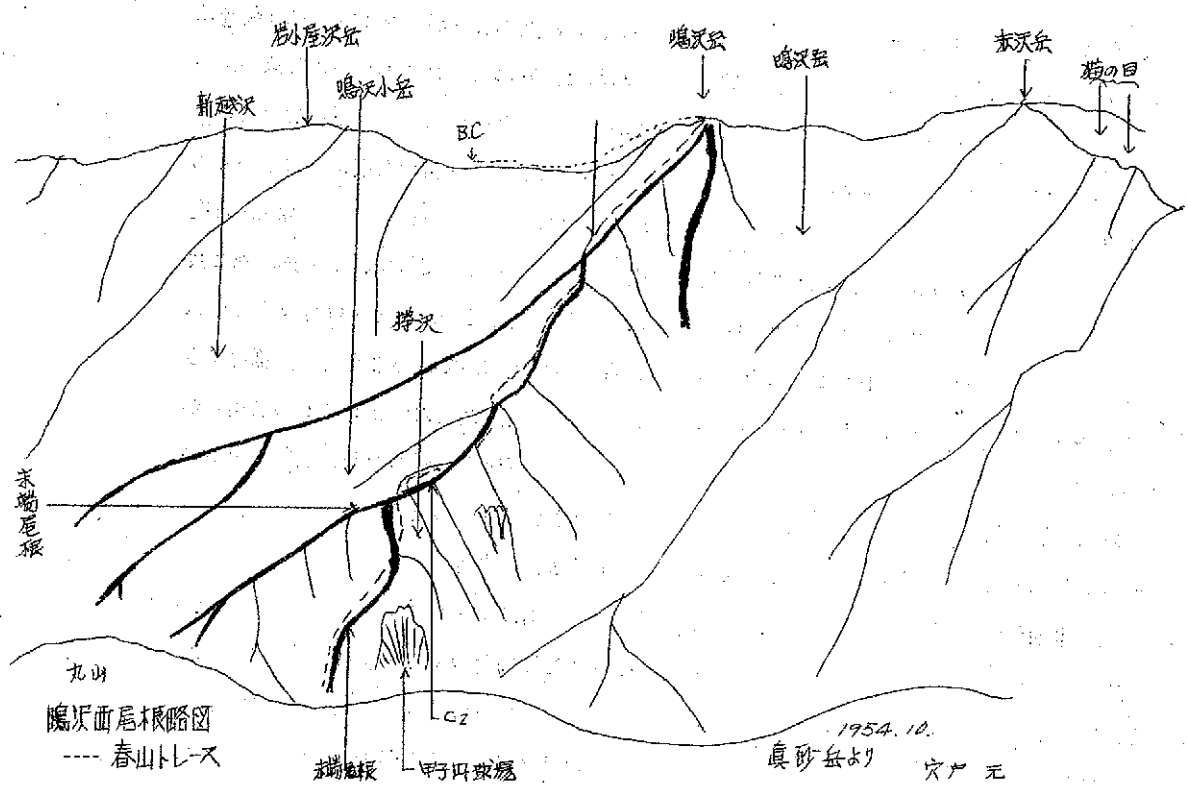
遂に降り出した雨にずくずくに濡れたアタック3名は吊越地点を後にした。濁流から灰色の空に吹い込まれている鳴沢の壁が、鳴沢の左岸から下流へとつづき、本流の左に転ずるに沿つて折れ込んで視界から去つて行く。右手は黒々とした赤沢の壁が根元に雪を蓄え、それが堤になつて立山側と同じふうに濁流につづく。そしてこの壁は鳴沢右岸へと移つて行く。ここには赤沢尾根に鳴沢から登るわずかな、しかも唯一の可能性がある所のように思われるが、実際に取りついたら例の不安定な雪にさぞ悩まされることだろう。

私達は、本流左岸の雪の急斜面を内蔵之助沢の出合を目指してトラバースを開始した。雨のためか、気温の高いためか、恐らくその両方のためだろう雪は水をたつぷり含んだ腐れ雪でピッケルを根本まで突きさし、脚を前に出すと、足頭と膝の中間位までもぐつて、それでどうやら安心出来る足場になる。それを待つて反対側の脚を出して同じ動作を繰り返していくわけだが、下が切り立つた堤であり、その又下は折りからの雨で水かさを増した黒部であつてみれば、いやでも慎重にしないわけにはいかない。若しスリップすれば遙か下流の仙人ダムで水死体として発見されるのがおちなのだから。それでも上部がすぐ針葉樹の森林帯でもあり、デブリが余り出ていないのがせめてもの慰めであつた。鳴沢の出合から一転した所で1坪あまりの平坦な場所を見付けて少憩、ここにリユツクを置き部分的に出ている夏道を発見し、例のいやな雪面から草付きを倒木沿いにアンザイレンして取りつく（半ピッチ）更に1ピッチ同様な斜面を降り、今度はシュルンドの中を進んだ（ノンザイル）。この辺りから日が暮れ、一層行動に困難の度が増して来た。

しかし私達はどうしても出合に行かねばならなかつた。かかる雨で融けたり、くずれたりする雪の斜面は1時間でも通るのが遅ければ遅いだけ通りにくくなるので一刻も早く通り抜けるのが賢明方策であると思つたからだ。最後に濁流に突き出た岩壁を、西川の電灯に導かれてトラバース（1ピッチ）。ようやくにして7時出合についた。

夏道ならば桟道と河原を通つてたつた30分ばかりの行程を正味3時間もかかつてしまつた。雨は止んだがずくずくに濡れた私達はふるえながら不二家のソフトドーナツを食べた。油で揚げたドーナツはかさかさもせず、つめたくもなく、おいしいはずであるが3つも食べる気がしなくなつた。

内蔵之助沢の左岸を少し登り森林帯の最下端の一かかえもあるような針葉樹の根元をならしてテントをはつた。急斜面ではあるが森林帯である上に積雪は案外少いし、その上用心に大木の根元を選んだので雪崩には絶対安全な場所であるが、やはり気分的に快適なテン



ト場というものではなかつた。

それでもラジウスが快調な音をたてて湯がわく頃にはすつかり元気も回復して、胃袋が満足する頃には既に夜中の1時になつていた。

3月31日　曇

昨夜は夜半になつてもクラストせず、元気も一向に冴えないので明日は予定の停滞とばかりぐつすり寝込み、起きた時は既に10時をまわつていた。

大阪での計画では雪崩を避けるため内蔵之助沢は昼間は歩かず、快晴の日の夕方から行動をおこすことになつていた。然し実際には宵の口にはまだクラストせず、むしろ明け方から午前9時頃までに通過するのがもつとも安全であるように思われるので、それに沿つて計画を変更した。

昨年も、今年も鳴沢尾根を行動中に毎日幾度となく雪崩れていた丸山の大岩壁が1日中ずつと静まりかえつている。もはや今年は雪崩の大きなのは出尽したようだ。しかし丸山から出ているデブリは扇状に拡がつて右岸を埋め尽し行動中に見舞れたら絶対に避けられそうにない。夏道は右岸即ちこのデブリの下にあるのだが、ここはかなりはつきりした台地を形成している。夏歩いたときはブッシュに邪魔されてよくわからなかつた地形も、今眼前にしつかりと焼きつけられる。デブリは扇の要に近い方で直角に横切つた方が安全だ

し、それに第一沢通しより楽そうなので結局ほぼ夏道通りつまり台地の上を通ることに決めた。岡田が朝食用にコーヒーをテルモスにつめるのを待つて午后4時就寝した。

4月1日

案の定、1時間寝坊したが、シラフから顔だけ出してするコーヒーとクラツカーの食事は意外に早く時間をかせぎ午前4時に出発出来た。歩いている間に東の方新越乗越の方から空が白み出して来た。今や所をかえて後立の稜線を眺めているわけだが、山肌は樹木が一面に出ていて、雪山のすばらしさが少しもない。籠川谷から見るとまとまつた美しさを見せる鳴沢岳も平面的でいささかがつかりする。ただ赤沢が猫の耳を中心に所々雪のついた岩肌を見せて周囲を圧している。しかしクラノスケ谷というところは案に相違して実に明るい谷だ。もしこれで雪崩という危険を考えないでよいとしたら私達を文句なく有頂天にさせてしまつていたに違いない。兼ねてから問題だつた内蔵之助平入口の滝も9分通り埋つていて簡単に通過し得た。もし積雪が少くて出ていたにしろ右岸にルートをとれば容易に通過出来ると信じる。夏本流から梯子段乗越えの分れ道の辺りで小休止、出合からたつた1時間40分で来てしまつた。余りあつけないのでびつくりする。流れが顔を出しているので水を汲んで飲む。"うまい"　平の中央部のこのあたりは針葉樹・岳樺があり、どこを向いても雪崩の危険は全然考えられないが、特に丸山よりがテント設営には快適に思われた。晴れていれば朝日がさし染め、雪面がギラギラと輝いて絶好の景色を展開させるだろうにどんより曇つた空には望むべくもない。それどころか真砂、立山の稜線から空模様があやしくなつて来て、7時遂に風と共に雪が降り出して来た。稜線は時々すごい風の音をさせ吹雪いているようだし、幕営することに決めた。丸山の西2281の三角点から出ている尾根をまわつた所、三田平を小高くしたような台地の上である。

4月2日　快晴

吹雪の割に気温が高くテントの中はすつかり水びたしになつてしまつた。こんな時にはナイロンテントほどみじめなものはない。つめたいシラフの中でこの朝ほど待ち遠しかつた朝はない。しかしお蔭で待望の朝日に輝くクラノスケと後立を見ることが出来た。飽かず眺めては時折シヤツターを切つて3人共なかなか出発する気にはならなかつた。梯子段乗越を通らないで直接内蔵之助源頭のカールをつめ2時半稜線に立つ。稜線間近かで鹿島槍を眺めながらラジウスで沸かした茶の味は何とも忘れがたい。稜線は風こそ強いが彌陀ケ原には天狗から室堂一越と一筋のシユプールが出て、スキーヤーたちが春スキーを楽しんでいるらしい。別山乗越には川島先輩が3人を待つていた。思いがけなかつたことなのでびつくりする。当然のことではあるが夜遅くまで四方山話に花が咲いた。小屋の屋根に

吹きつける風の音を子守歌に乾いた蒲団はあるし、すばらしい睡眠をむさぼることが出来た。後は彌陀ケ原を一目散に下ればよいのだ。

（時報8号）

1956年　冬山合宿
その1　北岳バットレス
その2　八方尾根
その3　富士山

北岳バットレス

1955年の夏、我々は北岳大樺沢に合宿バットレスに遊んだ。その冬引続きバットレスをやれとの声もあつたが、この計画は実施されるに至らなかつた。そして北アルプスの双六をベースとして計画を展開しようとしたが、天候が我に味方せず、大自然の猛威の前に我々の無力を嘆く他なかつたのである。この新しい考え方による山行も当初の計画は完遂こそされなかつたが、後に続く者に数多くの課題を残して春を迎えた。

南アルプスの冬の好天を祟つてか、数年来続けられて来た雪の黒部下廊下の井戸の底の様な重圧の下での登高が達せられた反動としてか部内には部が生れて以来伏流として流れてきた冬の北岳バットレスという問題が話題にのぼり出した。とにかく広大な大空の下、3000米の高さで、岩と雪と氷を相手にと云事は我々にこの上ない魅力として働きかけた。

夏山の報告会も済んだ9月8日のリーダー会に於てはアプローチルートとして釣尾根を使うことなど行動計画の大項が決められ、細目に関しては、偵察の結果及び文献研究に依つて決めることになつた。

秋も深まり山はとつくに白化粧した10月28日から1週間バットレスの偵察、池山小舎への荷上を目的として一パーティを送り、夏に踏まなかつたeガリー→第四尾根→cガリーのトラバースルートをつけ、BHとする池山小舎へは米30Kg、クラツカー8.5Kgが荷上げされ、多量の薪が取り入れられた。

この間にも東京塁峰会から丁重なる御教示の一文をいただいたり、雑誌クルンの小谷部氏の記録や関西学連報告などの文献などにもより計画は着々と出来上り、我々は冬を待つのみとなつた。

参加人員は2年部員以上14名が予定されていたが、合宿直前になつて流行性感冒に罹病するもの多く、最後的には5名となり（その外OB2名）先発の5名は23日篠田先生や先輩方に送られて大阪をあとにした。

メンバー

西川元夫（CL）　村瀬泰弘（SL経理）
樋下重彦（装備）　山田良平（食糧）
大井孝和（記録）　広橋　茂（OB）
関本靖裕（OB）

合宿中の天候

１２月２４日	晴　トンネル出口から見た北岳にはガスがかかつていた。
１２月２５日	晴　午前中稜線は依然ガス。
１２月２６日	快晴　稜線は強風
１２月２７日	快晴　弱風　１５時頃一時巻雲拡がるも日没後再び快晴、風が吹き出す。太平洋側は終日雲海。
１２月２８日	午前中快晴、太平洋側雲海午後鉛色の空となり、１５時頃一時雨。
１２月２９日	２時より９時まで降雪、その後季節風猛烈に強くなり快晴となる。
１２月３０日	快晴、夜半より降雪。
１２月３１日	午前中晴、太平洋は雲海、午後よりガス。
１月１日	晴、午後巻雲出る。
１月２日	高層雲の曇り、１９時より降雪。
１月３日	晴、巻雲。

行動概略

１２月２４日

身延線の一番で甲府着７時４５分。自動車の交渉に手間取り甲府通運の大型トラック１台をチャーターして９時４５分駅前より荷物諸共乗込む。市内はシートをかぶつたまま通過、町はずれまで来てもう出てもよいとの合図で全員顔を出すと富士が直南に我々の壮途を祝福するが如く仰がれる。第二のトンネルを出て登山の道の分れる所で自動車を降り昼食、予想していた雪は全くなく拍子はずれだ。鮎差で一橋大学の撤収して来たのに出逢い、荒川小舎には国学院大学が下つて来ていた。上では１０日間以上悪天候が続いていたらしい。

甲府駅（０９４５）→夜叉神隧道（１１１０～１２００）→鮎差（１３３０）→釣橋（１５００）→荒川小舎（１６００）

１２月２５日

起床５時、７時出発、各自４０Kgの荷にあえぎながらもよく頑張つて急坂を登り切る。坂の氷には滑つて消耗した。下つたパーティのラッセルが使えて大いに助かり昼過ぎに池山小舎に着く。池はきれいな雪原となつている。秋につくつた薪もかなり残つていた。15時より西川、村瀬、樋下の３人が荷上に向う、２５００位迄登つてデポし電灯の灯で小屋に帰る。

荒川小舎（０７００）→急坂上（１１４５）→池山小舎（１２５０）

池山小舎（１５００）→デポ地（１７００）→池山小舎（１８００）

１２月２６日

天気良く９時出発、南特有の森林中の登高が続く。寒さがひしひしと身にこたえる。梢を轟々とならしている風も時々は木々の根元

を吹き抜けて粉雪を舞い上らせ我々をちぢみ上らせる。森林限界をはずれると風が物凄い。砂払の上に立つと急に視界いつぱい飛込んでくるバットレス。満々と粉雪を蔵したガリー群。氷と雪をまとつた岩の黒い横じまの形相。思わずファイトがみなぎつてくる。釣尾根ではさんざん雪煙に叩かれた。

キャンプ地は２９５０のピーク直下の台地でテントは南北に１列に設営する。

後発の広橋、山田は荒川小舎に入る。

本隊

池山ＢＨ（０９００）→デポ地（１１００）→砂払の頭（１３００）→２９５０のピーク下（１６００）

後発隊

夜叉神（１０００）→荒川小舎（１４００）

１２月２７日

風もおさまり快晴、気持の悪いほど好天が続く。関本、樋下、大井はデポ地からの荷上、西川、村瀬がバットレス取付まで偵察に向う。秋の偵察により、第５尾根のトラバースにはとにかくｅガリーのカツオブシへ到達しなければならない。８本歯コル附近の地形は複雑で最初釣尾根を登つてｅガリーを直接上から下つてみるところが少し下つてみるとラッセルが腰まであり、その上積雪が不安定で表層雪崩を記す始末。危うく逃れこのルートを諦めた。この後幾度か釣尾根からｅガリーに下るルートを試めしてみたが、なかなかこれはと云うのが見付からない。陽も傾き今日はこれまでと釣尾根を下つていくと下にそうなのが眼につく。八本歯のコルから頂上側へ数えて３つ目のコブから出ている沢だ。とにかく明日の事だとテントへ戻る。頂上側から八本歯コルへの下りに２０米のフィックス。荷上に下つた３人もすぐ近くまで登つて来ていた。日もとつぷり暮れてから後発隊の広橋、山田が到着。これで全員７名となつた。午後巻雲が拡がつていたが、この頃には再び快晴、ふる様な星空の下、釣尾根に３つ並んだテント、風が吹き出す。

偵察隊

ＡＣ（１１３０）→ＡＣ（１５３０）

ポツカ隊

ＡＣ（１０５０）→デポ地（１２００－１２５０）→ＡＣ（１５５０）

後発隊

荒川小舎（０７３０）→池山小舎（１２１５～１２４５）→ＡＣ（１９１５）

１２月２８日

この日も午前中は快晴だつた。アプローチルートの偵察に西川、村瀬、山田、間の岳へ関本、樋下、大井、テントキーパーは広橋。

昨日の沢を先ず２０米ばかり下つて左へトラバース、小尾根へ出て雪を落しながら下降とトラバースを繰返す。とうとうｅガリーに下りついてｅガリーを仰ぐと幸運にもカツオブシの２０米下だつた。もう一息と第５尾根のトラバースにかかるとたんに雪が悪く無情にも岩がピッケルを拒む。秋の赤旗を発見

してルートを確認、陽は既に釣尾根の彼方に没し、気温がグンと降るのを覚えている。

間の岳隊は釣尾根より稜線に上る。稜線は雪が飛び去つて夏道が出ている処もあつた。間の岳頂上附近は氷となつていた。風は強く大井は中の岳の先より引返し、他の2人は間の岳頂上まで行き北岳の頂上へよつて帰幕する。

この夜、テントの中では間の岳の話にはずむ。ラジオの天気予報は気圧の谷の接近により明日の天気の悪化を報じている。第5尾根のトラバースルートもやつと半分つけただけだし、もう2日晴れてくれればと祈る。天気のくずれないうちに是非とも攻撃を終えたいものと気ばかり焦る。新雪が降ればトラバースを主とするアプローチの条件が悪くなる。天気予報の外れることを祈つて一応明日を第4尾根のアタック日と決め、それがすんでから第2尾根だ。休暇の都合から関本OBと体の不調の大井は明日下ることにする。

偵察隊

AC(1130)→AC(1530)

間の岳隊

AC(0820)→稜線(0950)→間の岳(1300〜1315)→北岳(1550)→AC(1640)

12月29日

山田、大井は2時に起きて朝食の準備、4時には出発準備整つたが、その頃より雪が盛んに降り出す。残念ながら出発は見合さないわけにはいかない。そうと決まると急に寒気が身に泌みて靴をぬいで寝袋にもぐり込む。5時頃からは季節風が烈しくなりテントの支柱を支える始末。夜明けと共に雪は止み快晴となる。しかし大樺沢から吹上げられる雪のため、テントはみるみる埋つていく。とにかく、こう風が激しくては岩も登れないと諦める。早く済ませた夕食後、「明日こそ!」と朝食のスープをつくりザイルを調べてシュラフに入る。

下山隊　AC→

12月30日

アタック　西川、村瀬、サポート　広橋、樋下、テントキーパー　山田

5時30分、釣尾根を辿る4つの電灯、寒さは厳しいが幸いな事に風がない。細く鋭い月が東天にかかり背中のあたりの興奮をしずめてくれる。やがて東の水平線は真紅にそまり、富士が黒々とシルエットを現わす。黄金でふちどられたバラ色のパットレス、サポートのラッセルの後をアタックが続く。

案じていた様に、第5尾根のまだルートをつけていなかつた残り半分は雪が悪くて難渋しdガリに着いた時は10時を廻つていた。ここからサポートの2人はアンザイレンして引返す。アタックの2人もここでアンザイレン、30米2ピッチ下りぎみにdガリをトラバースして左岸にかかると、ここは南に面しているので、岩上の雪は極めて不安定、ベルグラに強引にアイゼンをきかせたかと思うと

ガリッとすべる。そのうえ第4尾根からの小落雪が絶えまない。仰ぐ大逆層の岩は、のしかからんばかりにマツチ箱付近で天に消えている。第4尾根のトラバースはアンダーホールドの2ピッチ半でcガリの滝上に出た。冬なればこそである。まだ天気は大丈夫。既に11時30分。次にcガリを50米登る。ラッセルにあえぐ息を静めて更に第4尾根へつき上げている小ガリを1ピッチつめた。この上半では、雪が不安定に岩に乗つている状態でトップを大いに苦しめる。リッジへ出てマツチ箱の第2コルまでは問題なく、スタカットで順調に登れた。この上のオーバーハングにちよつと手こずり、打ち残してあるピトンにアブミをかけて、グツと上がるが手一杯の所にある小さいホールドには氷がついていて一度かけてもジワジワと手は滑つてゆき墜ちるのが落であつた。その都度、懸命に確保するセカンドは、いやと云う程頭から雪をかぶせられた。dガリ側へは30糎位の雪庇が出来ていて、リッジは左右華々しく切れ落ちている。一息入れて仰ぐ空にはいつの間にか暗雲が張りつめ、2人を一層不安にする。釣尾根からの仲間の声に励まされ再び体勢を整え、最後の手段と直登をやめcガリ側をからむことにする。拾縄をピトンに通して、これにぶらさがり一つの振子となつて一枚岩を渡るが、雪のためホールドがわからない。アイゼンが「ガリッ」と音をたててすべる。その内に力尽きて戻つてくる。

しかし、遂にホールドを確保することができた。とにかく、この第2コルの通過に1時間もかかつたため、第3コル上の雪壁を明るい中に抜けきることが不可能に思われてきた。第3コルへは懸垂で下ることにして、雪を掘つてピトンを打つ。その中に陽もとつぷり暮れる。第3コルへは18時。ビバークだと悲壮な決心をして、釣尾根の仲間に発光信号で知らせた。

サポート隊は15時アタツク隊を頂上に迎えるためにACを出たが、途中マツチバコに居る2人を認めて、これでは日のある内に頂上到達は望めないから多分ビバークだろうと判断した。しかし、一応17時に頂上にあがり15分ばかりアタツクを激励してACに下つた。この夜テントに当る風は特に激しく、夜半より雪さえ降る始末で第4尾根の雪と岩の間で朝を待つている2人の事を思つてまんじりともしない。ビバークの2人はツエルトを打つ風雪におびえながら、明日の天気を願い、時計をにらむ。

アタツク

AC(0530)→dガリ(1040)→cガリ(1130)→第2コル(1630)→3コル(1800)

サポート

AC(0530)→dガリ(1040〜1100)→AC(1315)

AC(1500)→北岳頂上(1700)→AC(1810)

12月31日

雪もやんだらしい。じつと風の音を聞いているのはたまらなく寂しいので、5時になるや否や携燃に火をつけて、暖をとるついでに湯をつくる。つけたままだつた電灯も線香の灯のようになつた。1時間かかつてテルモスに半分できた。風もおさまり静寂のうちにバットレスの夜が明けて行く。ツエルト越しに外の雪をさわつてみると昨夜の新雪は10糎位で案外少い。陽がさして来ないので恐る恐る顔を出して見ると、堂々と晴上つているではないか。はるか東の空が陽の光をさえぎつていたのであつた。ふり仰ぐと中央稜が圧倒的だ。7時に行動を再開。ここから上は夏なら50米ほどつるつるのカンテとなりdガリ間のクラツクを登るのだが、今はベッタリと雪のついた壁となつている。ここの雪の状態が悪ければ極度に困難な所となろうと云う事はACを出る時からの一致した意見であつた。幸にも昨夜の降雪が少なかつたため、雪は安定していてピツケルが快適にさき、この壁は2ピツチで片づけた。さらにもう一段、トツプが雪を払いながら岩を登ると、再び雪の斜面へ出る。そして傾斜は徐々に緩るくなり、頂上までキツクステップの登行が続いた。

テントの3人も9時に食糧や飲物を持つて攀つて頂上に向う。途中、中央稜南面直下をトラバース気味に登つている2人を発見、ほつとする。

ヤツケも吹通す冷い西風の頂上で5人が互いに固い握手を交したのは正午であつた。いつの間にかガスが周辺の峰々を包んでいた。

テントへ戻れば、登攀の話に暗くなつたのも忘れる。風もなく、平和な1956年を送る、螢の光の歌声。

アタツク

第3コル(0700)→頂上(1200)→AC(1300)

サポート

AC(0900)→頂上(1130〜1200)→AC(1300)

1月1日

元旦の朝も静かに明けた。

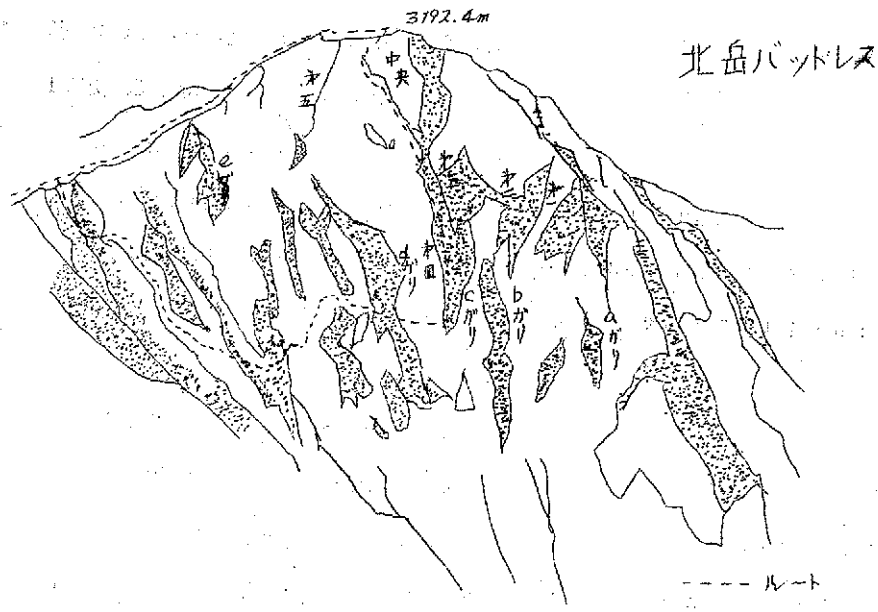
村瀬が凍傷にやられているし、他の疲労も回復していないため、昨夜の協議で今回の第2尾根登攀計画を放棄することに決めていたので、久し振りにゆつくり起きた。樋下がテントキーパーで村瀬が休養、広橋、西川、山田が間の岳へ向う。風も穏かで、のんびりと稜線を辿る。

AC(1030)→間の岳(1345〜1415)→AC(1630)

1月2日

珍らしく曇つている。予定通り撤収する。例の急坂の下りではさんざん苦しめられた。荒川小舎は超満員、往きにデポしておいた食糧や、こわれたテルモス、それに衣類の包み等全部無くなつていた。少々気分をこわす。

AC地(0930)→池山小舎(1130〜1330)→荒川小舎(1545)



行　動　表

日	夜叉神		荒川	池山	AC
24	→	5 →			
25			→ 5	3 ←	
26	→	2 →		5 →	
27			2 →	3 →	← 2 偵察
28					← 3 偵察及び間ノ岳行 ← 3
29				← 2	停滞
30	← 2				← 2 アタック及びサポート 2
31					← 3 〃 〃
1					← 3 間ノ岳行
2			←	← 5	
3	← 5				

1月3日

夜叉神トンネルからふり返えると、昨日までの山々は白銀に輝き、真白な雪煙を吹き込んでいた。

荒川小舎（０９４５）→鮎差（１１３０～１２００）→トンネル入口（１３５０）→出口（１４１０～１４４５）→芦安（１５４５）。

〈後　記〉

装備、食糧共今回は新しい試みはなかつたが東京製鋼より寄贈されたマニラザイル２本を使用した。ガソリンはラジウス４号に対して４リツトル罐４つ、計１６リツトル荷上げしたが、２リツトルばかり残つた。アタツクの帯行した用具はザイル３０米１本、カラビナ５、ロツクハーケン１２、アイスハーケン５、ハンマー２、捨縄３、ピツケル２、アイゼン２、わかん２、及びツエルトで、ロツクハーケン６、捨縄２を消費した。

今冬は天気にめぐまれすぎて何だか物足りない様な気がしたが、愉快に過すことができた。リーダーの未熟なため、アプローチのルートをつけるのに、多くの貴重な時間を費してしまい、とうとう第５尾根トラバースのルートの半分を未確認のままアタックに移つてしまつた。このため第４尾根でビバークを強いられるという結果になつたのであるが、当時の心境としては、それ迄幾日か続いた好天に明日、明後日の好天まで期待して、更に１日偵察のために費す気にはなれなかつた。

アプローチルートとして今回の第５，第４尾根をトラバースするルートは雪の状態でかなりの緊張の連続だつたが時間的にも悪くないルートと考えられ、釣尾根の２９５０のピークからｃガリの第４尾根取付まで２時間半もあれば行けるだろう。だから釣尾根にＡＣを置く場合は第１尾根，第２尾根や中央稜の攻撃にも有力なルートとなろう。一般に積雪期のバットレス、アプローチルートとしては大樺池又は釣尾根にベースを置いてバットレス沢→ａガリ→中央バンドのいわゆる夏のルート、掠奪帯から直接ｃガリ又はｄガリの雪壁を登つて中央バンドに登るルート等が説えられている。

何れにしても北岳バットレスの様にＡＣ迄もＡＣからもアプローチの長い所で苛酷な登攀を行うには、それに備えての体力の消耗を防ぐことが肝要であることを痛感した。

今冬は出発直前になつて流行性感冒に罹つて参加を辞退する者多く最終的には半数となつた。このため装備・食糧の準備に相当混乱が予想されたが、責任者の懸命の努力によつて支障一つなく、満足に山行を終らしめてく

れた。又ボッカにおいても順調すぎる位順調に進み、これらの点においても、今回の山行は計画は大幅に縮少され、やはり数々の反省は尽きないが一応の目的を達したものであつたと考える。

最後に、終始有益なる御討論、御示唆、御援助を与えられた篠田教授、諸先輩方に厚く謝意を表する。

（時報３号）

１９５７年　春山合宿

烏帽子小屋から黒部上廊下偵察

１９５７．３．２４～４．４

参加者

Ｊ３　岡田博司　ＣＬ　食糧　ＡＣ隊

Ｍ６　宍戸　元　医薬　写真　ＡＣ隊

Ｍ２　乾　正　装備　ＡＣ隊

Ｔ１　山本信樹　食糧　サポート

Ｔ１　熊清喜雄　食糧　サポート　時間記録

Ｅ１　野田憲一郎　食糧　サポート

Ｐ３　森川和子　装備　サポート

Ｌ３　一山幸代　装備　サポート

計画の決定するまでの経過

1.　３月に入つてＣＬ西川は卒業実験が多忙で、本合宿に参加しない事が決つた。来年度のＣＬは未だ決定されなかつたが、それはさて措き、今回は岡田が代つてＬをやることにして、村瀬、四方等と力を合せて合宿の計画、準備、実施を引受けることになつた。それ故、岡田は先ずメンバー１５名程度を考え、計画の概要を建てんとした。

だが、村瀬は見学旅行を抜けられないので、合宿参加を中止し、全計画から手を引く事になつた。ともあれ、上級部員、岡田、宍戸、四方、樋下、２年部員山田、飯田、乾、渡辺等の参加を見込んで計画を進める事にした。

2.　阪大山岳部は今後、黒部源流の山々や黒部上廊下をやらなくてはならないと云う気持は可成り確定的なものであり、今春はまず、黒部上廊下横断の為の偵察を主目標とする山行をやろうとそれが部の現状から考えて最も適当な事と考えられた。

ところで、右記のメンバーからすれば、いたずらに大人数でするよりも２パーティに分れて一つは獅子ケ原から五色を越えてスゴ小屋に入り越中側からの偵察、一つは烏帽子から赤牛に至り信州側から偵察と云うことが考えられた。（後から考えれば右記の部員が全部揃つていたとしても果して可能であつたか疑わしい。）だが上級部員が揃わないならば烏帽子から１本で行こう。そうなればテント２つを出して赤牛岳を越えて黒部上廊下の核心を目指して下降し得る可能性がある。又烏帽子岳から東沢にテントを出すのも良いであろうと考えられた。

この間参考にした文献は、三高報告、立教

報告、黒部（冠）、ＤＡＣ報告等であつた。

3. 3月も中旬となつた。四方は風邪がこじれて合宿は不参加になるであろうと表明した。宍戸、山田、飯田、渡辺は在阪しない。ここに至つて唯一の事は彼等の連絡を待つことであつた。各係は在阪者をもつて構成したが、メンバー確定しない以上準備は概括的な事以外手のつけようがなかつた。

全員と連絡がとれたのは3月２０日頃であつた。

樋下は風邪、山田も風邪、そして飯田、渡辺もそれぞれ合宿不参加を表明した。そしてここにメンバーが確定したが、雪山経験者は2名、新人4名と云うのがその内容であつた。3月も下旬になつた。私達には代る計画がなかつた。ともあれ、小規模ながら従来の計画でなんとかやれるであろう。そしてそうする以外に仕方がないという気持であつた。

計　画

大町—葛温泉—濁小屋—（ブナダテ尾根）—烏帽子小屋

バスが何処まで入るか明らかでなかつたが、実働4日あれば烏帽子小屋に達し得る。新人及び女子部員は烏帽子小屋に2，3日滞在して下山させ、残る3名のみで東沢乗越にテントを進め、赤牛岳を往復する。6日あれば充分であろう。日が許せば東沢へも下つてみたい。だが、宍戸は6日にはどうしても帰阪しなければならない。

食　糧

人数が不確定な以上、行動計画も不確定である。それ故、短時日に計画を樹て、買付、梱包を為すにはどうしても経験者がこれに当らねばならないから、L自らこの任を引受ける。

あらかじめの献立表をつくり人数の都合で適宜にこれを加減する。餅の使用は前以つて依頼することも出来ないので取止め、濁までは米、稜線上ではパン１本で行く。昼食はクラツカー。荷物の様子を見て、昼食にみかんの罐詰を使用した。

装　備

幕営具はナイロン2号テントのみで至極簡単であつた。テントは可成り沢山損傷があり、森上嬢が修理に当つたが、もつと丁寧にやつてもらいたかつた。

個人装備——一般にアイゼンの手入が悪い。上級部員でもツアツケの丸くなつたアイゼンを持つてくるようでは困る。

方　式

なんといつてもメンバーの内容が充分な隊員配置を許さない。時間的制約があり、スムースに荷上げを完了するためには、全員を長く稜線上におく余裕がない。それ故、今度の様な非常識とも云える方式を採ることになつた。即ち、ＢＨに隊員を残すことなくＡＣを進める事は危険である。又、新人、女子部員

のみで下山させることも問題がある。

メンバーが良ければ、かような問題が起りはしないが、かかるメンバーであればそれに適した山行があり、方式があるのだ。私達はあまり黒部上廊下に固執し過ぎていると云う事が、客観的に見て云えるのではあるまいか。

記　録　　岡田博司　記

3月23日

18.45　大阪発（遅発）

多数の見送りを受けて全員8名、夜の大阪を発つ。

3月24日　小雪のち曇

8.05　大町発（バス）

9.05　葛温泉　河鹿荘にて荷物を配分。全荷68貫。

10.20　葛温泉発

11.32～12.25　昼食

15.20　濁小屋着

20.00　就床

宍戸、大町で仕事があるために遅れて出発。荷を残して7名で行く。バスはやつと葛温泉まで入る様になつたらしいが、雪は非常に多い。濁沢の小屋は一部屋だけが可成り良く、風もあまり入らない。

3月25日　薄曇一時小雪

5.30　起床

9.00　小屋発

10.00　ブナタチ尾根取付点

14.30　宍戸、岡田トラバースより上の偵察に行く。他は小屋に帰る。

15.20　小屋着（乾、山本、野田、兼清、森川、一山）

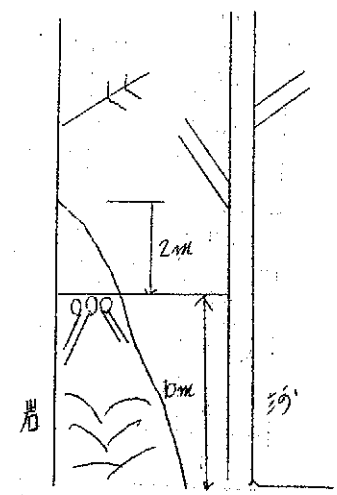
17.00　宍戸、岡田帰着

20.00　就床

三角点へ共同装備、食糧を荷上げすべく出発する。こわれかけた橋で右岸にわたり200米程で取付点に達する。赤布が木についていて、ようやく判明したが、取付点のトラバースが非常に雪のつき方が悪い。空身でトラバースルートにラッセルをつけて見るが、可成り困難な様子なので他にルートを探す。しかし見つからず、結局夏道通りのトラバースをする以外に方法はない。

取付点に雪洞を掘り荷物を入れ、7名を帰らし、岡田、宍戸でナイロンザイルをフイックスし、上部をラッセルを兼ねて偵察し、悪場のないことを確めて帰る。この様な状態が登り気味に40米ばかり続いている。

年によつてはこの時期では木の桟道が露出し



行　　動　　表

予　定　行　動　表　　（仮案）

	濁小屋	三角点	烏帽子	東沢乗越	赤牛
1	8 →				
2	← 8				
3	8 →	→			
4		← 3	→		
5	←	← 5	3 →		
6				← 2	
7			← 3		
8	←	← 3			

行　　動　　表

1957	葛温泉	濁小屋	取付点	三角点	烏帽子	野口五郎	東沢乗越	赤牛
3. 24	8 →	→						
25		← 6	← 2					
26			停					
27		← 8		←				
28		8 →	→	→	→			
29	←	←	←	←	← 3 →			
30					← 5	3 →		
31						停		
4. 1						停		
2						停		
3						← 3		
4	←	←	←	←	← 1			
					← 2			

切つていることもある。（例・京大・烏帽子→剣（3～4）

3月26日 吹雪

全員停滞

河原の雪を巻きあげて風が吹く。薪作りをする。

3月27日 快晴

6.00 起床

8.00 出発

8.47 デポ着

9.35 デポ発

11.40 昼食

14.45 2200米三角点デポ

15.30 出発、下山

17.25 小屋着

21.00 就床

荷は軽く、雪はかなりしまつていてラツセルは比較的楽である。しかし三角点まで急傾斜の部分は幾つかあり、慎重にラツセルして行く。森林帯で雪崩の危険はまずないと見た。

3月28日 晴 上部でガスが出る。

6.00 起床

8.40 出発（第1隊）

9.00 出発（第2隊） 不必要品を東電小屋にあずけ後片付け。

11.40 昼食。前日より高所。

12.40 出発。

13.00 サポート 荷の一部を加える。

13.35 発

15.55 烏帽子小屋着

20.30 就床

depot地より上部にも急斜面や細くやせたナイフリツジ、不安定なトラバースがある。（昨年、同大スリツプ事故ありと聞く。）烏帽子小屋は少し雪が入つていたが、先に入つたパーテイがあると見え居住性良好。丹念に除雪し、ゴザ及びふとんを使用し快適なり。

3月29日 快晴 風なし。

5.30 起床、9.50 出発、10.30 烏帽子小屋、10.45 発、11.05 烏帽子小屋、11.20 下山出発、12.10 depot昼食、13.00 下山隊出発、14.10 トラバース上部、14.40 トラバース下部、15.10～16.08 濁小屋、18.30 葛温泉、20.20 タクシで大町へ、21.00 大町着、22.17 大町発、13.30 荷上げ出発、15.40 烏帽子小屋着。

サポート隊の山での生活はこれで終りである。全員で烏帽子岳へのぼり、後下山せしめる。岡田、宍戸、乾は荷を小屋に上げる。明日の天候は疑わしい。

3月30日 曇 烈風

9.00 小屋発

14.00 野口五郎岳頂上

16.00 テント設営終り、テント内に落着く。一方下山隊は、9.37 京都着。

ちよつと出発を考えさせられる様な天気であつたが、東沢のむこうに見える赤牛岳の姿に励まされて出発する。

歩き出しは可成り不安だつた。おそらく行

動出来るギリギリの天候であろう。岡田、乾、宍戸の順でちよつとした重荷にあえぎながら、雪と岩のコンビネーションを時にはもぐりつつ、時には風に吹きとばされそうになりながら三ツ岳を越えた。小さなピークを幾つか越して野口五郎頂上に達したが、あたり一面を急速に動くガスにまかれ、今は黒岳も見えない。東沢乗越迄と思つたが、こう風が強くては、コルの状態如何でテント設営も困難であろうと考え、頂上附近に設営する事に決める。頂上より50米手前の凹地にテントを張るが、あたりはシユカブラが発達し風の強く当ることを裏付けているが仕方ない。有名な東沢から吹き上げてくる風の強さは百も承知であつた。

3月31日　風雪

停滞

昨夜から猛烈な風が吹いた。テントが今にも破れそうにはためいていた。最悪の事態を考えると不安であつたが、陽気な話題で気分をまぎらわせた。テントが雪で少しうまつた。N 2号テントは側面から雪におしつけられると3人は少し窮屈すぎる。

4月1日　風雪

風も雪も間断なく止まない。ラジウスをたくと、蒸気が、テント内部につき、風であおられ、たちまちシユラーフの上に積る。オーバーシユラーフも凍つてバリバリである。非常に温度が低いらしい。日暮の時刻になると、悲惨な気分が胸に滲み込んでくる様でたまらない。紛失したナイフで乾のエアーマツトに穴があく。3名とも熱がある。そして身動きもせず、テントに閉じこもつていると体の調子が不安である。それでも明日天気になれば更にテントを進めるべきか、或は又、行けるところまで往復してくるか、等考えてみる。

4月2日　風雪

朝薄陽が差している様に思つたが相変らずの天気である。もう1日の辛抱だろうと自らなぐさめてみる。外に出て見て少し動くも息切れがして苦しい。熱はあまり無いようだが少しうんざりして来た。明日が快晴なら別だが、もう烏帽子小屋に帰りたいと思う。誰の気持も同じだろう。食糧もそんなにゆとりがない。日に制限もある。それよりも第一に、こんな惨めな気持をいつわりの虚飾で美化しようという気にはなれない。山に敗け自分に敗けたのだ。再出発だ。

4月3日　ガス　烈風

11.00　出発

14.00　烏帽子小屋着

日はささない、だがガスの間から槍や遠くの山が見える。テント地よさらばだ。

手袋をぬらして使い物にならないので靴下を手にはめる。しかし風が通つて凍えそうだ。三ツ岳への登りで殆んどバテかけた。腹が減つてたまらぬので干ぶどうをほおばる。三ツ岳からは元気を持ちなおして烈風にあおられながら小屋に辿りつく。テントで殆んど水を飲んでいない。コツヘルに半分ほど一気に水

を飲む。

4月4日　快晴

11.00　小屋発

14.00　濁河原

14.40　濁小屋発

15.00　宍戸、乾、葛よりバスで大町へ→細野

15.30　岡田　葛温泉着　ここで泊る。

赤牛岳が素晴しく美しい。遙か遠くの黒岳からずつと手前にのびて来ているその尾根を見て馬鹿にしていやがると思つた。先日まで一生懸命、反対の方向に向つて歩いていたのだから。東沢へ真直下り、赤牛からの尾根にとりつけばすぐそこだと云う気がする。（これは可成り確実な気持である。）

宍戸、乾は細野に寄りたいというので濁から少し歩いてから別れ、1人のんびりと風景を楽しみながら下る。

凍りつく様な厳しい生活も
今は淡い夢の如く身内に潜み
燃えたつ歓喜と希望だけが
次に来る日々に輝きを与える。
Spring has come
高瀬の谷間にも遅い春が訪れて
醒みがえる木々とさえずる小鳥達にも
新しい太陽が眩しい程だ
いざ、目醒めよ。そして希望せよ！

1957年 夏山
穂高合宿報告

岡田博司

昭和32年度の新人部員数はかつてない程増加した。このことは直ちに夏山合宿に影響し、参加者総数34名という合宿になつた。このためテントが不足し、殆んど使用に耐えぬバカ天までも動員し、体育会からも一部を借りて間に合わせた。

計画の概要は、合宿用の荷物を全部かつぎ徳本峠をこえる。これは喧騒な夏の上高地をさける意味と、又非常に良いトレーニングになると考えたからである。そして横尾にBCを置き、全員で涸沢を中心とした岩登りと雪渓技術の練習をし、その間1時2年以上の部員は奥又池畔にACを出して、前穂の東壁などを登り再び全員が横尾に集つてから解散し縦走に移る。大体この様な計画で、上級部員のみが別行動するのは以前から問題であつたが、始めての試みである。出発は、多人数がまとまつて設営出来る様、例年より数日早く、7月15日とした。

メンバー

岡田（L）　山田（SL）　樋下（SL）
大井　森川　渡辺　飯田　乾　山本　兼清
笠松　玉井　三宅　佐藤　田井　広瀬
村井　堀山　小野　今井　横尾　井畑
黒田　宍戸（OB）　他に産経新聞記者2

名参加

7月14日に先発3名が松本へ行き、米、野菜及びトラック運送の準備をした。

7月15日　本隊が大阪発。翌日大阪を発つ者も3名いた。

7月16日　早朝松本についてトラックで荷物を島々迄運ぶ。縦走用の荷物のみトラックで運び、合宿用の荷物は担いで徳本峠をこえる予定だつたが、島々で、上高地迄の道路の不通個所が復旧していないことが判り、全部を担いで徳本越ということになつた。荷分けの結果1人当り12～3貫となり、島々谷を登つたのである。

この結果、翌17日徳沢を出た頃には日はとつぷりと暮れてしまい、1日後からバスで入つた部員に迎えられて横尾のキャンプ地に到着したのは9時半で他のテントがそろそろ眠りについた頃だつた。

7月18日　あまりはつきりしない空を気にしながら涸沢へ行き、雪渓でグリセードの練習を行つた。一時相当に強いにわか雨があり、朋文堂とユツテの仮設テントに逃げこんだ。

7月19日　朝から雨で停滞したが、パンの梱包などが湿つてしまつた。

7月20日　2年以上の部員が奥又白の池にテントを出す日である。岡田（L）　樋下　大井　乾　飯田　山田　兼清　山本　野田の9人は新人のサポートを受けて中畠新道から奥又白の池に入つた。松高ルンゼは上部にガスがかかり、雪渓はスタスタに切れてすさまじい様相を見せていた。

奥又白の池には大阪工大、神戸大等のテントが張つてあつた。降りしきる小雨の中でドロドロの粘土の上にテントを建てた。2張のテントは離れていて、相互の連絡は不便だつた。

7月21日　天気はどうも思わしくない。昼近く天気が回復してきたので岡田は横尾へ下り、2名がテントに残り、あとはA沢—前穂へ登り、3名ずつに分れて明神四峰往復と北尾根縦走を行なつた。北尾根パーティは、5，6のコル—奥又本谷経由。明神パーティはA沢を下つた。

7月22日　曇つていたが、回復したら四峰明大ルート、B，Aフエースなどを登ろうと6人でB沢を登つた。だが四峰の下へ来ても全く見通しがきかず、四峰の登攀は断念して全員でスタスタに切れかかつたC沢に入つた。B沢には大きなクレバスがつづき、簡単に登れそうには見えなかつた。インゼルの上端でトツプが死体を発見したが、これは後に日本アルコツ会の遭難者とわかつた。ピツチを上げて、3,4のコルへ上ると20人程の人々が集まつていた。北尾根を縦走中三峰から転落されたとのこと。御冥福を祈つて折からの豪雨の中を5,6のコルへ向かつた。コルから下り、1人が転倒して手などに軽傷を負つた。グリセードの失敗である。ACへ帰ると、横

尾から宍戸ＯＢ及び平田が連絡に来ていたので、負傷者をつれて帰つてもらつた。

一方横尾に残つたメンバーは

7月21日　蝶ケ岳より常念岳、一の俣縦走を行う。天候は晴れてはいたが穂高は上部はガスに隠れていた。常念迄は何のことはなかつたが、一の俣の下りはかなり悪かつた。

7月22日　奥穂高往復、天候は朝から思わしくなくザイテングラードから穂高小屋につくと、激しい雨となり頂上の展望もきかず一同ずぶぬれで帰る。

7月23日　奥又白のＡＣを撤収し、横尾へ下ると、涸沢にテントを張つていた女子部員の1人が北穂付近で足に負傷したという知らせが入つており、くわしい事がよく分からないので、奥又白から下つてきた3年生が直ちに岡田（Ｌ）と共に涸沢へ上がつた。他の部員は久しぶりにちらちらとのぞく青空にシュラフを拡げていた。宍戸ＯＢは、大阪へ帰る。

7月24日　合宿最後の日、涸沢との連絡を兼ね、どうやら1日もちそうな空模様の下を全員で北穂に登つた。途中で下つてくる女子部員に出合い、大したこともなかつたことを知つた。滝谷はその険悪な様相をガスの中に隠見させていた。

奥穂の小屋の前で全員は2パーティに分かれ、直接ＢＣへ帰るメンバーを見送つて8人が奥穂の頂上へ登つた。そしてグリセードで涸沢へ下り、ＢＣに帰つたのである。晩は、最後なので食べきれぬ程ぜんざいを作り、キャンプファイアを囲んで歌を唱つて合宿を終えたわけである。

この合宿では梅雨の終りが例年より遅れ、終に一度もザイルを結ぶことはできなかつたが、それなりに我々は新しい経験をした。我々はこれを足場としてより優れた山行をするように努力し、この合宿で得られた成果を生かして行きたいものである。

（時報9号）

1957年 冬山合宿報告

1. 双六岳—赤牛岳往復
2. 槍平新人合宿
3. 仙丈岳女子合宿

1. 双六岳—赤牛岳往復

岡田博司
宍戸　元

春の黒部下廊下横断に成功した私たちは、積雪期の上廊下周辺にすこぶる興味がわいてきた。冬は記録に乏しく、特に戦後は殆んど文献のないことも、一層魅力を増すものとなつた。

そこで上廊下に足をふみ入れる前に、まず冬の赤牛岳、薬師岳に目標をおいた。

第一回は、蒲田川左俣から双六小屋に入り、ここをベースに途中ＡＣを出しながら、赤牛、

薬師（裏の平—薬師沢経由）を同時に2パーティでアタックしようと考えた。（55年12月～56年1月）ところが、夏ののどかな双六周辺とはうつて変つて、徹頭徹尾、猛烈なラッセルと強風に悩まされ、双六から三俣連華まで数時間を要したほどだつた。更に行動期間3週間中にたつた2日しか晴天に恵まれず、三俣連華小屋で10日近くも籠城を余儀なくされたことも禍いして、わずかに、笠、鷲羽岳往復と黒部源流の偵察にとどまつた。この失敗から双六周辺のスケールの大きさを知らされるとともに、槍、穂高より高度が低いにもかかわらず、黒部を通して日本海の雪と風が直接吹きつけ、すこぶる条件の悪いところであるということがよくわかつた。

今回は計画を赤牛岳一本にしぼり、少ない晴天を生かすため1時間でも行動出来る天気があれば、1時間だけでも行動することにした。双六周辺は、地形の関係からテントをはる場所は比較的自由に選べるからだ。食糧、装備もすべて、このような行動に応ずるように計画された。次ぎに問題になるのは、大野間沢の通過で、これに対しては本文に詳しく書いた。第3にはこのルートでは逃げ道がないことから、一旦吹雪に閉じこめられると前回のような苦しい経験を繰り返さなければならない。それには充分な食糧が必要である。メンバーは岡田（L）、兼清（装備）、山本（食糧）、野田（食）、米林、平田、広橋（OB）、宍戸（OB）の8名で、大野間乗越まで村瀬（L）、以下の新人によるサポートがついた。しかし、これはむしろサポートというよりは、新人のトレーニングといつたものである。他に11月に双六小屋に40貫ばかりの装備、食糧を荷上げしたが、小屋から先では完全にノンサポートでやつた。将来はポーラー・メソッドでもなく、ラッシュでもない夏山のような形式で冬山をやりたいと思つている。今度の山行では双六小屋から先で、僅かだがそれが実行出来たと思う。それには食糧の軽量化と、ナイロンテントを使つて行動にスピードを持たせることが必要だ。それと長期にわたつても、計画を狂わせないだけの充分な食糧、その意味で、乾燥野菜、水分を極力へらしたパンの研究など、食糧係を中心とした活動もみのがせない。なおパンについては神戸屋パンKK 東山氏の協力を得られたことも幸いだつた。

行　動　概　要

12月26日　雨

蒲田川左俣のトラック道が、左岸から再び右岸に戻つたところの飯場を借りる。ここに二俣の発電所ができるので、トラックの往復が頻繁だ。

12月27日　曇一時晴

大野間沢の末端にかけトレースをつけに行く。夜でも迷わずに歩けるようにするためだ。大野間沢は岳沢に似たカール状の広い谷だ。本流はずつと左岸よりにあるので、右岸は広

い台地になつている。ブッシユはまだ埋まつていない。ルートはこの台地をゆくのだが、ブッシユの中のラッセルはかなわない。輪カンは枝にとられるし、油断しているとボッソリとはまりこんで、足が抜けなくなる。

大野間沢へは抜戸岳の岩壁から2本の沢が出ているが、これを渡る時が最も雪崩の危険がある。それを過ぎれば、抜戸側のスケールは、ぐつと小さくなるから、危険は減る。しかし降れば降つただけ、すぐ新雪表層雪崩のおこるところだけに、油断はできない。ただ本流は岳樺はまだ埋まつていないし、この時期に大野間沢自体が雪崩れることはないだろうと考えた。

飯場（8.30）—大野間沢出合（9.45）—下の沢出合（11.15～11.45）—飯場（14.30）

12月28日　晴のち曇

満天の星空のもと午前1時半出発。大野間沢出合付近の迷い易い所も、トレースがあるから大丈夫。クラストしているので輪カンなしで昨日のところまで行けた。しかし、ここからはそうはいかない。ラッセルは股までである。

乗越で村瀬のサポート隊と別れる。彼等が小さくなるまで見送つた。ここで、トラーゲンしていたスキーをデポ。帰りまでにドカ雪がくれば、大いにこのスキーが役立つことになる。一昨年は胸までもぐつて、スキーなしではとても下れたものではなかつた。

一つのコブをこすと、もうラッセルはない。強い西風の中を双六小屋へ急ぐ。小屋の付近はいつも風が強い。雪が吹きとばされて土が見えているところもある。双六小屋は雪も殆んど吹き込んでいない。

飯場（1.30）—大野間乗越（12.45～13.15）—双六小屋（17.00）

12月29日　風雪　停滞

12月30日　風雪　停滞

12月31日　風雪　停滞

吹雪をついて、単独行者（東京学芸大学生）が三俣連華からやつてきた。烏帽子から縦走してきたとのこと。このような単独行には大胆なのか無謀なのか考えさせるものがある。

1月1日　曇一時晴

11時、晴れ間がみえだしたので出発。一昨年にくらべるとラッセルは少ない。風のわりに雪が降らなかつたのだろう。小屋からしばらくは夏道どうり進んだが、双六岳と三俣連華の最底鞍部から一旦稜線に出た。稜線では輪カンがいらないぐらいだ。

出発が遅かつたし、天気も崩れてきたので、予定の赤岳までゆかずに鷲羽乗越に幕営と決めた。

双六小屋（11.00）—鷲羽乗越（15.15）

1月2日　風雪　停滞

1月3日　風雪　停滞

1月4日　晴のち曇

午前3時出発。満月で北鎌尾根が白く光り

素晴しかつた。鷲羽岳をまいて割物岳の稜線に出ると風が強くなつた。ラッセルはここでも少ない。水晶岳のかかりで、輪カンをアイゼンに代える。水晶の悪場も雪が予想外に少く、ザイルも使わず難なく通過した。あとは赤牛までたんたんとしている。午前11時、ACから8時間で赤牛岳頂上に到着。

鷲羽乗越A.C.(3.00)—赤岳(7.15)—黒岳(7.45)—ナカノゴヤ乗越(8.35)—赤牛岳(11.00〜11.30)—ナカノゴヤ乗越(13.15)—黒岳(14.10)—赤岳(14.45)—A.C.(17.00)

1月5日　雪—時晴のち風雪

午後から晴れてきたが、初めの原則に従い撤収を始める。だが、三俣連華のピークを越したころからガスがまいてきた。風雪も強くなつてきた。稜線から双六のトラバースにかかるところで、止むを得ずテントを張ることにした。

鷲羽乗越A.C.(15.40)—途中ストップ(17.00)

1月6日　風雪のち晴

今日も、午後3時すぎ、ガスがなくなつてきた。すぐ近くに樅沢岳が見える。双六小屋まで1時間位のところだ。午後5時、小屋に戻る。

途中ストップ(16.00)—双六小屋(17.00)

1月7日　風雪　停滞

1月8日　快晴のち曇

春の様な暖かな陽ざしだ。午前9時、小屋をあとに下山の途についた。大野間沢はスキーで下つたが、特にスキーがなければならないような積雪ではなかつた。槍見温泉についたのは午後9時を過ぎていた。湯舟で去年からのアカを落とす。

双六小屋(9.00)—大野間乗越(11.30)—大野間沢出合(16.30〜17.00)—飯場(19.15)— 二俣(20.00〜20.40) トラック 槍見温泉(21.10)

2. 槍平新人合宿

記録　村瀬泰弘
　　笠松卓爾
　　田村俊秀

冬山の様な大きな合宿に、いきなり新人を参加させることは種々の問題がある。それで例年細野でスキー合宿を行ない、雪に慣れさせることにしていた。しかし冬山と同時に行われるスキー合宿に現役のリーダーが参加することは、部にとつてもリーダー自身にとつても好ましいことではない。事実毎年適当なリーダーが得られず、龍頭蛇尾に終ることが多かつた。そこで花やかで誘惑の多いゲレンデスキー合宿よりも、新人にふさわしい冬山合宿を行う必要が感じられ、今回の槍平合宿となつた。合宿の前半は赤牛隊と行動を共にし、大野間乗越までサポートし、後半槍平に入つた。メンバーは、村瀬(L)以下大島、笠松、木村、田井、玉井、田村、尾藤(OB)

関本(OB)

12月29日　5.00　起床、小雪まじりの曇天　8.10　中崎橋付近の飯場発、前日のラッセルの疲労甚しく、余つた食糧が異常な負担となり、トラックを拾う。10.30　右俣出合発、左岸のトラック道をつめて、樹林中の夏道に取付く。ここから関学先発隊の、夏道をほぼたどつたと思われるラッセルがあり、地理不案内な我々には大変な助けになつた。けれども行程渉らず、2.3の者不調を訴える。14.00白出口　ここで食糧2日分を残して他はデポすることにし、急場をしのいだ。進むにつけ谷は急峻となり、せまり来る夕闇と共に降雪激しく、新雪は踏跡を消し、事実上のラッセルで消耗する。右手に岩小屋を発見、関学の先発ここでビバークした模様。16.25滝谷出合、陰鬱そのものの風景に新人連荒涼とした面持ち。寒気と疲労に沈む一同を叱咤してランプ頼りに強行。樹林が急に切れて小屋の灯を見る。時に18.00、ラッセルなければルート設定だけで多大の消耗をなし、ビヴアークも余儀なくされたであろう。計画の細部の粗雑さがこんな時に露呈する。関学の方がテルモスの茶で我々を迎えてくれた。20.00、尾藤、関本両OB相次いで風雪の中を到着、両氏共疲労の影もない。新人連にはよい刺激だろう。小屋はたちまち陽気になつた。

12月30日　曇　7.35起床、村瀬以下新人、デポ地の荷を取りに、一方、OB両氏は槍平をつめて偵察。

12月31日　雪　午後の小康に、前日OBが見定めてくれた小屋から1時間の小斜面に向う。両OBの指導でスキーの基本を一通り。同所でテントを張り雪中露営の訓練とすることにし、両OB大汗をかいて地ならしをしてくれたが、支柱を小屋に忘れる。OB氏怒り、次いで爆笑。夕食後焚火を囲んでOBの物語、山岳部の沿革、恐怖のビヴアーク、諸先輩の豪傑伝、心暖まる一夕であつた。

元旦。朝方の風雪11.00に至り突然晴上る。遅きに過ぎるが予定通り槍に向かう。尾藤氏残念そうに稜線を仰いで下山。13.10発、シールをつけての相当なラッセルだが久し振りの晴天と白銀に輝く槍穂、笠岳にフアイトを燃やし、大野間乗越が望まれる地点で昼食(14.00)、行手に飛弾乗越、あと3時間はかかろう。天候悪化の兆、下山と決す。帰路、山スキーの醍醐味には程遠く慣れぬ急斜面に新人難じゆうす。16.30帰着。今夕テントに関本、大島、田井が入る。アタックの日は、天候の如何に拘らず、一切の用意と共に待機すべきである。

1月2日　風雪　停滞　テント交代(村瀬、笠松、木村)食糧大量に余るため、食い放題とする。

1月3日　風雪をついて関本OB下山。テントの交代に行く。今夕は村瀬、佐藤、田村、夕刻より気温急激に下がり、−20℃突破、快晴となる。月光の穂高、滝谷、妖気に満ち

凄絶である。

1月4日　（テント）　寒さで目が覚める。バーナーをつけるとたちまち暖くなる。消すと音をたててテントは凍る。なんでもないことだが、新人には大きな心理的恐怖だ。（小屋）最低温度計寒さでこわれていた。－25℃、快晴、本隊は勇躍アタックに向かつたであろう。然し我々は下山せねばならぬ。新人の気力は最早や限界である。関学の後発隊と入れ代りに11.20小屋に別れを告げる。16.30　槍見温泉に至る。稜線は荒模様になつた。

3.　仙丈岳女子冬山合宿

一山幸代

此迄、阪大山岳部に於いて、男女部員は、ほぼ同一行動を取つてきたが、今年度になつて、一応女子部員は、別個の行動を取るようになり、涸沢での夏山合宿は、その主旨に添つたものであつた。冬山合宿も同じく別個のプランのもとに行われた。現役女子部員のメンバーは殆んど実際の登山活動の機会に恵まれなかつた1年生2名、卒験、就職で多忙を極める4年生2名であつたが、冬山の性格上1年生はスキー合宿に加わつてもらい、東京の三枝OB、松木OBの参加を依頼してのメンバー4人の予定でプランを進めた。初歩的な冬山の候補地はOBの方からも挙げてもらい、いくつかあつたが、アプローチや天候から割り出した所要日数、ベースとして小屋の使える所、しかもなるだけ高い所を、といつた要件にかなつた所として最終的に選んだのは、南アルプスであり、北沢小屋をベースとして主目標を仙丈岳に置き、余裕があれば甲斐駒、アサヨの往復もする事とした。

12月の初めに偵察及びボッカを引き受けて下さつた松木OBが都合により合宿には参加出来なくなつたので、結局3人で決行する事となり12月30日、東西から伊那北に落合いバスで戸台に向かつた。

〔メンバー〕（リーダー）　三枝礼子
（食　糧）　森川和子
（装　備）　一山幸代

〔行動記録〕

12月30日　曇

戸台（9.30）—丹渓山荘着（12.00）発（1.30）—平（2.15）—北沢峠（4.15）—北沢小屋着（4.30）

戸台川に沿つて進むと丹渓山荘迄は殆んど雪もなく、秋山に入る感じ。睡眠不足からの疲れもあつてコンデイシヨンの良くない者もあつたが、丹渓山荘で休憩の後、預けてあつた米と野菜を加え、パツキングを終えて強行。八丁坂の下部はスケートリンクのように凍つていて一歩一歩足元に注意しなくてはならなかつた。ベースに予定していた県営小屋は使えそうにもないので番人の入つている長衛小屋に変更する。

12月31日　晴

小屋発（6.40）—3合目（7.50）—小

仙丈（10.15）—小屋着（12.10）

今度の合宿の主目標である仙丈に向かう。森林の間はまるで春山のように晴朗だがアイゼンをつけて稜線にかかると雪を吹きつける風が烈しい。ともすればバランスが奪われがちであり、3m程前にいる者にかける声も吹き飛ばされてしまう。その上小仙丈の付近迄行くと1人がプロテクトの不十分な所為か顔面に凍傷を起こしかけたし全員南アは初めてなので慎重を期し引き返すことにする。

1月1日　快晴

小屋発（7.20）—3合目（8.20）—仙丈岳ピーク着（10,50）発（11.30）—小屋着（1.30）

今日こそはと意気込んでプロテクトにも十分意を払う。小仙丈からの稜線はいささか長い感じもし、同時にその緊張を終らせるのが惜しいような気もする頃最後の登高となる。快晴に恵まれたピークから展望する雪の中央アルプスは遠い時代の夢のようにリリーフされている。

1月2日　風雪

小屋発（7.30）—仙水峠着（8.55）発（9.05）—小屋着（9.50）

明け方から雪が降り続いているが偵察を兼ねて仙水峠までゆく事とする。次第に風雪気味となつてくる中を仙水峠に着く。カタカタ震えながらテルモスの紅茶を呑む10分ばかりの休憩の間に先刻のラッセルは跡形もない。三校OBは御自慢のナイロンのオーバースボンの威力で先頭に立つて、腰迄もぐりながらラッセルを続けて下さる。私達はさすがにOBだとそのリーダーシップにともつかず、そのオーバースボンにともつかず、しきりと感心する。

1月3日　風雪　停滞

1月4日　快晴

小屋発（7.15）—仙水峠（8.05）—駒津着（9.20）発（9.30）—六方石（9.50）—駒ピーク着（10.50）発（1.07）—仙水峠着（1.30）発（1.37）—小屋着（2.00）

甲斐駒に向かうパーティも幾つかあり、私達は思つていたよりも容易にピークに立つことができた。往路は駒へ岩稜を直登、帰路はピークと魔利支天のコルからトラバースする。

小屋に帰つてからは野呂川に沿つてスキー沢あたり迄散策を楽しむ。

1月5日

小屋発（7.00）—八丁坂着（7.45）発（7.55）—丹溪山荘着（8.15）発（8.20）—戸台（10.30）

女子部員のみによる初めての初歩的な冬山合宿であつたが、男子部員に依存がちだと評されがちだつただけに、私達自身の手で計画を立て、私達自身の力で、初期の目標を達成し得た喜びは一しおである。この合宿によつて学んだことや反省すべき事は多いけれどこの経験を生かして今後とも自由的な山行をな

したいと思う。そのためにも技倆の未熟な私達に男子部員の方々の適切な指導と助言をお願いします。

（時報9号）

1958年 春山合宿

天狗尾根より極地法による五龍岳および爺岳

兼清喜雄

冬の赤牛岳へのラッシュ攻撃が成功裡に終り、4年部員がいなくなり部は実質的に2年1年部員で行動しなければならなくなつた。

計画がはつきり決まつたのは1月に入つてからであり、我々の積雪期の山の経験は2年部員の一部だけであり、多くの1年部員を動かす事が出来、しかも2年部員にも満足して行動出来る所としてポーラーによる鹿島槍天狗尾根から五龍を選んだ。この尾根は、54年の冬に合宿の行われた東尾根の上部から分かれている尾根で、途中に数ケ所の悪場があり、頂上までテントを上げる場合相当に困難が予想された。又合宿の決定が非常に遅く文献による知識だけであつた。

具体的には丸山小屋をBHとしCⅠを2050にナイロン2号テントと雪洞で建設し、CⅡを北尾根コル付近にビニロンテントと雪洞でCⅢを北槍頂上又は釣尾根にナイロン1号で設置する事にした。天候は1週間で3.5日動けるとして、計画日数18日で行動日数9日としアタック前後で計画に巾を持たせるようにし、アタックはCⅢ設置後いかなる場合も5日で放棄する事にした。

今春は天気が入山中良好で目標の五龍アタックが成功裡に早く終つたので次の日すぐにCⅡより爺ケ岳アタックを出してこれも成功した。又今度の計画では1. CⅠ, CⅡで雪洞の使用 2. 食糧装備の完全パッキング（キャンプ毎）3. 荷上げの合理化（各キャンプ毎に荷物を数等分）以上三つを完全に実施した。

参考文としては、岳人、鵬翔山岳会「鵬翔」101号及び吉田二郎著「鹿島槍研究」を参考にした。

メンバー

兼清喜雄（L） 山本信樹（装備） 野田憲一郎（食糧） 米林外茂男（装備） 平田彰（会計） 大島浩 田村敏秀 佐藤茂 笠松卓爾 広瀬貞雄 大工原恭 村井忠雄 平野恵一 黒田阿郎 横尾由松 岡田博司 広橋茂（OB） 西川元夫（OB）

○行動概況

3月17日 18時9分大阪発の列車で本隊15人出発、食糧が1斗カンとカートンボックス全部で32ケ約60貫であつた。車の乗換時荷物の数が多いので非常に苦労した。

18日（晴後雪） 源汲でバスから放り出され、荷物を約半分民家にあずけ他を全員で

かついで出発、途中鹿島で狩野さんの所により丸山小舎に入る。岡田さんが後から来られた。丸山小舎はあまり大きくなく市大が入つており一緒でどうにか、全員ねられる様な状態であつた。

１９日（晴後高曇）　10人がＣＩ建設に向い、６人が源汲に荷物を取りに下つた。天狗尾根は今春多くのパーティが入つており天狗街道と云えるほどの道が出来たぐらいでほとんどラツセルがなかつた。ＣＩは最初の予定では２０５０のあたりであつたが雪洞の大きなのを作ることを考慮して１８００の付近の林の中に設置しナイロン２号は使用せず雪洞のみとし阪大式で北側の斜面に一つ３人用（後に炊事用）のを作り今一つは出来るだけほつておいた。ＣＩにはＣⅡまでのルート工作隊として、岡田・山本・笠松が入つた。ＣＩへのサポート兼清・平田・大島・佐藤・田村・広瀬・平野、源汲へは野田・米林・大工原・横尾・村井・黒田・西川（ＯＢ）大阪発。

２０日（小雪後晴）　今日はＣＩへＣⅡ建設のため５人が入る。又ボツカも今日と明日でＣＩ以上のものを全部ＣⅡへ上げねばならぬので今日は重要な日である。出発前に西川（ＯＢ）が到着され全員１４名で出発する。９人のボツカ隊であるので相当量の荷が今日１日で上る。ＣＩでは西川（ＯＢ）の指導により約10人用の大きな雪洞が完成した（ＢＨ—ＣＩ）、兼清・平田・野田・大島・田村、ＣＩ隊はＣⅡ予定地北俣のコルまでトレースし、第１第２クロアールにフイツクスを行いＣⅡの位置としては北俣のコルによい所がなく天狗の鼻が適当地である事を偵察して来た。又第１第２クロアールは予想よりも長くフイツクスは共に上半分だけが行われており、明日下半分を継ぎたさねばならない。広橋（ＯＢ）大阪発。

２１日（晴）　ＣⅡ建設の日である。非常に暑い太陽の下を８人のＣＩ隊員が天狗の鼻を通り急斜面をあえぎあえぎ登つていつた。ＣⅡは天狗の鼻の一番先の所にビニロンテントが張られ雪洞が一部掘られた。他の９人はのこりの全荷物を持つて全員がＣＩに入つた。ＣＩでは雪洞の居住性を良くするために、あちこちと手が加えられた。第１第２クロアールのフイツクスでフイツクスザイルのほとんど全部を使用し、ＣⅡ—ＣⅢ間に多くの悪場があつた場合の事が心配されるが明日の偵察にまかせる事にする。ＯＢ広橋氏ＣＩ着、ＣⅡ隊山本・野田・笠松・大島

２２日（曇）　入山して今日で５日目である。この様に天気が続くと計画は順調に進むが体の方はそろそろ停滞を欲する様になつて来る。ＣⅡ隊はＣⅢまでをトレースし途中２ケ所岩場にフイツクスをしＣⅢとしては北槍頂上よりも釣尾根の方がよい事を見て来た。一方ＣＩからは１０人のサポートのもとに４人のＣⅢ建設員とＣⅢ用ＣⅡ用の荷物がＣⅡに全部入り、ＣＩの荷上げに関する仕事は終つた。又ＣⅡのＣⅢ建設までの一時的な４人

用の雪洞が昨日一部堀られていたが今は完成し、ＣＩから上つて来た４人が入つた。ＣＩＩ先発隊の偵察の結果２ケ所の岩場もそう悪くはなく明日の荷上げはかなりスムースにゆくであろうと云う予想が立つた。（ＣＩ－ＣＩＩ兼清・米林・田村・広橋ＯＢ）

２３日（快晴・強風）　アタツクへの最後のステツプＣＩＩＩ建設の日である。非常に風が強く北俣のコルから上の一連の急斜面を登る４名のＣＩＩＩ隊員及び４名のサポート隊員は非常に苦しめられる。がしかし昨日のトレースを岩場のフイツクスによりスムースに進み、午後１時には釣尾根のＣＩＩＩ予定地に着いた。又ＣＩの１０人も早朝ＣＩを出発し北槍頂上で体の調子の悪い２人を残して他は全員釣尾根のＣＩＩＩまで上つて来た。ＣＩＩＩは釣尾根の一番北槍に近い所で冷沢側にナイロン１号が張られた。

ＣＩＩＩ（アタツク隊）　山本・野田・米林（サポート）・田村

ＣＩＩ隊　兼清・広橋ＯＢ・笠松・大島

ＣＩ隊　平田・佐藤・広瀬・大工原・横尾・村井・黒田・平野・西川ＯＢ・岡田

２４日（晴・微風）　ＣＩＩＩのアタツク隊は五龍アタツクに成功した。雪の調子によつては１日で往復不可能なこの稜線も非常に快適に歩くことが出来た。

（後出アタツク隊参照）

アタツク隊が五龍をアタツクしている間ＣＩＩよりＣＩＩＩの田村の所に連絡に行き北槍頂上―ＣＩＩ間の発光信号と明日のＣＩＩＩ撤収を打ち合わせし爺アタツクの事を伝えた。ＣＩＩ隊員とＣＩＩＩの田村は南槍頂上を往復した。夕刻雪がしまつてからＣＩよりＣＩＩに連絡に佐藤・広瀬が上つて来たので発光信号の事と明日のＣＩよりのＣＩＩＩ撤収・ＣＩＩからの爺アタツクを伝える。爺アタツクはリーダーの兼清が体をこわしたため広橋ＯＢに行つてもらう事とし広橋・笠松・大島である。

西川ＯＢ・岡田ＯＢ下山。

２５日（曇後吹雪・ガス）　天気はあまり良好ではないがこの１週間の調子から見て今日も１日保つかもわからないので一応アタツクを出す事にした。アタツクの隊は帰途南槍の登りから吹雪に出会つた。

これについてはアタツク隊報告を参照されたい。

一方ＣＩＩＩの撤収はＣＩから６名のサポート隊員が上つて行き、計１０人でＣＩＩＩをＣＩまで撤収。なお天気悪化のため、爺アタツクのサポート隊として二年部員の山本・野田・米林・平田は爺アタツク隊が帰つて来るまでＣＩＩにとどまつていたが無事アタツク隊が4.00に帰つて来たので山本・米林・野田はＣＩに下りＣＩＩは爺アタツク隊と平田・兼清の５名となつた。なお爺アタツク隊はＣＩＩＩ－ＣＩＩ間のフイツクスザイルをはずして下つて来た。アタツクは成功裡に終り後はＣＩＩ以下の撤収だけである。一応皆肩の荷が降りたような感じだつた。

２６日（晴）　ＣⅠよりサポートに４名が上つて来てＣⅡを撤収し、第２第１クロアールのフイツクスザイルをはずしてＣⅠまで下り、ＣⅠでＣⅠをほとんど撤収して待つていた他の部員と一緒になつてＣⅡの丸山小舎に降りた。今日ね雪の状態が非常に悪く足もとの雪がスノーボールとなつて落ちて行くとそれが表層なだれとなるという状態で、第１クロアールは撤収して来る寸前になだれていた。今日は遅くまでかかつて用意し久しぶりに米の飯を食べた。

２７日（高曇）　毎日行動が出来１日も停滞がなく従つて食糧は半分は余つてしまい、帰りには行きにも劣らぬ荷があつて丸山小舎から源汲まで苦しめられた。

あとがき

今度の山行を反省して見ると知識の不足による準備の不完全さもあつたが、天気にも恵まれ順調にキャンプを設置出来、爺か五龍か一方だけを考えていたアタツクも両方行く事が出来、今春の目標であつた新人部員の雪山に対してのトレーニング及び２年部員のリーダー的な行動のトレーニングの目的は十分に果されたと思つている。計画実行に対して不備な点は多くあつたと思うが皆よくポーラーの方式に従い協力して動いてくれた事により計画が成功したのだと思う。又３年部員が欠けている所をＯＢ多数の参加により多く教えられる所があつたと思う。

時間記録

３月１８日

6.35大町7.10－7.35源汲9.30－11.10鹿島部落11.30－2.00丸山小舎

３月１９日

5.00起床－8.30出発—10.15取つき—12.20ＣⅠ4.20－5.15取つき—6.20小舎着

9.25発—10.05鹿島—11.35源汲1.10－4.00小舎着5.15－5.55鹿島6.05－7.05小舎着

３月２０日

5.00起床（炊事）9.30出発—11.15取つき—2.15ＣⅠ着—ＣⅠ発3.10—小舎

３月２１日　ＣⅠ→ＣⅡ

6.00起床8.45ＣⅠ発—1.15ＣⅡ3.50－4.45ＣⅠ着

３月２２日　ＢＨ→ＣⅠ

6.00起床—8.30発—11.20ＣⅡ12.30発（1.35）—ＣⅠ

Ｃ2→Ｃ3—3.45Ｃ2着

３月２３日

5.30起床—9.00発10.25小舎岩—10.55第二の岩場上—11.40荒沢の頭12.30－1.50頂上—1.00釣尾根ＣⅢ3.00頭—3.40第一岩場下—4.10Ｃ2ＣⅠ—ＣⅢ

３月２４日

五龍アタツク

CⅡ→CⅢ—南槍11.00発—11.50第一岩場下—12.10第二岩場上—12.20荒沢の頭12.55北槍上—1.40CⅢ発—1.55南槍上2.15—2.30CⅢ3.00—3.15北槍上—3.25第二岩場—3.40小舎岩—CⅡ

CⅠ→CⅡ

3月25日

爺アタツク　6.00CⅡ発—4.00CⅡ着

CⅠ→CⅢ　CⅠ発—8.00CⅡ9.00—1.30C2

アタツク隊報告

◎第一次アタツク行（五龍岳）

朝4時半頃起床する。テントキーパーの出村はぐつすり寝ていて、山本が起こしたらしい。急いで朝食をとり、オーバーシユーズ、アイゼンなど身仕度をしてテントをとび出したのが5時15分だつた。大町のあたりに昨夜美しく見えた灯も今はなく静かに眠つている様だ。ヘツドライトをともし釣尾根からすぐ黒部側の急斜面を明りをたよりにおりる。岩の上にさらさらの雪が積つておりもぐるつもりで足を突込むと、がちんとはね返つてきて甚だ安定がわるい。少し下つたところで山本がスリツプし約30m程流されたが事なきを得た。10分程下つてから今度はトラバースをして稜線へ出る。このあたり雪は表面が薄くクラストしており甚だ歩きよい。快調にとばして30分程でキレツトへ着く。キレツトは心配していた程のこともなく鹿島側は夏道が出ており、どん底から五龍側は急な雪の斜面をよじのぼつた。

キレツト小屋には九州大学の方が入つておられ村近にはザイルフイツクスがありそれに助けられた。それから五龍迄は例のとおり凹凸の多い岩と雪のミツクスした稜線だ。天候は晴れてはいるが余りすつきりしない空の色で剣は高曇の様だつた。信州側にはり出している雪庇はもう根元に割れ目が入つている。

五龍迄大体トレースがあつたので非常に楽だつた。五龍岳頂上10時過ぎ。帰路はかなりとばし釣尾根のテントに午后3時帰着。

◎第二次アタツク行　（爺岳）

高曇　4.30起床、6.10出発　7.15荒沢頭　7.30北槍　8.08南槍　烈風有り　9.10冷池小屋　10.20爺岳頂上

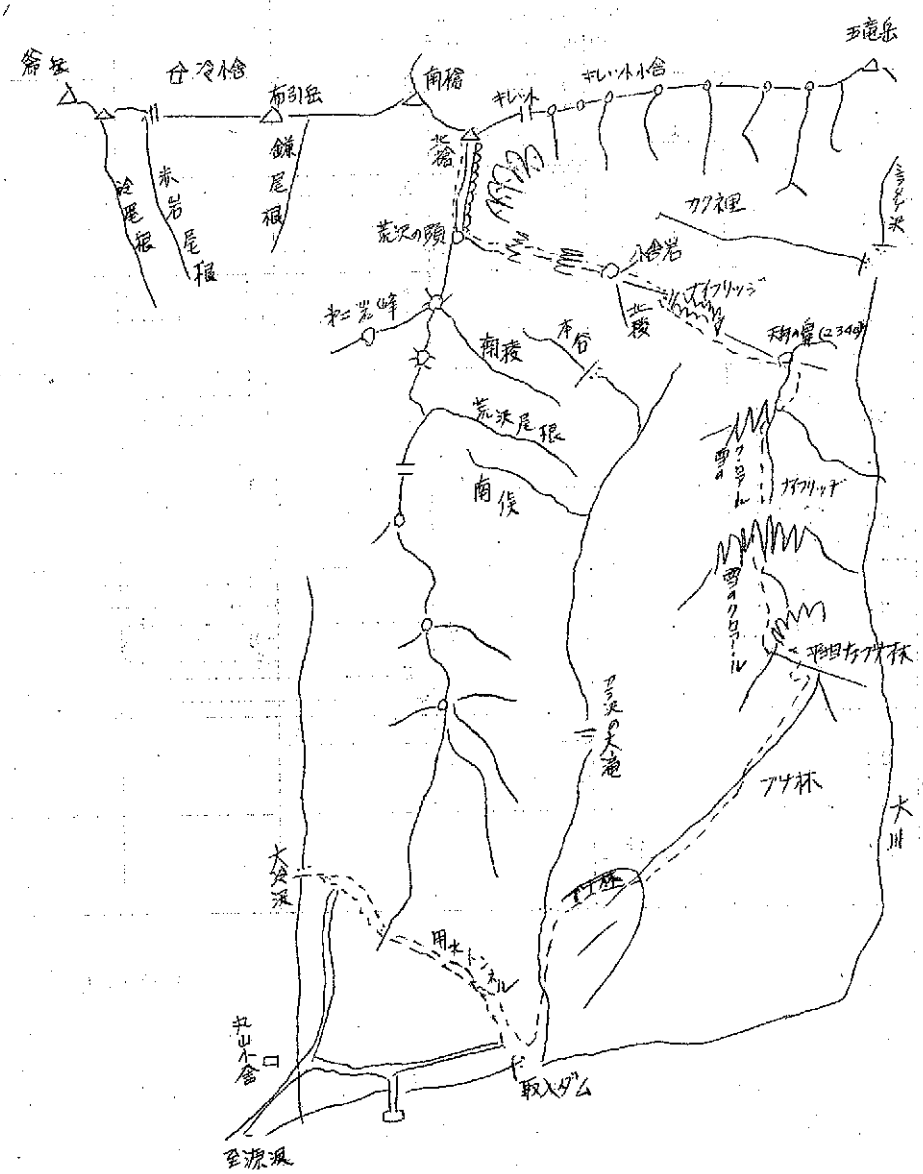
往路は南槍から夏道が良く露出し、加えトレースがついていたが、爺頂上付近では消失していた。ルートは雪庇を警戒して黒部側の林寄りに取つた。風強まる中、ツエルトを被つてつつましく昼食をとり、11.20出発。

12.00冷池小屋、ぐんぐんと剣にガス。13.30南槍ケルン。ガスの流れ繁く、北西視界なし。北槍かすかに見え疲労覚ゆ。

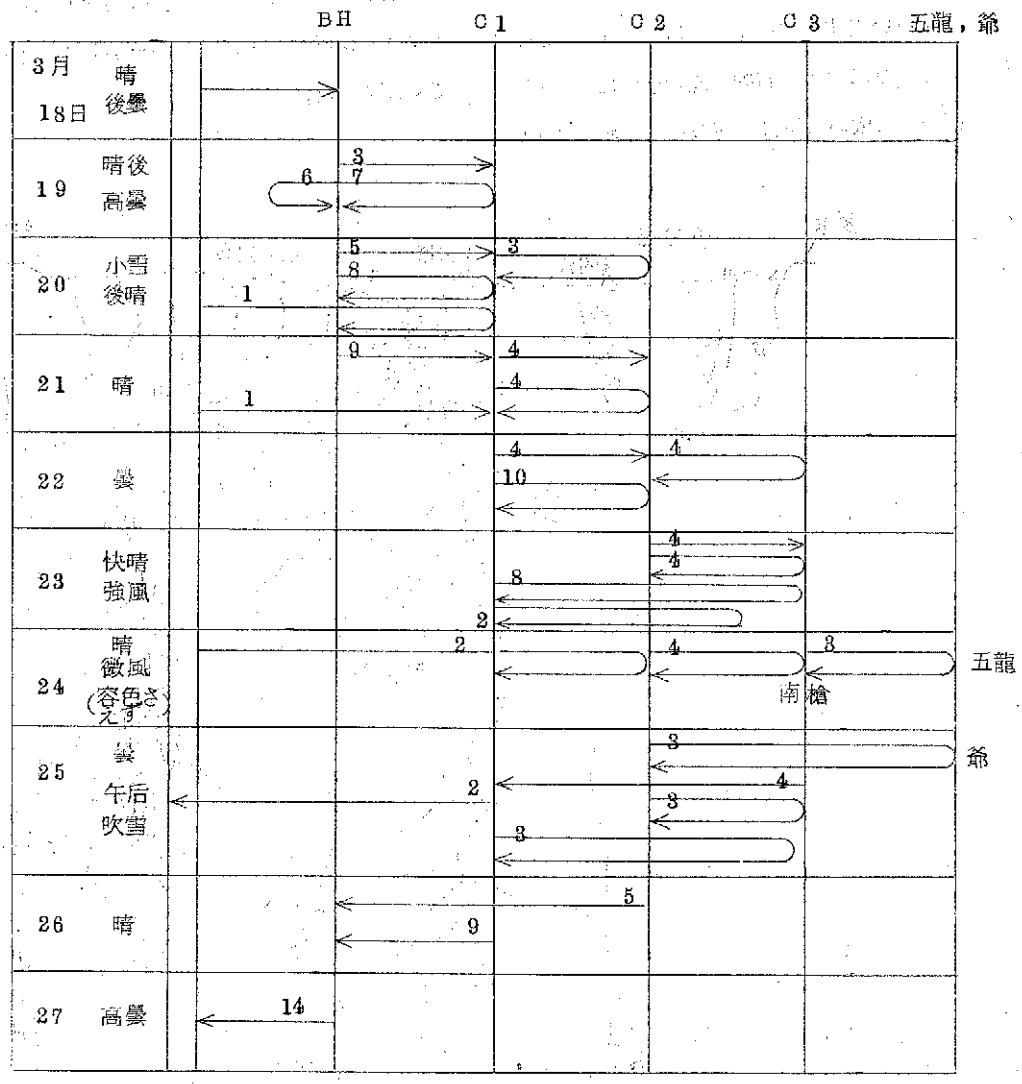
釣尾根にかかる頃より風雪となり僅かに北槍の赤壁が見えかくれする程度で頼みのトレースは新雪に埋れ不安を感ずる。14.15C

Ⅲテント地、撤収済。剣にガスがかかれば、後立の天気は３０分後に崩れるという話を改めて思い出す。やせ尾根から思わず足を踏み出しそうになるが奇妙に危険感がない。荒沢頭からの広い雪面は風雪の中の赤旗だけが頼り。

１６.０００ＣⅡに帰りつく。天候を心配してキャプテン以下ＣⅢのメンバーが我々をまつてくれていた。



行　動　表


BH
C1
C2
C3
五龍，爺
3月 18日
晴 後曇
19
晴後 高曇
20
小雪 後晴
21
晴
22
曇
23
快晴 強風
24
晴 微風 (容色さえず)
五龍
南槍
25
曇 午后 吹雪
爺
26
晴
27
高曇

（時報９号）

1958年 夏山合宿

剣岳トレーニング

兼清嘉雄

昭和33年度も前年度についで多くの新人が入部し夏山合宿も40人以上の大人数となつた為、今迄の様な合宿形態では全員に完全に目がとどきかねるので新しい試みとして全体を三つの大きいパーティに分けて、それぞれにサブリーダーをつけ、別個に行動する事にしたが、合宿場所は同一にした。

計画の概要は合宿用の荷物全部と縦走の荷物の一部をかつぎ称名から八郎坂を上つて2日で真砂沢出合の合宿地に入ることにし、縦走の荷物の一部はケーブルとバスで追分に上げた。

期間7月16日〜7月26日

メンバー　兼清（CL）、山本、野田、米林、平田、乾、田端、平野、木村、広瀬、田井、佐藤、大島、村井、大工原、田村、笠松、玉井、三宅、森村、金子、谷垣、九尾登、伊藤、西垣、前沢、保田、鍋田、比嘉、吉本、五百蔵、森田、黒木、北橋、長谷川、中村、丸尾、打出、菊池、酒井、高橋、佐藤T、星野。

7月15日　先発4名（野田、平田、大工原、高橋）が富山に行き、米、野菜、バス等の準備をした。

7月17日（晴）　称名迄バスで行き、ここでケーブルで上げた縦走の一部分の荷物以外を全部かついで出発した。約40Kg、この日は前夜の車中の疲れもあり、又、最初から八郎坂の急坂を登つたので追分止りであつた。

称名発9.30—追分小屋16.30

7月18日（晴）　追分から一気に雷鳥沢を登り真砂沢出合に着いたのが6時であつた。すでにキャンプサイトが完全にふさがつていたのであらかじめ予定した通り真砂沢台地を一段降りた二股側の草地を用いてキャンプサイトを作つた。追分発7.00—天狗平9.40—雷鳥沢下12.25—別山乗越14.25—真砂沢出合18.00

7月19日（曇一時ニワカ雨）

昨日が遅かつたので今日はグリセード、滑落停止等の訓練のみを行うこととし、12時から長次郎の雪渓に行つた。

7月20日（雨）　停滞

7月21日（曇）　今にも降り出し相な天気であつたので全員一緒に池の谷のコルまで行動す。

7月22日（曇一時雨）　予定通り今合宿に入つて初めて各パーティに分れて行動する。途中雨に降られた。最初の行動日なので尾根を歩いて体をならすことにした。

源次郎尾根、八ツ峰上半、八ツ峰下半、三の窓—平蔵谷

7月23日（雨）　停滞。出発するも、すぐ雨で引き返す。

7月24日（曇午後一時雨）　毎日いつ雨が降り出すかも知れない天気なので岩には手を出す事が出来ず、今日の行動も22日とメンバーを入れかえただけであるが、1パーティが真砂沢をつめて別山の方へ登つた。

7月25日（雨）　停滞。今合宿も予定では今日で終りであるがその最後の日も終日雨が降り通しであつた。

7月26日（曇・雨）　名古屋工大の人に天気図を見せてもらうと台風が本土に近づいており明日晴れる可能性はうすいので一日の食糧予備はあつたが相談の結果今日撤収する事にした。12時に真砂沢出合を出発したが平蔵の出合を過ぎたあたりから雨が激しく降り出し、剣沢の小屋の所では新人等は相当疲れていた様であるが、乗越を越す頃から雨もやみ風もおさまつて1人の落伍者もなく雷鳥荘の所まで降りた時は5時頃であつた。相談の結果このままテントを張つたのでは衣服が完全に中までずぶぬれなので確実に1人や2人は病人が出るものと思われたのでその夜は雷鳥荘と房治の湯に分けて泊らせ、着くとすぐ全員温泉に入れて病人の出るのを防いだ。

合合宿を終つて

今年の合宿は雨に降られ通しで満足に行動することは出来なかつたが、パーティを2つに分けたことは統制をとる上において成功であつたと云える。今後考えねばならないことは合宿期間をもつと長くして雨が降つても行動日が相当ある様にすることである。又天気の方も気象通報を聞いてある程度の判断をくだせる様、普段から心掛けておくべきである。撤収の悪天候にもかかわらず、2，3人が風邪になつただけですんだのは幸いであつた。

（時報10号）

1958年　冬山合宿

涸沢岳西尾根より奥穂高岳

山本信樹

本年度の最大の目標が春におかれていたので冬山はトレーニングという性格が強く冬山の為に長い準備期間を設ける事は出来なかつた。合宿の候補地は結局、涸沢岳西尾根と薬師が残つた。しかし、薬師は冬期のアプローチの困難さと予想される悪天候、記録がない等種々の悪条件がそろつている点を考えて新人のトレーニング、中堅の尾根歩きを重点とした場合穂高の方が良いということになつた。穂高はすでに多くのルートが開拓しつくされ上高地から入つたのでは先人の足跡をたどるというにとどまるので、最近トレースの記録がなかつた西尾根に目をつけたわけである。（1933年1月に沢筋を経て尾根に取つき横尾へ横断した記録が山岳に載つている。秋まではテントが全部で3張しかなくて、キャンプを3つ出す事が可能かどうかも不明であつたし、又、尾根に雪洞を掘れるかも不明

であつたが、12月に入つてからテント寄附が着々と集まり、6人用新テント2張を確保できたのでテント4張をフルに動員し多くのメンバーに雪中露営技術を修得してもらう事が現実化された。

一方、我々の計画は最初から尾根を末端からつめる予定であつた森林帯の通過については何ら知り得たものがなかつたので、先発隊の偵察が終るまでは、はたして尾根すじを荷上げ出来るかどうかが不明であつた。しかし我々は最も確実な線として先ず柳谷小屋をBHにし、森林帯の中間にCⅠを置き、CⅡを蒲田富士、涸沢頂上にCⅢを出して北穂アタックを行い、森林帯の通過に時間を節約できればCⅠを蒲田富士直下においてCⅡを涸沢岳頂上にCⅢを北穂に出して槍ケ岳アタックする予定であつた。

期間　12月21日―1月6日

メンバー　山本(CL)、米林(SL)、兼清(SL)、平田、木村、田端、平野、田村、大島、佐藤、大工原、玉井、村井、田井、中村、錦田、谷垣、長谷川、五百蔵、白井、西垣、宇野、打出、前沢、高橋、酒井、黒木、金子、以上28名　O.B　広橋、西川、近、宮本、東　以上5名

12月22日　先発隊、兼清、佐藤、打出、前沢、高橋、酒井、18時9分で大阪発。

12月23日　先発隊、高山―神岡―柳谷小屋に到着し、午後白出沢出合までトレースを行つたが積雪は少い。

12月24日(曇)　8.00小屋発。尾根に取りつき森林帯を偵察する。CⅠキャンプがどうにか張れる場所を13.00見出し、更に上部へ1時間登り14.00昼食する。食後すぐに下つたが、ガスが濃くて全く視界がきかない。

本隊22名、18.06大阪発。

12月25日(快晴)　本隊は柳谷小屋に入る。4.54高山着―5.50発(専用貸切バス)―8.25蒲田着9.00(トラック)発―10.00分岐点にて下車、12.00全員柳沢小屋集結、13.00～16.00スキーとワカンをつけて出合付近まで偵察をかねて足ならしに行く。

車の手配が十分に行き届いていて、簡単にBHへ入る事が出来た。また雪はごく少く蒲田ではまだ積つておらず、白出沢の出合でもせいぜい2尺程度であろうか。

12月26日(みぞれ)　5.10起床、6.20発、7.50、8.15取付、10.45CⅠ、13.30テントに入る。

朝からじつとりしたみぞれが降つていたが荷上げを強行する。西尾根斜面の途中に1ケ所だけ樹林の切れ目が巾20mぐらいで主尾根に向つてまつすぐに伸びている。積雪が不十分であるのと草の葉がたおれているのとでワツパがうまく雪の上にのつてくれない。主尾根上でも積雪は30～60cm程度か、樅の原始林の中に笹が生え繁りストックや荷物が

さんざんひつかかつて夏のブツシユこぎと大差がない。尾根は上に行くに作つて急である。取付より2〜30時間でCⅠキャンプ地に到着したが、尾根がせまいうえに勾配がきついので広い場所がない。少い雪をかき集めて樹の枝をひいてどうにかテントを張る。みぞれの中を登つたので全員ずぶぬれで寒いことおびただしい。

12月27日（雪）BH停滞　CⅠ11.00発、14.10、14.25デポ地発15.00テント着。

9時頃まで気温高くみぞれであつたのが雪に変つたので、ボツカをする。各自16kg、CⅠのすぐ上で尾根が急傾斜になつているのでこれを左にまく。トラバースの雪の状態が悪かつたからここに30mのフイツクスを行う。ザイルの両端は樅にくくりつけた。そこから更に岩と下枝の混り合つた中をくぐりぬけるようにして30分も登ると4m程の岩のフエイスに行きづまる。雪がかぶつておらずホールドがないのでここに3mのフイツクスを行いワカンをはいたままこじ上る。このあたりから尾根は細くなつてくるが少し歩きやすい所がつづきテントの張れそうな所もある。ここより30分程で再び岩が尾根の真上に露出している所へ来る。新雪で見えない割目に注意して通過。その上で6mの急な岩で露出している。これはフイツクスすれば問題ない。14.00尾根の上が少しひらけた所にデポして帰る。

12月28日（小雪）　BH6.30発、10.30CⅠ着、12.00CⅠCⅡ両隊合流して出発、14.00濃いラツセルの急斜面、14.30デポ隊下山、16.00キャンプサイト着。

天候悪化を予想したがBHからのボツカ隊が10.30CⅠに着く。又ラジオで天候回復をキャツチしたのでCⅡメンバーも合流して出発。デポ地通過後も、ぐんぐん高度を高める。時々晴れ間も見えて来る。やがて尾根が明るくなり、急な雪斜面があらわれる。雪崩の出そうなほど急な斜面で長さも100mはあろう。雪面の右端を肺までもぐり乍らラツセルをする。BH隊は岳樺の現れはじめたあたりで荷物を下してすぐ下山、CⅠメンバーはフワフワの新雪に悩まされながら蒲田富士直下300mの尾根のジヤンクシヨンまで荷物を上げた。CⅡ泊りは平田、兼清。

12月29日（晴）　BH高橋、谷垣がCⅠへ連絡に7.30発、他の新人等大工原、西垣、金子、長谷川、宇野、白井、五百蔵、黒木、酒井、前沢は槍平に行く。12.00広橋（OB）来る。14.30広橋、田井、中村、平野CⅠへ出発。田端は小屋番。CⅠ10.00発—CⅡ14.00山本、米林、木村、大島、田村、佐藤茂、玉井CⅠよりCⅡに入る。

CⅡ10.00発—14.35涸沢岳—CⅡ17.30兼清、平田はCⅡより頂上までフイツクスをする。

12月30日（快晴）　起床6.00出発10.00涸沢岳13.45、CⅡ14.00キャンプ

サイト14.30サポートCⅡへ　16.40テントへ入る。CⅢへアタツクメンバー山本、平田、田村、大島が入る。サポート米林、木村、兼清、玉井、佐藤、CⅡへ田井、村井、平野入る。CⅠへ打出、前沢、高橋、谷垣入る。兼清CⅡよりCⅠまで下る。CⅠまで西垣、金子は連絡の為に6.45BH出発。

BH田端、五百蔵、酒井、宇野出発9.50槍平、13.05中崎尾根着、4.20BHへ帰着。

CⅡのメンバーのうちアタツク隊は個人装備と若干の荷物をサポートはザイル食糧其の他で全員18kg以下の荷で前日の平田、兼清のトレースをたどつて荷上げをする。出発に際してテント撤収荷分けその他で時間を食いすぎ出発は10.00となつたが天候は余りに良く加えて新雪が全くないのでぐんぐん登り滝谷の絶景を心ゆくまで楽しんだ頂上付近でテント場を探したが飛弾側や尾根上では雪が吹き飛んで石がガラガラに露出しているのでやむを得ず。更に穂高小屋の方に下りケルンの横にテントを張る。

12月31日（風雪）　BHCⅠCⅡCⅢとも停滞。

CⅠからBHへ兼清が下る。又BHの西垣、五百蔵、白井、酒井、宇野、長谷川、金子、黒木、広橋（OB）が平湯へスキーに行くため下山する。

1月1日（曇後風雪）　CⅡからアタツクする。（米林、村井、平野、木村、田井）

田端がBHよりCⅡへ入る。7.45BH発10.30CⅠ着。14.30CⅡへ到着す。打出はCⅠからCⅡまで往復す。西川（OB）宮本（OB）近（OB）大工原がBHからCⅠに入る。谷垣、前沢、中村、高橋がCⅠからBHへ下る。CⅡでは午前中曇つていたが弱かつたのでアタツクを行つたが奥穂の登りの頃から風が出だし相当風が強くなつたのでやむなく穂高小屋に泊る。

1月2日（快晴強風）　山本、平田北穂アタツク。5.00食事。6.30テント発。7.00降り口。9.00涸沢槍。12.05北穂。12.50発。15.40テント着。CⅠ西川、近、宮本3氏がCⅠから涸沢頂上往復、CⅡアタツク隊5名CⅡへ下る。

BH高橋、前沢、中村飛弾乗越手前まで行つてひきかえす。

平田、山本、大島の3人で外に飛び出す。20日過ぎの月が頭上に明るく、奥穂に手がとどく如く見えている。食事係の田村がうまくやつてくれたので食事は早過ぎた程だ。風が少しきつく地吹雪が顔にあたつて痛い。涸沢岳頂上へつくまでに大島が「右手がものすごくだるいねん」といいだす。北穂までのバランスの悪い所が多い事を考えると安心して大島をつれて行く自信がない。全く気の毒であつたが、田村と奥穂へ行つてもらう事にした。

クサリの所は雪があまりついておらず、鎖を利用して下降、涸沢槍は涸沢側をまいて上へ上る。この付近雪の傾斜は45°を超してトラバースは1人ずつザイルで確保しながら通

つたが危いこの下降は雪のつき工合が悪く危険を感じる。その次の小ピークは尾根が細い。涸沢側は急な雪の斜面、尾根すじはラッセルが深くて登れないので雪崩の危険を感じつつアンザイレンして涸沢側をトラバースする。それからは尾根筋であるが、ルートがはつきりせず、時間を浪費した。特に滝谷側は西風が下から猛烈に吹き上げて地吹雪になり目もあけられぬ。夏道の上に積つた雪はクラストして所々青氷も見られた。北穂の鞍部で岩かげに風をよけて昼食。帰路は出来るかぎり尾根にルートを取つたので比較的早く帰つた。

1月3日（雪）　玉井CⅡ－CⅠそこで打出、大工原とテントCⅡCⅢは停滞する。近、宮本→BH、東、前沢、谷垣、高橋は飛弾乗越往復。

1月4日（風雪）　CⅡCⅢ停滞

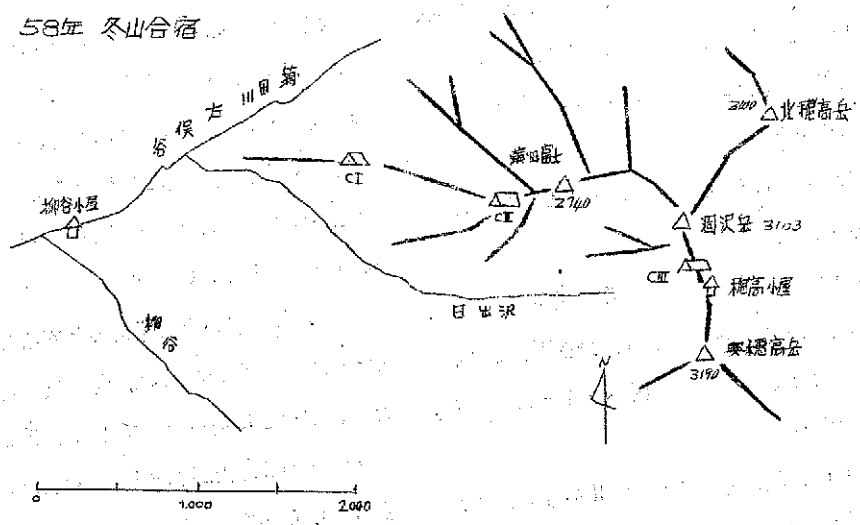
田端、佐藤CⅢへ撤収サポートに登つたが佐藤疲労の為に引き返す。中村、前沢、高橋CⅠへ残りの荷物をとりに往復。

1月5日（曇後風雪）　BH停滞。

CⅡより田端、木村の2名が前日に連絡に失敗したのであまり好い天気でなかつたがCⅢへむけて出発したが稜線では風が強くCⅢへ着いた頃は指の感覚がなくなつていた。ちようどその頃CⅢでも撤収中であつたのでテントを撤収してから田端、木村の手が不安なのでやむなく穂高小屋に入る。両名共相当ひどいらしく凍傷を訴える。微温で1時間以上温めて小屋に泊る。名工大の4名と同宿した。

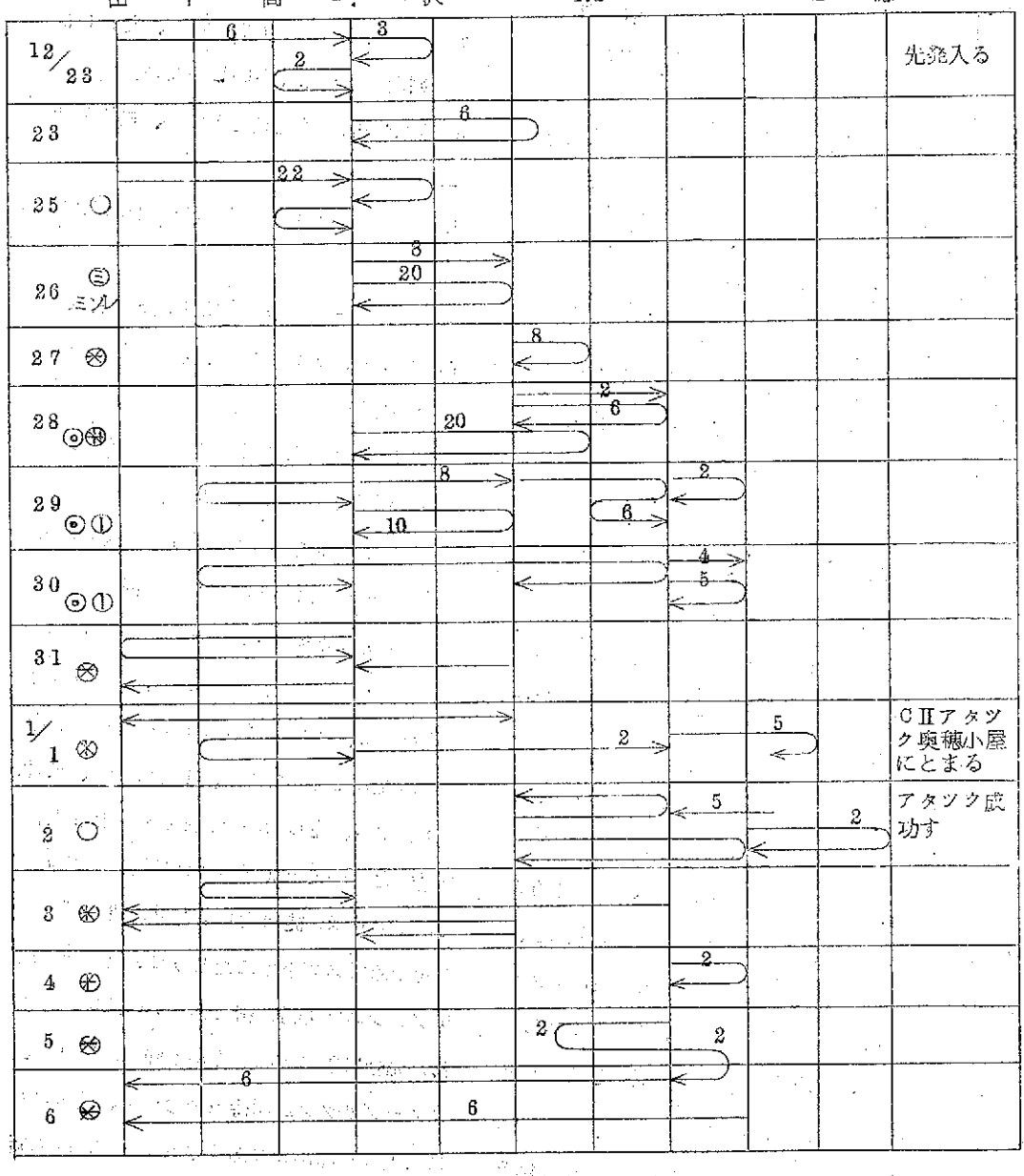
1月6日（曇）　6.00穂高小屋発9.30CⅡ着。4.00CⅠ着。5.00BH着。夜半に入り星空に変つたので未明早くから準備して天候悪化のまえに急いで下山した。

（時報10号）



1958年 冬山合宿

行動表



1959年 春山合宿

黒部川上ノ廊下積雪期初横断

山本信樹

戦後阪大山岳部が再建された当時すでに篠田先生その他一部の人々が上廊下に目をつけていたのであるが、当時は主に後立山周辺に多く積雪期合宿が行われ、まだ稜線の行動に確信が持てなかつたのでこの問題は長い間取上げられずにいた。

しかし積雪期の目標が後立連峰において稜線を行動しうる段階に入つてくるに従い、黒部川の横断に手をつけ数多くの準備と失敗が積重ねられて、遂に31年春宍戸、西川、岡田の3氏によつて初めて鳴沢→内蔵之助平→立山と横断に成功し、これから次第に上廊下の方に焦点が移つて来た。そして31年冬期木村裕リーダー他10数名が浦田温泉—大野間沢—双六小屋—雲の平のコースをとつて裏師岳アタツクの計画を実行したが、運悪く延べ2週間以上にわたる吹雪のため失敗した。

さらに2年して、33年冬期、岡田博司リーダー他7名が三俣小屋横にテントを出し、赤牛岳にアタツクを試みた結果6名のアタツク隊が14時間のアルバイトで無事成功し、黒部上廊下横断計画が次の目標としてはつきり浮彫されたのである。

しかし、これを実際に行う段になると数多くの解決せねばならない問題に直面せざるをえなかつた。即ち

1. 黒部川上廊下は谷が非常に深く、その両岸は非常な急傾斜或は絶壁でこの登行は困難である。

2. 積雪期の黒部に関する限り、大正15年の西堀氏等の記録ぐらいしかない。

3. 陸測地図は不正確をきわめ、誤りが非常に多い。

4. 高度2200m以下では猛烈なブツシユである。

5. アプローチが長いのでテントが最低4張必要であり、テントを新しく2張作らねばならないこと。

6. 春は増水するのでスノーブリツヂがかかつているかどうか不明である。

7. 東沢乗越附近及び黒岳周辺の難場をボツカ隊が事故を起さずに通れるか否か。

8. 最後に優秀なメンバーが20名以上必要である・等である。第1，2，3の問題を解くために、33年夏から延4パーティが赤牛岳の周辺に入つた結果、11月に野田、米林、山本、田村、佐藤のパーティが赤牛岳頂上より尾根を下つて上廊下のスゴ沢出合に下り、ここで50米の徒渉をして対卓に渡り、スゴ沢をつめてスゴ小屋にたどりついた。その結果ブツシユは非常に密であるが積雪期にはこれが完全に雪の下になるかも知れない事や、スノーブリツジが期待出来ない事、又スゴ沢には大きな滝が2つあるけれども春には雪崩のためにうまつてしまうかも知れぬ。等の事

がわかり、このルートが唯一つの可能なルートである事が、はつきりしたのである。

第5番目のテントの問題は33年12月に解決されたので、問題は如何にして円滑に赤牛岳まで荷物をボッカするかという事と新人に棱線で荷物を担がせて良いかという問題が残された。しかしこれはやつてみるより仕方がない事であつた。

実際の行動計画は別表を見てもわかると思うが、BHを烏帽子小屋、CⅠを野口五郎岳、CⅡを赤岳と黒岳の中間、CⅢを赤牛岳、CⅣを赤牛岳北西尾根上2200mのピークに出す。そして計画を3つの段階に分け、第1の段階ではBHに荷物と人員を集結する事、第2段でCⅡを建設しこれにCⅡCⅢCⅣアタツク用の必要物資を集め新人を下山させる。そして最後の段階でCⅣまでキャンプを延しアタツクを行う段取りであつた。

期間　3月10日～4月2日

メンバー　広橋（CL）、山本、兼清、野田、米林、平田、木村、大島、田井、大工原、玉井、笠松、田村、保田、谷垣、中村、鈴田、村井、佐藤、広瀬、西垣、酒井、高橋、打出、長谷川、佐藤、五百蔵、前沢、黒木、金子、白井、宇野、丸尾

3月11日　平田、野田、佐藤茂、五百蔵、高橋、前沢、の6名濁小屋へ入る。

12日（晴）　6名全員28Kgずつかついで7.20濁小屋出発。途中尾根の取付に60m、尾根途中に1ケ所ザイルフイツクスを行いながら登り、16.05烏帽子小屋着、荷物が多すぎたので濁小屋へ少し残して行つた。

13日（風雪）　停滞。

14日（晴強風）　野田、五百蔵、前沢は7.00出発し三ツ岳まで行つたが強風のため歩けないので荷物をデポして引きかえす。

平田、高橋、佐藤は濁小屋に残つた荷を逆ボッカするため、6.45出発、10.45濁小屋着、18.00烏帽子BH着、濁からの登りは風が強く、非常に消耗したのでナイフリッヂ上に荷物をデポして小屋へ逃げる。

本隊大阪発。

15日（晴）　3名ナイフリッヂの荷物をBHへはこび込む。9.00、6名にてCⅠを建設せんと出発するが10.30三ツ岳にて平田が不調になりて、野口五郎まで入れそうにないので高橋と引返し残り4名で三ツ岳風下側に雪洞を掘つた。

先発及び米林、兼清、広橋、田村を除く21名の本隊は43～47Kgの荷をかついで濁小屋へ到着す。14.30～15.30。木村、大島を取付の偵察に出し、残りの者は夕刻まで翌日の荷物のふり分けを行い、パッキングを完了す。

16日（快晴）平田、高橋は前日ハンマーを忘れていつたので三ツ岳まで渡しに行く。デポ地雪洞内の4名は、9.10出発し、14.00野口五郎岳の次のピークの風下側に雪洞

地点を決定した。ここに雪洞を掘りテントは張らなかつた。

一方本隊は、6.10濁小屋を出発し、2.30烏帽子小屋着、山本、大島、笠松、玉井は梱包と荷物整理のためにBHに迫まる。BHにて平田、高橋と計6名で荷物を石油罐につめ始め、CⅣとアダツク食を整理する。

17日（雪、気温高くガス濃し）CⅠから佐藤、野田が偵察に出たが、東沢乗越手前にて悪天のために引きかえす。BHでは梱包を続行し、夕刻完了、濁小屋では黒木、丸尾以外17名が黒部第5発電所まで往復、7.46発、10.10帰る。

18日（晴）野田、佐藤CⅠ8.45発11.10東沢乗越着、15.00フィツクス終了。16.50テント着。

東沢乗越では尾根上は雪が深く積つて岩がかくれているので悪場はない。しかし新雪が10cm程積つているので、古いクラストした雪とのなじみが悪い。東沢乗越の登り大斜面に50米。その上の岩場に20米のフィツクス。さらに赤岳との間に2ケ所フィツクスを行う。

BHより山本、玉井、大島、高橋はCⅠへ各自18Kgずつ荷上げを行う。6.30発、11.30CⅠ着。15.00BH。

濁から19名は各自20Kgずつかついで烏帽子へ入つた。6.30発、14.00BH着。

19日（快晴）CⅠでは全員晴天停滞、CⅡまでのフィツクスが完了したし、皆連日の行動で相当疲れていたので休日とする。

BHより山本、広瀬、村井、大工原、田井玉井、谷垣、高橋、打出、保田がCⅠに入り、他の11名がこれをサポートした。午後はBHからCⅠに新しく雪洞を完成し、合せて15名の露営が可能になつた。

BH6.45発、11.30CⅠ着。12.30サポート隊発15.00BH着。

20日（雪・風強し）CⅠ停滞。

BH広瀬、米林が入つて活気づいた。BHでは少々の雪をはねかえさんものとばかりに荷上げを強行したが三ツ岳まで到り強風のために断念し荷物をデポして引きかえした。

21日（晴）野田、村井、広瀬、佐藤及びこれをサポートする10名はCⅡ建設のために8.05CⅠ出発、9.10東沢乗越、11.00赤岳黒岳間のテラス上にキャンプサイトを決定する。13.00サポート隊帰る。15.30CⅠ着。CⅡに入つた4名及びサポート10名はそれぞれ18Kgずつかついだので固体装備200KgをCⅡに入れる事が出来た。CⅡにテントを張つている間に野田、村井は黒岳のフィツクスに出かけ、16.00テントへ帰る。

BHからはCⅠへポッカが入る。長谷川がCⅠに入つた。このポッカによつてBHからCⅠへの荷上げが全部終了す。

先発隊が最初に作つた雪洞は天井が沈降してきて床から天井まで60cmぐらいになり、水がポタポタ落ちてとても使えなくなつて放

業した。

２２日（風雪）　停滞。

朝になつてみると雪洞の入口が完全に埋まつてしまつて朝というのに夜中と変らない。雪洞入口の掘出に半日をつぶした。

五百蔵が右脇腹が痛むといつて昨晩は一睡もしていないというので盲腸ではないかと心配したが、盲腸でもないようである。早くＢＨと連絡をとりたいと思うが、天気が回復しないので連絡を出す事が出来ない。ＣＩ，ＣＩＩ，ＢＨとも停滞。

２３日（風雪）　五百蔵は食欲を取りもどし痛みも少し軽くなつたが、とても歩けない。ＢＨ、ＣＩ、ＣＩＩ停滞。大島は痔がひどくなつて薬もきかない。

２４日（小雪）　２３日夕刻から天気は回復しはじめたので２１.００保母、大工原がＢＨへ連絡のため雪洞を出たが、２１.００強風のため危険を感じて引きかえして来た。それから一眠りして２４日１.００目がさめてみると、雪洞内が月明りでうす明るい。風もおさまつたので保母、大工原を起こしてＢＨからの応援を求めるべく連絡に行つてもらう。ＢＨ４.３０着。

ＢＨでは連絡を受けるとすぐ電報をうたせる為丸尾を下山させ、すぐ続いて木村と他２名がシヨイコ、タンカをとりに葛温泉へ行く。田村、西垣、白井、中村、酒井、佐藤毅、金子、が五百蔵をＣＩに下した。五百蔵は歩いて帰つた。米林、広橋、平田の３名が新たにＣＩに入つてＣＩにてボッカ計画表を再検討した。保母、大工原が学校の進学手続きで是非下山したいというので稜線メンバーが不足し、仕方なく新人高橋、打出、谷垣を起用する事に決定し、平田は調子が良くなればＣＩＩ或はＣＩＩＩに入つてもらう事にした。

赤牛手前に１２.００ＣＩＩの既設テントはそのままにして、新テントをＣＩＩＩに持つていつたが、悪天で予定地まで行けずに赤牛手前に雪洞を掘つて入る。

２５日（快晴）　ＢＨ→ＣＩＩ田村、兼清ＣＩにて各々９Kgの荷を追加してＣＩＩに入る。ＣＩ→ＣＩＩ広橋、米林、田井、谷垣、打出、高橋の計８名が入る。ＣＩ←ＣＩＩ山本、平田、大工原、玉井、保母、ＢＨ←ＣＩ←ＣＩＩ長谷川、前沢、タイム。８.００ＣＩ発、９.１５東沢乗越、１０.５０ＣＩＩ食事をとる。１１.４５帰り発、１３.３０ＣＩ着。

前日五百蔵を下し、広橋、米林が入つて計画をたてなおしたあとの快晴で、意気ようようとボッカに出発した。サポート隊は２２～２４Kgの荷物をかついでＣＩＩに入り残りのものは８～１０Kgの荷をかついで上つたが新雪も少く快適に進んだ。

サポート隊はＣＩへ帰つたのが早かつたので夕暮まで雪洞を快適なように改装したり干物をする。

２６日（ガス）　ＣＩでは午前中視界わずか１００ｍ足らずで風が出れば危ない天気である。昼頃まで様子を見ていたが、風が出て

来ないので11.30出発準備を始めた。平田の調子は相変らず良くないので1人CⅠに残つてもらい、14.45出発、視界が悪いので100mおきに竿を立てて行くが稜線を歩いていても雪庇の輪廓さえ見えなくなつたので、晴れるのを待つ事1時間半、16.30再び出発、17.07東沢乗越、東沢乗越をすぎてから又ガスが濃くなつてくる。かまわずこれをつきぬけて、赤岳の上につく頃、夕焼の真紅がガスを染めて、我が家についたようにほつとした。西の空は雲海が低く水平線を作り赤岳には星がきらめく。18.30CⅡ着。山本と一緒に来た3名は天候が悪化したためCⅠへ帰るのを中止し、2つのテントに分れて入る。2個のシュラーフをつないで3人入り、V_2テントに7名、V_1テントに5名寝たが、全く窮屈な一夜だつた。

27日(快晴) 目ざまし時計が4.00ジリジリと鳴つた頃は全くうらめしかつた。4.00起床、玉井、大工原、保母6.15CⅠへ帰るため出発、CⅡの9名はCⅢへ入る。広橋、米林は個人装備の上に8Kg、又サポートの7名は20Kgの装備食糧を持ち、7.00出発。黒岳のフィックスの上に新雪が20cm程積つている。黒岳で京大のパーティ9名が軽装で追いついて来てザイルフィックスの所で彼らに先に行つてもらつた。

黒岳周辺から赤牛までの稜線は一昨年、昨年の冬や秋に比べるとずつと雪が多い。特に黒岳の周辺はずつと尾根通しにトレースが出来たので時間が大いに短縮出来た。黒岳の下りの大斜面はテカテカに凍りついていて新雪もほとんど乗つていない。ここに野田は50mのフィックスを設けていた。黒岳から赤牛までは晴れれば問題のない尾根だ。11.10CⅢ着、12.25サポート出発、15.20CⅡ着、CⅢは赤牛岳頂上から北西尾根を50m下つた所に建設してあつた。

CⅢからは同日、野田、広瀬がCⅣ予定地のピーク2200まで1時間で下り、約2時間の登りでCⅢに帰つた。

CⅢ 野田、広瀬、村井、佐藤、広橋、米林。

CⅡ 山本、田村、菜清、田井、打出、谷垣、高橋(全員CⅢまでサポート)

CⅠ 撤収、BH平田、玉井、保母、大工原、笠松

28日(曇後快晴) BH撤収す。

CⅡ隊8.10発、10.55CⅢ着、14.30CⅡ着。

明け方は風が強かつたが8時頃には風が止み、CⅡ、CⅢ間2時間45分の新記録を立てた。CⅢで北側急斜面に雪洞を掘りながらふと下を見るとCⅣの黄色いテントが点のように見えるではないか。まだ正午を過ぎたばかりだ。馬鹿に早い。田村、打出、田井は食後CⅡへ引きかえした。

テント設営がすみ、雪洞が完成する頃P2の上に黒い影が見えはじめた。雲が去つて快晴となる。CⅢ隊8.00出発、9.30ピーク

２２００m着、テント設営、１１.００発、13.００CⅢ帰着、米林、佐藤、村井の偵察隊兼サポート隊は広橋、野田、広瀬にサポートされてCⅣをピーク２２００（通称赤牛台地）にCⅣを出した。その結果予想に反して雪の状態も好くCⅣまではアイゼンのままで行ける見通しがついた。山本、広橋、兼清、野田、広瀬がテントに入り谷垣、高橋は雪洞に入る。

２９日（雲強風）　CⅣ偵察隊米林、村井、佐藤は河原まで下りて橋をかけた。

CⅢ隊　4.００起。8.２０出発、9.２５CⅣ着、食事。１０.１５出発、１２.１５CⅢ帰着。

森林限界から下の心配していたブッシュはすつかり雪の下にたり尾根の形がはつきりしているので視界さえよければまずまず間違える事はない。このあたりまで下ると雪がべとつき、それまではクラフトしていてアイゼンがよくきいていた雪が、アイゼンの下に１０cmも雪が団子になる様な湿雪に変つて全く始末が悪い。しかし気温は高いから、風が強いにもかゝわらず手袋がなくても大して冷たく感じない。

CⅢの者は食糧の余裕が出来たので入山以来始めての満腹感を味わつた。合宿の成功を祈りつつ8.００寝る。

３０日（風雨強し）　CⅡCⅢCⅣ停滞。

２９日夜シュラーフに入つてからだんだん風が強くなり、テントをバラバラと打つ音が聞え始め夜半に入つて猛烈な風がテントをひきちぎらんばかりに横なぐりに吹いて、今にも裂けはせぬかと思われる程だ。朝起きてみると足元の低くなつている方が一面の水たまりでシュラーフとキスリングを取去つてみると、深さ１０cmたらずの池になつている。すぐに他の３名を起してシュラーフをまるめ濡れては困るものを全部かたづけた。食後寝床の一策としてグランドシートを１０cmばかりT字型に裂いたら２，３分の間に水は消えた。終日雨又はみぞれが降り風が強かつた。

赤牛のCⅢは雪庇の発達状況や吹きだまりの様子から風が南西から吹くと判断して頂上の西側にテントを南北に張つたが、風は西から吹きあげてきたので真横にうける様になつた。今後ここへテントを張る者は注意すべきである。CⅡ、CⅣのメンバーも難儀している事だろう。

３１日（晴風弱し）　CⅡ田村、打出が鷲羽岳まで往復す。CⅢ停滞、CⅣアタツク出発。

CⅢにて。テントのベンチレーターから見える空の色が青に変つた。思いはCⅣに走りアタツクはどうしているかと心配される。

終日テントの雪かきや干物をしたり食糧、装備の整理をする。夕食が終ると気がそわそわし出す。２９日にCⅣの者と決めて来た7.００，7.３０，8.００のアタツクとの連絡時刻がせまつてくる。連絡は先ず7.００にアタツクは連続５分間、懐中電灯で信号を発し、それをCⅢCⅣで確認すればただちに５分間連

続点灯する事になつている。しかし昨日の天気の事を考えると雪崩を避けて今晩スゴ沢を上る見込みが大きいからおそらくまだ灯は見えないだろう。6.50各自ヘッドランプの明るさを確かめて外にとび出す。雲海がぐつと低く、日本海から西北へ水平線を作り空との境目あたりがまだ夕日の赤みを残して赤く薬師岳が黒々と前に立ちはだかり鋭い輪郭がその黒さを目に焼きつける。右下には黒部第四発電所の照明灯がはつきりしている。3分前風がようやく身にしみて寒くなり出し首筋がぞくぞくする。

しかしよく見るとスゴ沢の所だけうつすらと白くガスがかかつているのが見える。残念なるかな、これではうまくいかぬかも知れぬ、目の錯覚であろうか、スゴの頭へ続く尾根の中間に何かちらちらと見える様な気がする。7時1分前（私の時計で）見よスゴの乗越あたりに今までなかつた灯が見える。非常に明るい。富山の町の灯ではないか。いや、確かにアタツクの連中だ。夢中で電灯をつけスゴのコルの方へ向ける。灯りはじつとして動かない。1分過ぎにCⅣからの明りがこちらにみえた。まずは成功だ。夢のような気がする。CⅣとアタツクの明りが一直線上に見えCⅣの明りが何かを言つているように思われる。4人抱き合うようにして互に手を握り歓声をあげてしばらくしてコルの灯が消えてからテントに入つた。

4月1日エイプリルフール（晴無風）

CⅣ12.00撤収、CⅢ15.30～食事、16.00CⅡ帰着7.00

アタツクの後の虚脱感があるのみ。雨の後であつたが温度が下つたので雪は固かつた。10.00CⅡの3名が連絡のためにCⅢ到着、CⅣの連中が帰つてくるのを待つていたが、14.00になつても現れないので高橋、広瀬と共に先に帰らした。山本、谷垣が迎えにP_2まで下つた所でCⅣから兼清、村井、佐藤は重い荷にあえぎながら上つてきた。CⅢについた時は午後3時をすぎていたが天気が好いのでCⅡまでがんばつた。

4月2日（晴）　9.00出発烏帽子BH16.00濁小屋21.00

アイツクスザイルをはがしながらBHへ帰つた。BHには10人用食糧3回分が罐につめて残されてあつたのは全く嬉しかつた。しかし翌日の天候が不安であつたので最後のがんばりを続け、濁についた時はフラフラであつた。

後　　記

合宿は結果から云えば成功した。又大体予定通りの行動がとれた事は幸運であつた。アタツクが出るまでは成否は五分五分であると思われたが、唯の1回の試みによつてうまく行つたのは、あつけないという言葉があてはまるかも知れない。これは明らかに良い条件がそろつていた為であろう。しかし少し反省してみる事がある。

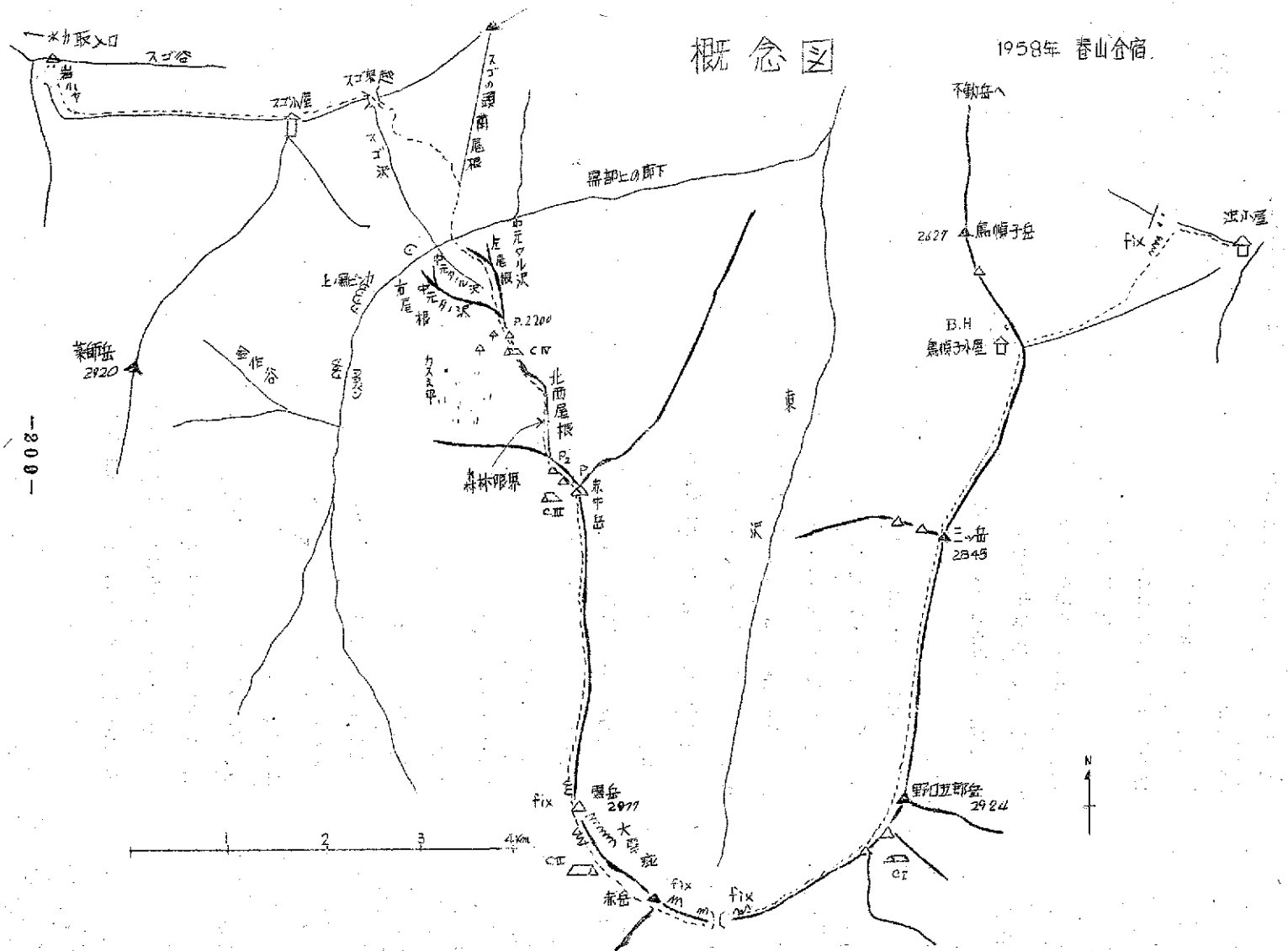
先発隊は計画表によれば本隊が追いつくまでにＣⅡを建設し終つていることになつているが実際には先発隊の装備が予想以上に多く、ＢＨへ入るために３日もかかり、おまけに平田が身体の調子を悪くしたので計画通り行動出来ず、その精神的負担は大きかつたようだつた。出来ればもう少し荷物を軽くする様に注意するとか、絶対確実の範囲内で行動出来る様に精神的な余裕を持てる様にすべきであつた。

行動計画では第一段階では尾根にも難かしい所がないからというので停滞日数を少く見積つていたが、予想以上に天気が悪くＢＨの食糧は不足を極めた。それに反しＣⅡＣⅢＣⅣでは食糧が半分以上余り、持つて帰れないものを少なからず放棄したのである。従つて全体として前半は食糧が不足し後半では余つたのであるが春の合宿では日がたつにつれて天候が良くなる事を考慮すれば合宿の停滞の取り方はほぼ一定で良い様である。

隊員については、はつきり云つて非常に残念でならなかつた。というのは特に２年生の中堅部員が身体の不調や進学手続その他によつて５名もの多くの者がＣⅡから先に入らなかつたのである。それ故合宿を継続するためにはどうしても新人を登用せねばならなくなり、隊員の安全という点で大きなマイナスとなつた事は動かせないのである。

以上気のついた点のみについて述べたが、合宿がうまく行つたのは合宿に隊員全員が真面目に取りくんだことが最も大きな力となつたのだと思つている。

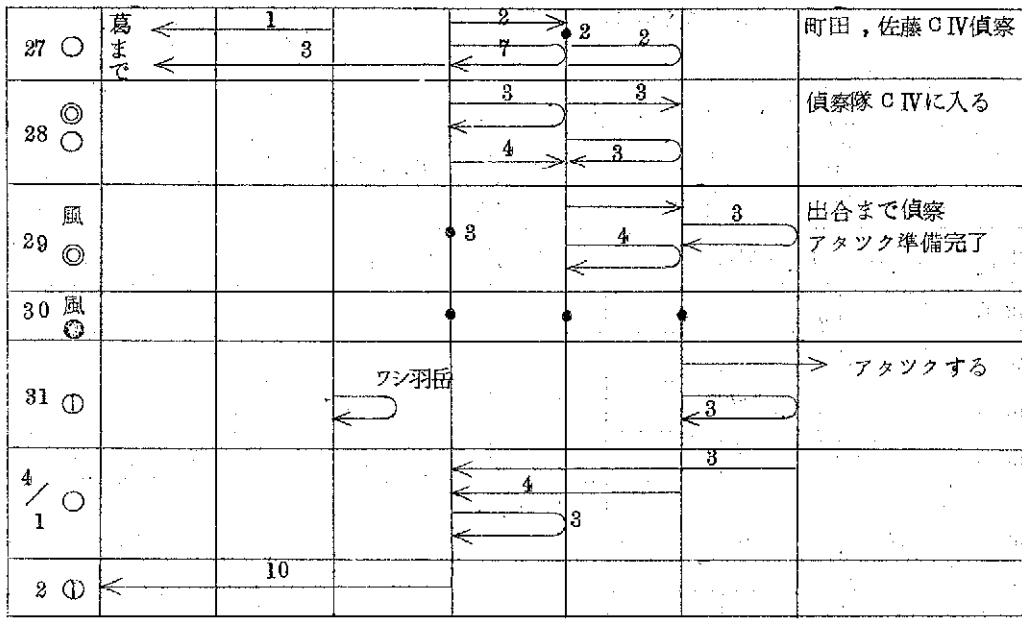
（時報１０号）


概念図
1958年 春山合宿
スゴ谷
スゴ小屋
スゴ峠越
スゴの頭南尾根
スゴ沢
黒部上の廊下
左尾根沢
右尾根
上黒部
金作谷
P.2200
北西尾根
森林限界
東中岳
東沢
不動岳へ
2627 烏帽子岳
B.H
烏帽子小屋
三ノ岳
2845
野口五郎岳
2924
鷲岳
2977
赤岳
fix
1 2 3 4Km
N

1958年 春山合宿 行動表

〔•印は停滞を示す〕

	濁小屋	烏帽子 BH	(野口五郎) CI	(黒岳) CII	赤牛岳 CIII	(P.2200m) CIV	出合	備考
3/11	平田,野田	佐藤,五百蔵	前沢,高橋	以上6名濁	小屋着			
12 ①	→	6						
13 ⊗	停滞	•						
14 風 ①	3 →	← 3						荷物三ツ岳デポ
15 ①	→	← 2 → 4						本隊21名濁り入り
16 ○	→ 19 ←	4 ← 2	4					先発隊CI入り 本隊ボッカ
17 ⊗	19 停滞	• 6	• 2 ← 2					BHにてパッキング CIより東沢までトレース。
18 ①	19 →	← 4	• 2 ← 2					CIへ第1次ボッカ 東沢乗越までフィックス
19 ○	2 →	10 → 11 ←	• 4 晴天停滞					BHからCIまで第2次ボッカ。CIへボッカ隊入る。
20 風 ⊗		←	• 14					三ツ岳よりひき返す
21 ①	2 →	1 → ← 13	4 → 10 ←					CIIへフィックス隊入る
22 風 ⊗		• 15	• 12	• 4				五百蔵発病
23 ⊗		• 15	• 12	• 4				
24 ⊗	3 → ← 1	→ ← 6 ← 1	• 3 17	→	→ 4			五百蔵下山させる。 CII隊CIIIへ出る。
25 ○	←	→	6 → 5 ← 2 ←		• 4			アドバンスベースCIIに荷物人員集る。
ガス 26 ⊗	← 3		→	• 8 4	• 4			



1959年 夏山合宿

千丈沢及び槍ケ岳周辺

野田 憲一郎

一般に夏の合宿地としては剱や穂高が選ばれる事が多く、我々も過去3年間、これらの山で合宿していた。けれどもこれらの山の混雑ぶりは年々はなはだしくなり、また新鮮さも乏しくなつたので、今年の合宿地はこれ以外の場所を選ぶ事になつた。いくつかの候補地のうち、豊富な雪渓とあまり人に知られていない、静かな上に変化に富む岩場のある北鎌尾根棱が合宿地に選ばれた。

北鎌尾根を全般的に見ると、独標以南の千丈沢側には岩登りの対象となる岩場があるが、天上沢側や独標以北には森林が発達していて岩場は殆んど見られない。千丈側の岩場を穂高や剱でよく知られている岩場と比較してみると、その最大の特色は狭く、急な沢が複雑に発達し、数多くの枝沢に分かれている為、地形が極めて複雑な事である。この点は特にここに初めて合宿する我々にとつて重要な点で、ある程度の探険的な興味をそそられる点でもあつた。又この付近には殆んど知られていない沢があるが、この中東沢の遡行が篠田先生のアドバイスによつて計画の中に組み入れられた。

合宿参加者は以下の通りである。

野田（ＣＬ）・平田（ＳＬ）・佐藤・田井

大工原・森村・田村・村井・大島・西垣・酒井・打田・五百蔵・森田・白井・保母・錦田・谷垣・高橋・宇野・前沢・金子・米沢・丸尾・梶本・三沢・加藤・松井・それにOBとして広橋・岡田

7月13日　先発隊大阪発。田村ら3名は先に千丈沢へ入り偵察とキャンプ地の選定、整備を行う。大工原ら2名は細野で食糧の購入に当る。

7月15日　本隊大阪発

7月16日　（快晴）　大町→第5発電所13.00七倉発、16.30第5発電所着。温候まで入る予定であつたが大町での連絡がスムースでなかつた為七倉への集結が遅れた。懸念していた台風5号は本邦を外れ、好天に恵まれた。

7月17日　（快晴）　第5→BC　6.30湯候　17.30BC着

高瀬入のルートは起伏の少い楽なルートであるが、非常に時間を要し、六の沢出合より少し上流の右岸のキャンプ地に入る。場所は狭いが仲々良いキャンプ地である。

7月18日　（曇時々小雨）

沢の概略を知る為に偵察、いずれの沢も急なゴルジュをなしているが、六の沢は巾も広く、傾斜や雪量は新人の雪渓技術訓練に最適であり北鎌尾根からの下山ルートとしても、大槍を越えるわずらわしさを避ける唯一のルートである。五の沢は岩場の中核部にいくつもの枝沢を広げた錯綜した谷で、主要なリッヂへは殆んどこの沢から取付くことになる。（ここの地名は慶応大学の呼称と法政大学の2つがあり、我々は尾根については慶応の、沢については法政の呼称を使つているが、非常に不便である。全般的な名称の統一が必要であろう）

7月19日→26日

この期間の定着合宿中の登攀対象は、A稜、B稜、C稜、D稜、C稜ツルム、六ノ沢左方の小尾根、小槍、硫黄岳、中東沢などであり、天候のはつきりしない日には双六岳、西岳、南岳方面へ歩いた。北鎌尾根側面の各稜は最近「岳人」などにくわしいので時間記録の一例に補足的説明を加えるに止める。

最もアプローチの短いのがC稜ツルムである。正面の高度差は150m程度であるが草付と硬い岩のミックスした非常な急傾斜で腕力登攀を強いられる。中程に45°程の広い斜面があり、この上に見事な凹角がある。私の記録では11ピッチ、5時間。また正面左方にまつすぐつき上つたクラックがあり、広橋、酒井が21日に登つた。恐らく初登攀である。A稜は最終の2ピッチが非常なナイフリッヂである。そこに至る3～4ピッチは楽しいフェイスである。

C稜は上半部はコンテイニュアスでも登れる容易な尾根であるが取付きは各パーティまちまちである。D稜は最もスケールが大きく、アプローチも最長である。大きく三段に分れていて取付に洞穴があり、冬期にビバークし

た記録を入れた瓶がある。取付より4時間・8～10ピッチ。取付以前から相当手応えがある。

硫黄岳、赤岳は北鎌尾根千丈沢側の展望台として最も優れているが、岩が極めてもろく、登攀の快適さは求むべきもない。いずれも涸れた沢をつめて稜線へ出るが、ここの地形もよく知られていない。赤岳→硫黄岳の縦走はあまりにも岩がもろく危険である。

中東沢へ村井、白井らが試登したがあいにくの降雨による増水で目的を達し得なかつた。

なお、合宿中の天候は18、22、24、日が雨又は曇一時雨であつた以外は絶妙の晴天で相当の行動が出来、一昨年、昨年と恵まれなかつた夏山合宿も久し振りに相当の収獲があつたと云えよう。

7月27日　（快晴）　BC→湯俣

徹収を行い、湯俣で各縦走隊毎に別行動。後立山パーティは濁へ、他は湯俣でキャンプ。第5発電所に預けた縦走用の荷物を荷上げする。堀井は飛弾乗越を経由して帰阪、村井は双六小屋へ向う。

以上の様な経過で夏山合宿を終えたが天候も良好で各部員の熱意も相当に発揮され、北鎌尾根を選んだ目的にもほぼかなつた成果が得られた事と思うのは事後の記録整理が不充分であつたため貴重なスケッチや記録の一部を失つた事である。

記録整備の為に強力な記録編集機関を作るべきであろう。　（時報11号）

1959年 冬山合宿

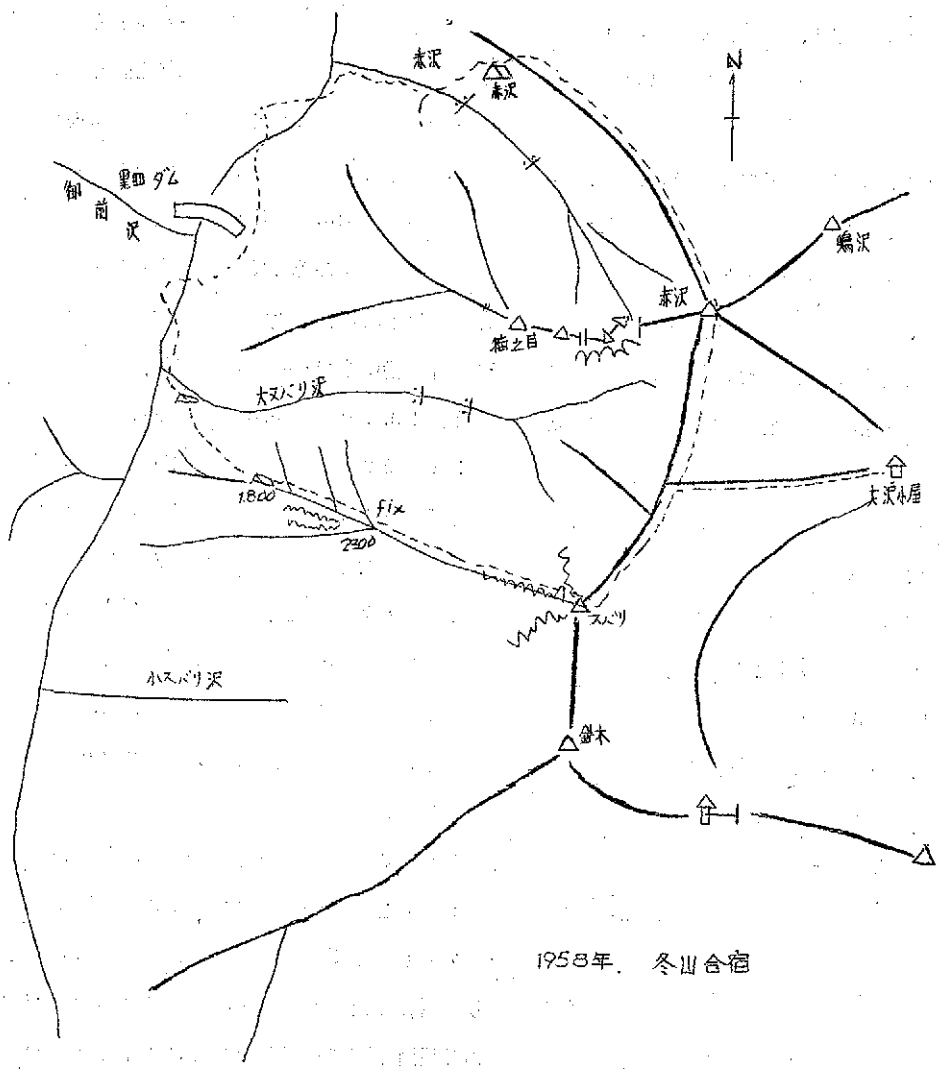
I　スバリ岳及び赤沢岳周辺

田村俊秀・田井英男

前回まで数回の積雪期ボーラーは、少数の上級部員に極度の能力を期待する一方、他の部員は殆んど受身の山行に終始する傾向にあつた。従つて今回の合宿には、各人の自主性を尊重し上級部員の多くにリーダーシップを持たせる為に少人数のパーティを各地に分散させ独立して多角的に行動せしめる形式が望まれた。これに加えて新人を訓練する事、又ゲレンデ化していない新鮮な目標を選びたいという要求とを巧みに組合せる事が計画作成の上で腐心した所である。この形式は部としての大きな成果は得られぬが、それよりも個々の部員の単なる技術以上の成長が重要と思われ、これは来たるべき薬師、剣攻略の為にも必要なことであつた。合宿は北アと南アに別れた。

スバリ岳西面

大町トンネルの開通は黒部流域の山々に新しい可能性を与えた。元来これらの山々はアプローチの困難な所から下廊下横断に見られる如く長時間の地味な忍耐の対象とされていたものが、入山が飛躍的に容易になつた為、北アの中核を直ちに突き得る軽快な登山の対象と看做される様になつた。ところで我部の黒部流域の伝統を新しい条件のもとでたどる



1958年　冬山合宿

べくこの地点がとりあげられたのである。

本計画は33年5月宍戸OBによる赤沢岳猫の耳周辺の登攀及び新たに34年秋の3回の偵察をもとにして赤沢岳西尾根（猫の耳峰を有す）とスバリ岳西尾根（中央稜）を黒部から登攀する事にし、更に新人の訓練の為、大沢小屋をBHとしてここから直接赤沢スバリ間の主稜線に至る尾根を加えた。西面の尾根は、共に短いが急峻で頂上直下に顕著な岩峰を有し中級技術の満足に適し漸く充実をみせて来た多くの中堅部員達に好適と思われた。

12月25日　大阪発

12月26日　大町からトラックで大町ルート経てトンネル通過、赤沢口に至る。途中日向山関電事務所へ挨拶に寄つた。扇沢で大沢隊は大沢小屋に向い、スバリ隊、赤沢隊と

そのサポート（村井、金子、米沢）は赤沢口で下車、以後各隊全く独立して登攀行動に入つた。

スバリ隊メンバー　田村（L）、山本、酒井、前沢、高橋。

１２月２６日（晴れたり曇つたり）　赤沢隊と別れ、村井等のサポートを受けつつ、工事用の足場を伝い黒部河畔に降り立つた。作業は休止され巨大な鉄骨やコンクリートが更に巨大な赤沢の絶壁に寒々とくつついている。右岸の一部をザイルでへつり、大スバリ沢に入つたが、河原の石の上に軽く乗つた雪は意地悪い落し穴の連続で僅か５００ｍ進んで左岸に設営した。この沢は狭く暗く陰惨でさえある。１０.３０トンネルに入る。１１.００赤沢口、２.３０スバリ沢出合、４.３０サポート引返す。６.００テント設営。

１２月２７日（晴後雪）　本日はテントを進める前段階のボッカである。秋の偵察通り左岸の台地を遡行し尾根の側面にとりついた。猛烈なラッセルで、時には胸まで埋まり踏めども踏めども手ごたえなく非常に消耗した。後線末端の１８００ｍ付近にデポし下る。登り５時間のところ下りは僅かに２０分で唖然とした。９.１５発、１１.１５尾根取付き。４.２０デポ。４.４５下山、５.１０取付点　６.００テント。

１２月２８日（雪）　テントを昨日のデポまで進める。昨日のラッセルの為行程ははかどるが、湿雪は登るにつれ乾燥しアワが盛んに足もとを流れ、せつかくの踏み跡をくずしてゆく。ブッシュの中なので危険を感じないが一ケ所ナダレヒモ３０ｍ一杯にかつて逃げ切つた。やせ尾根上にテント地がみつからず、さがし廻つた挙句、断崖につき出した岩のテラスを木の枝でひろげて我々５人のねぐらとした。足下に黒部を背後に立山剣をひかえ、猫の耳の絶壁を仰いで身震いする様な眺めである。１０.１０発。６.００テントに入る。

１２月２９日　（小雪）　本日は２３００ｍまでテントを更に進める準備としてフイクスとボッカをする。秋の偵察でテントを上るのに最も困難と予想される部分である。１０Kgの荷をもち樹林の中の急な尾根はまるで木登りで苦しい。５０ｍ一杯にフイクス、予定の半分も進めずデポ。９.４５発。２.２０デポ、３.４０テント。

１２月３０日　（快晴）　昨日に引続いてフイクスをしつつデポを進め２３００ｍにともかくも達して見る事にした。昨日１日がかりで開拓したルートを１時間で通過した。初めて足跡を印す事の難かしさと「未知」という重荷はより大きな試練である。更に３ケ所各々５０ｍ一杯にフイックスとデポを進めた。最後の１００ｍはブッシュこぎとラッセルを垂直にやらかした様なものであつた。悪場を終えて２３００ｍに達したが、いまだ樹林帯はスバリのピークも見えない。得難い快晴の一日、隣の猫の耳は白い怪猫よろしく我々のケチなブッシュ中の苦斗をあざ笑つている。

以上4ケ所のフイツクスをした。これもテントを上げんとした為であるが予想以上に悪くことに撤収の際思わぬ困難にぶつかる恐れがある。山本と協議の結果、テントはこれ以上進めぬ事にし、ここ1800～2800のスバリまでビバーク覚悟で一気にアタツクをする事にした。8.30発、9.40デポ、4.30 2300m。5.20テント。

12月31日（小雪淡雨） ラジオはしきりに山岳地帯のナダレを注意している。天気図上に3つの低気圧群が手をつないで我々をうかがつているので停滞とした。気温は高く10～15℃。

午後から雨となり天幕の底が池になり始めた。ナイフで穴をあけ排水するが一面に濡れとほる。今日は大晦日、夜中にラジオ入れると第九シンフオニーをやつている。濡れたシラフに顔を埋めて雑音から合唱をより分け聞いた。

1月1日（小雪） デポを回収しようと出発しかけたが夜来の雨で雪が不安定なので見合せた。元旦の一日、トランプにウイスキーをなめ、たら腹食つて縮いだ。横着な奴程タフだ。夜、星が見える。アタツク態勢で就寝。

1月2日 「快晴だ起きろ」とキーパーの酒井の声。言うなり目前にヌツと朝のソバを山盛つきだした。5.00発（アタツク田村、山本、サポート前沢、高橋） 満天の星が氷りついてアイゼンがよくきしる。暗闇の中へツドランプとフイツクスをたよりに悪場を早々に通過した頃、立山がモルゲンロードに映えた。2300mからワカンをつけ緩傾斜の楽な尾根を高橋と前沢をラツセルにたてて急ぎ9.20頂上直下の岩峰取付きにつく。ここでサポートを帰し岩場によりついたが、案に相異して紛雪の軽く乗つた岩場は、みかけのいかめしさに似ず殆んどザイルを要せず突破11.30頂上、すでに9.00頃からガスを巻き始めていたが、この時にはかなりの風雪となつていた。帰路は往路を忠実にたどる。風雪のクライミングダウンは登りの数倍も緊張させられた。しばしば下からの吹き上げに目が氷りつき、岩にしがみついてこらえる。途中視界のきかぬままとんでもない方向に降りかけ磁石とかすかなアイゼンの跡でもとに戻つたが、これが最も恐ろしい腕間であつた。樹林帯に入つて我に返えり、遅い昼食をとる。めぼしい樹の幹に生ま生ましい大きなナタ目が入つているので危く初登攀を疑うところであつたが、帰路を案じたサポートの仕わざと判明した。フイツクスを一部回収、全所要時間12時間、成功の夜は話しがはずんだ。

4.00起床、5.00出発 7.00、2300、9.20取付、この頃から天候悪化、11.30スバリ頂上、11.45下降開始、2.30取付 3.00昼食 5.00テント。

1月3日（曇） 撤収、入山時より雪が安定してあるきやすい。工事場は全く人影がなく、風雪のなすがままである。荒涼として

砂漠に忘れ去られた廃虚の様だ。トンネルを出、タクシーで大町へ、黒部の雪がいつぱいくつついたザツクをホームに積みあげた。一片の雪もない大町ではこの雪はなにものにもかえがたく思われた。

11.30発　1.05大スバリ沢出合　5.00赤沢変電所

〈後　記〉

赤沢スバリ両西尾根共頂上直下にある氷雪の付着した岩峰の突破にかなりの困難を予想し、この為テントを出来るだけ尾根の上部まで上げてアタツクの行程を短かくしようとした。しかしせまい急な尾根にテントを上る事は容易でない。即ちアタツクの負担を多くしてテントは低きにとどめおくか、或いは無理をしてでもテントを上部まで上げアタツクにゆとりを与えるか、我々は後者をとつたのであるが、反省を試みれば、岩峰の困難さを過大に見積つて不必要に迂慎重でスピーディな行動を制約する結果になつている。ことに北アの様に冬期晴天のない所ではスローな方法はチャンスを逃がしやすい。しかし本年は雪の到来が遅れ岩峰の雪氷が少なかつたので本年の様相が常にあてはまるとはいえぬという見解もあつた。

いずれにせよ久しくスローなポーラ登山をとつて来た我々には1つの方法上の反省の契機を与えている様に思う。猫の耳峰の失敗は電力工事の為当分再挙をはかれないので、残念であるが大スバリ沢側からは比較的良好なルートが得られそうなので遠からず冬季登攀が行われるであろう。転進した西尾根は変化や困難を求める興味はないが、阪大による鳴沢尾根、猫の耳などを含めた一連の尾根群の登攀を完成する一端として意義を認めたい。大沢小屋は初級訓練の目的を充分に果した。即ちテントマナからスキー、ワカン、アイゼンのいずれの舞台をも備え容易な尾根を得て稜線の経験をもあわせ得た。又大町に近いところから忙しいOBでさえ次々と見え現役との交歓が見られたのは大きな収獲であつた。

赤沢岳西面

1958年5月　宍戸、広瀬（OB）現役4名が、立山より黒部へ下り、赤沢にテントを出し赤沢岳西面の登攀を行い、猫の耳と呼ばれる顕著な岩峰の並んだ西尾根の詳細が明らかになつた。西尾根はピークより大小の岩峰を連ね、その両側は切り立つた壁となつている。後立山西面における行動の一端としてこの尾根の途中にテントを出し、ピークへのアタツクを計画した。西尾根の取付点及び猫の耳を含む、岩峰群の突破にはかなりの困難が予想された。

結果は赤沢を取付点迄行く事が出来ず、赤沢岳西北尾根（赤沢と鳴沢の間の尾根）にテントを出し、赤沢頂上を往復した。

期間　12月26日～1月1日

メンバー　田井（Ｌ）、谷垣、米林、広橋（ＯＢ）、村井、金子、米沢。

１２月２６日（小雪）　8.45大町着、9.45関電黒４建設事務所、１0.00大町トンネルに入る　１0.55黒部側出口着。スバリ岳隊と別れる。１１.45発、きれいに除雪された道路を黒部へと下る。赤沢岳西尾根の巨大な壁から絶えずシャワーが落ちている。すさまじい壁だ。黒部赤沢出合より少し上流の赤沢左岸の熊谷組飯場の小屋を貸してもらえた。１5.30。

１２月２７日（小雪）　米林、田井、広橋、赤沢偵察、9.20出発、赤沢は埋もれているが、大きな岩が出ていてそれを越すのに苦労する。雪がフワフワでよくもぐる。
ラツセルを続けたが、ピツチはあがらぬ。１0.45前方に１５ｍぐらいの滝が露出しており、危険が予想されるので、引返す。（１１.１５）飯場。かなり高い所に枝トンネルの口が開いているらしいので、午後はそちらを偵察した。（１3.00）出発。黒部側へもどり、雪で埋つた道路を伝つて、トンネルに入る。送風機室より外へ出してもらつた。（15.00）赤沢はかなり低いところにある。３０分程上へ登つてみた。行けぬ事はないが、雪崩道で、新雪が降つた後の撤収の事が心配である。送風機室へ下り、番人に聞いたが３０日より正月中閉鎖してしまうとの事で通行出来ない。赤沢からここへ直登するのは不可能である。（１7.35）飯場。村井他は西北尾根を偵察したが、飯場より西北尾根にテントを出す事は可能だ、との報告であつた。以上の状況より西尾根をあきらめ西北尾根よりピークを狙うように計画を変更した。

１２月２８日（小雪）　全員6.20出発、すぐ尾根にとりつく。木の枝にぶらさがりながらラツセルを続ける。9.30やつと西北尾根上に着いた。２ケ所急傾面にフイツクスザイルを張つた。雪がだんだん激しくなつて来た。１2.00ガスの中でテントを張る。１3.00　4名テント入り、他の3名下山する。大沢小屋へ。

１２月２９日（小雪）　雪の中を偵察に行く。１0.00出発、尾根は細くなり、大きな岩がごろごろしている。樹と樹の間の吹き溜りに落ち込んで苦労する。時々薄日がさし、黒部や猫の耳がガスの間から見える。赤沢は険悪な様子を見せている。１2.15、３つ目のギャツプ。森林限界まで見通しがついたので、食事をすませ帰る。１3.15。テント着１4.15　明日は天気が期待出来そうだ。

１２月３０日（晴）　アタツク田井、米林、サポート広橋、谷垣。
5.40出発。ライトをつけ、昨日のラツセルを頼りに進む。森林限界へ出る迄、木登りが続く。１0.00～１0.40食事。木の間から猫の耳をのぞき、フアイトを燃やす。11.20森林限界を出た。１2.00岩峰が出て来たので、輪カンをアイゼンにはきかえる。サポート隊と別れる。雪をかぶつた岩稜を伝つて直

上。別に危険な所はない。13.00ピーク、風も殆んど無い。薬師岳がはるかにかすんでいる。スバリ西尾根下部にオレンジ色のテント発見。田村隊のだ。連中の苦労が思いやられる。主稜線スバリ赤沢岳のコルから、数名こちらへやつて来る。大沢隊だ。28日下山した村井と再び頂上で握手。14.00発、春のような暖かさの中を快適に下降。行きそこなつた猫の耳をいつかは登つてやるぞと睨みながら。16.20テント着。

12月31日(曇風強し)　天気がくずれそうなので、急いで撤収、11.00出発。赤布標識を頼りにどんどん下る。すべるように赤沢へ、13.30変電所で泊る。

1月1日(曇)　トンネルをぬけ、大沢小屋へ入つた。

〈後　記〉

目的とした西尾根に取付く事も出来ず、失敗だつた。雪が予想以上少なく、取付き迄赤沢を上る事が不可能だつた為である。その点、偵察も足りず考え方も甘かつた。

テントは出せずとも下からアタツクを行ける所迄出す事も考えたが、前述のような事情及び天気の点で出来なかつた。

赤沢岳西面、スバリ岳西面は積雪期、無雪期を問わず高度の登攀対象として今後期待される。

大沢小屋生活

期間　12月25日〜1月3日

メンバー　大工原・笠松・打出・錦田・三沢・桑田・森・大角・村井・金子・米沢・兼清・奎中・関本・抱・岡田

12月26日(曇後雪)　田村達を見送つた後、残された荷物の山を見て、うんざりした。とにかく出来る丈の荷を持ち、あとはデポする。11.30出発。夏道は台風のためくずれて分らず、河原をラツセルする。重荷と深雪にさつぱり進まず、小屋までいやに遠く感じた。15.25大沢小屋着。少し休んでから、しばらくお世話になる小屋をそうじして居心地良くした。

12月27日(小雪)　6.00起床。大工原、笠松は尾根の偵察。残りはデポを取りに行く。目的の尾根はスバリ、赤沢の中間から、真直東へ下りているものである。取付は小屋の正面、何の事はない。裏山に登るようなものだと取付いて見たが深いラツセルには参つた。それでも下りがないので高度は確実に上つていく。林をぬけていくらか木のまばらな所にテント地を見つけた。14.00テント予定地、ここで引返す。打出達は午後からスキー練習。

12月28日(雪)　4.50起床、テント予定地へポツカする事にしてパツキング。8.00出発、所が昨日のラツセルがあつたので、快調に登り10.45には予定地につく。更に上に上げるべく、ラツセルするが、ここからは難渋する。少し行くと、150mくらいの

ナイフリッジがあり、そこを過ぎた頃から、雪と風がはげしくなつたのでデポする事にする。12.00デポ　14.10小屋着。今夕から1斗罐利用のルンペンストーブを使つたので、薪がよく燃える様になり、小屋生活も快調になつて来た。

12月29日（雪）　4.30起床。きのうのデポをさらに上にあげるべく出発。7.30出発。9.00デポ地。デポはそのまま空荷でどんどんラッセルしていく。2 600m付近に良いテント地を見付ける。12.00テント予定地。すぐテントを張れるようふみかためた。14.40小屋着。小屋には村井以下のサポート隊及び兼清（OB）の計7名が来ていて、にぎやかになつたが、せまい小屋は足の踏み場もない程になつた。小屋の横にN_2テントを張り村井、金子、森田が入る。

12月30日（快晴）　OBが来ると、たちまち晴れた。5.00起床、8.40出発。今日まで見えもしなかつた稜線や爺子すら見える。晴れているので益々快調に登り9.45デポ地着、ここから兼清以下精鋭のラッセル隊が先行、あとはポッカする。テントは予定地よりさらに上げ、2100m付近に張る。10.50テント地着、テントに杢中OB、金子、錦田、米沢が入る。テントを張つてからラッセルを追う。12.00テント地発、途中10m程フィックスする。あとはただ登るのみ、案外あつ気なく、稜線に出た。13.00稜線。立山、猫ノ耳が圧倒的だつた。新人の他は赤沢往復、15.50小屋着。村井、森、大角直ちに下山、あとはストーブをかこんで話に花が咲いた。

12月31日（曇後雪後雨）　7.00打出、三沢、森田が上のテントへ連絡に出る。あとは朝寝坊を楽しむ。昼から薪取りとそうじをして新年を迎える準備をした。門松も立てた。上のテントでは、針ノ木往復を目標に出たが、悪天候のためスバリにて引返す。抱OB、霞本OB下山。夜になつて雨になつたので小屋の横のN_2テントを撤収する。

1月1日　（曇後雪）　上のテント撤収のサポートをすべく準備している所へ、赤沢隊の連中がやつて来た。そうこうする内に上のテントの連中も撤収して下つて来た。小屋内騒然。食糧係、食い放題を宣言する。

1月2日（曇後雪）　5.30起床、小屋の中は人でごつたがえし、始の清潔さは全然見られない。大工原以下6名、付近のゲレンデスキーの練習に行く、食糧はだぶついている。

1月3日　（曇）　最後のモチをたらふく食う。9.20小屋発。10.10トラック道。トラックが正月でないのでスキーで下る。13.30大町着、7名与兵衛氏宅へ。あとは直ちに帰阪。

（時報11号）

1959年 冬山合宿

Ⅱ 白根三山—大唐松尾根

冬の合宿計画にあたつて、我々がまず考えねばならなかつた事は、わずか2週間の短い日数のうちにいかにして多数の部員が効率的な山登りをするかという問題だつた。一方、部の中で1956年冬のバットレス以来しばらく遠ざかつていた南アルプスへ再び目が向けられた。その結果後立山黒部側と白根三山という分散合宿の形態がとられ、さらに後立ではより小人数のパーテイによるクライミングが行われたのである。

当初の計画は次のようなものであつた。釣尾根にACを置いて北岳バットレスの1本の尾根を登り、次に白根三山を縦走して農鳥岳から前年冬神商大にトレースされたばかりの大唐松尾根を下る。そうして後半により大きな比重を置く為、バットレスでは比較的容易な尾根を選ぶ。この観点からバットレスを研究した結果、1956年に登つた第4尾根とその左の第5尾根以外はアプローチ等の問題をも含めて、我々の技術や目的には過大であると思われた。ここで一応目的を第5尾根と定めて10月末から池山小屋への荷上げと偵察とを行つた。その結果、天候如何によつては2つの目的のどちらも達成できない恐れもあり、第5尾根にそれ程の価値もないと思われた。篠田先生のアドバイスもあり、未知の尾根の下降を含む白根三山の縦走のみに計画を変更した。

計画の大要は次のようである。池山小屋をBHとしボーコンの頭付近にBC、これに縦走用の荷物を集結して新人を中心とするメンバーは下山。他は5名で縦走、下山予定は6日。メンバーは野田（L）、大島、佐藤、保母、西垣、五百蔵、森田、白井、黒木、堀本、浜田　以上11名。

12月25日　富士→身延線経由で出発。

12月26日　甲府着、7.41芦安発電所前、ここからチヤーターしたトラックで鷲の巣着11.30、荒川小屋14.30。

夏この地方を襲つた台風の跡はまだ生々しいが、何とか鷲の巣山までトラックは入る。ここからの急な下りは雪がうつすらと地面をおおつている。北アルプスの11月の感じである。荒川小野到着後、大唐松尾根からの下り道を探しに行くが見出し得ない。（後で分つたことだが、この道は林道工事の飯場のすぐ裏手に下つていた）

12月27日（快晴）　荒川小屋発6.00池山小屋着12.30。

池山釣尾根下部の急登は10センチ程の積雪で、部分的な悪場や倒木は我々を苦しめた。ルートは赤旗が沢山あり決して迷う事もない。池山小屋では意外な事件が我々を待受けていた。我々が秋に荷上げした食糧のうち、ビス

ケット２０食、乾パン２３袋（４６食）、ソーセージ１０本、計６６食ほかにローソク大部分など重要な昼食類が殆んど盗難に会つていた。そうして空の罐は小屋の外に捨ててあつた。我々の食糧は全部ブリキ罐に入れて紙で封をし針金でしばつて小屋の片すみに積んであつたのであるが、内容を調べたらしく、全部の罐のフタがゆるんでいた。小屋番の話では１１月頃から３回程この小屋に来たとき、少しずつ盗まれていたという。他のパーティの荷上げ品もあつたが厳重にシールしてあつた為か、開こうとした跡はあつたが被害は無かつた。直ちに食後の食糧について検討した所、第５尾根登攀を予定して少し多目に荷上げしてあつたので朝食用に準備した乾パンを昼食用に当て、朝は少々時間がかかるが他のものでまかなえば、何んとか計画遂行可能である事が判つた。けれども特に昼食用のビスケットについては新しい試みでありその使用について非常な期待をもつていただけにがつかりした。このような盗みを登山者がするはずがないが、今後とも荷上げに当つては注意を要する事だと思う。

１２月２８日（晴一時曇）　池山小屋発 6.３０　１0.３０砂松の頭とボーコンの頭中間に設営。

森林限界までは倒木が多く、木の上を伝つて行く所もある。積雪５０センチ内外、森林限界以上でも風は案外寒くない。期待していた砂松の頭からのパットレスは雪におおわれていた。積雪少く、岩がゴロゴロと露出していて良いテント地は仲々得られない。設営に選んだ場所は少々吹きだまり気味の所で風の方向が一定していないようである。これで縦走用の荷物はここに集結して縦走パーティがテントに入り、五百蔵をリーダーとするサポート隊は池山小屋へ戻る。

１２月２９日（快晴）　9.３０キャンプ発。１2.１０北岳、１2.４０縦走隊とサポート隊別れる。１4.００　３０５０mピーク下で設営（サポート隊別れる）

池山小屋から上つて来るサポートを待つて出発。縦走隊は約３０kgの荷物、八本歯は雪質もそう悪くなく針金なども出ていた。流石に稜線上は厳冬の気分であるが寒さは弱い。東の谷は全く雲海に閉されているが西側は北アルプスの連峰が暖かそうな伊那谷の彼方に全容を現わしている。

ここで縦走隊はサポートに別れ、間の岳へ向う。午後２時近く、ガスが巻きはじめたので早目に行動を中止しキャンプ。テントは初使用のテトロンテント、内張はナイロン。

ここでテントのことにふれると、第一に非常に薄く軽く、凍りつかないので積雪期の縦走に非常に好適である。撤収時にも容易に袋に入れられる。但し第二に薄い事の一つの弱点としてある程度風を通す。その為、テント内の温度を高く保つておく事ができない。この点に少々目のつんだ生地を使う事で幾分軽さを犠牲にすれば解決できるかもしれない。

またその機性をはらつても軽さの面で充分余りあると思う。また、風を通す理由はナイロンの内張にあつたのかもしれない。従来のような木綿の内張ならば水蒸気の凍結によつて繊維の目がふさがれ、充分風を防いだかもしれない。ナイロン内張りは凍らぬ代り、上昇して凍つた水分が雪になつて落ちて来るので寝袋や衣類が濡る事になる。テトロンテントに木綿の内張ならば特に第2日目以後の装備軽量化には少しのブレーキとなるにしても相当に強力であると思う。この晩テント内に落ちた雪を、外部から入つたものかと考えたが、事実はそうでなかろう。

12月30日（晴のち高曇）　7.50出発。9.40間の岳　13.00西農鳥岳、14.00農鳥岳　14.40キャンプ

南アルプス特有のバカ登り、バカ下りを繰り返して進む。風のない場所ではポカポカと暖く、手袋を外しても大して冷くない。西農鳥の登りは直登したが上部では可成り傾斜が強い。西方の山々は高い雲におおわれ、この好天つづきもそろそろ終り近い事を物語つている。農鳥ピークより200m程下つてキャンプ。東斜面なので高く立つた遠い松の上にやわらかく積つた雪で設営困難、曇天となり急激に気温下る。サポート隊ACから一気に西山温泉に下る。

12月31日（曇時々小雪）　8.30出発　13.40キャンプ

大唐松尾根はいくつも大きな起伏をくり返しつつ、大唐松山に到り、次第に高度を下げて唐松平から急に荒川へ落ちている尾根で特に大唐松山までは細く両側は急である。

この尾根に入るまではカンバの木の混つた急なルンゼを腰ぐらいのラッセルに悩まされつつ、半ばすべり下る。尾根の背には所々に小さな岩峰があり荒川側の急な斜面をトラバースして行く。ガスがかかり時々晴れる。正午頃ナタ目発見、テント地は大唐松山の手前。意外にピッチ渉らず大唐松山手前の森林中にキャンプ、夏の焚火の跡がある。積雪量約50cm。

1月1日（小雪）

動いて動けない日ではなかつたが、これまで連日の行動であり、新年の事でもあるので停滞。風もなく静かな正月であつた。

1月2日（晴）　7.30出発　9.00大唐松山　13.30唐松平　16.20荒川出合　17.00荒川小屋　ザックに「初荷」の札をつけて出発。大唐松山からの北岳はするどく立つている。これ以後ルートは南面で倒木が極めて多く、特に雨池山へのジャンクションには殆んど立木が残つていない。唐松平からは最後まで前にのめりそうな下り。積雪が少いのとナタ目で夏道がわかる。1ケ所悪い岩場のトラバースがある。荒川の水音が聞えはじめる頃アイゼンを脱ぐ凍つた急傾面は上りやすく再びアイゼンをつける者もいた。尾根の最下部は急な草付きで足跡は不明瞭である。

1月3日（晴）

夜叉神トンネルを越えて甲府へ、夜叉神峠から鳳凰三山縦走のプランも出たが、食糧棚卸の結果、うまいものがないというので中止、夜叉神荘の前でトラックを捨てて下山、合宿を終る。

（時報11号）

1960年 春山合宿

薬師岳東面

我々阪大山岳部は1956年の下廊下横断（鳴沢一内蔵之助平一立山）に引き続き、1959年上廊下横断（赤牛岳—スゴ沢—スゴ尾根）に成功したがその間1956年冬、双六小屋—雲の平—薬師岳ラッシュ、1958年冬、双六小屋—赤牛岳ラッシュを始めとし、四季を問わず数多くのパーティを黒部川下廊下上廊下源流、薬師岳、赤牛岳、雲ノ平周辺に送つた。

1959年上廊下横断に際し、水晶岳—赤牛岳の稜線を西に薬師岳東面をながめながら行動したが、雪をまとつたその姿に大いにファイトを燃やした。

薬師岳東面は3つの大カール、数本の長大な尾根、深く切れ込んだ谷、多数の岩稜、壁をそなえ1300m程の高度差で急激に黒部上廊下に切れ込んでいる。薬師岳への東からの接近は長い稜線と深い上廊下によつてさえぎられる。その為、有峰より太郎小屋を経て、薬師岳頂上付近にBCを作る事にした。ここから

(イ) ACを比較的容易と思われる南稜第一尾根に降ろし、上廊下を渡つて、赤牛へラッシュ及び上廊下の偵察

(ロ) BCを早暁に出発し、沢あるいは比較的容易な尾根を下つて、金作谷北尾根より南稜末端にいたる間の各尾根を登攀する。

8月、11月に偵察隊を出し地形がかなりはつきりしてきた。又同年11月太郎小屋発、一部食糧のポッカを行つた。3月17日大阪発、23日南稜第一尾根頭にBCを建設以来非常な悪天と湿雪に悩まされながらも、金作谷北尾根、金作谷中尾根、下央稜、南稜、南稜第1、南稜第2、第3尾根、金作谷、中谷、ガラ沢の登はん、上廊下へのアタックに成功した。

天候及び尾根の状態が悪く、テントを下降さす事が出来ず、赤牛岳へはアタックを送り得なかつた。

行動概要

期間　3月17日～4月4日

メンバー　田井（CL）、玉井（SL）、打出、前沢、高橋、佐藤、金子、酒井、宇野、黒木、米沢、平田、田端、森田、田村、笠松、大工原、保母、森村。

3月17日　大阪発。

3月18日　猪谷着、有峰経由、全員折立へ（バス、トラックにより）

3月19日（晴）　6.30発4名太郎小屋へ（15.20着）残りは太郎小屋へポッカ、太郎16.00発、折立着18.45。

3月20日（晴）　7.30発、全員折立より太郎小屋へ（13.50太郎着）独標よりスキー、シールを使用。

3月21日（強風雪）　太郎小屋停滞。

3月22日（晴）　6.50発　薬師へポッカ2回往復　平田，森田は折立へ下山、田井，前沢，南稜第1尾根頭に雪洞を掘る。（着9.45）

3月23日（晴）　全員太郎より空洞を拡張して入る。田井，前沢，第1尾根、中央稜偵察、田端、上岳往復。

3月24日（風雪）　停滞

3月25日（晴）　第1尾根下降—田井，高橋，打出，前沢，酒井。

北薬師往復—玉井，米沢。

南稜下降—黒木，佐藤，宇野，金子。

3月26日（風雪）

3月27日（風雪）

3月28日（晴）　中央稜、上廊下まで、高橋，黒木，前沢。

金作北尾根・中部まで、打出，金子，佐藤。

第2尾根→立石→上廊下→中ノ谷→BC、田井，酒井。

後発を迎えに折立方面へ、玉井，米沢。

後発、田村，笠松，大工原，保母，森村，太郎小屋へ。

3月29日（曇）　田井と酒井の凍傷を2名太郎へ連絡。田村，保母，玉井、太郎よりBCへ上り玉井は凍傷の酒井，佐藤と太郎へ下る。

3月30日（曇）　黒木，金子，高橋、太郎へ下る。他は停滞。

3月31日（風雪）　停滞

4月1日（曇時々雪）　太郎より酒井他5名下山。

4月2日（晴）

第2尾根→ガラ沢→第3尾根　田村，保母

金作右俣→上廊下→金作中尾根　打出，宇野

第2尾根下部　田井，前沢

玉井，大工原，笠松，高橋は太郎より薬師往復し一部撤収。

4月3日（ガス）　BC撤収、太郎へ

4月4日（晴）　全員太郎→有峰→富山

行動記録

〔金作北尾根〕

3月18日（快晴）強風→地吹雪

メンバー　打出，佐藤，金子。

雪洞発7.15　北薬師の手前で佐藤調子悪く引返す。帰路佐藤は右耳に凍傷を負う。北薬師8.20に通過し北尾根の分岐点を9.15に通過。この分岐点は雪庇のため上から分りにくく少しとまどつた。分岐点から少し下つた所から急な斜面となり上からは斜面の途中の部分は見えない。急になるコルを9.40に

通り、そこでアンザイレンする。雪は新雪が表面に１０cm程積り団子になつてすべる。その斜面の下のコルが１１.１０ここで高度にして黒部川までの約半分、距離では約２／５程であり、下まで下り得る見通しは立つたが天気と時間を考え、１２.３０引返す。そこから下はナイフリッジが少し続きその下はブッシュである。稜線２.１０　風はかなり強い。デポ地点３.４５　雪洞４.００帰りは稜線までトレースが消えラッセルを強いられた。金子左耳に凍傷。

〔金作谷及び金作中尾根〕

４月２日　（快晴）

バーティ　打出，宇野

春山合宿最後のアタック日である。アタックは３パーティ各々薬師東面の異なつたルートを目ざしている。我々２人のパーティの目標は薬師本峰から金作谷のカールへ下りてその出合まで下つてから引き返し金作中尾根に取付きその尾根伝いに北薬師頂上まで出る。もし下まで降りられないようなら途中から尾根に取付いて登るというものである。

午前６時３０分ベースの薬師南稜の雪洞を出発する２人の荷物は共に５Kg内外で軽いが早朝の気温はきわめて低い。稜線上を歩いて７時間薬師岳本峰に到着、薬師如来に安全を祈つて７時５分　の後に下りる場所をみつけアイゼンをきかせてカールに下りる。雄大なカールを背にしてなお下るとたやすく金作谷に下る事が出来た。谷はさすがにデブリだらけである。気温も上りラッセルがひどいので固く大きなだんごになつたデブリの上を歩くのだが、足を捻挫しそうで歩きづらい。左手の金作谷中尾根を見ると、尾根の側面は雪の急斜面で岩峰もあり途中から取付くのは非常に困難である。やはり末端まで下る事にする。谷を下り中尾根の末端の取付きへ着いたのは８時５０分。そこから少し下ると約１５分程で黒部川へ到着。出合は雪で埋つているが、少し下流では流氷がでている。そこで少し休んでから引返す。９時３０分中尾根に取付く、取付きは岩場であるが、ザイルも使わず尾根上に出る。そこへ出るのに４０分程かかる。尾根は雪が多いのでアイゼンをはずしてワカンをつける。しばらく登るうち、先刻下つた金作谷に側面からあまり大きくはないがナダレが２，３度起るのが見られた。やはり早い時間に谷を離れて良かつたと思う。尾根は谷から見て想像していたより巾広く、又雪も深くアイゼンの必要は全くない。ワカンが偉力を発揮する。休憩の毎に赤牛や木挽山を見てどんどん高度をかせいでいるのを知る。途中２-０分ばかりで昼食を済ます。ラッセルを交代しながら、早いピッチで登り続け、北薬師直下の行程中唯一の悪場である急斜面でアイゼンにはきかえて、そこもなんとか登り切る。主稜線にでたのが午后５時５分過ぎであつた。北薬師頂上でその日の山行に満足しながらゆつくり休んで夕闇のせまる稜線の上をとぼと

ぼ歩いて6時頃雪洞に帰り着く。

〔中央稜から黒部へ〕

3月28日

メンバー　高橋，黒木，前沢

時間　7.00　出発

9.00　中央稜上部岩稜通過

11.30　黒部着、昼食

12.25　黒部出発

4.00　岩稜取付

7.50　雪洞帰着

主稜線上は相変らず強風であるが、3日ぶりの快晴で剣が良く見える。薬師頂上の小さなホコラの東側から中央稜に下る。稜線のかげに入ると同時に風はなくなり部分的にひざを越すラッセルとなるが下りでもあり雪もかるいので苦にならずはかどる。23日にアンザイレンして下つた雪の急斜面は前日までの雪が安定していないので下れない。薄の岩の露出した部分を下るがこの方が楽である。23日に引き返した岩稜に出る。赤いナイロンザイルがうれしい。非常に細いやせ尾根の上に雪がのつている一番やつかいな場所をすぎ、所により確保用に2本ほどハーケンをうつ。岩稜を通過して時計を見ると9時、今日は黒部まで行けそうだ。あとはなだらかな雪稜で問題はないが、雪は完全にくさつており足をふみだすと大きな塊がずるずる落ちていく。黒部と頂上の中間あたりで尾根が大きく2つに分れているがここでワカンをつけ右つまり南側を下る。岩稜に取り付いている頃から見えていた右の第1尾根左の金作右尾根の2バーテイも今は見えない。やがて樹林帯に入る。シリセードをして時間をかせぐ。

11.30井戸の底のような感じの黒部の流れに立つ、少し下手にスノーブリッヂが懸つており徒渉はいたる所出来そうである。早く引返さぬと遅くなると思つてもつい昼食などで1時間近くいる。もつとかかると思つていた樹林帯を意外に早く1.45に抜ける。ワカンをはずす。この頃より雪多くなり風が出て下りのラッセルが消されている。登りのラッセルは時間を喰う。岩稜下部に4時着、突然1人が腹を押えて倒れる。しかし30分ほどでなんとか歩ける程度におさまる。気温が下つて岩についた雪が締り、とても歩き易く助かるが一応アンザイレンする。岩稜をすぎると急にラッセルが深くなる。そろそろ日が暮れだした。ジャンクションまで行かぬうちに完全に日が暮れ前方は薬師の巨大なシルエットにうまつてしまい方向がつかめない。ピッケルでたたいて一番高い方へ登る。ホコラの真下に出てほつとする。主稜へ出るととたんに強い風で地吹雪を伴つてくる。主稜を南に下つて雪洞へ帰るのだが左黒部側へよりすぎると雪庇をはずすし右へよるとルートがわかりにくく下手すると薬師沢へ下りかねない。やがて22日の荷上げのときに残したデポを見つけて小おどりする。この時雪洞の方向にランプの明滅しているのを見つける。これまで

出さずにいたランプを出し合図する。むこうも気がついたらしい。あとは雪庇をはずさぬように進むだけだ。雪洞帰着8時近い。熱湯をのむ。とても疲れた。

〔南稜第1尾根〕

3月25日

メンバー　田井，前沢，酒井，打出，高橋

南稜第1尾根とは薬師岳東面の中央カールと南稜カールにはさまれた比較的傾斜のゆるく巾の広い、そして岩の少い尾根である。

以下当日3月25日の記録と合わせて概要を記す。なお時間は眞察しながらのものである。

8.30　BC発　ここからはところどころ岩の出ている丸い尾根をたんたんと下る。向つて左側の中央カールのまわりの壁がぐいぐいせり上る。9.10尾根が3つに分れる。この辺から尾根上に岩が入りくんでとび出していて、所によつては腰までもぐる雪、陽の当る斜面では、はい松まで露出している。

右から2つ目と3つ目の沢を10m程下つてから直角に右へ中央の尾根を越し、一服す。

10.10　空はあくまで晴れ、右も左も沢は急で気味が悪い。一方尾根は岩が10m程垂直にせり上り、登つてみるも先は下る所もない。

12.00左の沢の右はしを岩壁にそつて下る。日陰になつていて、しかも吹きだまりらしくラッセルは腰まで岩の切れたところを直角に右に曲る。この辺は少しやばい。下は　の中央まで見通せる急な沢、上は岩、ザイルを使う。約10m。ここからは重い雪とブッシュと岳樺がずつと黒部まで続いている。推定2時間を要すると思われる。我々は見通しが立つたので帰路についた。

〔南稜第2尾根 — 上廊下〕

3月28日（快晴）

メンバー　田井，酒井。

南稜第2尾根とは南稜からでている尾根の中で一番顕著な尾根で南側はびつしりと岩稜をならべ、2700m位から扇状に広がつて黒部へ下つている。

久しぶりの快晴に強風の中を南稜に下る。第2尾根の頭からコルまでは岩稜伝い、コルから肩までは不安定な雪稜を下つた。ふりかえると南稜側面の氷をつけた岩壁がくつきりとしたリッヂを数本形成している。

赤牛岳、水晶岳の稜線、雲ノ平、上廊下、がずつと見渡せるがこの尾根の直下立石めがけ、ゆるい尾根を下つた。雪はひざまでもぐる程度、黒部へ出る直前に立石正面の沢をからんで河原へ立つた。水はとうとうと流れている。食事をすませ、河原（黒部左岸）を行く。赤牛側から滝状の小沢が入るあたりから廊下状になつてきたので、高巻を行つた。このあたり薬師側の沢は大きなデブリを押し出し雪橋となつている。デブリを1つ1つ越えるが岩のそばは空洞になつていて危険である。再び両岸が廊下になつてきた。昨夏下流から

来て引き返した所である。ハーケンを打ち、捨て縄をかけ、補助ザイルを張つてへつつた。下は青黒いとろになつていて緊張させられる。あと3ピッチ斜面をトラバースして悪場終了。南沢出合を通り、河原通りに中谷出合着。出合は大きな雪橋がかかつている。食事をして日没を待つ。温度が下つてきて凍りだした。雪崩の危険を感じなくなつたので登り出す。最初はしまつて歩き易すかつた。星が段々増えて来る。カール底の上り口付近の星をコンパスとして、ラツセルを続けた。高度をあげるにつれもぐるようになつてくる。蟻地獄が頭に浮ぶ。カールへは右手の岩稜に取り付いてあがつた。いつの間にか雲の流れが速く星が消えている。睡かつたがチヨコレートをしやぶりながらラツセル。雪庇を避けて、岩稜の根本を伝つて南稜々線に出た。稜線上は強風で酒井の眼鏡がたちまち白く凍りついてしまう。磁石を出して見ていると薄明るくなつて来た。予想以上に時間を喰つている。雪洞はすぐ見つかつた。

BH発7.00　第2尾根肩8.55　立石11.40　発12.20　悪場終了15.40　中谷出合15.50　発16.30　南稜々線5.00　BC 5.30

〔南稜第3尾根〕

4月2日（快晴）

メンバー　田村，保母

6.00出発、第2尾根のコルより沢を下り、7.00に第3尾根の支尾根に取付いた。下つた沢は広いがかなり急な沢で大小さまざまなデブリがあつた。アイゼンで膝までのラツセルだつた。主稜とのジヤンクシヨンまでは平凡な雪稜、雪はアイゼンで膝あたり時に腰まで来た。途中1ケ所だけ急傾斜のところがあり、ここで、はじめてアンザイレンしてブツシユにつかまりこれを通過した。以後ジヤンクシヨンまでコンテイニアスで進んだ。主稜に入つてからはずつと交代確保を行つた。そこより3ピツチで小さなピークを越して昼食（11.00）昼食後3ピツチが悪くブツシユの生えた岩場に雪がつき下層は水になつていた。確保用にハーケンを1本打ちあとはブツシユにつかまりながら腕力にたよつて30m一杯で登り切つた。以後は岩の上に厚く雪の積つた両側が岩壁となつて下の沢まで切れ落ちているナイフリツジを3ピツチでピナクル頂上に立つた。尾根通しに下ろうとしたが雪の状態が悪く下れず、2ピツチ引き返して南側の急な雪稜を下りコルに達した。コルより南側の60°近い雪面を2ピツチ登りこれより悪い雪に苦しみながらリツヂに出て3ピツチで南稜に出た。4.00そこには田井，前沢が2時間程我々の登はんを見守つてくれた。緊張を解かれてのんびりと雪洞に帰つた。（5.00）輪カンは持つていたが雪の状態が場所により非常に異なり且傾斜がきつかつたので用いなかつた。

〈後　記〉

薬師岳東面の開拓という点では、一応の成功を見たが多くの反省すべき点がある。

テントを下す予定の第一尾根は岩峯にはばまれ、中央稜は雪の状態が悪く、メンバーの関係もあり、テントは出せなかつた。その後ＢＣよりラッシュでアタックを考えたが遂にその機会を得なかつた。後でわかつた事であるが、金作中尾根末端にテントを下す事は可能である。上廊下へ下るには金作谷を更に下らねばならぬが、夜明け前ないし深夜ならば、距離傾斜共に少ないし危険は避けられるものと思われる。但し高度２０００ｍ付近では３月でも雨が降るようなのでその点、テント等注意が必要である。

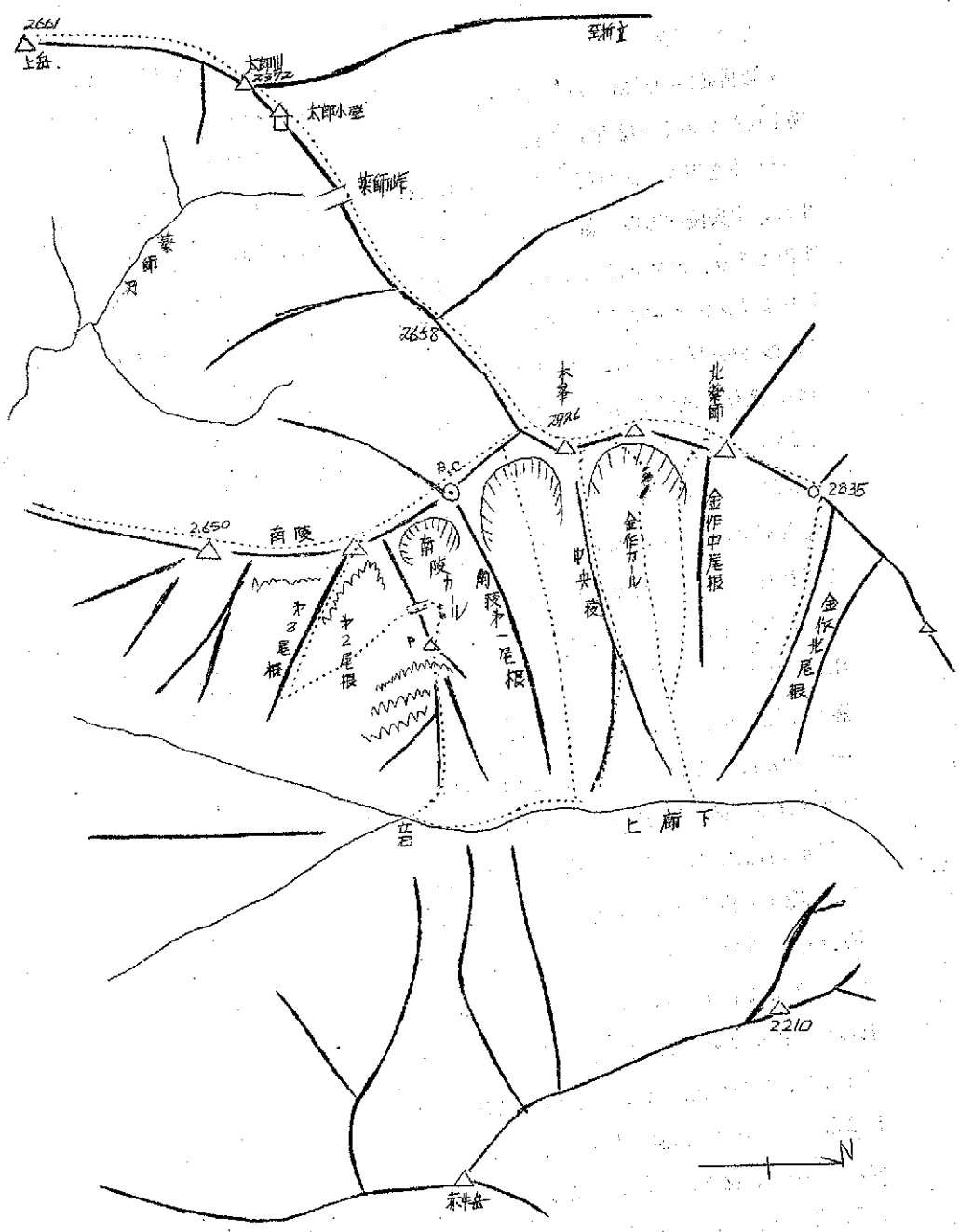
縦走は立山へ行く予定であつたが縦走メンバーに凍傷者を出したので中止した。凍傷は３月２８日の強風下の長時間の行動による。

今回の合宿で特に問題となつたのは、下廊下、上廊下の横断の頃よりよく言われて来た事だが、下向の登山の特異性である。通常のアタックでは下のＢＣからピークに向け行われるが、我々の場合は、まず稜線から下に向け出発し、しかる後、上向けに帰つて来なければならぬ。午前中は誰しも元気で良いからそれにつられ、必要以上に下つてしまう。又下りに急いで、とかく足を傷めやすい。その時、登りになつてから苦しい登攀をしなければならなくなる。その失敗例が３月２８日の行動にあらわれている。

高度差が主稜線と黒部川との間で１３００ｍあるのであるから、当然の事であるが、上と下でかなり天気や雪質がちがつている。上で雪が降つている時、下ではかなり雨が降つたようである。その為次の晴天に沢の下部はかちかちにクラスト、上部はフワフワで、ラッセルにてこずるような事があつた。

我々はここ２，３年、主としてポーラ形式の山行を主として来たがそれに対し、今回のようなやり方は個人、個人の天候、雪の状態に対する判断力及び技術の向上という点で得る所大であつた。

（時報１１号）


2661
上岳
太郎山
2372
至新宮
太郎小屋
薬師峠
薬師沢
2658
太郎
2924
北薬師
B.C
2835
2650
南陵
南陵カール
南陵第一尾根
中央稜
金作カール
金作中尾根
金作北尾根
第3尾根
第2尾根
P
立石
上廊下
2210
東岳
N

薬師岳周辺

1960 春山合宿（薬師） 行 動 表

	折立	太郎小屋	薬師岳B.C	
3/18 ◎	14 →			
19 ①		→ 4 ← 10		
20 ①		↺ 2 → 10		
21 風 ⊗	停滞			
22 ①		←	→ 2 ← 10 ← 8	
23 ①	← 2		→ 9 上岳 ← 1	← 2 第1尾根中央稜
24 風 ⊗	停滞			
25 ①	← 1			← 5 第1尾根 ← 2 北薬師 ← 4 南稜
26 風 ⊗	停滞			
27 風 ⊗	停滞			
28 ①		後発5 → ↺ →	2	← 3 中央稜—黒部 ← 2 金作北尾根 ← 2 第2尾根—上廊下—中谷
29 ◎			← 2 → 3 ← 3	
30 ◎			← 3	
31 風 ⊗	停滞			
1 ◎	←	6		
2 ①			← 4	2 金作中尾根 2 第2尾根 2 ガラ谷—第3尾根
3 ◎			← 6	
4 ①	←	10		

1960年 春山合宿

真沢尾根から剣岳八ツ峰Ⅰ峰

佐藤　茂

積雪期の剣岳八ツ峰といつてももう新鮮さはとうの昔に失われている。だが先人たちは例外なく1，2のコル又は2，3のコルへ上つて、1峰へ直登するという真に末端からの記録はまだない。末端から頭まで、我々はこれを狙つた。我々は当然、未知の個所、一峰東面に目をそそいだ。1峰のピークから4本の尾根が剣沢におちている。マイナーピークで2つに別れている尾根（1稜，2稜）ダイレクトに剣沢に達している尾根（3稜）一股に至つている長い尾根（4稜）3稜をとつた場合、剣沢から1峰まで高度差940m。4稜の場合は1040mにもなる。1峰東面が意外に大きなスケールを持つているのを知つた。傾斜も2000m以上は急で40°～45°殊に2000m～2300mは45°を越えている部分もある。

さて「末端から頭まで」この為に克服しなければならない問題。

1. 積雪期において1峰東面の下に到達する方法
2. 1峰東面について、我々は何も知らなかつた。積雪期のその場所については文献も見あたらなかつた。ただ立教大学山岳部報告に一枚の写真があつた。
3. 1峰東面では、非常に困難な登攀を強いられる事、そして非常に長いアタック行。

1，2の問題を解決する為に58年秋11月初旬、偵察と剣沢から1峰東面へ、村井，谷垣，峯田，三沢が真砂岳からハシゴ段乗越を経て黒部別山に至る尾根を降つた。だが結局、1峰東面については何も具体的な事を知り得なかつた。唯3稜か4稜が登攀可能ではないかという憶測はついた。1．についてはもちろん剣沢を通るのは近道だが、雪崩の危険がある。それに荷物を運ぶ事などの為何度も往復する　いわば幹線だから安全であるに越した事はない。それ等の理由から真沢尾根を使う事に決めた。

結局、次のような計画をたてた。剣御前小屋をBH、真沢尾根の2300mの場所にCⅠ、真沢尾根から剣沢へおりているいずれかの尾根（それは1峰東面のどの尾根を選ぶかによつて異なつてくる）の末端にCⅡ（これがアドバンスベースキャンプになる）1峰東面のいずれかの尾根のなるべく高いところにCⅢ（アタックキャンプ）を各々建設する。

CⅢからアタック隊は八ツ峰、その頭、本峰を通つて別山乗越へ行く。サポート隊の一つはCⅢから1峰又は5，6の窓まで、他は別山乗越から本峰までアタック隊を迎えに行く。

メンバーは3年部員が3人、2年部員が6人、新人が4人、そして早く帰る4年生1人

と先輩1人、少しすくなすぎた。もう少し多数予定していたのだが、たとえばリーダーに予定していた大島が頭骨炎で参加不可能になるなど、不測の事情の為減少した。

成功に至るためには解決すべき鍵はあつた。

1. 偵察と登頂の2つを行わなければならない事。1峰東面と真沢尾根からの下降ルートについての偵察。又1峰東面に要する時間と困難度がよくわかつていたので、もし1峰それ自体が登攀の対象である場合は放棄し、計画を1峰のみに限定する事を前もつて申し合せた。
2. 雪崩の危険、なるべくこれを避ける為ルートを多く稜線にとつたが、なおかつ、これの予測の必要と危険はつきまとうにちがいないこと。
3. 真沢尾根の大部分は曲折したナイフリッジの連続であるが、ここを多くの荷物をかついで新人が通る事。この為250mのフィックスを要した。
4. CⅢの建設。急激な1峰東面にキャンプを上げる事、又おろす事、なるべく軽量にする為にアタック直前に建設し、できれば雪洞にする事を考えた。

結局我々のなし得た事は偵察丈であつた。

期　間　3月15日～4月2日

メンバー　佐藤，広瀬，村井，谷垣，西垣，白井，錦田，丸尾，五百蔵，三沢，橋本，浜田，森，木村，立花。

3月14日　広瀬，五百蔵を除いて全員大阪発、富山へむかう。

3月15日（晴のち吹雪）美女平9.30発、弥陀ケ原ホテル前14.00～14.40、天狗小屋18.00、ホテルまでは荷物はすべて雪上車であげた。荷物の半分をホテルに残し、それぞれ30kgをかついで天狗平へ。天候次第に悪化。美松荘をすぎると吹雪となり、視界はきかない。スキーをついて荷物の多くをデポしようやく小屋に入る。

3月16日（吹雪）吹雪のすきをねらつて前日デポした荷物をとりに行く。小屋から200m位の距離であつた。停滞。この日広瀬，五百蔵が弥陀ケ原に入る。

3月17日（快晴）人間と荷物半分は天狗平に、残りの荷物はホテルに残つている。人間も荷物もすべて地獄谷まで持つてゆき、真砂岳から出ている尾根をも偵察しようと意図した。4時星空の下、天狗平を出発、深いラッセルののちホテル着6.30　広瀬，五百蔵と合流、ホテル発7.05　天狗平帰着10.45　立花，木村，佐藤が12.30　村井ら12名は少しおくれて天狗平発　立花らは夏道より数百メートル上手で沢を横切り、14.20　村井らは室堂経由で16.00　地獄谷房治温泉着　先行した佐藤の誤つた指示によりこの違反を生じたのである。立花等3名は15.30　地獄谷発、雷鳥沢の右岸の尾根を通つて別山乗越17.45　途中からアイゼンが必要になる。すでに日没寸前であつたので雪質を調べ

たのみで下山。19.45地獄谷着　この日は全員房治温泉で泊る。荷物はまだ半分天狗平に残つている。

3月18日（曇）　立花，村井，谷垣が真砂尾根の偵察に向う。他の12名は5.00発。沢を横切るルートをとつて6.10天狗平着。残り全部の荷物をもつて7.45天狗発。9.00～10.45房治。乗越へむかう。登るにつれガスは次第に濃い。風もつのる。乗越は吹雪　13.30着　村井らは偵察に行けず乗越小屋にいた。

3月19日（快晴）　立花，村井7.00乗越小屋をあとにし、真砂尾根へザイルフイツクスと偵察にむかう。約2200mまで下る。14.00乗越帰着　佐藤ら10名は地獄谷へ荷物をとりに下る。6.10発。7.40～9.45房治、13.50乗越。白井，錦田，森は秋に荷上げした食糧を整理するため小屋に残る。やつと荷物のすべてを乗越へ上げたと思つたら、共同装備の罐を忘れた事がわかり丸尾と五百蔵をとりに下らせる。

3月20日（強風のち吹雪）　天気図に台湾坊主があらわれたのでCI建設を見合わす。台湾坊主による遭難は数多い事であるし、真砂尾根はかなり困難なナイフリツヂであり、しかも帰途は登りになる事を考えて、真砂岳頂上、東面に雪洞を掘りCI用荷物をデポする。6.40乗越　7.50～10.10デポ地　10.50乗越　雪洞を掘つてデポするやり方はよくなかつた。埋まる恐れがあるのだ。幸い、今度の場合は埋まらなかつたが、尚、午前中に立花，木村下山す。12.40吹雪の中を丸尾が共同装備の罐とともに上つてきた。五百蔵は帰阪をもとめる報の為下山する。

3月21日（風雪）　停滞。計画はすでに4日もおくれている。今日から全員11名。

3月22日（快晴）　CII，CIII用荷物をもつて全員でBH乗越小屋を出発、5.50アイゼンをつけて、ワカンは使用せずデポ地7.10～8.10CI用と入れかえる。村井，広瀬がしつかりしたトレースをつける為に先行する。鋭いナイフリツヂ、急斜面のトラバースをくりかえす。雪庇はすべて内蔵助谷側にかなり大きく出ている。進むにつれて、八ツ峰と急峻につきあげているその1峰東面の巨きな三角形の相貌があきらかになる。13.50CI建設地につく。約2240mの地点、真砂沢側の斜面の上部には11人用の雪洞を掘る。ここまでに要したフイツクスザイルは250mに及ぶ。村井，広瀬，佐藤はハシゴ段乗越の前まで偵察に行く。やはり3稜か4稜かどちらかというと、3稜が登れそうだと思われる。4稜の北側を見る為に黒部別山までゆく必要がある。3稜のまん中より少し下にはテントの張れそうな白い大地が見え、まん中より上は凹凸のない斜面が白熊の背中のようだ。

3月23日（晴）　村井，広瀬は偵察。黒部別山より一峰東面をスケツチ。3稜と2稜をマークし、真砂尾根より剣沢への下降ルー

トとテント地をみつけてくる。

ハシゴ谷の西側の尾根を下りその末端の台地がテント地、しかもそれは3稜と剣沢をへだてて対時している場所だ。他の9名は7.30CI発、デポ地9.20～10.20CI着12.45、これで荷物も人間もすべてCIに揃う。うまくいきそうだ。我々は希望にもえた。雪の状態も良好。

3月24日(風雪) 停滞。 前線のために前線通過後の気圧の谷のせいで結局1日降つた。

3月25日(晴のち曇) 6.07CI発。真砂尾根を下り、ハシゴ谷西側の尾根を下る。クラストの上に50mぐらい雪がついて歩きにくい(ワカン) 8.40CII。この日のうちに一峰東面を偵察する予定だつたがだめだ。三の沢を上つて3稜をとりつくことになるのだが、沢は雪崩れつづけている。1峰東面の沢にも別山尾根につきあげている沢にもたえまなく雪が落ちている。表層雪崩である。CIIには村井,広瀬,谷垣,白井が入る。他は11.45CII発 14.10CI着。

3月26日,27日(ともに風雪) 停滞。

文字通りのドカ雪、雪洞の雪かきがしんどい。3mも深くなり、結局通路は5mぐらいになつてしまう。真砂沢から強風とともに雪がまいあがつてくる。CIIのテントは雪にうずもれ雪かきのため眠るひまさえない。

3月28日(晴のち曇) 朝、快晴、気よくしてCIを出発6.20。深いラツセル。CIIは夜中の雪かきのため、みんなねぼけ面。雪崩の危険のため偵察は不可能。今日も又、1峰の真下で1峰とにらめつこするばかり。タバコもきれた。

3月29日(曇) CI7.30発 くもり空。時折吹雪が襲う。9時すぐCIIにつく。下る途中、雪がブロックになつて落ちる事を知つた。直径10cmの雪の球が転がるうちにみるみる直径1m以上の円盤になるのだ。こういうスノーボールにあたつたらしまいだと思うが、一方スノーボールのできる時は大きな雪崩の心配はない。CIIに書きおきがある。「佐藤君へ、3／29 5.00出発。悪天のため引き返す。8.30再出発。アヤシイ天気だが一応村井,白井は3稜、ヒロセ,谷垣はマイナーをトレースする。明日アタツク態勢に入つてはいかがかね。小窓尾根で横浜市大がやつたらしい。初心忘るべからず」。

剣沢と出合から約30分三ノ沢を登る。このあたりの傾斜約30度、そこから3稜にくい込んでいる沢(傾斜約25°)に入る。この沢はスベリ台のコルにつきあげているルンゼに通じている。腰までのラツセル、おちてくる雪のブロックを身をもつて避けながら登る。ここから(A)90度まがつてスベリ台のコルへのクロワールに入る。クロワールは約60m つづく。雪崩道の為、底がつるつるにみがかれている。音もなくブロックがすべつている様は無気味だ。C付近に数本の岳樺。コルからスベリ台のピークまではブツシユを

手がかりに直登２０ｍのピッチ。ここから鋭くきりたつたナイフリッヂのピークが続く。三ノ沢は垂直にきれている。四ノ沢は４０～５０度。雪庇は三ノ沢側に出ている。リッヂの上部は雪面、下部は岩稜となり巾約５０cm、スベリ台のピークから６ピッチで第２のピークと次のクロアールとのコルに出る。そこには間口５ｍ、奥行２０ｍぐらいの岩穴がありビバークに好適だ。１３時引き返す。約束の時間なのでつづくクロワールが登攀可能と見定めてからこのコルから四ノ沢へ下る。かなり容易に下れる。

マイナピーク東面の岩壁はびようぶのようにおれまがりながら、きりたつたまま三ノ沢側へおりている。その岩壁の下方にくい入つている雪の沢、そこを登つて岩壁の上へ出ようと試みたが、実は岩壁の上はナイフリッジ。しかもブッシュがありその上に雪がのつている。おちこんだらブッシュの下はがらんどうではい上れない。

１４時すぎまで小さな雪崩がおちつづけた。１６時半両パーティ前後してＣⅡに帰る。この間、西垣，三沢，渦本は黒部別山へ登る。他はＣⅡで広瀬，村井らの行動を見ていた。偵察の結果、２稜は放棄した。３稜から登れる事は確定的だと思われた。村井，白井の到達点からクロワールを登れば白い台地。次いで小さなピークを２つ越せば凹凹のない白い斜面に出る。そこは登れるだろう。あとはピーク（三ノ沢の頂上）直下の急斜だが、それも見たところ越せそうだ。

しかし３稜は登路といつたなまやさしいものではなく明かに登攀の対象だつた。だから当初の予定にしたがつて焦点を１峰のみにしぼる事にした。それにもと通りの計画を遂行するにはメンバーも減つていたし日数も満足でなかつた。

３月３０日（曇のち雨）　ＣＩを撤収してＣＩの食糧とともに全員ＣⅡに入つた。ＣⅡでは村井，広瀬，谷垣，白井が３稜に向つたが雨の為引返した。

３月３１日（雨）　全員２時起床の予定であつたが１時にはみな起きていた。一晩眠れなかつた者もいる。雨と風の為にテントはゆるみ、雨もりで殆んど全員のシュラフがずぶぬれになつた。テトロンテントの５人は全くぬれてしまつた。尚、雨はふりつづいている。雪がとけて、向いの１峰からはしばしば大砲のような音がきこえ雪がおちつづけている。テントはあたりの雪面より４０～５０cmも高くとまつている。もちろんアタックは出せない。食糧は４月３日までしかない。翌日行動できるようなら、丸尾，錦田，三沢，渦本，浜田は村井，西垣とともに乗越へ帰つてもらうことにする。残りの佐藤，広瀬，谷垣，白井で１峰をアタックする事にする。食糧をＣⅡに長く残すためだ。とにかく１峰のピークを踏む為に四ノ沢から上つて岩穴へ行くルートをとる事にする。

４月１日（雨、一時曇のち風雪）

1時起床、3時アタツクの予定だが雨である。もういくらぬれても同じだが眠れないのが困る。たとえばテトロンテントにいた西垣は、一晩中シユラフをしぼつていた。他も大体同様のありさま。帰る方のメンバーは事実弱体だ。村井と西垣で支えられるかどうか。それにねていない。帰りのルートは登りであるとともに3年がツプになつてラツセルしなければならない個所が多い。雪はぶすぶすに腐つてラツセルがひどいし、1峰からは大きな雪崩がおちている。白く輝いていた1峰も、今や陰惨で黒々としている。今までの例で晴れても雪崩待ちに1日つぶさなければならない事が多いと思われる。もはやアタツクよりも全員無事につれてかえる方が問題だ・・・と思われた。食糧は3日迄だから2日に撤収しなければならない。アタツクメンバー丈ならばひきのばす事も出来る。しかし、アタツク4人だけ残すのは撤収する方も心配だし、アタツクメンバーは撤収パーティが心配だつた。天気回復を待つたが8時になつても良くならず遂に8.00アタツクを断念せざるを得なかつた。1峰まではどんなに少く見積つても8時間はかかる。8時に出発できなければ致し方なかつた。

10時ごろ、晴れ間が見えた。撤収の準備をはじめた。何故なら天気図は快方にむかう事を示していたから13時CⅡをあとにする。風雪になつてくる。深いラツセルの為真砂尾根上に出たのがすでに17.30CⅠの雪洞に泊る。シユラフが凍つていたのでバーナで暖をとりながら坐つていた。

4月2日（快晴）　1峰とその東面は再び白銀におおわれていた。風もなく一片の雲もなかつた。だが、東側の雪は予想通りの不安定だつた。8時CⅠ出発。真砂岳頂上14.00　17時すぎ、地獄谷へ帰着。

〈失敗の原因〉

1. 天候が悪化した事。たとえば、最後の1週間のうちCⅡが行動できたのはたつた1日であつた。
2. メンバーの不安。もともと不足気味だつたうえに尚、減つた事。
3. 雪崩、1峰東面が急傾斜である為、降雪の翌日は天気の如何に拘らず行動できなかつた事。風は西から東に吹く。その為西面の雪はかなり堅いが東面は不安定である事が多い。
4. 彌陀ケ原のボツカを軽く考えていた事。計画では3日で乗越へ荷物とともに全員が入る予定だつたが5日かかつている事。
5. 今まで新人を主にボツカに使つただけで帰らせたが、こんどはしまいまでつれていつた事。その為計画の終りの方で人数がだぶつき、いたずらに食糧を減らした事。
6. 雨、テントの雨に対する無防備性、シユラフがびしよぬれになり、ねる事もできなかつた。春山の雨とテントについて、次の山行までに考えなければならない問題であ

る。

テトロンテントを雨は殆んどそのまま素通りする。ビニロンは幾分ましだが余りかわらない。

7. 悪天候、鞍陀ケ原ボッカの誤算等により計画におくれがちであつた事。

8. 偵察と登頂、この2つの課題があつたが、それは我々には少し負担でありすぎた。

〈後　記〉

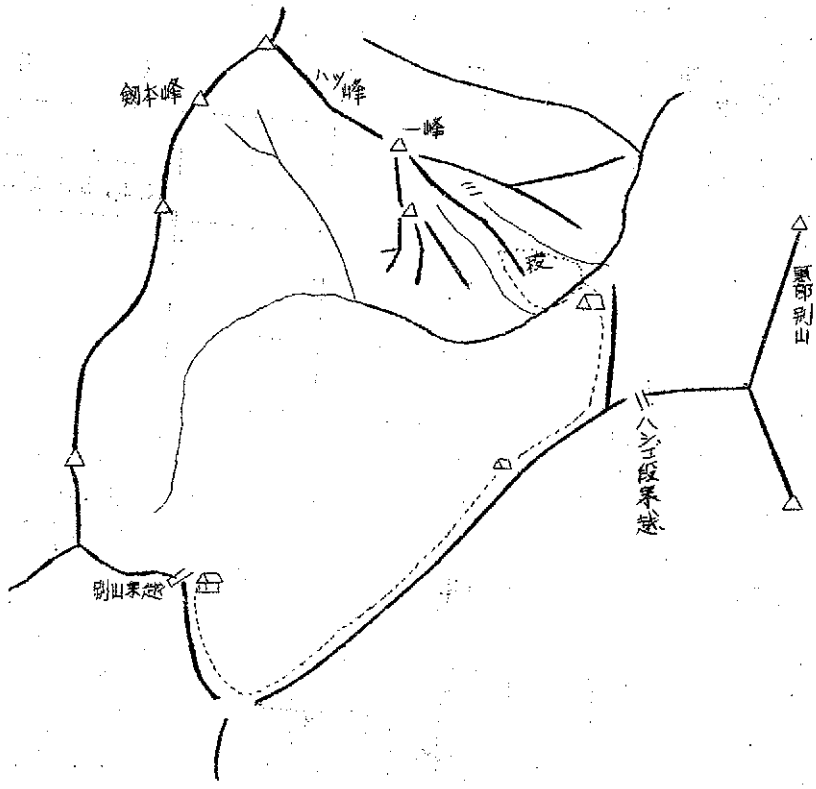
我々は5月初旬にもここを訪れた。メンバー、佐藤，広瀬，五百蔵，西垣。剣沢を下り、かつてのC II建設地をベースにして、四ノ沢から3稜の岩穴へのルート（春の村井，白井の下降ルート）をとり、クロワールから白い台地へ出た。そこはテントを張るだけの広さはどうやらある。そこから上は急峻なナイフリッジ。ところどころ雪がはげおち岩稜やブッシュが露出しているが、岩稜は文字通りナイフで頂稜の巾はまつたくない。結局、台地から6ピッチに5時間を費し、雪崩れ待ちとビバークの末引返した。今後、ここを狙うにはやはり雪の多い3月，4月初旬、そして好天の比較的よくつづく4月はじめがもつとも適しているだろう。

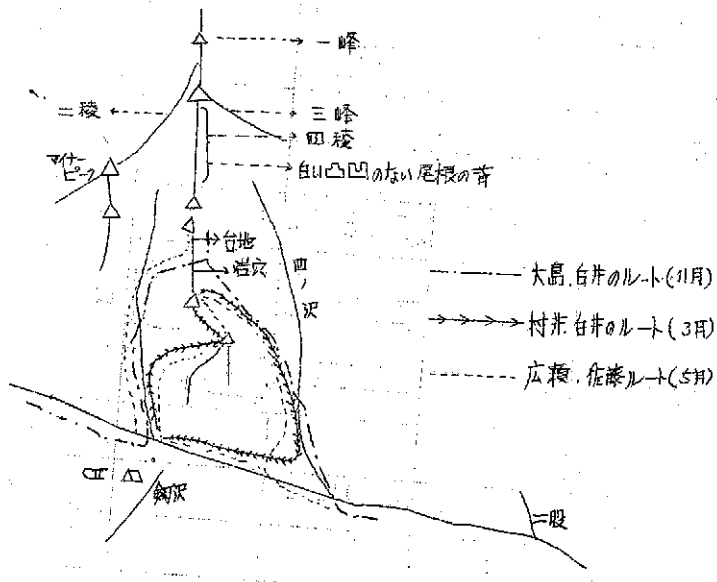
我々が真砂尾根をつかつたのは、剣沢の雪崩を恐れた事、1峰を偵察する事のためだが、この方法は余りにもしんどすぎる。夜間にでも一挙に剣沢を下つてしまう適当な手段を考えなければならない。

3稜について言えば、もし雪質がよく雪崩の心配がなければ、例の台地にテントをあげる事も可能であるし1峰のピークへの、更にそれを通つての八ツ峰へのアタックも可能であると思う。結局問題は天候の、ひいては雪質のよい時期をつかむ事にあると思われる。

（時報11号）

1959. 春山合宿（剱岳）


剱本峰
ハツ峰
一峰
二
三
四
稜
別山乗越
ハシゴ段乗越
別山


一峰
二稜
三峰
四稜
マイナーピーク
白山凸凹のない尾根の青
台地
岩穴
四ノ沢
大島、白井のルート(11月)
村井、白井のルート(3月)
広瀬、佐藤ルート(5月)
剱沢
二股

春山（剣） 行 動 表

		美女平	みたが原	天狗平	地獄谷	B・H	C I	C II	備考
3/15	①→ ⊗ 風		13						
16	⊗		2						広瀬，五百蔵入山
17	○		11 2 2						
18	◎		12 3						
19	○		10 2			2			
20	◎ ⊗	3 1下山	1			11 デポ地			立花，森，木村下山　五百蔵下山 真砂岳上にデポ
21	⊗	停滞							
22	○					11			
23	①					デポ地	2		
24	⊗	停滞							
25	① ◎						7 4		
26	⊗	停滞							
27	⊗	停滞							
28	○→◎						7	4	
29	◎						7	2 2	村井，白井，三稜に行 広瀬，谷垣は二稜へ
30	◎→◎						7	4	
31	◎								
1	⊗						11		
2	○					11			

１９６０年夏山合宿

―千丈沢をベースとして―

昨年にひきつづき千丈沢で合宿を行つた。参加人員は３８名で期間は７月２０日から10日間の予定であつた。このような多人数の合宿には当然２パーティ以上の分散合宿も考えられたが、結局１ケ所に集中する事になり、そのかわり行動半径を拡大し、単なる基礎的トレーニング以上の研究を課する事にした。

(1) 合宿地選定について。

昨年の合宿の結果、千丈沢周辺はあらゆる意味で、未開拓のところが多いと思われた。そしてこれを更に開拓しようという意欲があつた。また剣沢、涸沢の混雑と猥雑な雰囲気をさけたかつたのである。

(2) 目　的。

Ａ．新人部員の基礎技術・中堅以上の強化

Ｂ．更に千丈沢周辺・北鎌尾根を１つの山系として開拓研究するため総括的な登攀を行う。従つて岩登りはこの一部にすぎない。

Ｃ．中堅部員の課題として将来の展望もかね次の方面に別動隊を出す事にした。

1.南岳附近にキャンプして、北穂・槍間の飛弾側の斜面の偵察及びその登攀。

2.中東沢の溯行。

但し、これらは必ずしも差し当つての偵察の必要から出たのではなく、以上多様の目的の達成に期待が持たれた訳である。

(3) 参加者。

ＣＬ田村，ＳＬ広瀬，ＳＬ佐藤茂，大工原，笠松，保母，五百蔵，西垣，佐藤毅，金子，打出，酒井，前沢，白井，米沢，宇野，高橋，大角，森，三沢，滝本，浜田，清水，三田，山本，岡久，辻，笠原，藤森，桑原，横尾，高田，浅井，池畑，岡田ＯＢ，野田ＯＢ。

(4) 行動概要。

７月１５日　先発隊、出発。

７月１７日　本隊　大阪発。

７月１８日　湯殿に幕営。

７月１９日　千丈沢にキャンプを張る。

７月２０日　雪上技術の練習

７月２１日　８パーティに分れて出て行つたが、田村Ｌが落石事故に遭い負傷し、上高地へ下つた。

７月２２日　広瀬がＣＬ，佐藤茂がＳＬとなつて合宿を続行する事になつた。

２２日～２３日　Ａ，Ｃ，Ｄ稜，小槍を岩登りの対象とし、又奥丸山，双六，天井沢等広く歩く。

７月２４日　佐藤茂以下５名の南岳パーティと西垣，白井，金子の中東沢パーティ出発。他の者がこれをサポートして行つた。

２６日、中東沢パーティが下る事に成功してテントに帰つて来た。

２８日、南岳パーティが帰つて来る。

２９日、千丈沢合宿を解散し、各々の縦走パーティに別れた。

(5) あとがき。

夏山合宿を終つてふりかえつてみるとき、検討すべき点が多々ある。

1. ＣＬの田村が合宿２日目に負傷して合宿から脱けたが、ＳＬの広瀬が代つて合宿を続け、一応最初の予定と目標をほぼ達成することが出来た。しかしＣＬが合宿早々に脱けなければならなかつたことは大いに問題である。

2. ３０数名の大合宿であり、落石の危険から、かなりの範囲の登攀を計画から除外したので、単に岩場トレーニングの見地からいささか手狭な感がした。夏山合宿に於て基本的なトレーニングに加えて新しい岩場、その他の開拓をはかるのは負担が大きく危険を伴う、例えば新しい岩場は必ず落石の危険を伴う。その為に最初独標を中心に千丈沢側を試登することを目論んだが、断念せざるを得なかつた。

3. 山系の研究という点では別動隊の行動で示されるように効果があつた。黒部川を溯つて来た阪大山岳部の次のテーマとして、槍ケ岳を中心として、硫黄尾根の赤岳、弓折岳、中崎尾根、南岳、西岳、常念山脈、北鎌独標を結ぶアラウンド・槍あるいは槍ケ岳を中心にした綜合登山といつたアイデアがこの山系の研究の背景にあつた。色々な事情でこのプランは日のめを見なかつたが、いつの日かまた問題にされてしかるべきと思う。この合宿では赤岳→千丈沢、中崎尾根上部、千丈沢→独標→天井沢日大小屋附近、日大小屋→西岳、横尾尾根取付、及び上部、南岳西尾根上部についてかなりの資料を得た。

4. 毎年問題になつている夏山合宿のあり方というものについても一考を要する。いつたい合宿そのものに重点をおくのか、それとも縦走の成果により大きな期待をかけるのか。また合宿はどのように運営すべきかという点についてである。この千丈沢合宿では、各コースを新人向、上級部員向、長く歩くコースの３つに分けて、特に新人に対しては、独標沢より北鎌の後線歩き、天井沢、中崎尾根、奥の丸山往復、Ａ稜、小槍、双六往復をさせた。しかもなるべく個人差を作らないようにする為にしたので、たまたま新人のお守りに当つた上級部員はかなり疲労した様である。雪渓技術の訓練についてもかなり意識的に階梯をくんでみた。ゆるい斜面を歩くことから始めて、踵をきかして下ること、アイゼンをつけての歩行、滑落停止、グリセードと進めて行つた。この練習において強調したいことは、岩場での静的なバランスに対して、動的なバランス、すなわち、いつも安定と不安定が繰返えされて全体として安定でなければならぬということ、絶対にこけてはいけないということ、完全にバランスをくずしてしまうと、たとえ滑落停止の稽古が充分つめていても、実際にはそんなに簡単に止れるものではないということ、グリセードは絶対に安全であるという見通しの上に立つて行うこと、実用技術というよりは壮快さを味う種類に属す

るということ、etc. である。練習時の安全装置というのは従来当部でそれ程考慮が払われていなかつたうらみがあるが、今回は、ステップを切り、ザイルをはるなどの方法を試みた。今後更に改善せねばならぬ問題である。

夏山合宿そのものは、夏山までのトレーニングの総仕上げとして欠くことはできない。一つの行き方として、夏山までのトレーニングが充分であれば、夏山は縦走だけでもよさそうであるが、北アルプスのあのスケール、雪渓そして一定期間合宿することが可能な点、やはり欠くことはできない。定着合宿の内容は、グレーデイング付を行ない、毎年検討を加えつつ、よい意味のマンネリズムを打ち立てることが望ましい。そして縦走は、定着合宿が基礎的な面を強調するのに対し、応用として、ただ漫然と縦走するのでなく、意欲的なものにして行きたい。その点で、酒井らの立石パーテイは非常に好しかつた。

1960年冬山合宿

ー南アルプスー

今回の冬山には次のような背景があつた。

1. 海外遠征を控えて特に慎重な山行が望まれる事。
2. 遠征準備の為かなりの上級部員が参加出来ないかもしれない事。
3. 同じく準備の為、山行期間が限られる事。

又南アルプスを選んだのは、

1. 以前から南アルプスに興味があつた事。
2. 比較的安全な範囲でスケールの大きいコースがとれる事。
3. 北アルプスより行動可能な日数が多い事。

合宿の形式について

1. 一支稜や岩稜よりも1人1人が大きな機動性と体力をもつて雪中を広く行動する事。
2. 日程のかぎられた者や忙しいOB達でも最小限の参加が出来る事。
3. 南アルプスの冬の概念をつかむ事。

以上の理由から部員独自の判断と意欲に期待する分散合宿とし、次の5隊が南アルプスを広く抜渉することになつた。1. 両俣隊（10名） 2. 千枚赤石隊（5名） 3. 西俣隊（7名） 4. 北沢隊（4名後にOB3名） 5. 鋸隊（2名）

当初我々としてはいささかセーブした積りであつたが例年の南アルプスらしからぬ悪天

に鍛えられ、まずまずの合宿であつた。又遠路九州からこられた関本ＯＢを始め、岡田，野田，広橋の各ＯＢの参加がえられたのは大きな収穫であつた。しかし短い期間に欲張つたプランをもちすぎた感もある。なお、このプランは、８月の佐藤等（三伏以南）、１０月田村等（三伏以北）の偵察と、昨年冬の野田等による白根三山縦走の成果をもとにした。

1. 両俣隊。

メンバー　L田村，広橋ＯＢ，打出Ⅲ（装備）黒木Ⅲ，浜田Ⅱ（食糧）、藤森Ⅰ，山本Ⅰ，笠原Ⅰ，辻Ⅰ，高田Ⅰ。

目標。前半北岳・間岳。後半北沢峠周辺。

５人用テント２張携行、食糧１０日分。スキー無し。

行動。

１２月２４日　大阪発。

１２月２５日　雨後雪。戸台—丹渓山荘—北沢峠—長衛小屋。黒木川にはまる。

１２月２６日　曇後晴。長衛小屋—野呂川—両俣小屋。このコースは今冬我々が殆んど始めてらしく、終始障害物競走のような倒木越えとラッセル。野呂川の氷結（最も危惧していいたうは不完全で、危険はないようなので月明りを利して強行し１０；００小屋到着。所要時間１５時間で、無雪期間の３倍。全員全く腰をぬかし、辻は途中で荷をデポ、高田はピッケルを落した。

１２月２７日　晴後曇。昨日の強行がたたつて本日は休養、午後から薪取り。田村，打出広橋ＯＢは野呂川乗越を往復。高田はピッケルをひろつてきた。

１２月２８日　雪。田村，広橋，打出，高田，山本は右俣をつめ三峰岳下にテントを出した。黒木等はサポート。意地の悪い倒木と、ふかふかの雪のラッセル。７；００発。４；００テント設営、サポートを帰す。

１２月２９日　雪。間岳をアタックせんものと、吹雪の中胸までのラッセルを５時間、三峰岳と間の岳のコルとおぼしきに出たらしいが、風雪にまかれて退散した。黒木等は両俣から北岳をアタックするはずであつたが停滞。

１２月３０日　雪。　日程が限られているので、両俣へ撤収。黒木等は停滞。どうも北西季節風の偉力強大で南アまで悪天をもたらしているらしい。噂にきいた北岳の甲府側と異り、ここはまるで、南アの吹きだまりの様に雪が積る。（後で西俣隊もすごいラッセルに苦しんだときく）両俣小屋は、寒く、わびしく、１年部員達はわななきわななきかぼそい歌をうたつていた。

１２月３１日　晴。　北沢小屋へひきあげる。来る時とうつてかわり、野呂川は美しく氷結し、アイスパレスの廊下のよう。おまけに誰かがラッセルしてくれていて６時間程で帰つてしまつた。北沢峠附近はテントのオンパレード。６０まで数えて止めた。一番みすぼらしいテントから玉井がテントを出し、「ナンダ、モウカエツタカ。」、関ＯＢ等も顔を出して急ににぎやかになつた。

1月1日，晴。　元旦でめでたいのでOB達と談笑しながらゾロゾロと甲斐駒を往復した。摩利支天がすばらしい。風が強いので浜田の鼻が白く氷結し、大騒ぎとなつた。玉井と米沢は、鋸岳をアタックすべく七合小屋に入つた。

1月2日　晴。　2隊に分れてアサヨ、仙丈を往復、まるでハイキング。北岳、塩見まで晴れ上り、人並みにくやしかつた。

1月3日　晴。　撤収。

以上失敗したが、期間の上から、本来無理であつた。1年部員は、前年、後半の鮮かな対照から冬山の多様性を知つてくれたろうし、ラッセルもよかつた。　（田村 記）

2. 千枚赤石隊。

メンバー　佐藤（4.L）　保母(4)　酒井(3)　前沢(3)　梶本(2)

期間　12月25日～1月3日

12月24日　大阪発。

12月25日　雨。田代入口（9：00）—堀沢小屋（12：30）。相当の土砂降りで飯場のテントにとめてもらう。

12月26日　快晴。堀沢小屋（8：00）—転付峠（10：00）—二軒小屋（10：50）—同、昼食後出発（12：00）—マンボウ頭下方にテントを張る（15：20）。西俣パーティは二軒小屋に荷をおいてテント地まで我々のサポートをしてもらつた。

12月27日　晴後曇。　出発（9：00）—千枚岳（15：04）。午後から曇りとなり弱い風雪の為に又途中まであつたトレースが全く途絶え相当に深いラッセルとなつた為に、千枚岳のピークまで行けず少し下方でテントを張る。

12月28日　吹雪。　停滞。

12月29日　吹雪。　出発（8：45）—悪沢岳（11：05）—テント（11：15）。前日と同じ悪天候で悪沢岳のピークを少し越した所で強風の為に顔面に軽い凍傷を起したのでただちにテントを張り逃込む。

12月30日　停滞。非常な強風でテントのポールが曲り、心細い。

12月31日　吹雪。　出発（11：00）—荒川岳（12：00）—テント（13：20）。ガスの為と、雪崩の危険をさけて荒川岳の下りは夏道をさけ稜線を行く。

1月1日　晴後ガス後晴。　停滞。朝晴れていたので出発の準備をしたがすぐに濃霧となつたので停滞する。しかし2時頃晴間が見え出した。

1月2日　曇後快晴。　出発（13：00）—大聖寺平（14：00）—赤石岳（16：30）—テント（17：10）。午前中相変らずガスと強風であるが準備を整えて待機。午後から快晴となり今回の山行で始めての"来てよかつた"の気分になる。赤石岳のピークを下り切つたあたりでテントを張る。

1月3日　晴。　出発（8：45）—百間洞小屋（10：00）—大沢岳コル（12：00）

—大沢渡（１６：００）—木沢（２１：１５）。大沢岳の登りは実に堂々のラッセルがあり助かる。大沢渡—木沢間の３８Km、夜の軌道を歩くのはうんざりするどころの騒ぎではなかつた。

天候に比べよく行動したと思う。北アルプスがドカ雪と悪天の戦いならば、南アルプスは強風にふかれながら稜線をドンドン縦走することだ。（前沢記）

3. 西俣隊。

メンバー　L西垣，白井，三沢，三田，清水，横尾，岡久。

期間　１２月２５日〜１月２日

１２月２５日　雨。　荒川三山を縦走するパーティと共にびしよ濡れとなつて保利沢小屋へ入り込んだ。

１２月２６日　晴。　伝付峠をへて二軒小屋へ。雪は峠でひざぐらい。赤石へ行くパーティをマンボーの頭の下までサポートする。

１２月２７日　晴。　二軒小屋から小西俣まで立派な道がつづいている。昼すぎ小西俣についたので、二手にわかれて塩見、悪沢のルートを見に行く。

１２月２８日　吹雪。　小石尾根より悪沢へ行かんと、小屋のすぐ前の吊り橋を渡つた所から尾根に取付いて森林帯の中を急登する。２３００mあたりからさらに雪が深く、おまけに吹雪が強くなつてきたので、新蛇抜沢の頭までのぼつて引きかえす。

１２月２９日（吹雪）　６：００吹雪がおさまりかけたので悪沢にむけて出発する。だが１ピッチ登つた所で又吹雪き、全員退却。

１２月３０日　吹雪。　停滞。小屋は４棟あり事務所が一番しつかりしている。電蓄もあつたが残念な事に電気がない。

１２月３１日　曇。悪沢をあきらめて三伏峠へ向う。雪はどんどん深くなり、予想以上に時間をくい、１時すぎ、西池の沢出合の小屋につき泊る事にし、空身で３時間程ラッセルにゆく。

１月１日　晴。　昨日ラッセルしたところをあつというまに通りすぎる。荷を持つてのラッセルはなかなかはかどらない。やむを得ず２組に分れて、１組が荷をおいてラッセルし、他の１組がラッセルしている間に荷をとりに返る方法にする。空身でも雪は胸をこえ、その上倒木が多く、その上に雪がつもつて雪の壁がいくつもできている。目の前の沢が、なかなか曲れない。薄暗くなつても三伏小屋へつかず、月光、光々たる中に１９：００すぎやつと小屋にたどりついた。

１月２日　晴。　どこかのパーティが残していつたパンを頂戴して出発の用意をしていると峠の方から２人づれが下りて来て「パンが残つていませんでしたか。」と来た。頭をかいてこちらの残りのクラッカーをおいた。三伏峠は冬テンの展覧会。あとは気持のよいラッセルのついた道を沢井へ走りおりた。途中、東大の遭難者と会う。遺体をおろす人達は皆

顔面凍傷にやられていた。

最初は欲張つて三伏峠につくまでに、悪沢と塩見をのぼるはずだつたが天候にめぐまれず、ドカ雪と倒木で三伏峠につくのがようやくであつた。（西垣 記）

4. 北沢隊。

メンバー　笠松L，金子，宇野，桑原。

期間　12月26日～30日。

目的　時間的都合がつかず全期間合宿に参加できなくても、1日でも山に入つた方がよいという意見に従つて、4人がより集つて1パーテイを作つた。

行動概要

26日　晴。　数人パーテイが一緒に戸台で下りた。峠をこえて北沢小屋に向う途中樹々の間に北岳が望まれた。この山行中北岳をみたのはこの日だけである。北沢小屋には管理人はいない。我々のテントは峠と小屋の中程の平にひらけた樹林帯の中に決めた。水場はテント地から少し北沢小屋の方に下つた所。沢に水が流れていた。

27日　晴。　5：30起床—7：40出発—11：15千丈岳頂（ガス）—11：40（下山）—12：15樹林帯—13：10テント帰着。樹林帯をぬけたとたんに西風にあおられたので感覚的にはかなりきびしく感じられた。トレースもあり、ある程度しまつていてもぐらず、雪はややしめつているが固りにくい。

28日　高曇り—吹雪。　5：00（起床）—6：40出発—8：00仙水峠—9：15駒津岳—10：15駒ケ岳頂—11：15駒津岳—12：00仙水峠着—12：50北沢小屋—13：00テント帰着。きつい西風が小雪をはこんでくるが仙水峠に立てば、摩利支天が所々に雪をつけてみえる。ここにも登るルートがあるという。時々晴間がみえていた。駒の上に出れば猛烈な風、たまりかねてカンパンをくわえたままとんでおりた。予備食糧もなかつたし、天気もよくなかつたのでアサヨ行はやめて下る。同じ仙水峠までくるのなら一度に二つ片付けてしまおうか等と話し合つていたのだが。

29日　高曇り。　4：50起床—6：30出発—（テント地は無風）—7：40仙水峠—9：20アサヨ登頂—10：00峠—10：45テント地。森林帯をぬければ例によつてすごい風。地吹雪。はたしてピークをふんできたのかどうか、テントに帰つてからももめた。夜遅くまでカードをして遊んだ。解禁煙した。

30日　曇。　11：10テント地出発—12：40丹溪山荘着—13：10同発—14：50戸台。1日おくれて今日の10時入れかえのメンバーがついた。岡田OB，玉井，米沢である。丹溪山荘では関本，野田両OBに会つた。29日から30日にかけてどつと登山客がおしかけてきた。我々のテントのまわりにもすごいカマボコ天がはられた。

後記。　私自身も南アといわれる山にくるのははじめて。テントを1ケ所にすえて空身で動いたせいもあるが、一言でいうと手軽すぎた山行であつた。アイゼンはつけた方が快適なのではいたがザイルはサブザツクにしまつたさり。晴れた日の風の強いのが特に印象に残る。我々の隊は合宿といえない程ささやかなものであるがオール・オア・ナツシングより、僅かでも参加する事に意義があると思つていたし事実風に吹かれて満足して帰つた。

（笠松 記）

5.　鋸岳隊。

メンバー　玉井，米沢。

1月1日　①強風。　甲斐駒頂上でサポートして頂いたＯＢの方や新人に別れると急に重くなつたザツクをしよつて6合目石室に下り始めた。風が強く、雪がしつかりしていないので難儀する。7合目の針金の所ではナイロンのミトンの為すべつてしまつた。6合目石室はかなり雪が吹きこんでおり、風通しも良いので、カートンボツクスを下に敷き、ラーメンで一息入れてからツエルトを張つた。三つ頭の方へ偵察に行つて見たがトレースがあるのでやれやれと引返した。なさけない事だが僕は大阪を出る時からここのラツセルをひどくおそれていた。気温が下つてカメラが凍つてしまう。石室には僕等の他に2パーテイ、6合の頭にテントが3張程ある。

1月2日　①。　3時米沢に起される。とても寒い。ツエルト中霜だらけである。5：20アイゼンを岩にきしませて岩登り。長野県側はオーギビラキからの風であまり雪がついていない。三つ頭の手前でちよつと休み、キジを打つ。7時三つ頭。ブツシユの中を山梨側をまいて風がするどく吹きぬけている中の川乗越へ下る。この鞍部から第2高点へは急なルンゼ状の雪面で気分が悪い。急いで登り、ブツシユをぬけると第2高点に着く。

大ギヤツプをさける為に中央稜を左に下り、薄い雪の乗つたガレを丁寧に下ると圧倒的なゴルジユの底に着く。風穴側のハンドの下で1回目の昼食。風穴は針金が半分程切れていたので念の為にザイルを出して2ピツチで稜線に出た。雪がしまつていないので帰途を考えると心配である。風穴からはブツシユの中を急に下ると小ギヤツプの底に出る。ここでも慎重に10m程スタカツトで登る。9：40第1高点に着く。2回目の昼食。小ギヤツプは帰りは山梨側を懸垂する。風穴は3ピツチだけザイルを使う。あとは何でもなかつたが登り下りに疲れてて14：28石室に戻る。9時間で往復できたのはラツセルのあつたおかげである。

1月3日　◎。　余つた食糧を雄嶺の人にあげて第4尾根を丹渓山荘へと下る。七丈滝は完全に凍結している。戸台川の1合目出合からはところどころ凍つた川を歩く。山荘までは意外に遠い。米沢がズボンを完全にさいていたので他のパーテイが近づくと僕等はぴつ

たりと並んで歩いた。　（玉井 記）

（時報１２号）

１９６１年 春山合宿

八つ峰を末端から

酒 井 次 郎

Ⅰ．前書き。

本年度、春山の計画にあたり色々なプランが立てられたが、結局剣岳八ツ峰末端より本峰への完登をめざす計画に決定した。これは、昨年来の我が部の懸案であるのと同時に、特に本年はヒマラヤ遠征中の事でもあり、余裕のある行動を必要としたからである。

なお昨年度の経過を略記すると

1. ３４年秋　ボツカ
2. ３５年春　悪天候と偵察不充分の為、３稜に登路の見通しをつけたにすぎない。
3. ３５年５月、四の沢から３稜に取付いたが雪質が悪く中止。
4. ３５年秋、四の沢から３稜をへて１峰までの無雪期トレース。

Ⅱ．計画概要。

真砂沢出合にＡＢＣを設け、次いで八ツ峰末端より取りつき、尾根の途中２０００m附近にＡＣを建設、アタツクはここから八ツ峰を縦走して剣本峰のサポートテントに入り、後単独で早月尾根を下る。その間、ＡＢＣでは一峰東面の４本の尾根のトレースをする。又、剣御前小屋ＢＣには１年が主体として入り、奥大日往復及び本峰サポート・テント建設の役目を果す。計画遂行に当つての問題点は、

1. 千寿ケ原から剣御前小屋までの長いアプローチ。
2. 急峻な一峰東面における雪崩。
3. アタツク隊の大きな負担。

等である。

Ⅲ．行動記録。

(1) アプローチ期間。（千寿ケ原→剣御前小屋）

３月１３日　先発の打出，高橋大阪発。

３月１４日　本隊大阪発。

先発。美女平から３ピッチでビバーク。

１５日　晴。　千寿ケ原・美女平間２回に分けてボツカ。

先発。追分小屋。

１６日　晴。　６：３０美女平—１４：５０立山荘—１６：３０美女平。半量を立山荘にボツカ。スキー不慣れの為予想外に時間がかかる。先発は天狗。

１７日　快晴。　６：５０美女平—１３:４５立山荘—１７：００天狗。弘法まで歩く。クラストと前日のトレースのため快調。追分より美松荘をへて天狗にいたる。先発は房治小屋。

18日　快晴。　7：00天狗—8：00立山荘（スキー練習）10：10出発—12：00天狗—13：00出—14：00房治—14：30出—15：30天狗着。

天狗—追分間はスキーで下つたが、スキーを2本折り、2本流す。房治で先発と合流。先発は乗越までトレースして房治に戻る。

19日。　停滞。

20日　晴。　7：30天狗—8：10房治—9：35出—11：45御前小屋—12：40出—13：20房治—14：55出—16：25御前小屋。

全員御前小屋に集結し、これより各パーティに分散する。

(2)　分散期間。

イ，真砂パーティ。

L酒井，広瀬，高橋，前沢，佐藤，五百蔵，金子，白井，梶本。

3月21日　曇後晴。　4：20出—5：45真砂沢。

約1時間で剣沢を下る。平蔵、長次郎からのデブリが出ていたが、剣沢はよくしまつており、あまりもぐらなかつた。1峰東面の雪の状態よく、又、好天が続きそうなので、計画を変更して、ACを出さず、ABCより直接アタツク2名を出し、2・3のコルまで2名がサポートし、又、残り5名は東面を知る為AC予定地まで同行する事にする。

◎アタツクの記録

アタツク　広瀬，高橋

サポート　前沢，五百蔵

3月22日　晴・夜より風雪。

真砂平キャンプ地3：30→4の沢入り3：45→4の沢のど4：15→3稜岩穴4：55→天幕予定地6：10→昨年引返し点7：20→1峰頂上→9：15→I IIのコルで中食（10：30〜11：25）→2・3のコル14：20→V峰で食事（16：10〜16：40）→ビバーク地決定18：10。

昨年5月ヤバかつた岩稜は例年にない雪の為かえつて容易に通過でき、その上の引返し点も何なく過ぎてしまつた。

そのあとは昨年の推察通りだつた。兎に角たんたんとした登りであつた。I峰に出る直前、4稜の一番後の処は、時間的にかなりおそく少し気味が悪かつた。

ここで我々の考えが甘かつたのは、かえつて八つ峰そのものに対してであつた。特に1峰、2・3の窓の間は、急な斜面、それも長いやせた尾根の連続であつた。これは昨年5月の偵察で明らかであろたにも拘わらず、左程問題にしていなかつたのは考えの甘さを示すものであろう。

サポートの前沢，五百蔵はII IIIのコル迄来てくれたが，彼等のサポートがなければI峰，II IIIの間も動けなかつたのではないか。全く心から感謝する。

II IIIの窓からあとはIV峰の下りが急であつた。普通に考えてこれは懸垂すべき所であろ

V峰まで来ると、空腹に耐えられなくなつて、2回目の食事にした。ⅡⅢの窓でサポートと別れる頃から雲行きがあやしかつたが次第に風が出て来た。

V峰から懸垂すべくのぞいてみたら2～3回の中継が必要なのと、最初のピンがない。途中でテラスにヒヴアークというのは困るので、長次郎側をまいておりる事を考えた。しかしのぞいて見ると全部シユークリーム状でまず不可能。やがて日も暮れかけて来たので一応Ⅱ・Ⅲの窓に引き返してⅥのコルに行くか、そこでビバークするか迷つた挙句、ビバークに決定。V峰三の窓側の斜面に位置決定。本峰から懐中電灯の合図あり、こちらから応答する。ツエルトを張り終つた頃より雪が降り出した。

3月23日　風雪。

停滞。朝方少し、ほんの少し晴れ間がみえたが、あとは一日風雪。足首までしかもぐらなかつたのが八つ峰の稜線へ出るのに腰までのラツセルに変つた。天気がいつ回復するかわからないので食い延ばしをする事を考えた。昨夜もそうだつたがマツチが直きにつかなくなる。携燃はうまく燃えない。通気性がないので、すぐ息づかいが荒くなる。色んな事をするのがめんどうくさい。従つて水はつくれない。運動を兼ねて雪かきに表へ出る。キジは2匹うつた。夜になつて冷えこんでくる。これは天気がよくなつて来た証拠である。

3月24日　晴。　V峰8：20—Ⅳ・Ⅴのコル8：30→長次郎の出合9：30→真砂テント地11：00。

Ⅴ・Ⅵのコルへおりられない事はわかつたが一度長次郎へ降りてあらためてⅤⅣの窓より上半をやりたいという気持に悩む。とにかく引返すのがたまらなくつらかつた。上半の様子を見ると登れぬのは自明であるが、尚かつ気がかりであつた。無事に引返す事が第一と考えて何度かぐらついてたが引き返した。しかし帰る時には殆んど水を飲んでいない為に2晩もビバークしている事によつて体がまいつている事はヒシヒシと感じられた。下る際、本峰の連中はずつと見ていてくれた。何とも言えず有難かつた。

疲れてもいたし、又引返したというひけ目からじつに馬鹿気た事なのだが、テントに着くまで声をかける気にはなれなかつた。幸か不幸かテントの連中は黒部別山へ行つていた。

一方真砂パーティは、先日50cmの積雪があつたので一峰東面はやめ、7名黒部別山へ行く。ＡＢＣ発8：55—黒部別山1：00—ＡＢＣ着15：15。

ハシゴ谷乗越へ向つたが、沢をまちがえ、黒部別山よりに登つた為、尾根へ取付く直前、雪庇につつこみ、2名が約200m流される。

アタツクがV峰まで行きながらV峰を下れずビバーク2日の後ＡＢＣに帰つた事を知る。アタツク出発当時は昨年の事も考えると雪の状態は最良であり再度のアタツクもそれ以上

望めないと考え、アタツクは断念する。
又一峰東面のトレースも今後長く天候が悪化しそうなので打切り、ＡＢＣを撤収する事に決定する。

3月２５日　曇。　ＡＢＣ出１５：３０—御前小屋ＢＣ着２０：３５。

ロ．本峰隊。　打出，保母，三沢，浜田。

3月２１日　晴後高曇り。　乗越—本峰。

前夜は殆んど寝ていないのでふらふらした。4人共頂上についた時にはバテていた。カニの横ばいもたいした事はなかつた。頂上のすぐ北にテントを張つた。田村，田井が頂上までサポートしてくれた。

3月２２日（快晴）　逆ボツカ。

八峰はトレースが完全についているので、万一今日アタツクが来ても大丈夫だつたので逆ボツカした。前剣の下まで。昼過ぎてＷ峰附近にアタツク隊を発見、夜電池で確認した。アタツクはＶ峰の上でビバーク。

3月２３日　吹雪ガス。　停滞。

晴の予想が見事にはずれ、朝から吹雪。８：３０アタツク隊を気遣い、八峰に向けて出かけていこうとしたが、粉雪で危険なので、引返した。１日中八峰を注視したがアタツクの姿は発見出来なかつた。心配した。

3月２４日　快晴。　停滞。

サラサラの粉雪が５０cm程つもり、行動出来なかつた。１０時頃、ＶＩＶのコル附近から下降するアタツク隊を発見、無事を喜ぶ。台湾坊主が発生したので明日真砂沢パーティが撤収したら、我々も撤収する事にする。

２５日　高曇り。　停滞。

パツキングをして、テントの内張まではずしたが、剣沢にトレースがなく、真砂沢が撤収したかどうかもわからず、判断に迷つたが、停滞とする。

２６日　曇後風雪。　停滞。

9時の予報で、北高南低の気圧配置となり悪天が長びきそうな気配となる。成城のテントが撤収し、うまいビスケツトを置いていつてくれた。気温が異常に高い。

２７日　雪。　停滞。

異常に高い気温に驚きつつ、ポンを打つていると、粉雪がしんしんと降りつづき、テントの半分まで埋つた。いくら雪のけしきも、まわりに土手が出来てあまり効果がない。

２８日　吹雪後晴。　停滞。

一夜降りつづいたドカ雪で朝おきるとベンチレーターの所まで埋つていた。気温は下つて来た。夜、快晴となり雲海が美しい。

２９日。ガス後快晴。　撤収。

積雪多く、動きたくなかつたが又天気がくずれそうなので撤収を行う。停滞疲れで歩きはじめは息ぎれがした。鎖場附近はひでいラツセルで前剣頂上より少し剣よりのところでサポートに来た西垣，広瀬，金子，梶本に会い、ほつとする。剣御前ののぼりは雪崩の心配から、尾根通しにかかつた。サポートがなかつたらラツセルの為、もつと時間がかかつていたろう。乗越小屋でゆつくりと飯を食い

星空をみあげながら雷鳥沢を下つた。房治では皆が、歓迎してくれた。

○頂上附近は動けそうで動けない所だ。その判断の基準によつて行動は非常に異つたものとなる。今回はサポートが目的だから無理は絶対にさけた。

○スコップとは名ばかりのジユウノウを持たされた為、除雪に苦労した。

○連絡方法を決めていなかつたことは今回の最大の欠点である。難しいことだが研究の必要がある。

(ハ) 乗越パーティ。

メンバー　L西垣，黒木，田井，清水，山本，横尾，高田，辻，岡久，浅井，大川。佐藤茂，田村，三田。

3月21日。黒木他新人5名前剣中腹までサポート。BH出発7：00、前剣デポ点着8：45、出発9：15、BH着10：55。

田井及び房治よりの田村は剣頂上までサポート。平蔵のコル10：30、頂上着11：45、出発11：55、BH着14：30。西垣他3名停滞。佐藤下山。田村房治へ。

3月22日。西垣，田井，他6名雄山往復。3名停滞。BH発7：20、別山着7：40、雄山着9：40、出発10：15、BH着11：45。午前中快晴風強し。午後風強くガス。

3月23日　風雪停滞。

3月24日　快晴。奥大日へ6名。5名サポート。BH発7：15。奥大日ピーク下10：05。雪洞を堀り始める。サポート隊は奥大日登頂後BHへ。12：00雪庇の割目にぶち当り中止。12：40場所を替えて堀る。15：30完成。この頃より薄雲が出始める。今日はラツセル深く、雪はしまつていないためワカンもアイゼンも変りなし。腰までのラツセル珍しくなし。

3月25日。7：10雪洞発、7：25奥大日、7：40雪洞着、8：15分出発、10：40BH。

この日、台湾坊主と日本海の低気圧に挟まれて悪天候の続く見込みなので食糧は3日分残つていたが、大日に行かずに引きあげることにする。朝から急激に悪化して、日本海に雲の山脈の押し寄せてくるのをみたが、結局1日中もつた。20：00真砂パーティ帰着。

Ⅲ．撤　収。

3月26日　雪。　停滞

3月27日　雪。　〃

3月28日　雪。　〃

3月29日　晴。　9：10発房治着11：15。剣本峰隊を除き全員下る。

3月30日　晴。　スキー練習。

剣本峰隊が撤収したので合宿を解散する。

（時報12号）

1961年 夏山合宿

―剣岳一峰東面を中心として―

夏山合宿をここ2年槍ガ岳千丈沢で行つたが、今年は剣沢、真砂沢出合にテントを張り剣岳東面を中心に行われた。これは剣岳が豊かな岩と雪渓をもつと共に、我部がここ数回登攀を試みている八つ峰Ⅰ峰東面の開拓を目指した。

参加人員は上級部員がかなり不参加の為、減少し、その構成も1・2年部員の基礎技術、2・3年の中堅部員のリーダーシップの養成に重点がおかれた。

アプローチは体力養成の点から、従来に比較してかなり強烈なルートである大日岳を越えて剣沢に入つた。合宿中は連日の好天に恵まれ、Ⅰ峰東面の沢・稜のトレースを初めとし、1年を対象に八つ峰、源次郎尾根縦走、中級部員は八つ峰側壁、チンネ、ジャンダルム等の岩登り、さらに内蔵助谷を下り黒部へ、大タテガビンの偵察も行われた。

だが21日チンネで岡久が転落、大窓で大川がスリップと、同時に2つの事故を起してしまつた。特に岡久は大　骨骨折という大けがで、チンネ中央バンドよりザイルでつり下すと言つた大がかりな救助作業が行われた。この事故は当人の過失というより部の失敗である。又この夏山合宿の失敗だけに片付けきれない。

この合宿後、我々はいく度かこの事故の原因を論じた。その反省の中には岡久の場合を考えても、直接原因は1本のハーケンが抜けたのだから、単なる技術的な失敗と片付けるよりも、もつとその根底にある山登りに全般に関して我々の進み方、考え方が誤つていたという事である。それは山登りの大原則であるべき「step by stepの登山」を忘れていたのではないか。言い代えれば、基礎技術も不十分な者が「さるまね的」な山登りに走つたということである。この点、今後のトレーニングの方法についてもかなり考えてみる必要がある。

リーダーメンバーも部員の力を過信していたのは失敗である。しかしこれはこの合宿のリーダーシップの失敗だけではなく、平常の部の運営を考えなおす点が多い。この事等、改めたいものだ。

なお合宿の後半は事故の後片付けに終始し、又、上級部員が帰阪したので縦走は少々予定を変更し、4パーティに分れて行われた。

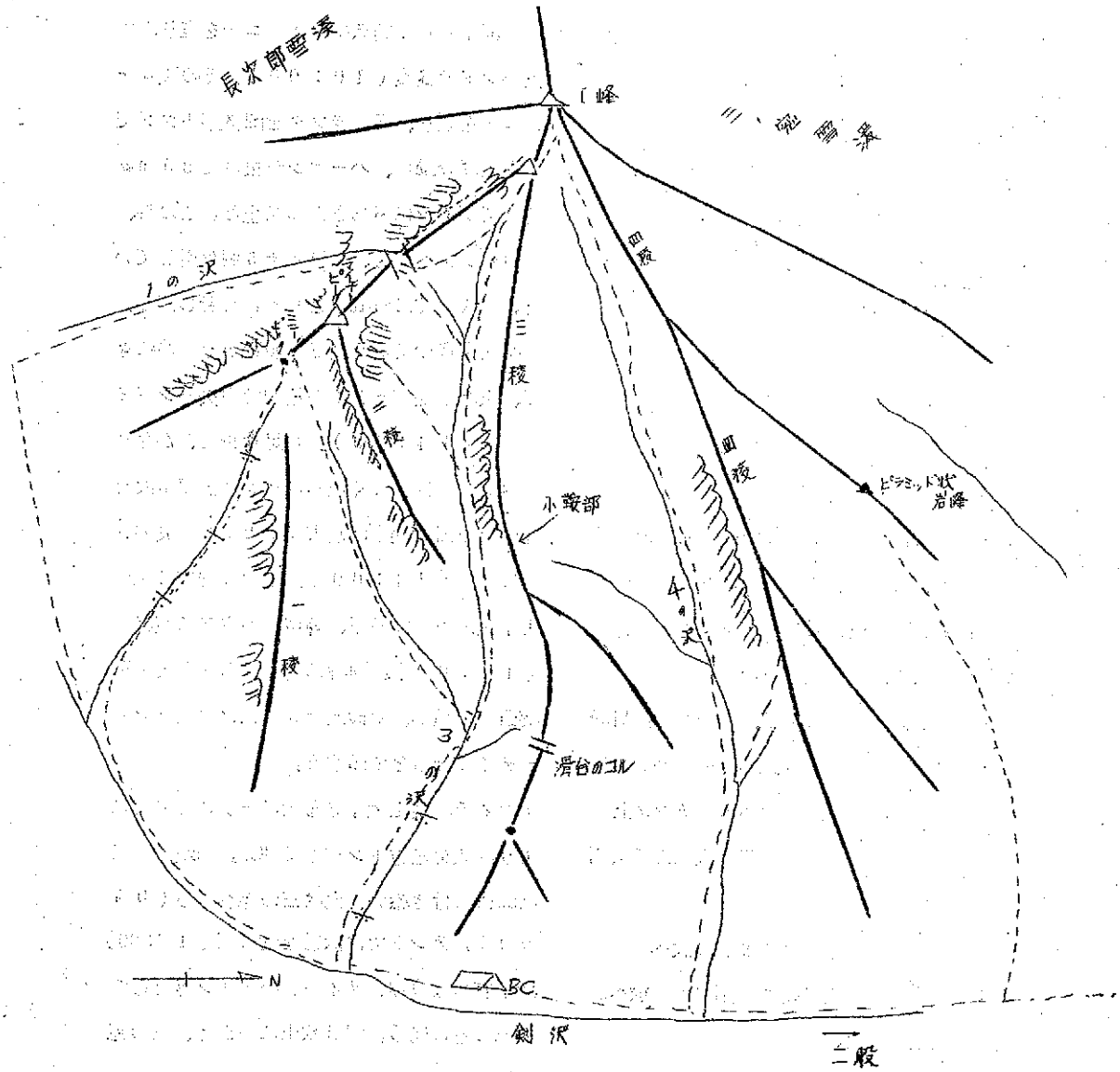
合宿参加者

酒井（CL），西垣（SL），大工原，黒木，五百蔵，梶本，浜田，横尾，高田，辻，岡久，桑原，藤森，山本，笠原，清水，三田，大川，牧野，吉川，播本，柳井，秋濃，竹本。

行動概要

7月12日　先発隊大阪発。

13日　本隊酒井ら20名大阪発。



図ロ峰I峰東面ルート図

14日　曇。　小型トラックで称名1ピッチ手前まで入る。11：00発—大日平キャンプ17：00。

15日　晴。　大日平発6：20—室堂乗越しにキャンプ17：00。

16日　晴。　出発7：00—真砂沢出合少し下にテント地を作る14：00〜14：30。

17日　晴。　新人雪上訓練。一の沢よりマイナーピークⅠ峰へ。二の沢。三の沢マイナー側壁。Ⅰ峰へ。四の沢より八つ峰下半。

18日　晴。　二の沢よりマイナー。三の沢よりⅠ峰。4稜3の窓側偵察。八つ峰上半。源次郎尾根。チンネ。ジャンダルム。Ⅵ峰Cフェイス。

19日　晴。　4稜よりⅠ峰へ。一の沢よりマイナー。三の沢よりⅠ峰。チンネ。八つ峰上半。源次郎尾根。Ⅵ峰A・Cフェイス。

20日　快晴。　晴天停滞。

21日　晴。　源次郎尾根、本峰南壁。Ⅵ峰A・Cフェイス。チンネ。剣尾根。ハシゴ谷より内蔵助谷、黒部。小窓周辺。チンネ上部Eクラック登攀中岡久転落。大窓にて大川スリップ。

22日　晴。　岡久チンネより二股へ。

23日　晴。　岡久二股より剣沢小屋領へ。大川，大工原帰阪。

24日　曇。　岡久、ミダガ原ホテルへ。

25日　雨。　岡久、ヘリコプターで富山病院へ。全員美松荘より真砂沢テント地へ。

26日　晴。　合宿解散。

事故報告

〔チンネの事故〕

7月21日　晴。

西垣，清水，岡久中央チムニーを登り、中央バンドで昼食（10：00）。その後Gチムニーを登り、Eクラックを岡久がトップでつり上げ登攀中、ハーケンが抜けて20m転落してザイルにぶらさがつて止る。この時、西垣がジッヘルし、カラビナ5個使用していた。岡久すぐに意識をとりもどし苦しがる。左稜線を登つてきた高田，藤森がその場にきて、東北学院パーティの援助で中央バンドまで下る（14：00）。右足骨折で、かなり出血したが間もなく止る。チンネ上で事故を知つた三田，梶本は左方ルンゼより中央バンドに登る（14：00）。その後梶本は剣山荘，剣山小屋に急報、警察、学生課に連絡（19：00）。同時に同小屋の金沢大学医療班に依頼し、真砂沢テントには東北学院パーティに伝言を依頼する。

チンネでは農工大，立命大パーティの応援により岡久を左方ルンゼまで運ぶ。西垣，三田は岡久に付き添い、他は三の窓へ下る（0：00）。テントでは伝言を受けて（17:00）辻，笠原は食糧、ザイル、ハーケン等を持つて三の窓に向う。明日救出にひかえ、三の窓に泊る。

7月22日　晴。

黒木，梶本，藤森，横尾チンネに向う（15：00）。三の窓に泊つていたものと合流し、

又農工大，立命大の援助により左方ルンゼより岡久を下す。これはハイマツで作られたタンカに岡久を固定し、4本のザイルでつり下げ、一歩一歩おろしていつた。左方ルンゼには落石が多く、特にハングした部分は困難であつた。又、約10m毎にハーケンを打つてザイルをfixする為、意外に時間がかかつた。16：30左方ルンゼの下の雪渓におろし、朝からまつていた金沢大の医師の方に診断を受ける。新たにタンカを作り三の窓の雪渓をピツケルを打ち込んで、ザイルでジツヘルしながらすべりおろす（18：00～0：30）。二股の1年部員の待つテントにつく。この間池の平に行つた浜田ら佐藤OBが来て下さる。

7月23日　晴。

二股より真砂沢出合まで、全員汗と泥にまみれてタンカを担ぐ。ここ2日間満足に寝ていないので足がふらふらする。この間、梶本は雷鳥荘よりスノーボートをはこんでくる。真砂沢出合からは立命大パーティが一気にスノーボートを引き上げて下さつたのでずい分助かつた。広橋OB，坪井OBが待つ剣沢小屋に到着し、小屋横にテントを張り岡久を休ませる。（17：00）

7月24日　曇。

タンカを交替で担ぎながら、小雨の中をミダガ原ホテルへ。20：00。

2月25日　雨。

岡久、自衛隊のヘリコプターで富山中央病院へ（11：00）。OB，岡久の御家族，黒木，高田は共に、他は全員真砂沢テントへ戻る。雨の中、どろの中を敗残兵の如く。だがテントには1年部員が飯をつくつて待つているのだ。

〔大窓の事故〕

7月21日。

5時20分に宇野，桑原，大川パーティが出発。池の平小屋より小黒部谷を約40分下り、雪渓をつめ、大窓に出る（9：30）。昼食をとり10：00に出発、稜線ぞいに本峰の方へ向う。踏跡を求めて岩まじりの草付をトラバース中、最後部にいた大川スリップする（10：15）。傾斜50°～60°のガレたルンゼを30m程すべり雪渓のシユルンドに落ちたが、額から鼻への裂傷の出血は間もなく止つた。

その後、桑原は、池の平小屋に救助依頼、居合せた大工，石工の方々3名が現場に向つて下さる。桑原はテントに連絡に帰つたが1年部員のみで、間もなく源次郎に行つていた酒井に会う（15：30）。

事故現場では救助の人が15：30に大窓に着き、マーキユロで消毒後材木とザイルで作つたタンカで出発する（18：00）。18：30、雪渓を出合まで下つたが、そこからの登りは4人の力では遅々として進まず、救援を待つ。（20：30）大工原、小屋の管理人の田中正雄氏ら6名が着き、小屋へ向う。

7月22日。

2：10頃ようやく小屋にたどり着く。朝になり、6：30浜田，桑原がテントから到着し、酒井に連絡をつく。大川は名大インターンの方に傷の手当をしていただく。その日、宇野，清水と共に小屋に泊る。

7月23日。

7：30、大工原，浜田らが小屋に到着し宇野ら8名を阿曾原に下す。大川はぼつぼつ歩けるようになつていた。大工原がつきそつて帰阪する。

（時報12号）

山行記録年表

山　行　記　録　年　表

（太字は記録的なもの、重要事項）

1948	1	遠見尾根より鹿島槍北壁	佐谷、徳永。	時報1号
	3	白馬三合尾根	佐谷、中西、徳永。	〃
	7	白馬主稜	徳永、加藤。	〃
	8	明神最南峰中央壁	佐谷、徳永。	〃
		明神南峰南稜	家田、加藤。	〃
		下又白奥壁中央ルート	佐谷、徳永。	〃
		（以上は浪高ＯＢとして行つたものである）		
	11	富士山		
		関西学生山岳連盟合同登山により阪大より	徳永、大島参加	〃
1949	4	雨飾東南稜	徳永、大島。	〃
	6	**阪大山岳会発会**		
		旧浪高山岳部を母体とし、阪大全学部的なものとして発足		
		（編者註ー現在、現役を阪大山岳部と称している）		
		篠田会長「時報1号に寄せて」		〃
	8	夏山剣沢合宿	大島ら7名	〃
	8	（八ツ峰、六峯、三の窓側等）		〃
	8	朝日、白馬岳	佐江木、藤谷。	〃
	8	穂高、槍北鎌尾根	久保ら2名	〃
	8	木曾駒縦走	大久保、伊藤、岡本。	〃
	9	和賀山系久留尊山	久保。	〃
	10	東多紀アルプス	徳永ら5名。	〃
	10.11	北岳バットレス東北稜	徳永ら4名。	〃
	10.11	木曾駒ケ岳	家田、細見、田島。	〃
	11	御　岳	大島ら6名。	〃

1949	11	八ケ岳	大久保、伊藤	時報1号
	12	**冬山合宿、厳冬期白馬主稜**	アタック 徳永、大島、家田ら13名	〃
1950	3	**春山合宿、八方より鹿島槍往復**	徳永ら6名	時報2号
	5	槍平より燕縦走	家田ら6名	〃
	7	白馬、剣、立山	多喜野、浜崎	時報3号
	7	夏山、南股合宿 （杓子沢、dルンゼ等）	家田ら8名	〃
	7	剣合宿及び立山縦走	加藤ら8名	〃
	7	雲の平	大島ら4名	〃
	7	東沢溯行、裏銀座縦走	家田ら4名	〃
	7	後立縦走	川島ら6名	〃
	8	槍、常念、大滝	住吉	〃
	9	比良山堂満岳北面ガレ	大久保ら4名	〃
	10	鈴鹿山行	家田ら9名	〃
	11	剣　岳	尾藤ら2名	〃
	12	冬山合宿、杓子、双子尾根	家田ら14名	〃
1951	2	細野スキー合宿	四宮ら6名	〃
	3	春山合宿、後立山逆縦走（失敗）	徳永ら9名	〃
	3	樽池、蓮華温泉、白馬	久保	〃
	5	鈴鹿山行	川島ら5名	〃
	5	丹波高原、大堰川源流より 由良川源流へ	久保、近	〃
	6	比良奥の深谷より武奈岳	久保ら4名	〃
	7	夏山、鹿島槍カクネ里合宿 （蝶左、PI等）	家田ら13名	〃
	8	妙高火山群	久保	〃
	8	戸　隠	大島ら2名	〃
	8	塩見、赤石	徳永ら4名	〃
	9	**北岳バットレス** **第二尾根新ルート等**	徳永ら4名	時報4号

1951	10	大杉谷、大台ケ原	川島、近	時報4号
	10	穂　高	二木、坪井、宮本	〃
	10	北岳、ボツカ、偵察行	久保ら3名	〃
	11	比良縦走	尾藤ら3名	〃
	11	阿蘇山	久保	〃
	11	穂　高	尾藤ら2名	〃
	12	冬山、北岳合宿	細尾以下5名	〃
	12	冬山、八方尾根合宿	大村ら11名	〃
1952	3	春山合宿 小日向より不帰往復	家田以下9名	〃
	6	穂　高	尾藤ら2名	〃
	7	夏山　カクネ里合宿 （直接尾根、蝶右、中央ルンゼ ピークリツヂ等）	尾藤ら13名	時報5号
	7	東　谷	川島、近	〃
	7	針ノ木、立山	尾藤ら4名	〃
	7	烏帽子	大村ら6名	〃
	7	鹿島槍、笠縦走	宮本ら6名	〃
	7	聖、赤石	田島ら4名	〃
	8	白　山	久保	〃
	9	八ケ岳	大久保ら4名	〃
	10	赤石、荒川岳	尾藤、東	〃
	11	中央アルプス縦走	久保ら3名	〃
	12	冬山合宿　聖岳	尾藤ら5名	〃
	12	冬山合宿、大沢	久保、坪井	〃
	12	冬山合宿、木曾駒	川島ら3名	〃
	12	細野スキー合宿	細見ら9名	〃
	12	富士山	徳永、加藤	〃
1953	3	大峯山	山本ら3名	〃
	3	大沢偵察	大島ら5名	〃
	3	春山合宿　後立逆縦走	尾藤ら16名	〃

1953	5	大峯山	由比浜、広橋、山本	時報5号
	7	夏山、剣沢合宿 （源次郎1峯長次郎側フエース 池の谷右股、剣尾根ルンゼ等）	川島ら13名	時報6号
	8	剣、穂高縦走	東ら6名	〃
	8	黒部及び西鎌縦走	川島ら3名	〃
	8	奥又白	山本ら3名	〃
	8	千丈沢より薄田川へ	久保、坪井	〃
	10	大峯山	関本ら3名	〃
	11	穂高、冬山偵察、ボッカ	川島ら6名	〃
	11	穂　高	坪井、田島	〃
	12	冬山合宿　天狗のユルより槍往復	川島ら13名	〃
1954	1	上高地、穂高	鷲沢、大西	〃
	1	木曾駒	椎本、関本	〃
	3	黒部偵察	川島ら5名	〃
	3	春山合宿　春の黒部へ	尾藤ら7名	〃
	3	白馬岳	関本ら2名	〃
	4	大峯山	関本ら2名	〃
	4	八方、唐松	久保他	〃
	5	木曾駒	宮本	〃
	5	大峯山	東ら3名	〃
	5	愛知川、雨乞山	久保他	〃
	7	剣岳（体育科登山応援）	松久、木村、金中	時報7号
	7	夏山　南股合宿 （三峯C、二峯東南稜 二峯ルンゼI等）	完元ら17名	〃
	7	黒部下廊下偵察行	尾藤ら5名	〃
	8	後立山縦走	山本ら6名	〃
	10	才二次黒部下廊下偵察行	宍戸ら6名	〃
	10	才三次黒部　〃	坪井ら4名	〃

1954	11	雪彦山	杢中ら4名	時報7号
	11	木曾駒	宍戸ら6名	〃
	11	御在所山	高田、椎木	〃
〃	11	八ヶ岳	広橋ら7名	〃
〃	11	鹿島槍東尾根偵察	坪井、三枝	〃
〃	12	大峯山	岡田ら5名	〃
〃	12	冬山合宿　鹿島槍東尾根	坪井ら9名	〃
〃	12	関温泉スキー合宿	宍戸ら12名	〃
1955	2	蘇武岳	宍戸	〃
〃	2	御　岳	辻川、石沢	〃
〃	3	春山合宿、鳴沢岳より黒部へ	完元ら15名	〃
〃	4	木曾駒	杢中ら3名	〃
〃	4	北　岳	細見ら5名	〃
〃	6	鈴鹿霊仙山	岡田他	〃
〃	7	夏山、北岳合宿	木村ら17名	時報8号
		（パットレス　中央稜等）		
〃	8	比良打見山	岡田他	〃
	10	双六岳冬山荷上げ	宍戸ら9名	〃
	12	鈴鹿山行	高木、岡田	〃
	12	槍平より槍	久保ら4名	〃
〃	12	冬山合宿、双六岳、	木村ら14名	〃
		笠岳、鷲羽岳		
1956	3	春の黒部下廊下横断	宍戸ら9名	〃
	3	山上ケ岳	樋下ら3名	〃
〃	4	八ヶ岳	山田、乾	〃
	5	谷川岳	田島ら3名	〃
	5	剣　岳	田島、樋下	〃
	5	比良山	岡田ら8名	〃
〃	5	木曾駒ケ岳	山本ら7名	〃
	6	伯耆大山	辻川ら4名	〃

1956	8	大台ケ原	岡田	時報8号
	10	鈴鹿山行	乾	〃
	10	比良山	乾	〃
	10	木曾駒ケ岳	山田ら5名	〃
	10	御　岳	岡田ら3名	〃
	10	〃	田島、由比浜	〃
	10	北岳、偵察、ボッカ	西川ら4名	〃
	10	穂　高	森川、一山	〃
	10	〃	岡田ら3名	〃
	11	伯耆大山	町田ら11名	〃
	11	富士山	坪井、東	〃
	11	山上ケ岳	乾	〃
	11	比良、武奈ケ岳	坪井他数名	〃
	11	鈴鹿山行	乾	〃
	12	〃	山田、兼清	〃
	12	戸隠、飯縄	乾	〃
	12	冬山合宿　北岳バットレス 第4尾根	西川ら7名	〃
1957	1	冬山合宿、富士山	岡田ら6名	〃
	1	〃　八方尾根		
	1	鈴鹿御在所岳	乾ら4名	〃
	2	吾妻山	乾	〃
	3	春山合宿、烏帽子より黒部偵察	岡田ら8名	〃
	4	富士山	山本ら4名	時報9号
	5	穂高、明神より奥穂	兼清、宍戸	〃
	5	笹ガ峰学連合同登山	岡田、野田	〃
	5	西穂高	四方ら4名	〃
	5	五竜、白馬	樋下、大井	〃
	6	白馬岳	森川ら3名	〃
	7	夏山穂高合宿	岡田ら32名	〃
	7	槍、白馬縦走	兼清ら4名	〃

1957	7	黒部源流	飯田ら3名	時報9号
	8	三伏峠、塩見岳	岡田ら3名	〃
	8	裏銀座縦走	山田ら7名	〃
	8	白　山	玉井	〃
	8	棒小屋沢、十字峡、剣岳	村瀬、広橋	〃
	8	鈴鹿愛知川	乾	〃
	10	中央アルプス縦走	山本ら3名	〃
	10	奥秩父	山田、乾	〃
	11	双六、燕岳	村瀬ら7名	〃
	11	双六、槍、常念岳	山本ら7名	〃
	11	双六、干丈沢	宍戸ら3名	〃
	11	双六、槍、上高地	岡田、兼清	〃
	11	遠見尾根、五竜	兼清、平田	〃
	12	冬山合宿　双六、赤牛往復	岡田ら8名	〃
	12	冬山女子合宿、仙丈岳	三枝ら3名	〃
	12	冬山新人合宿、槍平	村瀬ら9名	〃
1958	3	奥越高原、経ケ岳	田村ら3名	〃
	3	春山合宿　天狗尾根より五竜岳および鹿岳	兼清ら18名	〃
	4	剣岳池の谷左俣	西川ら3名	時報10号
	4	干丈沢より双六	乾ら3名	〃
	4	大峰、中ノ川	山本ら3名	〃
	5	黒部より赤沢岳西尾根	宍戸ら6名	時報11号
	5	中央アルプス	大島ら8名	時報10号
	5	鈴鹿山行	木村ら8名	〃
	7	夏山剣合宿	兼清ら43名	〃
	7	立山、穂高縦走	平田ら7名	〃
	8	剣、雲の平、白馬縦走	田村ら7名	〃
	8	針の木、白馬、朝日縦走	野田ら6名	〃
	8	北岳、間の岳、農鳥岳	大島、広瀬	〃
	8	薬師岳より雲の平	米林ら2名	〃

1958	8	薬師、金作谷	山本、田端	時報10号
	8	屋久島、宮の浦岳	大工原ら2名	〃
	9	中央アルプス	五百蔵ら2名	〃
	9	雪彦山	打出ら3名	〃
	9	涸沢岳西尾根偵察	野田ら4名	〃
	10	有峰、三俣、赤牛岳	乾ら5名	〃
	10	スゴ沢より上廊下偵察	笠松ら5名	〃
	10	燕岳、北穂高	服部ら3名	〃
	10	木曾駒ケ岳	黒木、西垣	〃
	10	薬師、槍	広瀬	〃
	10	裏銀座縦走	高橋ら3名	〃
	11	涸沢岳西尾根偵察	兼清ら3名	〃
	11	烏帽子へ春山荷上げ、偵察	野田ら18名	〃
	11	烏帽子、笠ケ岳	木村ら9名	〃
	11	燕　岳	広瀬ら4名	〃
	11	赤牛岳よりスゴ沢、偵察行	山本ら5名	〃
	12	**冬山合宿　涸沢岳西尾根より北穂、奥穂高**	山本ら28名	〃
1959	3	**春山合宿　黒部上廊下積雪期初横断**	山本ら33名	〃
	5	槍、北鎌尾根	野田ら3名	時報11号
	5	内蔵助平より黒部	兼清ら3名	〃
	5	赤石岳	平田ら5名	〃
	5	立山、剣	大工原ら6名	〃
	5	中尾峠、徳本峠	打出、佐藤	〃
	6	小豆島、栂岳	金子、五百蔵	〃
	6	鈴鹿、愛知川	兼清、酒井	〃
	7	夏山合宿、千丈沢及び槍ケ岳周辺	野田ら28名	〃
	7	雲の平、剣縦走	大島ら5名	〃

1959	7	烏帽子、針の木、白馬縦走	大島ら5名	時報11号
〃	8	剣　岳	白井ら8名	〃
	7	東沢、黒部上廊下	村井ら5名	〃
	7	黒部源流、東沢	野田ら4名	〃
	8	雲の平	大工原、広瀬	〃
	8	九重連峰	黒木	〃
	9	穂高、屏風、北尾根	大島、玉井	〃
	10	穂高、滝谷	金子、五百蔵	〃
	10	燕、常念岳	梶本ら2名	〃
	12	**冬山合宿　スバリ岳　赤沢岳周辺**	田村ら28名	〃
		冬山合宿　白根三山、大唐松尾根	野田ら11名	〃
1960		**春山合宿　薬師岳東面**	田井ら20名	〃
		春山合宿　真砂尾根から剣岳	佐藤ら15名	〃
		八ツ峰I峰		
	5	剣岳I峰東面（冰3稜）	広瀬ら4名	時報12号
	5	後立山縦走	酒井ら5名	〃
	5	海谷山塊	田井ら3名	〃
	5	比良山新人山行	村井ら10名	〃
	5	立山山行	保母、大工原	〃
	5	比良山	三沢	〃
	6	穂高縦走（涸沢－前穂）	三沢、峯田	〃
	6	〃　（西穂－北穂）	梶本、浜田	〃
	6	尾瀬周辺、燧岳、至仏山	梶本ら2名	〃
	6	伯耆大山	三沢	〃
	7	夏山合宿、千丈沢	田村ら36名	〃
	8	三俣蓮華、剣岳縦走	高橋ら6名	〃
	8	針の木、白馬、朝日縦走	五百蔵ら7名	〃
	8	立石、黒部源流、上廊下周辺	酒井ら5名	〃
	8	南アルプス南部縦走	佐藤、宇野	〃
	8	祖母嶮	黒木	〃

1960	8	穂高山行	前沢ら3名	時報13号
	8	薬師岳、黒部源流	篠田会長ら7名	〃
	9	穂高山行	田村ら3名	〃
	9	八ケ岳、周辺	梶本	〃
	10	南アルプス北部縦走	田村ら7名	〃
	10	穂高山行	佐藤ら11名	〃
	11	燕、大天井縦走	田村ら11名	〃
	11	剣岳、春山の偵察、ボッカ	西垣ら11名	〃
	11	剣岳、平、針の木縦走	田村ら8名	〃
1961	12	冬山合宿、南アルプス分散	田村ら28名	〃
	3	春山合宿、剣岳、八ツ峰末端から	酒井ら27名	〃
	4	後立山縦走	前沢ら5名	〃
	4	西穂、北穂縦走	酒井、佐藤	〃
	4	黒部、東沢横断	田村ら6名	〃
	4	中央アルプス	山本ら6名	〃
	4	御　岳	西垣ら4名	〃
	5	八方尾根、唐松岳	打出	〃
	5	上高地周辺、焼、蝶、大滝等	梶本	〃
	6	西穂、槍縦走	高田、岡久、辻	〃
	6	西穂高	黒木	〃
	6	赤谷山	酒井、保母	〃
	6	大峯山	浅井ら4名	〃
	7	夏山合宿、剣岳八ツ峰1峰東面を中心として	酒井ら24名	〃
	7	東沢より笠岳縦走	横尾、桑原	〃
	7	剣、薬師、笠ケ岳縦走	三田ら4名	〃
	7	剣、雲の平、穂高縦走	宇野ら4名	〃
	7	剣、雪の平唐松従来	浜田ら4名	〃
	8	白馬岳	大工原、岡田	〃
	8	北又谷（負傷事故）	打出、横尾	〃
	10	南アルプス、広河原、二軒小屋	横尾ら4名	〃

1961	10	南アルプス、夜叉神、広河原	高田ら5名	時報12号
	11	双六、笠ケ岳縦走	山本ら5名	〃
	11	双六、槍、西岳縦走	横尾ら5名	〃
	11	双六、薬師沢周辺、有峰	梶本ら5名	〃
	11	富士山冬雪訓練		〃
		堀井昭彦　滑落死亡		
1962	1	冬山山行として近畿の山歩き	広瀬ら22名	〃
		鈴鹿、京都北山、段ケ峰、		〃
		峰山高原等分散		
	3	春山合宿、白馬岳北方稜線	梶本ら15名	〃

ヒマラヤ山行

1956　**JACマナスル第三次遠征**　徳永OB参加

「マナスル通信」　時報8号

1959　**JACヒマルチユリ遠征**　住吉OB参加

「ヒマルチユリだより」　時報10号

1961　**P29峰　阪大山岳会隊**

篠田隊長以下8名　時報11,12号

編　集　後　記

この時報特別号は決して阪大山岳会の戦後１０数年の公式報告と言つたものではなく、現役諸君が先輩の残した記録に接し、今後の山行の指針になればと編集した次才である。

現在、現役の活動について語る時、有形、無形に先輩の恩恵を受けている。その１つが時報である。時報は記録を記載し、研究の場であると共に、後輩の指導標のようなものである。過去１０数年の記録を顧みると、後立、黒部と言つた成果にしても、幾度もの、苦しい体験と不屈の闘志によつて支えられたものであることが知れよう。

阪大山岳会もさらに大きく困難な山に取り組もうとしている。いたずらにヒマラヤの幻映にまどわされ、足場を見失しなう事がない様、この機会に足場を踏み固める必要がありそうだ。

今後２０周年の特別号が出される時には輝しい成果を記載出来る様、一層努力したい。

最後に編集に際し、御多忙中、原稿をいたゞいた篠田先生、編集と御指導下さつた大島輝夫先輩を始め、先輩諸氏にお礼申し上げます。

なお冬山合宿の準備に追われたとは言え、何かと不手際のある点おわびいたします。　　（１９６２．１２．　梶本孝治記）

編集責任者	梶　本　孝　治
発　行　所	大阪大学山岳会 大阪市北区常安町36 大阪大学内
発行年月	１９６３年　１月１日
印　刷　所	株式会社栄文堂印刷所